中須東原遺跡

市内遺跡発掘調査及び
益田川左岸北部地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2013年

益田市教育委員会

中須東原遺跡

市内遺跡発掘調査及び
益田川左岸北部地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2013年

益田市教育委員会

中須東原遺跡空中写真（東から）

巻頭図版２

米極東軍が撮影した昭和22年の益田平野

（広島大学附属図書館所蔵）

明治初期の中須村地引図合成図

序

本報告書は、益田市教育委員会が平成17年度から23年度にかけて実施した益田市土地区画整理事業に伴う中須東原遺跡の発掘調査、及び範囲・内容確認を中心とした市内遺跡発掘調査に伴う試掘調査の結果をまとめたものです。

中須東原遺跡は、12世紀から16世紀にかけての時代に繁栄した大規模な中世の港湾遺跡であり、益田氏の経済基盤を支えた中世の舟着き場を備えた湊であることが明らかとなりました。また遺跡の西側には、同じく中世の舟着き場を伴う中須西原遺跡が隣接していますが、本来は中須西原遺跡と一体のものであったと考えられます。

周辺には、これに先立つ11世紀から12世紀にかけての時代に繁栄した大規模な中世の港湾遺跡である沖手遺跡が存在して、日本海や益田川の水運を利用した物資の流通・集散拠点として商人・職人たちによって営まれた集落であることが判明しています。

こうして中世益田の新たな歴史像が浮かび上がるとともに、当時の繁栄を支えた港湾地域の重要性に対して、全国から注目が集まっているところであります。

本書で紹介する調査の成果は限られた内容のものですが、発見された数多くの遺構や遺物に関しましては、今後も調査研究を継続するとともに、積極的な活用を図ってまいります。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の刊行にあたり、ご協力頂きました益田市建設部、地元の方々並びに関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成25年９月

益田市教育委員会

教育長　村川　修

例　言

1．本書は、益田市教育委員会が国庫補助を受けて平成17年度から平成23年度までに実施した中須東原遺跡に係る試掘調査及び範囲・内容確認調査、並びに益田市（建設部）からの依頼により実施した土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2．本書で報告する遺跡は下記のとおりである。
島根県益田市中須町28番地ほか　中須東原遺跡

3．調査組織は次のとおりである。
調査主体　益田市教育委員会

平成17年度　第１次調査：土地区画整理事業出合工区に係る試掘・遺跡の有無確認調査
【事　務　局】　益田市教育委員会文化振興課
安達正美（課長）、橋本浩一（課長補佐）、河野敏弘（課長補佐）
【調　査　員】　木原　光（課長補佐兼文化財係長）

平成18年度　第２次調査：中須東原遺跡南部の範囲確認・試掘調査
【事　務　局】　益田市教育委員会文化振興課
安達正美（課長）、橋本浩一（課長補佐）、河野敏弘（課長補佐）
【調　査　員】　木原　光（課長補佐兼文化財係長）

平成19年度　第３次調査：第２次調査に基づく中須東原遺跡南部の発掘調査、本調査
中須西原遺跡発掘調査
第４次調査：中須東原遺跡東部の範囲確認・試掘調査
【事　務　局】　益田市教育委員会文化振興課
安達正美（課長）、河野敏弘（課長補佐）、野村正樹（課長補佐）
【調　査　員】　木原　光（課長補佐兼文化財係長）
【調査補助員】　寺戸淳二（嘱託職員）、池本　篤（臨時職員）

平成20年度　第５次調査：中須東原遺跡縁辺部～南西部の範囲確認・試掘調査
【事　務　局】　益田市教育委員会文化振興課
木原　光（課長）、河野敏弘（課長補佐）
【調　査　員】　長澤和幸（主任）

平成21年度　第６次調査：中須東原遺跡南西部～北部の範囲確認・試掘調査
第７次調査：中須東原遺跡の性格・範囲確認、試掘調査
第８次調査：中須東原遺跡の性格・範囲確認、試掘調査
【事　務　局】 益田市教育委員会文化財課
木原　光（課長）、河野敏弘（課長補佐）
【調　査　員】 長澤和幸（主任）
【調査補助員】 寺戸淳二（嘱託職員）、池本　篤（嘱託職員）

平成22年度　第９次調査：中須東原遺跡南部の範囲確認・試掘調査
第10次調査：中須東原遺跡の性格・範囲確認、試掘調査
第11次調査：中須東原遺跡の区画道路予定地に係る発掘調査、中須東原遺跡北西部の本調査
【事　務　局】 益田市教育委員会文化財課
木原　光（課長）、河野敏弘（課長補佐）
【調　査　員】 長澤和幸（主任）
【調査補助員】 寺戸淳二（嘱託職員）、世良　啓（嘱託職員）、池本　篤（嘱託職員）

平成23年度　第12次調査：中須東原遺跡の区画道路予定地に係る発掘調査、中須東原遺跡東部～南西部の本調査
第13次調査：中須東原遺跡北東部の範囲確認・試掘調査
第14次調査：中須東原遺跡西部の範囲・内容確認、試掘調査
【事　務　局】 益田市教育委員会文化財課
木原　光（課長）、河野敏弘（課長補佐）、山本浩之（主査）
【調　査　員】 長澤和幸（主任）、佐伯昌俊（主事）
【調査補助員】 寺戸淳二（嘱託職員）

平成24年度　資料整理
【事　務　局】 益田市教育委員会文化財課
木原　光（課長）、可部　裕（課長補佐）、山本浩之（主査）
【調　査　員】 長澤和幸（主任）、松本美樹（主任主事）、佐伯昌俊（主事）
【調査補助員】 寺戸淳二（嘱託職員）

平成25年度　資料整理
【事　務　局】 益田市教育委員会文化財課
木原　光（課長）、石田　公（課長補佐）、山本浩之（主査）
【調　査　員】 長澤和幸（主任）、松本美樹（主任主事）、佐伯昌俊（主事）
【調査補助員】 寺戸淳二（嘱託職員）

4．調査に係る経費は、第１次～10次及び第13次～14次調査は国庫補助を受けて益田市教育委員会が負担し、第11次～12次調査は益田市（建設部　区画整理課）が負担した。

5．現地調査及び報告書作成に関しては、以下の機関、方々から指導、助言をいただいた。
井上寛司（島根大学名誉教授）、石賀裕明（島根大学教授）、近江俊秀（文化庁記念物課）、大庭康時（福岡市教育委員会）、小野正敏（人間文化研究機構）、角田徳幸（島根県立古代出雲歴史博物館）、北垣聰一郎（石川県金沢城調査研究所所長）、五味文彦（放送大学教授）、坂井秀弥（奈良大学教授）、鋤柄俊夫（同志社大学准教授）、瀬戸浩二（島根大学准教授）、田中義昭（島根県文化財保護審議会委員）、中島圭一（慶應義塾大学教授）、中村唯史（三瓶自然館指導員）、仁木宏（大阪市立大学教授）、西尾克己（島根県古代文化センター）、禰宜田佳男（文化庁記念物課）、東山信治（島根県文化財課）、水澤幸一（新潟県胎内市教育委員会）、村上　勇（奥田元宋・小由女美術館館長）、八峠興（鳥取県埋蔵文化財センター）、柳原敏昭（東北大学教授）、山村亜希（愛知県立大学准教授）、島根県教育委員会文化財課、島根県埋蔵文化財調査センター　　※所属は当時

6．発掘調査作業及び整理作業には、下記の方々に参加していただいた。
発掘作業
麻生時夫、石川倖枝、伊藤松男、糸賀義人、岩本功一郎、岩本裕紀、巖本知、梅谷藤人、大石常夫、岡本昌幸、角田進、可部秀治、亀山武徳、河野孝義、河野正幸、齋藤豊、佐々木直人、武田爲久、田原美代子、俵信義、寺井フミ子、西坂哲郎、西坂松子、野村紀年、羽板和良、長谷田正延、原田隆一、深井一雄、福原幸治、藤原稔、牧原正明、又賀大輔、三浦竜之介、宮野信和、椋悟、椋庄蔵、椋務、村上博一、籾山泰廣、森脇義男、安野和男、山根定男、横田幸和
整理作業
石川倖枝、大谷浪江、岡﨑敦子、岡﨑陽子、河井悦子、坂本文江、田原美代子、中島雅宏、中島裕子、中村康恵、西坂松子、松本寛子、横山秀美、領家剛、両見美鈴

7．挿図中の方位は測量法による第Ⅲ系座標X軸の方向を指す。また、平面直角座標系XY軸は世界測地系による。レベルは海抜高を示す。

8．現地及び遺物の実測図・写真は、調査員のほか山本・松本・寺戸が行った。また遺物トレースについては佐伯が行った。

9．本報告書の執筆は、長澤のほか木原・山本・松本・中司・佐伯が行い、編集は長澤が行った。

10．自然科学的分野の分析を次の方に依頼し、また下記の方々から玉稿をいただいた。
土壌分析：株式会社地球科学研究所
井上寛司（島根大学名誉教授）
村上　勇（益田市文化財保護審議会会長）

11．本書に掲載した出土遺物及び実測図、写真等は益田市教育委員会文化財課で保管している。

凡　例

1．本書で使用した遺構の略号は次のとおりである。
SB-掘立柱建物跡、SD-溝、SK-土坑、P-ピット、SX-その他

2．本文・挿図・写真図版中の遺物番号は一致する。

3．土層断面図及び遺物観察表の色調は「標準土色帳」を参考にした。

4．本書で用いた遺物の分類及び編年観は、基本的に下記の各論文・報告書を参考にした。

（瓦質土器）

岩崎仁志「防長地域の足鍋について」『山口考古 第17号』山口考古学会、1988年

岩崎仁志「防長型擂鉢について」『山口考古 第19号』山口考古学会、1990年

（陶磁器）

上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究No.２』日本貿易陶磁研究会、1982年

小野正敏「15～16世紀の染付碗皿の分類と年代」『貿易陶磁研究No.２』日本貿易陶磁研究会、1982年

山陰中世土器検討会『山陰地方における越前・常滑系陶器』第10回山陰中世土器検討会資料集、2011年

山陰中世土器検討会『山陰地方における瀬戸・美濃陶器』第９回山陰中世土器検討会資料集、2010年

重根弘和ほか「備前焼分類試案」『山陰地方における備前焼』山陰中世土器検討会、2008年

森田　勉「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究No.２』日本貿易陶磁研究会、1982年

山本信夫ほか「大宰府条坊跡XV陶磁器分類編」『大宰府の文化財第49集』太宰府市教育委員会、2000年

山本信夫「貿易陶磁の分類・編年研究の現状と課題」『貿易陶磁研究No.30』日本貿易陶磁研究会、2010年

（その他）

小畑弘己「度量衡」『中世都市 博多を掘る』海鳥社、2008年

木戸雅寿「石鍋」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会、1995年

5．本書で用いた沖手遺跡に関する貿易陶磁器の数量データは、下記報告書を参考にした。

島根県教育委員会『一般国道９号（益田道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書５―沖手遺跡・専光寺脇遺跡―』、2008年

本文目次

第１章　調査の経緯及び経過……（山本）　1
　第１節　調査に至る経緯
　第２節　調査から保存に至るまでの経過
第２章　位置と環境……　5
　第１節　地理的環境……（山本）　5
　第２節　歴史的環境……（山本）　5
　　１．河口部の歴史的変遷
　　２．益田の歴史と文化財
　第３節　文献史料に見る中世益田地域の流通経済・対外関係……（中司）　20
　　１．はじめに
　　２．荘園公領制・海禁政策下における益田地域の流通経済・対外関係
　　３．戦国期における益田地域の流通経済・対外関係
　　４．おわりに
　第４節　中須西原遺跡……（木原）　23
　　１．調査の経過
　　２．遺跡の位置と周辺の環境
　　３．発掘調査の概要
　　（１）遺構の概要
　　（２）遺物の概要
　　４．検討
第３章　調査の経過と概要……　43
　第１節　発掘調査の経過……（長澤）　43
　　１．調査前の状況
　　２．試掘・確認調査
　　３．本調査
　　４．遺構番号
　第２節　基本層序……（長澤）　53
　第３節　中世の検出遺構・出土遺物
　　１．検出遺構の概要……（長澤）　73
　　２．遺構……（長澤）　73
　　３．出土遺物
　　（１）貿易陶磁器……（松本）　91
　　（２）国産陶磁器……（松本）　98
　　（３）その他……（松本・佐伯）　103
　　（４）鍛冶関連遺物……（佐伯）　108
　第４節　近世の出土遺物……（佐伯）　115

第４章　自然科学分析…… 117
　第１節　放射性炭素年代測定
第５章　総括…… 125
　第１節　集落の変遷、構造について……（長澤・松本） 125
　　１．はじめに
　　２．出土遺物から見た集落の消長と変遷
　　３．遺構について
　　４．遺物について
　　（１）種別ごとの出土傾向
　　（２）機能別の出土傾向
　　（３）石西地域における中世遺跡の消長
　　５．集落の構造について
　　６．集落の性格について
　第２節　まとめ……（木原） 145
　　１．河口域の歴史的環境と港湾遺跡の展開
　　２．湊町を特徴づける遺構
　　３．貿易陶磁から見た遺跡の盛衰
　　４．益田湊へ運び込まれたもの・運び出されたもの
　　５．結語
附章
　中世の益田川関と沖手、中須西原・東原遺跡……（井上） 157
　高津川・益田川河口域の港湾遺跡群出土陶磁の背景……（村上） 163

挿図目次

第１図　益田市の位置と市内の主要な中世遺跡 …… 4
第２図　中須東原遺跡の範囲と周辺の主要遺跡 …… 6
第３図　益田市内の遺跡分布 …… 9
第４図　益田川下流域の字名分布図 …… 13
第５図　益田平野の地形分類図と主要な中世遺跡 …… 24
第６図　遺構平面図 …… 25
第７図　礫敷き遺構平面図 …… 25
第８図　礫敷き断面図（H–H'）…… 25
第９図　区画溝の断面図 …… 29
第10図　出土遺物種別構成比 …… 34
第11図　貿易陶磁器種別構成比 …… 34
第12図　貿易陶磁器の時期別出土数 …… 35
第13図　種別毎出土遺物分布図 …… 36
第14図　特徴的な遺物実測図 …… 38
第15図　中須東原遺跡の調査地位置図 … 45
第16図　第10～14次調査の区域とグリッドの設定 …… 52
第17図　基本層序ライン位置図 …… 53
第18図　基本層序と遺構の関係模式図（南北ライン）…… 55
第19図　基本層序と遺構の関係模式図

挿表目次

第１表　中須東原遺跡の調査経過一覧 ……２
第２表　中須東原遺跡の全面保存への経過 ……２
第３表　調査地周辺の遺跡一覧 …… 11～12
第４表　貿易陶磁器集計表 …… 34
第５表　第１次調査結果一覧表 …… 47
第６表　第２次調査結果一覧表 …… 48
第７表　第３次調査結果一覧表 …… 49
第８表　第５次調査結果一覧表 …… 49
第９表　第６次調査結果一覧表 …… 50
第10表　第８次調査SK土坑計測表 …… 87
第11表　第10次調査SK土坑計測表 …… 87
第12表　第11次調査SK土坑計測表 …… 88
第13表　第12次調査SK土坑計測表 …… 89
第14表　第14次調査SK土坑計測表 …… 90
第15表　第11次・12次調査近世遺構出土陶磁器集計表 ……116
第16表　中須東原遺跡出土遺物集計表 …133
第17表　第10次調査鍛冶関連遺物集計表 ……136
第18表　第11次・12次調査鍛冶関連遺物集計表 …… 136～138
第19表　石西地域の中世遺跡消長表 ……141
第20表　中須東原遺跡出土遺物観察表 …… 153～156

巻頭図版目次

巻頭図版１　中須東原遺跡空中写真（東から）
巻頭図版２　米極東軍が撮影した昭和22年の益田平野
巻頭図版３　明治初期の中須村地引図合成図

本文中写真目次

写真１　福王寺石造十三重塔 …… 17
写真２　三宅御土居跡 …… 17
写真３　七尾城跡 …… 17
写真４　住吉神社 …… 17
写真５　医光寺総門 …… 17
写真６　染羽天石勝神社 …… 17
写真７　医光寺 …… 17
写真８　医光寺庭園 …… 17
写真９　万福寺本堂 …… 18
写真10　万福寺庭園 …… 18
写真11　妙義寺 …… 18
写真12　益田藤兼の墓 …… 18
写真13　益田兼家の墓 …… 18
写真14　益田兼堯の墓 …… 18
写真15　益田兼見・兼方の墓 …… 18
写真16　暁音寺 …… 18
写真17　中須西原遺跡空中写真（南南西から俯瞰）…… 23
写真18　中須西原遺跡空中写真（直上から）…… 27
写真19　方形竪穴建物SX41（西から）… 30
写真20　方形竪穴建物SX42（西から）… 30
写真21　炉跡SX50（炉内半截状態）…… 31
写真22　炉跡SX50（内容物除去後）…… 31

（東西ライン）…… 56
第20図　中須東原遺跡遺構配置図 …… 57
第21図　部分図配置図 …… 59
第22図　部分図１―東区北東部― …… 60
第23図　部分図２―東区南東部― …… 61
第24図　部分図３―東区北西部― …… 62
第25図　部分図４―東区南西部― …… 63
第26図　部分図５―西区北西部― …… 64
第27図　部分図６―西区北西中央部― … 65
第28図　部分図７―西区北東中央部― … 66
第29図　部分図８―西区北東部― …… 67
第30図　部分図９―西区南西部― …… 68
第31図　部分図10―西区南西中央部― … 69
第32図　部分図11―西区南東中央部― … 70
第33図　部分図12―西区南東部― …… 71
第34図　部分図13―南西区― …… 72
第35図　７次SX1遺構平面図 …… 74
第36図　７次SX1出土遺物実測図 …… 75
第37図　10次SX265遺構平面図 …… 76
第38図　10次SX266遺構平面図 …… 76
第39図　12次SX119遺構平面図 …… 77
第40図　14次SX22遺構平面図…… 78
第41図　SB1・SB2平面図 …… 79
第42図　11次SD23～11次SD29平・断面図
…… 82
第43図　溝状遺構（SD）土層図 …… 83
第44図　10次SX267平面図 …… 84
第45図　７次SK5平・断面図…… 86
第46図　８次SK11遺構図 …… 86
第47図　出土遺物（１）青磁 …… 92
第48図　出土遺物（２）白磁 …… 93
第49図　出土遺物（３）青花 …… 95
第50図　出土遺物（４）
中国陶器・タイ陶器 …… 96
第51図　出土遺物（５）朝鮮陶磁器 …… 97
第52図　出土遺物（６）中世須恵器 …… 98
第53図　出土遺物（７）備前焼 …… 99
第54図　出土遺物（８）
瓷器系、瀬戸・美濃陶器 …… 101
第55図　出土遺物（９）土師質土器 …… 102
第56図　出土遺物（10）瓦質土器① …… 104
第57図　出土遺物（11）瓦質土器② …… 105
第58図　出土遺物（12）石製品 …… 106
第59図　出土遺物（13）金属製品、木製品
…… 107
第60図　鍛冶関連遺物一覧 …… 109
第61図　第11次・12次調査における
近世陶磁器の比率 …… 115
第62図　第11次・12次調査出土の
近世陶器の産地別比率 …… 115
第63図　ボーリング箇所位置図 …… 117
第64図　貿易陶磁器の時期別出土数 …… 125
第65図　貿易陶磁器出土分布図１（C～E期）
…… 126
第66図　貿易陶磁器出土分布図２（F～H期）
…… 127
第67図　貿易陶磁器出土分布図３（I～K期）
…… 128
第68図　出土遺物分布図１（奢侈品・
朝鮮陶磁器・土師質土器）…… 129
第69図　出土遺物分布図２（土錘）…… 130
第70図　時期別遺構配置図 …… 131
第71図　鍛冶関連遺物出土分布図 …… 135
第72図　土壌サンプリングメッシュ模式図
…… 135
第73図　出土遺物の種別構成比 …… 139
第74図　貿易陶磁器の種別構成比 …… 139
第75図　機能別の構成比 …… 140
第76図　中須東原遺跡と沖手遺跡の
機能別構成比の比較 …… 140
第77図　区画遺構分布図 …… 143
第78図　沖手遺跡・中須西原・東原遺跡の
貿易陶磁器時期別出土数 …… 147
第79図　山陰西部における
朝鮮王朝陶磁器の出土遺跡と数量
…… 149

堆積状況
（下）12次調査L2周辺鍛冶遺構検出状況
図版22　（上）12次調査L2周辺鍛冶遺構検出状況
（中）12次調査L2周辺鍛冶遺構検出状況
（下）12次調査L3周辺遺構検出状況
図版23　（上）12次調査L3石造物出土状況
（中）14次SX22検出状況
（下）14次SX22土層堆積状況
図版24　14次調査Ⅱ区畑と考えられる畝状遺構
図版25　青磁（１）
図版26　（上）青磁（２）
（下）白磁
図版27　青花（１）
図版28　青花（２）
図版29　（上）中国陶器、タイ陶器
（下）朝鮮陶磁器
図版30　備前焼
図版31　中世須恵器、瓷器系、瀬戸・美濃
図版32　（上）土師質土器
（下）瓦質土器（１）
図版33　（上）瓦質土器（２）
（下）滑石製品
図版34　（上）金属製品
（下）砥石
図版35　白磁、青花、朝鮮陶磁器、備前焼
図版36　備前焼、土師質土器、木製品、その他

写真23　墓SX116 …… 31
写真24　礫敷きの検出状況（西から）…… 32
写真25　礫敷きの検出状況（東から）…… 33
写真26　特徴的な遺物（珠洲・越前・
中国鉄絵瑠璃釉大鉢）…… 39
写真27　特徴的な遺物（褐釉擂座壺・
タイ鉄絵・ベトナム鉄絵）…… 40

図版目次

図版 1　（上）調査前の状況
（中）調査前の状況
（下）７次SX1検出状況
図版 2　（上）７次SX1礫の堆積
（中）７次SX1礫の堆積
（下）７次SX1埋土の堆積
図版 3　（上）７次SX1帯水状況
（中）７次SK5検出状況
（下）７次SK5断割状況
図版 4　（上）８次SD24検出
（中）G区遺構検出状況
（下）H区遺構検出状況
図版 5　（上）H区遺構検出状況
（下）Ｉ区の造成のために投げ込まれた礫
図版 6　（上）８次SK11検出状況
（中）８次SK11遺物出土状況
（下）８次SK11銭貨と木材出土状況
図版 7　（上）Ｊ区遺構検出状況
（中）10次調査完掘状況（西から）
（下）10次調査２つの遺構面検出状況（4Gグリッド）
図版 8　（上）10次調査完掘状況（東から）
（下）10次SX266検出状況
図版 9　（上）10次調査12G土層堆積状況
（中）10次調査第２遺構面検出状況
（下）10次SK104、SK105検出状況
図版10　（上）10次調査16G遺構検出状況
（中）10次調査17G遺構検出状況
（下）10次調査18G遺構検出状況
図版11　（上）10次調査22G遺構検出状況
（中）10次調査22G遺構検出状況
（下）10次SX267検出状況
図版12　（上）10次調査26G土層堆積状況
（下）10次SX265と道路状礫敷き遺構の検出状況
図版13　（上）10次SX265と道路状礫敷き遺構
（中）10次SX265土層堆積状況
（下）11次SK1検出状況
図版14　（上）11次調査C8付近土層堆積状況
（中）11次調査C10付近土層堆積状況
（下）11次調査F13付近土層堆積状況
図版15　（上）11次SD1検出状況
（中）11次調査SB1検出状況
（下）11次SD24他検出状況
図版16　（上）11次SD23他検出状況
（下）11次SD23土層堆積状況
図版17　（上）11次SD6及びSD7検出状況
（下）11次SD6及びSD7完掘状況
図版18　（上）12次SD1完掘状況
（中）12次SK92土層断面
（下）SB2検出状況
図版19　（上）12次調査北西部の砂丘端部
（下）12次SK56鍛冶関連遺物出土状況
図版20　（上）12次SX119検出状況（北西から）
（中）12次SX119検出状況（東から）
（下）12次SX119土橋状の石積み
図版21　（上）12次SX119土層堆積状況
（中）12次SX119南北セクション土層

第１章　調査の経緯及び経過

第１節　調査に至る経緯

益田川左岸北部地区土地区画整理事業は、土地利用の高度化や促進化及び広域幹線道路（国道９号益田道路・島根県道333号［久城インター線］・市道中吉田久城線）を活かしたまちづくりを目的として、中島町・中須町の一部を対象に平成16年11月に都市計画決定が行われ、事業計画決定を受けた平成17年６月から施工を開始している。

その都市計画決定までには益田市教育委員会との間に協議が行われており、遺跡発見の際には別途協議を要するとの協議結果の基に、平成13年度から平成17年度にかけて事前に区画整理予定地内全域を対象に遺跡の有無を確認するための試掘調査が、平成18年度から21年度にかけて範囲・性格を把握するための確認調査が行われた。

その結果、平成17年度に中須西原・東原遺跡の存在が確認されたことから、関係部署との継続的な協議の上に、中須西原遺跡においては記録保存の措置（発掘調査）を図ることが決定し、また中須東原遺跡については、開発区域内に係る発掘調査とともに継続した範囲・内容確認等の調査が行われることとなった（第１表）。

文化財保護法上の手続きは、次のとおりである。

（遺跡発見通知）　平成20年２月29日付益教文第186号　※遺跡発見日は平成19年３月30日
（第３次調査）　94条：平成20年２月12日付益建都第104号、99条平成20年２月15日付益教文第162号
（第５次調査）　99条：平成21年１月26日付益教文第149号
（第６次調査）　99条：平成21年５月28日付け益教文第25号
（第７次調査）　99条：平成21年６月30日付け益教文第47号
（第８次調査）　99条：平成21年10月29日付け益教文第99号
（第９・10次調査）　99条：平成22年４月20日付益教文第６号
（第11次調査）　94条：平成22年９月６日付益建区第81号、99条：平成22年８月27日付益教文第88号
（第12次調査）　94条：平成23年１月28日付益建区第167号、99条：平成23年２月９日付益教文第188号

なお、遺物の発見届は、各調査終了後にそれぞれ益田警察署長あてに提出している。

また、各調査区の埋め戻しは、文化財保護側で実施している。方法は、試掘・確認調査分については掘削土を掘削時の逆順に埋め戻しを行い、発掘調査は検出遺構面上に山砂を厚さ10㎝を基本として敷き詰めたのち掘削土を埋め戻すこととした。

その後、平成25年２月19日付益教文第174号で区画道路を施工するための第94条の通知が提出され、遺跡の全面保存方針に基づく遺跡を保護する工法で、現在工事が進められている。

第１表　中須東原遺跡の調査経過一覧

年度	調査内容等	備考
平成16年度	益田川左岸北部地区土地区画整理事業の都市計画決定	
平成17年度	第１次調査：土地区画整理事業出合工区における遺跡の有無確認のための試掘調査45箇所	中須西原・東原遺跡発見
平成18年度	第２次調査：遺跡南部の範囲確認調査５箇所	
平成19年度	第３次調査：第２次調査に基づく遺跡南部の発掘調査（区画整理／一部550㎡）	
	＊中須西原遺跡発掘調査（区画整理・都市計画道路／4,300㎡）	
	第４次調査：遺跡東部の範囲確認調査20箇所	
平成20年度	第５次調査：遺跡縁辺部～南西部の範囲確認調査17箇所	
平成21年度	第６次調査：遺跡南西部～北部の範囲確認調査15箇所	
	第７次調査：遺跡の性格・内容確認調査（A～E区／362㎡）	
	第８次調査：遺跡の性格・内容確認調査（G～J区／221㎡）	F区は欠番
平成22年度	第９次調査：遺跡南部の範囲確認調査１箇所	
	第10次調査：遺跡の性格・内容確認調査／897㎡	
	第11次調査：区画道路予定地及び遺跡北西部の発掘調査／1,183㎡	
平成23年度	第12次調査：区画道路予定地の発掘調査／1,382㎡	
	第13次調査：遺跡北東部の範囲確認調査５箇所	
	第14次調査：遺跡西部の範囲・内容確認調査（Ⅰ～Ⅱ区）	

第２節　調査から保存に至るまでの経過

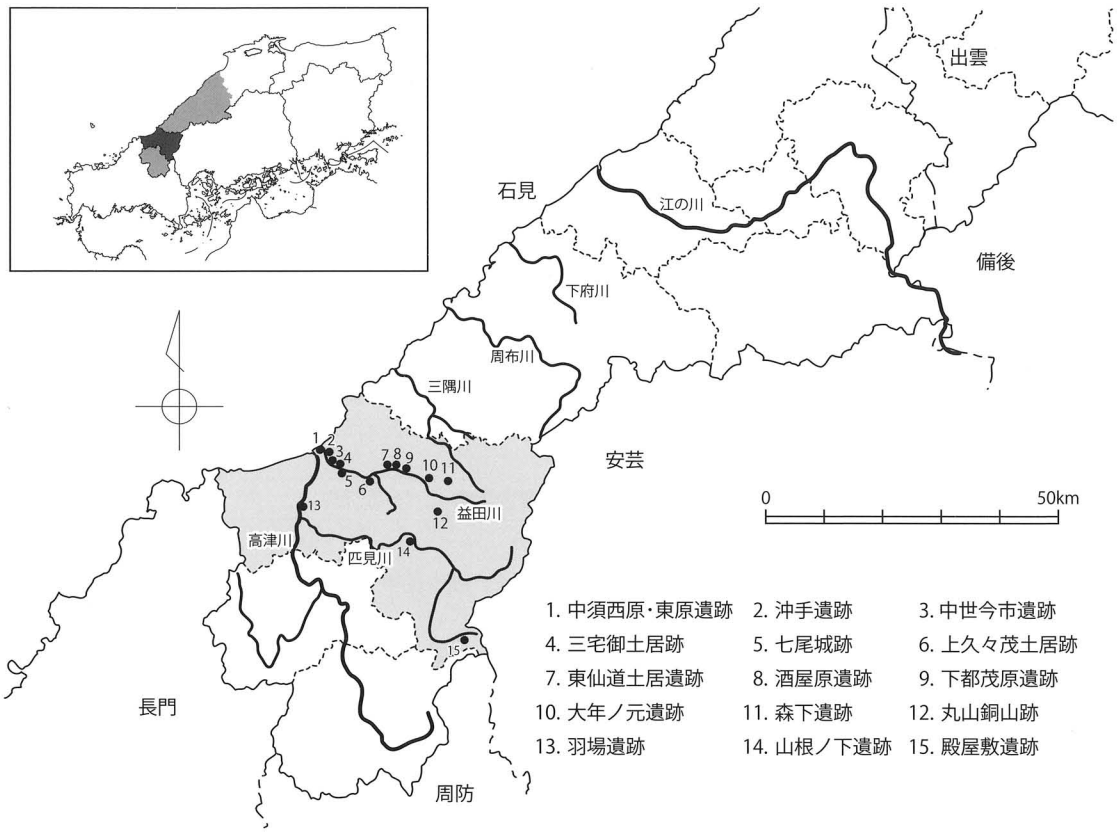
中須東原遺跡の発見以来、庁内会議を継続する一方で、平成22年10月、平成23年７月には文化庁調査官による現地視察・指導が行われ、史跡指定の意見具申を目指すべきとの評価を頂くとともに、平成23年３月には慶応大学、大阪市立大学、６月に島根大学、８月には関西方面の研究者団体の現地視察など、全国規模での研究機関・専門家からの注目を集めるようになっている。このように本遺跡への学術的価値、関心が高まる中、平成24年２月に益田市は全面保存を目指す方針を決定した（第２表）。

このことを受けて、関係部署及び機関並びに地元権利者等との協議を重ねた結果、地元権利者等のご協力のもと、土地区画整理事業計画の一部を変更して遺跡を現地保存し、国史跡指定を目指すこととなった。

第２表　中須東原遺跡の全面保存への経過

年　月　日		事　項
平成22年	10月１日	内容確認調査に係る文化庁記念物課現地指導 「中須東原遺跡は、史跡指定の意見具申をめざすべき遺跡」と評価
	10月２日	現地説明会（参加者120人）
	10月19日～	庁内関係課（文化財課、区画整理課、下水道課）協議（以降３回実施） 「保存も選択肢に含めた遺跡の取り扱い」を提起
	10月24日	歴史を活かしたまちづくり講演会パート12（参加者85人） 「中世の景観　城・館・町・港」坂井秀弥（奈良大学教授）

平成23年	1月19日	関係課に関係部課長（経営企画部長、建設部長、教育部長、政策企画課長、財政課長）を含めた協議に移行（以降２回実施）
	3月10日	慶応大学日本中世史研究室現地視察
	3月18日	大阪市立大学日本中世史研究室現地視察
	3月26日	中須東原遺跡発掘調査指導会
	5月19日～	副市長、総務部長、関係部課長による協議に移行（以降２回実施）
	6月９日	島根大学教育学部共生社会教育講座現地視察
	6月26日	歴史を活かしたまちづくり講演会パート13（参加者150人） 「中須東原遺跡が語る中世港町と東アジア世界」 小野正敏（人間文化研究機構理事）
	7月７日	文化庁記念物課協議
	7月26日	文化庁調査官現地視察・調査指導会（～27日）
	8月７日	現地説明会（参加者100人）
	8月８日	関西の研究者による現地視察・遺物見学（～９日）
	9月26日～	市長協議に移行（以降２回実施）
	12月15日	益田市文化財保護審議会に対し諮問 「中須東原遺跡の歴史的価値の評価とその保存・活用のあり方について」
	12月26日	市長・教育長による文化庁記念物課訪問、東京大学史料編纂所所蔵 「益田家文書」見学、研究者との意見交換
平成24年	1月10日	益田市文化財保護審議会より答申
	1月29日	現地説明会（参加者161人）
	2月６日	文化庁記念物課協議
	2月24日	市長による全面保存を目指す方針の公表
	3月18日	現地説明会（参加者140人）
	3月25日	権利者全体説明会（第１回）の開催。以後、個別に説明を進める。
	4月５日～	保存方針に基づき副市長を代表とした庁内調整会議を実施（以降４回実施）
	6月26日	文化庁記念物課協議
	8月３日	新市長事務引継　文化財課の最重要事項「中須東原遺跡の保存」
	8月18日	島根県知事の現地視察
	8月20日～	新たな方針決定のための市長協議を継続（11月までに７回）
	9月23日	歴史を活かしたまちづくり講演会パート14（参加者140人） 「益田の港湾遺跡と清盛の時代の交易」柳原敏昭（東北大学大学院教授）
	9月27日	益田市議会全員協議会 新方針「中須東原遺跡の保存に係る益田市としての方針」について説明
	9月30日～	権利者全体説明会（第２回）の開催。
	10月23日	市長の文化庁記念物課訪問と意見交換
	11月20日	文化庁記念物課協議
	12月15日	権利者全体説明会（第３回）の開催。
	12月25日～	関係権利者からの史跡指定同意書の取得を開始
平成25年	3月６日	中須東原遺跡整備検討委員会（第１回）
	5月11・12日	中須東原遺跡整備検討委員会（第２回）
	7月25日	中須東原遺跡史跡指定意見具申を提出
	8月20日	中須東原遺跡整備検討委員会（第３回）



No.	遺跡名	種別	時期	遺跡概要
4	三宅御土居跡	館跡	12c～16c	遺構/堀跡、掘立柱建物、礎石建物、木組井戸、石積井戸、盛土、土手状高まり、溝 ・荘園益田荘の政所から益田氏の居館へと変遷か。 ・館内は、東側から西側に向けて段階的に拡充されたか。 ・陶隆房の挙兵(1551)に伴い、益田藤兼は三宅御土居を離れ、七尾城へ拠点を移す。 ・藤兼の下城に伴い改修。関ヶ原の戦い後、益田元祥の長門国須佐移住に伴い廃絶。
5	七尾城跡	城跡	14c～16c 後	遺構/礎石建物、礎石列(塀跡)、集石遺構、庭園遺構、石積井戸、畝状空堀群 ・南北朝期の延元元年(1336)に三隅氏が北尾崎木戸を急襲。(『益田家文書』) ・礎石建物等検出遺構に伴う遺物の大半は 16c 前末～第 3 四半期過ぎに限定。 ・天正 10 年(1582)頃に藤兼・元祥が下城し、三宅御土居へ再び拠点を移す。
6	上久々茂土居跡	館跡	14c 前～16c 中	遺構/掘立柱建物、柵列、土坑、溝 遺物/白磁皿 2、青磁碗 48、青花皿 4、天目 9、褐釉 4、朝鮮碗・皿 2 など ・益田氏家臣の屋敷か。
7	東仙道土居遺跡	墓	13c～15c 初	遺構/集石墓 遺物/宝篋印塔(日引石製)、五輪塔片、多字一石経、褐釉四耳壺、常滑系壺、土師器壺 ・付近に館跡が推定される。
8	酒屋原遺跡	集落跡	11c～14c	遺構/ピット群、石組道路状遺構、溝 遺物/ 奈良～平安前半の須恵器・土師器に伴い円面硯 6 点が出土。 白磁碗・皿、青磁碗・皿、青磁香炉、青白磁合子、褐釉四耳壺、朝鮮陶磁など ・古代の行政関連遺跡から中世の館へ変遷か。
9	下都茂原遺跡	集落跡	9c 末～15c	遺構/掘立柱建物、柵列、土坑、溝状遺構、石積井戸 遺物/緑釉陶器、黒色土器、白磁、青磁、中国陶器など ・上流の丸山銅山の採銅開始と同時期に成立。銅山開発に関わった工人・下級役人の居住集落か。 ・鎌倉時代は、東仙道を拠点としていた益田氏と関連する集落か。
10	大年ノ元遺跡	集落跡	14c～15c	遺構/掘立柱建物、竪穴状建物 遺物/白磁、青磁、天目、朝鮮陶磁、坩堝、滓など ・銅の精錬工房跡。『日本三代実録』に記された丸山銅山の下流約 3.5 kmに立地。
11	森下遺跡	館跡	14c～15c	遺構/掘立柱建物、礎石建物 遺物/白磁碗・皿 6、青白磁梅瓶 2、青磁碗・皿 32、青磁盤 3、青花碗・皿 3、天目、褐釉 8、東南アジア産陶器など ・有力在地領主丸茂氏の館跡か。
12	丸山銅山跡	鉱山跡	881～1986	・天慶 5 年(881)に「都茂郷丸山」で銅が採れたとして、中央から役人が派遣されたという。(『日本三代実録』) ・14 世紀以降、下流の大年ノ元遺跡で銅精錬が盛んに行われる。 ・14～15 世紀にかけて丸山銅山の技術者が石見銀山の初期の開発に関与か。 ・1602 年に天領となる。1898～1901 年の間、津和野の堀氏が経営。
13	羽場遺跡	集落跡	12c～	遺構/掘立柱建物 遺物/緑釉陶器、白磁碗Ⅳ類、白磁碗Ⅸ類、白磁皿Ⅵ類、白磁水注・四耳壺、越州窯系青磁碗、同安窯系青磁碗・皿、龍泉窯系青磁碗・皿など ・弥生時代中期の環濠集落に古代及び中世前期の拠点集落が重複。
14	山根ノ下遺跡	館跡	14c～15c 前	遺構/柱穴群、土坑 遺物/白磁碗・皿 4、青白磁梅瓶 4、青磁碗 9、青花碗、朝鮮碗・皿 5 など ・益田氏勢力下の在地領主の館か。
15	殿屋敷遺跡	館跡	14c 中～16 c	遺構/柱穴群、土坑 遺物/白磁碗・皿 8、青磁碗 22、青花碗・皿 5、朝鮮碗、ベトナム長胴瓶など ・石見、安芸、周防に接する当地を支配した益田氏家臣・大谷氏の居館跡。

第１図　益田市の位置と市内の主要な中世遺跡

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

益田市は、島根県の西端に位置し、総面積733.24km^2、人口50,042人（2013年４月末現在）を有する石西地域の中核都市であり、1km^{2}当りの人口密度は68.2人となっている。地理的にみると、北は約33kmの海岸線で日本海に面し、東は浜田市、西は山口県、鹿足郡津和野町・吉賀町と境を接し、南は中国山地の脊梁部で広島県と境界を分け合っており、旧国は石見（いわみ）国に属して、西は長門（ながと）国に接した。

平安時代末期に石見国府（現浜田市）の在庁官人である藤原（御神本）氏が、開発を進めた益田平野とその周辺部を摂関家に寄進して荘園益田荘が成立すると、藤原氏は荘官に任じられて益田氏を称するようになった。以来、関ヶ原の戦いの後、長門国須佐に移るまでの間、山陰の有力武士団である益田氏が領域支配の本拠とした。平野部の南東に位置する益田地区には、平成16年に「益田氏城館跡」の名称で史跡に指定された居館三宅御土居跡と七尾城跡を中心に遺跡や寺社、石造物、地割・地名などの中世文化が色濃く残っている。近年、益田川河口域を中心に中世遺跡の調査が相次ぎ、さらに最近の中世石造物の調査では、鎌倉時代後期以降、六甲山御影石製の大型石塔が多量に搬入されたことが明らかにされている。

益田市の地理的環境は、石見地方最大となる北側の平野部（益田平野）と、それを取り囲む丘陵部・山間部からなっていて、益田平野は南の中国山地から北流して日本海に注ぐ２つの河川、益田川と高津川の沖積作用によって形成された複合三角州である。古地理・古環境の研究によれば、約6000年前の縄文前期に「古益田湖」と呼ばれる潟湖（ラグーン）が形成されたが、縄文後期以降の小海退が起こり、両河川の堆積作用が活発化するなどして徐々に陸地化が進行し、江戸時代中期以降は「古益田湖」はほぼ消滅しながら、現在の益田平野の地盤が成立したものと考えられている。

また益田平野の周辺部では、U字状に低丘陵地帯が広がりをみせているが、谷や尾根が多く入り組み、丘陵間をぬって流下する河川やそれに伴う氾濫原・河岸段丘が見られるなど、複雑な地形が形成されている。

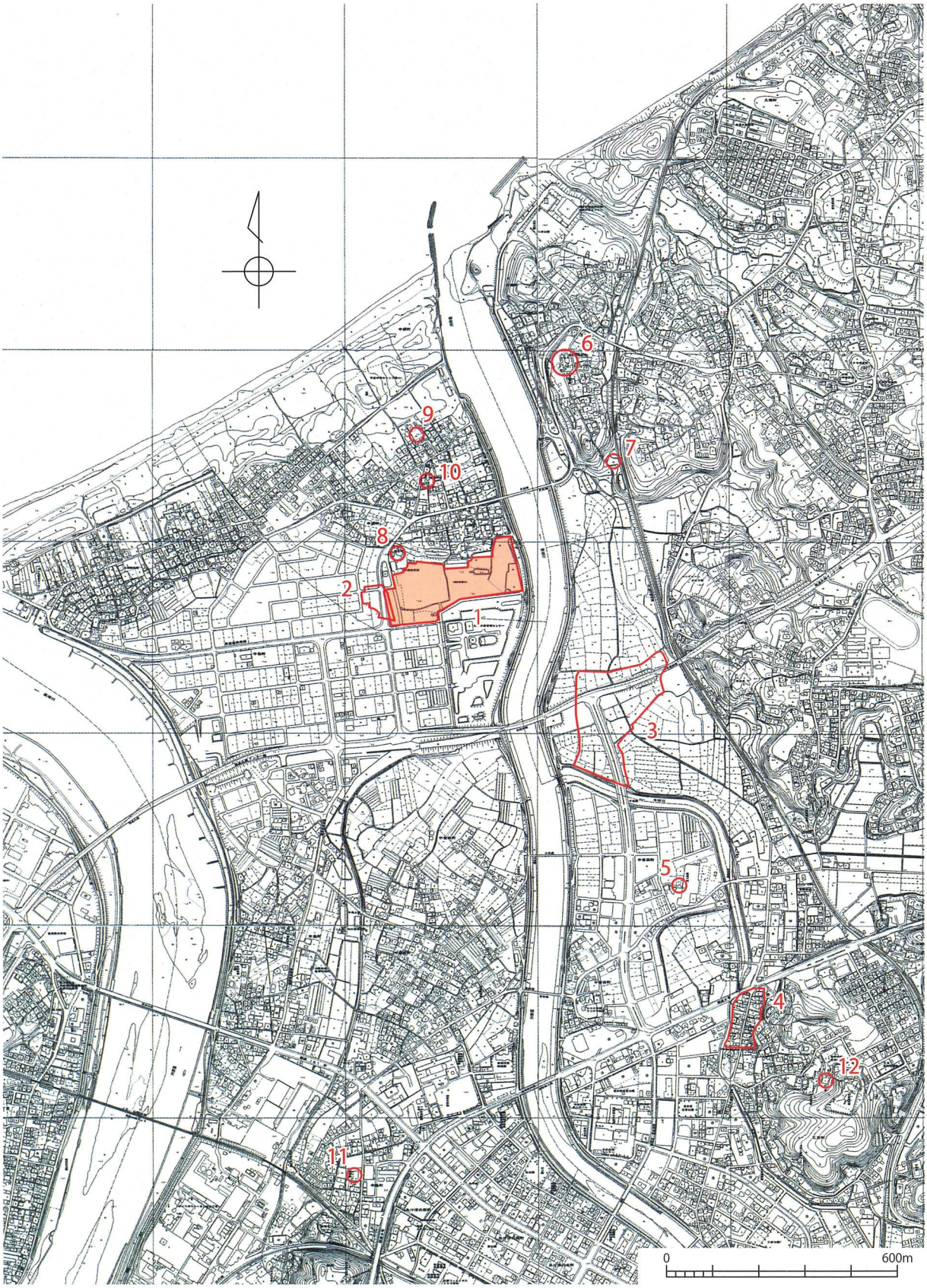
中須東原遺跡は、益田川左岸の安定した沿岸部に位置するもので、中世期には「古益田湖」東側の縁辺に立地していたと考えられる。そこは地表面の標高約1.6m前後を測って、益田川河口から約数百メートル遡った場所であり、砂丘や砂州の発達する平地において、現況では主に水田や畑地として利用されていた場所である。

第２節　歴史的環境

１．河口部の歴史的変遷

現在の益田川河口部の久城から中須、大塚にかけての海岸に砂州が形成され始めたのは、約6,000年前の縄文時代前期にまで遡る。これに伴って益田川と高津川の流路が複雑に蛇行・分流して、河口部には広範囲に後背湿地、潟湖（「古益田湖」）が形成された。それ以降、沖積作用により土砂の堆積が進む中で、中世においても潟湖または入江の地形が存続し、湊が立地するに適した地形的条件が備わっていた。

益田川右岸の丘陵上には、延喜式内社櫛代賀姫神社が鎮座し、その近くには、建長７（1255）年在銘の阿弥陀如来立像を本尊とした別当寺真如坊が明治初年まであった。また左岸の中須地域には、福王寺に鎌倉時代後期の十三重層塔や元徳２（1330）年の年号が彫られた五輪塔の地輪など多くの



1. 中須東原遺跡　2. 中須西原遺跡　3. 沖手遺跡　4. 中世今市遺跡　5. 平田遺跡　6. 式内社櫛代賀姫神社　7. 真如坊跡
8. 福王寺　9. 安福寺跡　10. 恵比寿神社・厳島神社　11. まどころ（政所）地名　12. 雪舟の墓

第２図　中須東原遺跡の範囲と周辺の主要遺跡

中世石造物が残され、付近には、応永７（1374）年に「益田本郷」（現在の益田地区）に移転創建された萬福寺の前身である安福寺跡、さらに恵比寿神社、厳島神社、大元神社などが散見できる。最近の研究では本層塔を含め、鎌倉時代後期から南北朝時代にかけて六甲山花崗岩の御影石製の大型石塔が多量に益田に搬入されたことが明らかになっている。

永和２（1376）年の「益田本郷御年貢并田数目録帳」（益田家文書81）によれば、南北朝時代に益田兼見が中須を新たに益田本郷の領域に組み込んだことを読み解けるが、こうした宗教的施設と一体となっている湊を中心として、益田氏関係の経済基盤を支える港湾拠点地域として重視されてきたものと推測される。さらにこの史料には、名（みょう）のひとつとして「大中洲鍛冶名」が確認でき、一帯では川砂鉄を利用した鍛冶も盛んに行われていたと想像できる。

なお、恵比寿神社に隣接する中須集会所には、後世の江戸時代に作成された絵図や文献史料が残されているが、前者からは海側からみた港や山、川、集落などの名称や地形的様相を視認でき、また後者からは寛政８（1796）年には益田川の水量が減少し、かつては諸廻船が入津していた中須浦港の機能がすでに著しく低下していたことを読み取ることができる。

ところで、本報告する中須西原・東原遺跡の東側にあたる今市川と益田川との合流地北域には、11世紀後半から12世紀後半にかけて最盛期を迎える沖手遺跡が存在する。遺跡は、益田市久城町の益田川河口から約１km遡った右岸に位置しており、標高約２ｍの低平な水田地帯に広がる遺跡の推定面積は45,000m^{2}に及んでいる。

南側に接する今市川は、昭和10年代に行われた河川改修以前の益田川本来の河道であり、遺跡の南側の一部には「専福地（寺）」の寺院地名が重なり、近世には浜田藩の益田組専福寺浦番所が置かれていた。本遺跡地は道路建設事業に伴い、平成16年度から平成18年度にかけて島根県埋蔵文化財調査センターと益田市教育委員会によって約19,000m^{2}の発掘調査が行われた。

主な遺構としては、掘立柱建物跡140棟、井戸18、墓92、道路遺構などが検出されている。とくに直線状または方形に巡る道路、溝、柵列等によって集落の全体が大きく区画され、建物は概してこの区画に沿って建ち並んでいたこと、両側に側溝状の窪みをもって、全体が皿状に浅く掘り窪められた幅4.0～6.0mの道路が明瞭に検出されたことなどが注目される。配置は方位に準じた方向性をもつなど、成立段階から一定の規格性をもった上で道路を骨格とした集落全体の地割を行っていたことが窺える。

また遺物は11世紀後半から17世紀前半までの遺物が出土しているが、貿易陶磁は11世紀後半から12世紀後半までをピークとして、以降は減少する傾向が窺える一方、東端域は中世後期のものが増加し、近世初頭の遺物も多数出土している。こうした状況からは、集落の中心部は南あるいは南西から東へ移動したと考えられ、中世前期に係る益田川の本流河道の利用から中世後期に係る山裾際の小河道の利用も高まったと推定される。

沖手遺跡からは舟着きの遺構は確認されていないが、その立地と遺構や遺物の全体的な様相から、益田川や高津川の上流域と国内外の遠隔地とを結ぶ流通拠点として、寺院と一体となって古代末に成立した港湾集落と考えられ、それ以降の河口域では、礫敷き遺構（舟着き場跡）の検出された中須西原・東原遺跡へ接続すると推定される。

その後、1368年に建国された明の海禁政策により中国を閉め出された南蛮船は壱岐や対馬、博多の商人と結びつき、倭寇も介在した新たな交易圏が形成された。中須西原・東原遺跡は、益田氏関連の拠点港としてそこに組み込まれ、国内外の物資集散地として機能していたと思われ、また室町時代

には一帯に港湾遺跡が複数存在していたと想定されている。

沖手遺跡から中須西原・東原遺跡へと変遷した港湾施設の機能は、さらに上流の今市へと移った。そこには潟湖の干陸化とともに、海水面が現在よりも1.0m以上低くなったといわれる14世紀後半の海退も大きく影響したと考えられる。

益田本郷市に対する新たな市町として成立した今市は、発掘調査によって16世紀前半に造成が始まり、16世紀末に最盛期を迎え、益田氏の須佐移住と連動するように17世紀初頭に終息したことが明らかにされている。軍事物資調達のために益田本郷市の有力商人が居住した可能性も考えられる市町跡で、中央の道と両側の短冊状区画を含む中世今市の地割全体が今も残っている。

2．益田の歴史と文化財

［原始・古代］

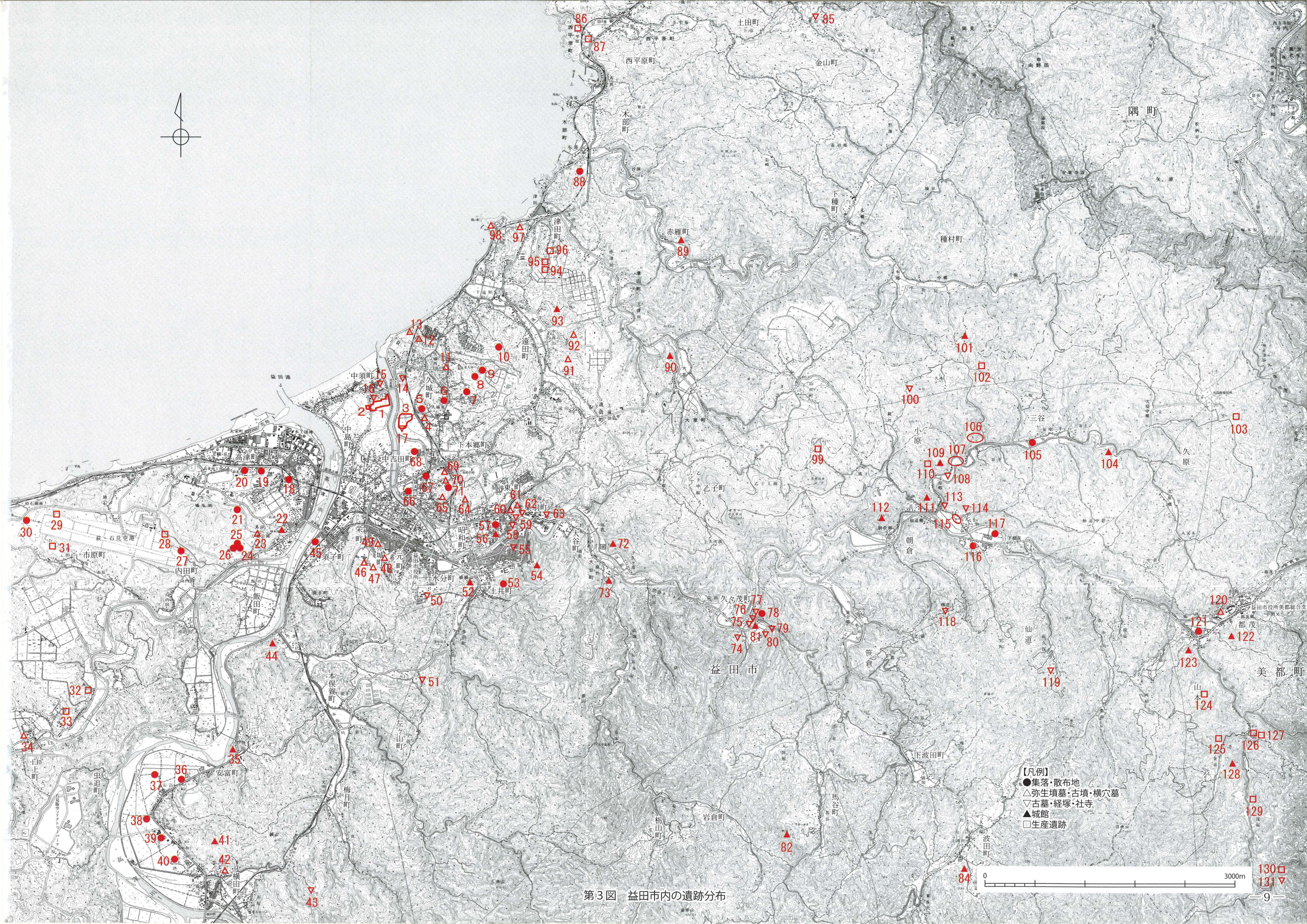
現在、島根県では旧石器時代のものとみられる石器が10数箇所で確認されているが、県西部では山間部の匹見町道川で発見された新槇原遺跡が顕著である。約２万数千年前に降下した姶良Tn火山灰層下から人工的に打ち欠いた石刃状剥片と炭片が出土した。また昨今の調査成果により、海岸部に近い久城台地の久城西Ⅱ遺跡からは尖頭器が、堂ノ上遺跡からは有茎尖頭器が発見され、いずれも縄文時代草創期を下限にすると推定される。

匹見町は、縄文時代草創期以降、狩猟・採集・漁撈文化の拠点として縄文遺跡が濃密に分布する。早期の上ノ原遺跡や蔵屋敷田遺跡（道川）、近年発見された山崎遺跡（澄川）では押型文土器の出土とともに、上ノ原遺跡やダヤ前遺跡では石器の製作や打製石斧の使用が認められ、前期の田中ノ尻遺跡（道川）や中ノ坪遺跡（紙祖）では轟式系土器、中期の石ヶ坪遺跡（紙祖）では阿高・並木式系の土器が使用され、九州との活発な交流があったことが窺える。

また後期の石ヶ坪遺跡、水田ノ上遺跡（紙祖）、ヨレ・イセ遺跡（匹見）では、径１～２m程度の河原石による円形石組をドーナツ状に配置した「配石遺構」が発見されており、個々の石組下の土坑から人骨片が採取されたことから、共同墓地であることが判明している。中には多くの土器に混じって女性土偶、円形土製品、鳥形土製品、玉類なども出土することから、葬送儀礼を含めた宗教的な儀式が行われていたと推測できる。その背景には、同一の精神文化を共有した中規模以上の集団のまとまりが想定でき、恵まれた自然環境と広域的な文化交流の要衝地という地理的条件が相まって、後期以降に拠点的な集落が複数形成されたと考えられる。なお海岸部では、沖手遺跡（久城町）の下層から縄文時代晩期に遡ると推定される丸木舟２艘が発見されるとともに、久城台地の若葉台・久城西Ⅱ遺跡では、縄文時代中期の落とし穴がそれぞれ確認された。

弥生時代の前期から中期にかけて、浜寄遺跡（高津町）では水田跡が発見され、中期には高津川中流域の羽場遺跡（安富町）で環濠をもつ集落が営まれており、高津の丘陵上のサガリ遺跡では高地性集落の確認、沖手遺跡では水田に伴う水路の発見とともに、久城台地の専光寺脇遺跡からは貼石をもつ墳丘墓が発見されている。後期になると、中小路遺跡（安富町）で竪穴住居と土器棺墓群が発見される一方で、久城台地の堂ノ上遺跡、久城東遺跡、原浜遺跡には竪穴住居が多く検出されたことより、広く安定的な集落が展開した様相を窺うことができる。

古墳時代には、益田川以東の益田平野周辺に首長墓としての大型古墳が築造された。前期の四塚山古墳（下本郷町）は未調査であるものの、団地造成工事中に三角縁神獣鏡が発見されている。県史跡大元1号



第３図　益田市内の遺跡分布

第３表　調査地周辺の遺跡一覧

番号	遺　跡　名	種　類	旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	江戸以降	遺跡番号
1	中須東原遺跡	集落跡						■	■	Q348
2	中須西原遺跡	集落跡						■	■	Q349
3	沖手遺跡	集落跡		■	■	■	■	■	■	Q271
4	専光寺脇遺跡	墳墓			■	■				Q23
5	堂ノ上遺跡	集落跡		■	■					Q270
6	久城東遺跡	集落跡			■		■		■	Q269
7	若葉台遺跡	集落跡		■		■				Q268
8	久城西Ⅰ遺跡	集落跡			■	■				Q266
9	久城西Ⅱ遺跡	散布地	■	■						Q267
10	原浜遺跡	集落跡			■		■			Q265
11	スクモ塚古墳	古墳				■				Q24
12	小池古墳群	古墳				■				Q27
13	高浜古墳群	古墳				■				Q26
14	真如坊跡	寺院跡						■	■	Q91
15	安福寺跡	寺院跡			■		■			Q93
16	福王寺石造十三重塔	石造物						■		
17	専福寺跡	寺院跡					■			Q94
18	浜寄・地方遺跡	集落跡・水田跡			■	■	■	■		Q274
19	長者原遺跡	散布地			■					Q107
20	松ヶ丘遺跡	散布地			■	■				Q142
21	サガリ遺跡	集落跡			■		■			Q259
22	高津城跡	城跡						■		Q67
23	研石横穴	横穴墓				■				Q261
24	廿子Ⅰ遺跡	集落跡他			■	■				Q283
25	廿子Ⅱ遺跡	集落跡他			■	■	■		■	Q284
26	廿子Ⅲ遺跡	集落跡他			■	■	■		■	Q285
27	根ノ木田遺跡	散布地				■	■			Q208
28	北ヶ迫遺跡	窯跡							■	Q207
29	仁右エ門山遺跡	窯跡							■	Q205
30	大溢遺跡	集落跡					■			Q204
31	相生遺跡	窯跡							■	Q206
32	吹金原窯跡	窯跡							■	Q320
33	野田窯跡	窯跡							■	Q318
34	白上古墳	古墳				■				Q39
35	安富城跡	城跡						■		Q74
36	羽場遺跡	集落跡			■		■	■		Q150
37	中小路遺跡	集落跡			■		■	■		Q347
38	安富遺跡	散布地		■	■					Q1
39	大畑遺跡	集落跡						■		Q262
40	家下遺跡	集落跡			■		■			
41	豊田城跡	城跡						■		Q73
42	上野横穴	横穴				■				Q38
43	石塔寺権現経塚	経塚						■		Q186
44	角井城跡	城跡						■		Q246
45	須子遺跡	散布地			■					Q106
46	小堤横穴群	横穴				■				Q48
47	南長迫横穴群	横穴				■				Q47
48	日赤裏横穴群	横穴				■				Q49
49	北長迫横穴群	横穴				■	■			Q46
50	水分経塚	経塚							■	Q153
51	扇原関門跡	関門跡							■	Q198
52	稲積城跡	城跡						■		Q69
53	万歳山遺跡	散布地			■					Q100
54	七尾城跡	城跡						■		Q57
55	暁音寺山門及び鐘楼	寺院						■	■	
56	三宅御土居館跡	館跡		■			■	■		Q136
57	土井後遺跡	散布地		■						Q215
58	萬福寺庭園	庭園						■	■	Q202
59	勝達寺跡	寺院跡						■	■	Q90
60	片山横穴群	横穴				■				Q44
61	秋葉山古墳群	古墳				■				Q32
62	染羽天石勝神社本殿	神社						■	■	
63	医光寺庭園	庭園						■	■	Q203
64	山の平山頂古墳	古墳				■				Q187
65	叶屋上山古墳群	古墳				■				Q20
66	日赤敷地遺跡	散布地			■					Q191
67	中世今市遺跡	市町						■		Q323
68	平田遺跡	集落跡						■		
69	四塚山古墳群	古墳				■				Q143
70	小丸山古墳	古墳				■				Q17

71	小丸山遺跡	集落跡								Q188
72	大谷城跡	城跡								Q64
73	大谷土居跡	館跡								Q137
74	小平古墓	古墓								Q184
75	土井殿の墓	古墓								Q181
76	得亳寺裏古墓	古墓								Q180
77	大峠古墓	古墓								Q179
78	大峠遺跡	散布地								Q216
79	とうのう山古墓	古墓								Q182
80	山根古墓	古墓								Q183
81	上久々茂土居跡	館跡								Q151
82	高嶽城跡	城跡								Q66
83	韮草山城跡	城跡								Q254
84	波田城跡	城跡								Q83
85	大内新介弘直の墓	古墓								Q201
86	中塚窯跡群	窯跡								Q56
87	芝窯跡群	窯跡								Q55
88	井元遺跡	散布地								Q2
89	赤雁土居跡	館跡								Q138
90	大草城跡	城跡								Q63
91	大元古墳群	古墳								Q149
92	木原古墳	古墳								Q145
93	嶽城跡	城跡								Q59
94	朶ヶ迫窯跡	窯跡								Q54
95	本片子窯跡	窯跡								Q99
96	杉迫窯跡	窯跡								Q147
97	大道古墳群	古墳								Q51
98	鵜の鼻古墳群	古墳								Q9
99	北ヶ溢鈩跡	製鉄遺跡								R24
100	久木経塚	経塚								R46
101	土井山城跡	城跡								R45
102	新宅溢鈩跡	製鉄遺跡								R25
103	鈩床鈩跡	製鉄遺跡								R14
104	都賀根城跡	城跡								R4
105	大石前遺跡	散布地								R66
106	三谷古墳群	古墳								R3
107	小原古墳群	古墳								R5
108	粟島原遺跡	古墓								R56
109	竹城跡	城跡								R47
110	掛所鈩跡	製鉄遺跡								R23
111	背戸山城跡	城跡								R55
112	四ツ山城跡	城跡								R21
113	東仙道土居遺跡	その他の墓								R57
114	相続庵跡	寺院跡								R52
115	酒屋原遺跡	集落跡								R59
116	龍光遺跡	散布地								R67
117	下都茂原遺跡	集落跡								R73
118	正明寺跡	寺院跡								R51
119	殿明古墓	古墓								R72
120	屋敷平横穴・遺跡	横穴・散布地								R2
121	大年ノ元遺跡	集落跡								R64
122	都茂城跡	城跡								R54
123	要害山城跡	城跡								R20
124	金ヶ崎鈩跡	製鉄遺跡								R26
125	悪谷鈩跡	製鉄遺跡								R29
126	金屋敷鈩跡	製鉄遺跡								R28
127	火の迫鈩跡	製鉄遺跡								R27
128	入船山城跡	城跡								R19
129	深折鈩跡	製鉄遺跡								R30
130	化粧谷鈩跡	製鉄遺跡								R31
131	安養寺跡	寺院跡								R50

墳（遠田町）は石見地方最大の前方後円墳で全長88mを測る。中期には円墳として国の史跡指定を受けているスクモ塚古墳（久城町）が築造されるが、平成19年度の測量調査からは前方後円墳の可能性も指摘されている。また後期の初めには、周濠と外堤を備えた全長52mの市史跡小丸山古墳（乙吉町）が築造された。後期に入ると、横穴式石室をもち小規模な円墳を主体とする県史跡鵜の鼻古墳群（遠田町）が築造される。

一方では、平野部の開発に伴って台頭してきた有力者層によって、市史跡白上古墳（白上町）や片

1．西下市　2．西中市　3．西上市
4．東下市　5．東中市　6．東上市
7．橋本　8．法寺迎　9．岩本
10．田中　11．中之坪　12．西ノ前
13．郷ノ内　14．河原　15．峠山
16．魚田　17．山崎　18．王子
19．氏八幡　20．小堤　21．堂ノ上
22．江渕　23．四反田　24．専福寺
25．曽利田
26．新田・久保田・窪畑（字界不明）
27．梨ノ木・角江田（字界不明）
28．堂本　29．内ノ田　30．ヨシノハナ
31．江藤・卯ノ木・水入・新水入（字界不明）
32．新田・久保畑・窪畑（字界不明）
33．堂畑　34．西ケキ　35．西ケ市
36．間所　37．新イヤ　38．蔵屋
39．泰平山・山根（字界不明）
40．丸山　41．鯨　42．枇杷首

0　500m

（2000中世今市船着場跡調査報告書より転載）

第４図　益田川下流域の字名分布図

山横穴群（染羽町）、多田横穴群（多田町）、北長迫横穴群・南長迫横穴群（赤城町）などが築かれるとともに、山間地の美都町には市史跡三谷古墳群（三谷）、匹見町には市史跡の江田古墳群（匹見）・和田古墳（匹見）などが築造された。

本片子窯跡（遠田町）は須恵器や瓦が焼かれ、三宅御土居跡周辺でも瓦が少量出土しているが、古代寺院は現在のところ見つかっていない。

なお本市は、歌聖といわれる柿本人麻呂の関係地とされる。益田市戸田は人麻呂の生誕地といわれ、戸田柿本神社が存在する。彼は、持統・文武両天皇に宮廷歌人として仕え、「万葉集」に多くの歌を残した。また益田川の河口沖にかつて鴨島があり、万寿地震の大津波によって水没したと伝わる。そこは人麻呂の終焉地といわれ、人麻呂を祀った高津柿本神社（高津町）は、松崎の地を経て、江戸時代には現在の地に移転した。

奈良時代に石見国府が現在の浜田市に置かれたが、美濃郡衙の位置は未特定である。また安富町の中小路遺跡では、直径１ｍに及ぶ柱穴群が検出され、官衙に関わる建物とも推測されている。そして、益田氏の居館が置かれた三宅に「屯倉」を想定する説もある。

平安時代の天慶２（881）年には都茂郷丸山で銅山が発見され、以降近世初頭には幕府直轄地（天領地）として繁栄する。また延長５（927）年に完成した『延喜式』には旧美濃郡内で、菅野天居若子命神社・佐比売山神社・染羽天石勝神社・櫛代賀姫命神社・小野天大神之多祁阿豆委居命社の五社がみえる。

また益田川の河口部には、五福寺といわれる安福寺、妙福寺、福王寺、蔵福寺、専福寺があったと伝わるが、万寿３（1026）年の大津波により流失したという伝説があるが実証はされていない。現在に姿を残すのは、福王寺と安福寺の後身となる萬福寺のみである。

なお平安時代の末期には、益田荘（吉田・安田・鎌手・種・北仙道・豊川・真砂・東仙道）と長野荘（鹿足郡の一部・美濃郡内の高津・中西・小野・美濃・二条・豊田・高城）が成立した。

［中世］

石見国を代表する有力武士団である益田氏は、鎌倉時代に本拠を「益田本郷」に移すが、その後いったん益田川中流域の「山道（せんどう）」（現在の美都町仙道）地域に退いた。再び「益田本郷」に本拠を定めたのは南北朝時代であり、荘園領主九条摂関家に代わって益田荘支配の実権を掌握した。

以来大内氏、大内氏の滅亡後は毛利氏に従い、室町将軍家や幕府の中枢権力との関係も強めながら、山陰の有力武士団として勢力を伸張させた。関ヶ原の戦いの後は、長門国の阿武郡須佐村に移り、萩藩毛利家の永代家老職を務めている。

本拠とした「益田本郷」地域には、三宅御土居跡と七尾城跡を中心に中世の遺跡や地割、地名、寺社、石造物などが数多く残り、これを取り巻くように益田平野、そして市域全体に中世遺跡が点在するが、とくに益田川流域に顕著である。さらに益田家には山陰地方の史料では質・量ともに随一とされる文書群と多くの貴重な美術工芸品が伝来した。

三宅御土居は益田家文書から、応安年間（1368～75）に築造され、天正11（1583）年に改修されたこと、須佐移住後の跡地には、益田氏旧臣の鬼村祐光が江戸時代初頭に寺院（浄土真宗本願寺派松龍山泉光寺）を創建したことが知られている。因みに、泉光寺に伝わる文書には、かつて19代当主益田藤兼が阿弥陀堂を建立したと思われる場所から、「松竜山阿弥陀殿」の板額が掘り出され、それを発端とすることが記されている。

本居館跡は益田川右岸の標高約９ｍの微高地上に立地し、かつて周囲を巡っていた堀跡は埋め立てられて宅地化している。館敷地と周辺住宅の比高差は約2mを測る。堀内側の敷地は東西約190m、南北約110mで、

東側が北に突出した長靴形を呈し、東西に高さ約５mの土塁が現存する。東西の堀跡は幅10m、深さ２～３mの箱堀である。北堀跡は最大幅16m、深さ1.5mで、さらに北側に堀と平行する幅約８mの川跡が検出された。また南側では幅20～25mの川跡が検出され、益田川の支流を堀として利用していたことが判明している。

遺物は12世紀から16世紀の陶磁器が出土し、中でも12・13世紀の陶磁器が普遍的に出土することから、益田氏居館の前身として益田荘の政所の存在が推定されている。また館内の東側では建物が繰り返し建て替えられており、13世紀の木組井戸跡、16世紀の礎石建物跡、石積井戸跡、鍛冶場跡等が検出されているが、主殿など中心的な建物は確認されていない。なお、三宅御土居の前身の館推定地として、現在の益田水源池付近の周辺に「小土井」が、土井町に「徳原土居（大土井）」が推定されている。

益田氏の拠城である七尾城は、４代益田家当主の兼高が益田に本拠を移したとされる建久年間（1190～1198）、あるいは鎌倉時代の文永・弘安年間（1264～1287）の元寇に伴い海岸防備のための石見十八砦の一つとして築城され、延元元（1336）年の文書に初見する。天文20（1551）年に毛利氏との緊張関係が高まる中で、益田藤兼は大規模な改修を行って、城内に居住した。その後、天正11年には七尾城から下城して三宅御土居跡に移ったとされている。位置については、三宅御土居跡の南東約900m、益田川左岸の標高約118mの丘陵上に立地し、標高差は約100mを測っている。

そこは東西約400m、南北約600mの範囲に大小40余りの曲輪（くるわ）や堀切が展開し、６つの地区で構成される。大手道は北側に開く馬蹄形の東西尾根の間の谷道を登る。また北東端と本丸跡の南東側には畝状空堀群を配し、西側の山裾には水堀跡が巡る。

本丸跡では、南端で御殿跡と想定される建物礎石と雨落溝が、北端で櫓門と想定される瓦葺き礎石建物の門跡が、二の段跡の北端では礎石建物跡、砂利化粧区画を伴う小庭園跡が検出された。また13世紀から16世紀の土器・陶磁器が出土したが、遺物の大半は16世紀の第３四半期までのもので、藤兼の居住期間と一致する。とくに主郭にあたる本丸と二の段では全ての遺物に対するかわらけの占有率が90％近くに及ぶことから、酒宴を伴うハレの儀式などの儀礼の場であるとともに、城主の生活の場であったと推定される。

このように益田氏城館跡は、発掘調査の成果と文献史料の研究成果が一致し、遺構の遺存状態も極めて良好であり、中国地方の歴史を考える上で貴重である。

延喜式内社染羽天石勝神社は、奈良時代の神亀年間（724～728）に創建され、紀州熊野権現を勧進して瀧蔵山瀧蔵権現と称した。天正９（1581）年に焼失したため、藤兼・元祥父子によって天正11年に再建された。勝達寺は承平元（931）年に瀧蔵権現の別当寺として創建された真言宗寺院で、中世初期には十六坊を構え、中世末期には権現社も掌握していたが、明治の廃仏毀釈により廃寺となった。本尊の不動明王坐像は重要文化財に指定され、鎌倉市極楽寺に現存する。

医光寺（瀧蔵山医光禅寺）は、もと天台宗崇観寺の塔頭として正平18（1363）年に創建された臨済宗東福寺派の寺院で、南北朝時代に争乱や火事で衰えたため17代益田家当主宗兼が再建した。史跡及び名勝に指定された室町時代の伝雪舟庭園があり、県指定有形文化財の総門は、かつての七尾城大手門と伝えられる。また近年には、本寺の創建期に遡る時代に制作された仏像が新たに発見されて話題を呼んだ。その仏像は開山堂に安置されていた釈迦如来坐像であり、前身の崇観寺の本尊であったとされる像である。背中部分の内側に銘文が墨で書き付けられており、南北朝時代の応安４（1371）年に制作されたことや、仏師名、また11代益田家当主兼見の名前も確認できることは、当該期に係る仏教振興の具体的事例であり、また崇観寺に関する史料では現存最古となる点で貴重である。

写真１　福王寺石造十三重塔

写真２　三宅御土居跡

写真３　七尾城跡

写真４　住吉神社

写真５　医光寺総門

写真６　染羽天石勝神社

写真７　医光寺

写真８　医光寺庭園

写真９　萬福寺本堂

写真10　萬福寺庭園

写真11　妙義寺

写真12　益田藤兼の墓（伝）

写真13　益田兼家の墓（伝）

写真14　益田兼堯の墓（伝）

写真15　益田兼見（右）・兼方（左）の墓（伝）

写真16　暁音寺

時宗清瀧山萬福寺は、平安時代の万寿年間に流失したとされる中須の天台宗安福寺を、兼見が応安7(1374)年に移転再建した寺院で、本堂は重要文化財、室町時代の伝雪舟庭園は史跡及び名勝に指定され、鎌倉時代後期仏画の重要文化財二河白道図、県指定文化財の木造阿弥陀如来立像（鎌倉時代）も所蔵されている。

萬歳山妙義寺の創建は文永年間（1264～1274）といわれ、当初は臨済宗で妙義庵と称したが、応永年間（1394～1427）の初めに13代益田家当主の兼家により再興し、菩提寺とした。門前には七尾城の堀、丸池からの川跡が残る。

七尾山の中腹に鎮座する住吉神社は、４代益田家当主の兼高が上府（現在の浜田市）の住吉社を七尾城の鎮護神として奉祭したことに始まるという。現在の社殿は、寛文４（1664）年に浜田藩主松平氏によって造営された。益田氏の重臣増野甲斐守の屋敷跡に、浄土宗知恩院派暁音寺が天文12（1543）年に創建され、本尊の阿弥陀如来立像（鎌倉時代）は県指定文化財とされている。天正５（1577）年に創建された浄土真宗 順念寺は源頼朝公ゆかりの寺宝を残しており、また日蓮宗円教山妙法寺は天正９年頃に創建された。また大草町の東陽庵には延慶４（1311）年在銘の木造薬師如来坐像（蓮法作）、妙義寺末寺の大喜庵には平安時代の木造観音菩薩立像が安置され、それぞれ県指定文化財となっている。

中世の石造物としては福王寺の十三重層塔のほか、七尾城跡南側の桜谷に藤兼の墓、13代益田家当主兼家の墓と伝えられる花崗岩製の五輪塔がある。前者は総高211cmを測る市内最大の五輪塔で、完存している。後者も復元総高約150cmの大型五輪塔である。七尾城尾崎丸山麓の大雄庵跡の近くに伝益田兼堯（15代益田家当主）の墓、萬福寺境内の椎山墓地に兼見の墓と伝えられる総高168cmの五輪塔など６基の花崗岩製の五輪塔が確認されるが、さらに近年の中世石造物の調査では、鎌倉時代後期以降、六甲山御影石製の大型石塔が多量に搬入されたことが明らかにされている[(1)]。

明治時代の「美濃郡上本郷村地図」によれば、七尾城下の益田川左岸側の町には、いわゆる短冊状の地割が道に面して連続していることがわかり、益田川に近い自然堤防上に「上市、中市、下市」に地名が、暁音寺の東側の広い範囲に「上犬ノ馬場」、「下犬ノ馬場」の地名がみえる。さらに、順念寺一帯には家臣の屋敷地と推定される「山根」、七尾城跡の山麓の北寄りに「堀川」の地名がある。慶長４（1599）年と推定される「益田玄蕃頭（元祥）目録」には、「益田本郷市屋敷一二八ヶ所」とある。

暁音寺門前の鍵曲がりは、中世城下町の防御のための遺構、あるいは近世初めに境内を迂回する形で住吉神社への参詣道が整備された結果とも考えられ、中世城下町から近世在郷町への変遷を象徴的に残す地割の痕跡といえる。下層には奈良時代から平安時代にかけての古川遺跡が重複している。

市域の南西部、横田町の山頂に建立された石塔寺大権現は、『日本三代実録』天慶２（878）年の条に「石見国石塔鬼王帝釈天王国社神並授従五位下」とみえる。宝永３（1706）年に境内から９口の経筒が発見され、うち越州窯系青磁経筒１、褐釉四耳壺３、須恵質壺１の５口が社宝となり、県有形文化財に指定され、現在は豊田神社に所蔵されている。安富町羽場遺跡でも、緑釉陶器と12世紀以降の陶磁器が大量に出土した。

承久の乱の勲功により、遠江国内田荘下郷地頭内田致茂が石見国「貞松名」（現浜田市）・「豊田郷」（長野荘の所領単位：現在の隅村町、本俣賀町、向横田町、横田町）の地頭職に、相模国波多野氏の一族菖蒲実盛が鹿足郡境の「美乃知黒谷」（長野荘の所領単位：現在の上黒谷町、黒周町、美濃地町、有田町）の地頭職を補任された。

---

(1) 古川久雄「石材からみた益田市の中世石造物」『市内遺跡発掘調査Ⅰ―七尾城跡・三宅御土居跡・沖手遺跡・中世石造物分布調査―』益田市教育委員会、2003年

北条氏が石見国守護となり、「益田本郷」が一時的に益田氏の手を離れていた鎌倉時代後期、益田惣領家及び益田氏一族の本拠地は、益田川上流の「山道」地域と推定されている。南北朝時代に庶子家から惣領家を継いだ兼見の勢力域にあたる。一帯では、中国製青磁碗、白磁小皿、湖州鏡などが副葬された墓地の粟島原遺跡、館推定地の一画から日引石製宝篋印塔とともに褐釉四耳壺、常滑系壺などを骨蔵器とした集石墓が発見された東仙道土居遺跡、円面硯と豊富な中世陶磁器が出土し、古代の行政関連施設から在地領主の館に変遷した可能性のある酒屋原遺跡、緑釉陶器と中世陶磁器が出土した下都茂原遺跡など中世遺跡の発見が相次いでいる。

さらに上流域の「津毛」（現在は都茂）には、「日本三代實録」に記載のある丸山銅山（近世初頭には石見銀山領、昭和62年に閉山）の近くで中世の銅の精錬工房跡が発見された大年ノ元遺跡、「丸毛」（現在は丸茂）には青白磁梅瓶の出土により有力在地領主の館と推定される森下遺跡がある。

「疋見」（現在は匹見）では石見、安芸、周防を結ぶ要衝地を支配した在地領主大谷氏の館跡と推定される殿屋敷遺跡（紙祖三葛）、青白磁梅瓶や12世紀後半と推定される和鏡の出土から在地有力者の館跡と推定される山根ノ下遺跡（澄川持三郎）がある。

このほかに益田地区に52、美都地区に14、匹見地区に21の中世城館跡が分布している。

第３節　文献史料に見る中世益田地域の流通経済・対外関係

１．はじめに

本稿に課せられた課題は文献史料から中須東原遺跡を位置づけることである。

中須の地名が古文書に直接出てくる事例は少ない。このため本稿では中世益田地域をとりまく流通経済と対外関係を分析することにより、中須東原遺跡の歴史的背景を考察したい。

中世益田地域の領主益田氏は、その家文書として中世文書だけでも約850点を残しており、関連する文献史料もあわせて分析することで、当時の状況を知ることができる。

中須東原遺跡は12～16世紀にかけての港町の遺跡であるが、この間の益田地域の流通経済の状況を、荘園公領制や海禁政策といった中央集権的な国家体制が機能していた段階と、明朝と室町幕府が衰え先述の国家体制が十分に機能しなくなった段階にわけて考察したい。

２．荘園公領制・海禁政策下における益田地域の流通経済・対外関係

（１）荘園公領制下における益田本郷地域

中世の益田市域には皇嘉門院領益田庄[(2)]や粟田宮社領長野庄[(3)]などの荘園があり、これらの荘園年貢は荘園領主のいる畿内へと輸送されたと想定される。その際は日本海や瀬戸内海を経て輸送されたと考えられ、そのことを示す石造物が益田地域には多く残っている。

それでは日本海沿岸まではどのように輸送されたのか。陸路を輸送された可能性ももちろんあるが、益田川・高津川・匹見川などの河川を輸送されたと想定することができる。鎌倉時代の文永６（1269）年頃、益田本郷において「津料浮口」が徴収されていたことが確認される[(4)]。「津料」は入港料、「浮口」は流通課

---

(2) 皇嘉門院惣処分状（「九条家文書」（『平安遺文』3913））。
(3) 崇徳院御影堂領目録（「華頂要略」55（『鎌倉遺文』8042））。
(4) 法橋範政書状案（「益田金吾家文書」１（久留島典子「益田金吾家文書（中世分）の紹介と考察」（『大規模武家文書群による中・近世史料学の統合的研究―萩藩家老益田家文書を素材に―』久留島典子、2008年））。

税で流通する物資の十分の一程度が徴収された[5]。このことは当時すでに益田川を使った河川水運が活発に行われていたことを示している。また南北朝時代の永徳３（1383）年には益田祥兼（兼見）が嫡子兼世（兼顕）に長野庄内飯田郷に加えて「河関」を譲与しており[6]、高津川水運も活発に行われていたことがわかる。

南北朝時代の永和２（1376）年の益田本郷の年貢や田数が記された目録からは、「大中洲」に「鍛冶名」があり、「水衆用途」が徴収されていたことがわかる[7]。「鍛冶名」は鍛冶が徴税を請け負った田や畑などのことで、有力な鍛冶の存在が想定され、中須東原・西原遺跡で発見された鍛冶関連遺構との関係が考えられる。「水衆用途」は領主が舟の漕ぎ手を動員する際の費用が納められたと考えられるが、これは大中洲においてのみ徴収されており、大中洲が水運と深く関連していることを示している。

以上のことから、益田本郷は古くから、日本海水運と益田川（さらには高津川とその支流匹見川も想定される）の河川水運が接続する地点として、益田地域の流通経済の重要地点であり、南北朝時代には水運の拠点が形成されていたことが文献史料からも裏付けることができる。

（２）海禁政策下における石見国沿岸地域

中世東アジアの外交関係は、時期による相違はあるものの、海禁政策のもと私貿易が公的には認められず、国家の公認のもとに通交・交易が行われるのが建前であった。

このような状況下においても、山陰地域は朝鮮半島と近いため、漂流者の送還などを通じた交流・交易が行われた。応永32（1425）年、李氏朝鮮の官人らが乗る船が石見国長浜（浜田市）に漂着し、これを送還した周布兼仲は李氏朝鮮から通交を認められ、この後周布氏は文亀２（1502）年まで計49回李氏朝鮮と通交している[8]。こうした山陰地域と朝鮮半島の関係の中、応仁元（1467）年に「益田守藤原朝臣久直」が寿蘭の護送を名目に朝鮮に通交しているが[9]、当時の益田氏に久直という人物がいないことなど不自然な点が多く、これは対馬宗氏が仕立てた「偽使」と考えられる。しかし、このことは当時の益田が、対馬宗氏が「偽使」の根拠地とするにふさわしい海洋領主の拠点であったことを示してもいる。

また、15世紀後半は朝鮮王朝の倭寇対策により倭寇の活動が衰退した時期であるが、次のような倭寇的とも言える存在が確認でき、その倭寇的勢力と石見国の関わりが深いことが推測される事例がある。たとえば以下のようなことが知られる[10]。1445（端宗３）年には石見国出身で対馬にて還俗した「三甫羅酒毛」が朝鮮人であると詐称して朝鮮で回賜品を盗んだ。1481（成宗12）年に全羅道を襲撃した「倭賊」は対馬を拠点とし、石見国との商売を生業としていた。1490（延徳２）年に対馬の宗貞国は「賊徒」の拠点が出雲・石見に及んでいるとした。これらのことは倭寇的勢力・対馬・石見の三者が密接に結びついていることを推測させ、倭寇的勢力により石見国に多くの中国・朝鮮などの産物がもたらされたと考えられる。中須東原・西原遺跡で発掘される大量の15世紀の貿易陶磁はこうした国際状況を背景としている可能性が高い。

３．戦国期における益田地域の流通経済・対外関係

応仁・文明の乱により室町幕府が弱体化すると、荘園公領制がその実態を大きく失い、また各地に

---

[5] 秋山伸隆「戦国大名毛利氏の流通支配の性格」（同著『戦国大名毛利氏の研究』吉川弘文館、1998年。初出は1982年）。
[6] 祥兼（益田兼見）譲状（『大日本古文書　家わけ第22　益田家文書』61号）。
[7] 益田本郷御年貢并田数目録帳（「益田家文書」（井上寛司・岡崎三郎編著『史料集　益田兼見とその時代―益田家文書の語る中世の益田（一）―』益田市教育委員会、1994年）。
[8] 「朝鮮王朝実録」「海東諸国紀」（田中健夫訳注『海東諸国紀　朝鮮人の見た中世の日本と琉球』岩波文庫、1991年）。
[9] 「海東諸国紀」
[10] 「端宗実録」巻13、「成宗実録」巻132・巻247。

地域経済圏が成立するようになり、必ずしも畿内に求心的ではない流通が全国的に見られるようになった。一方、明朝および室町幕府の弱体化は、海禁政策を動揺させ、倭寇の旺盛な活動やヨーロッパ人のアジア交易参入により、私貿易が活発化することになった。

ところで益田氏は永禄11（1568）年、安芸国吉田郡山城の毛利氏のもとを訪れ、朝鮮産の虎の皮を贈り、北方産の昆布・数の子などを使った料理を振る舞った。このことから益田氏は海洋領主的性格が指摘されている[11]。先述の歴史的背景を踏まえつつ、益田氏がこれらの産品を入手しえた背景について考察したい。

益田氏は大内氏より長門国阿武郡大井浦・川島や筑前国席田郡莚田・原などを与えられていた[12]。これらの所領を利用すれば、大内氏の保障のもとで益田氏は益田から国際貿易港であった博多まで益田の産物を輸送することが可能だったと考えられる。

大内氏の滅亡後は、毛利氏が豊前国・筑前国を支配下に収めることができなかったため、この流通路は必ずしも安全なものではなくなったと思われる。このように考えた時、大内氏滅亡後に益田氏が宗像大社との結びつきを強めていたことは、非常に注目される。現在の宗像大社辺津宮本殿は、天正６（1578）年に大宮司宗像氏貞が遷宮したものであるが、このとき「厚薄板并彼是三千枚　丁長四万数」という大量の材木が益田にて調達され、また益田氏も「丁長　一万数」の材木を寄進している[13]。このことは大内氏の滅亡後、益田氏が宗像大社と関係を深めることによって、博多などへの流通路を確保していたことを示している。また大量の材木を提供していることは、益田にとって材木が主要な産品であることを示しており、中世の中国が材木不足で大寺院の再建などに支障を来していた[14]ことを考えれば、益田の材木が中国などへの輸出品となっていた可能性も十分にある。

また益田氏は大内氏滅亡後に見島を領有しており、見島から直接朝鮮に渡海していた可能性も指摘されている[15]。

一方、国際状況で注目されるのは、嘉靖大倭寇と呼ばれる後期倭寇の活発化と石見銀山の発見である。明の弱体化は海禁政策を緩ませ、中国沿岸部の人々が私貿易を活発に行う状況となった。これに様々な人々が結びつき、後期倭寇と呼ばれる私貿易を行う集団が形成された。双嶼を拠点としていた後期倭寇が明政府の攻撃を受けると、その頭目となった王直は日本の五島列島に拠点を置き、博多商人やヨーロッパ人とも結びついて私貿易を活発に行った。これにより、後期倭寇の活動はより広域かつ大規模なものとなった（嘉靖大倭寇）。この状況下でこれまで以上に多くの中国の産物、さらには東南アジア地域の産物が日本にもたらされたと考えられる。

さらに1520年代に石見銀山が発見・開発されたことにより、山陰沿岸には国内外より多くの船舶が往来するようになり、空前の活況を呈するようになった。これに前述の倭寇の活発化が結びつき、山陰地域にも多くの中国・朝鮮や東南アジアの産物が流入することになったのではないかと推測される。

この時期の益田地域の状況は史料では確認できないが、永禄11年の益田藤兼・元祥父子の吉田郡山行の際の虎の皮や昆布は、このような時代状況を背景に益田氏が入手したと考えられる。

---

[11] 岸田裕之「石見益田氏の海洋領主的性格」（同著『大名領国の経済構造』岩波書店、2001年。初出は1993年）。
[12] 大内義興書状（『大日本古文書　家わけ第22　益田家文書』221号）など。
[13] 『宗像市史』史料編第２巻中世Ⅱの582・583-２・583-３号。
[14] 中国の五山第一の径山万寿寺が1242年に火災により焼失し、南宋禅宗界の高僧無準師範がその再興に尽くしていたことを知った無準師範の弟子であり、博多承天寺・京都東福寺の開山円爾（聖一国師）は、承天寺檀越謝国明に勧めて材木1,000板を中国に送らせ、無準師範より礼状の墨跡をもらっている（東京国立博物館蔵「無準師範墨跡」）。この背景には戦乱および遷都による材木需要とそれに対する慢性的な材木不足があったと思われる。
[15] 前掲註11岸田論文参照。

4．おわりに

本稿で考察した中須東原遺跡成立の背景をまとめたい。

益田川・高津川河口域は益田地域の河川流通と日本海流通を結節する地点として、古くから流通経済上の重要地点であった。また石見国は朝鮮半島と地理的に近く、漂流者の送還などによる交流・交易が行われ、また倭寇的とも言える勢力が活動する素地があった。

日中双方の中世国家の弱体化は、荘園公領制や海禁政策といった国家体制をも動揺させ、地域経済圏や倭寇の活発化を招いた。さらに石見銀山が開発されたことにより、山陰沿岸地域は空前の活況を呈したと推測される。一方、益田氏も宗像大社と結びつき、見島を領有し、実際に朝鮮産の虎の皮や昆布を入手するなど、自ら対外交易や日本海交易に積極的であった。

第４節　中須西原遺跡

1．調査の経過

益田市教育委員会は、益田川左岸北部地区土地区画整理事業及び都市計画道路中吉田中須線の建設に伴い、平成17・18年度に中須町地内の試掘調査を実施し、中須集落の南側で、市道中島木部線の西側と東側で広範囲に広がる中世遺跡の存在を確認した。それぞれの遺跡は地名を採って中須西原遺跡、中須東原遺跡とした。

試掘調査の段階から、益田市教育委員会では益田市建設部と遺跡の取扱いの調整を進めてきたが、

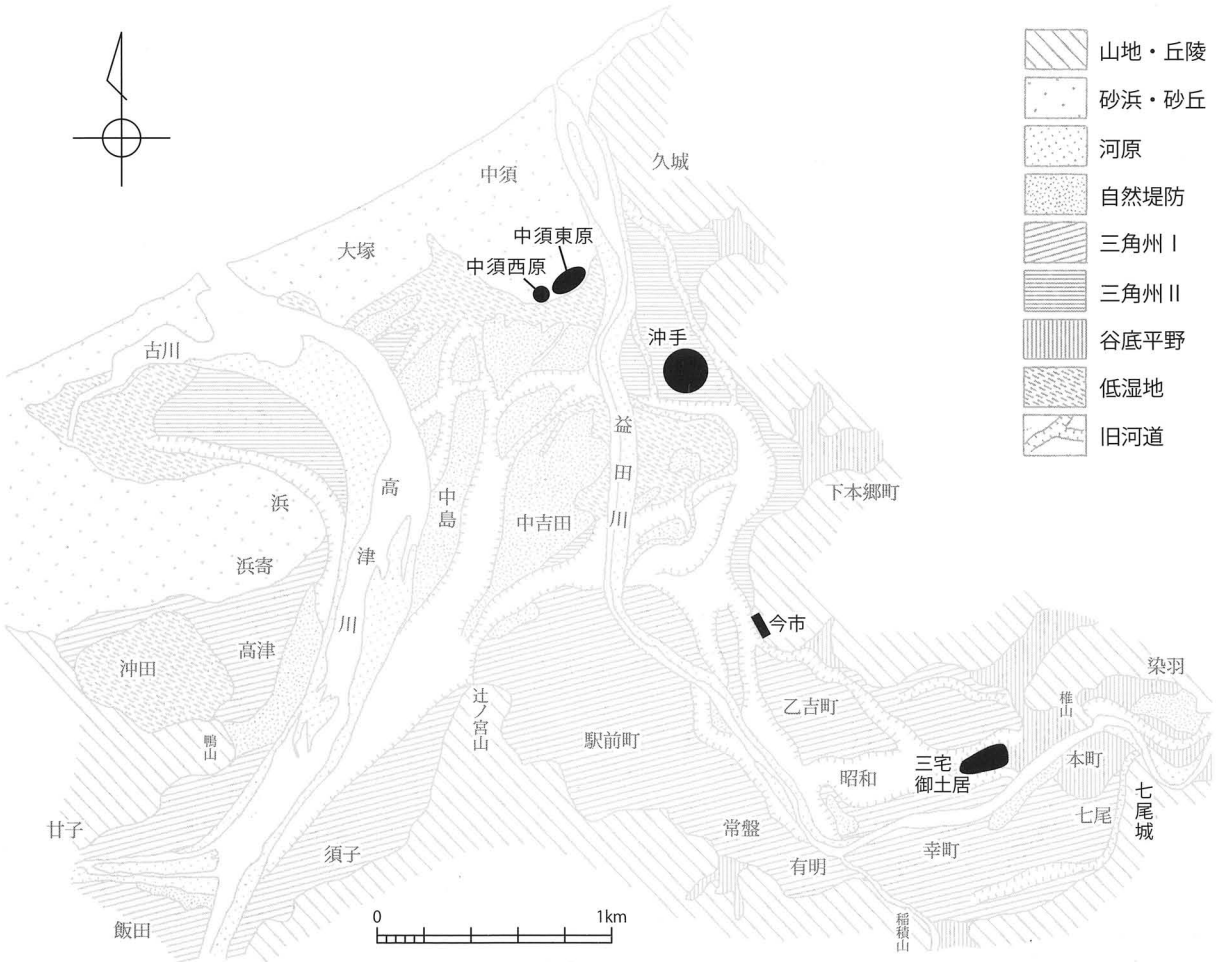
写真17　中須西原遺跡空中写真（南南西から俯瞰）

区画整理事業はすでに施工中であり、用地を取得して工事を行う一般的な公共事業とは異なり、民有地の状態で減歩によって公共用地と事業費を生み出して道路や公園等公共施設の整備と土地の区画を整え、再配置を行うという区画整理事業の特殊性から計画変更は困難との結論に至り、平成19年４月から平成20年３月にかけて発掘調査を実施した。

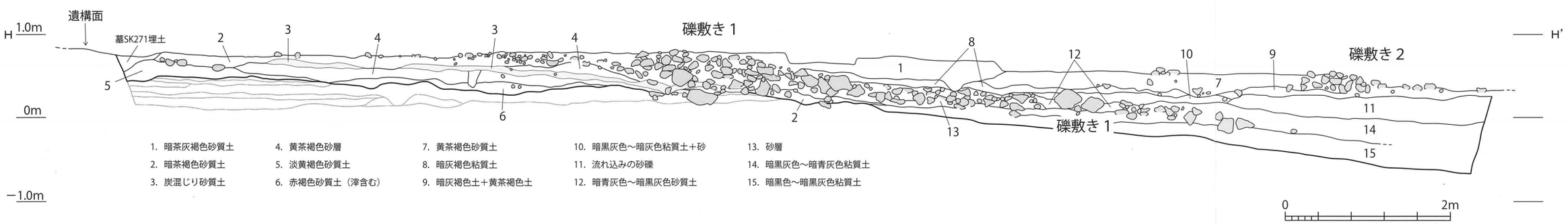
２．遺跡の位置と周辺の環境

益田平野の地形分類図（第５図）における中須西原遺跡の位置は、現在の益田川河口部の左岸側の海岸部に形成された砂丘の南側縁辺部に位置する。特に中須地域では、砂堆が内陸部にかけても幅広く発達し、遺跡の南側には砂丘の後背に沿って低湿地が広範囲に広がる。さらに、砂丘によって河口の位置が大きな制約を受ける中で、高津川と益田川の本流・支流の河道が洪水のたびごとに複雑に変動し、交錯した結果、現在の両河川の間には旧河道の跡と中州状の自然堤防が多く残る。

遺跡は低平な微高地上に位置し、調査時点の現況は畑と水田であった。遺跡の大部分は畑として利用され、地表面の最高部は標高1.66mであった。北には平坦な畑が広がるが、残る三方の周囲は標高1.0m～1.2m前後の低い地形で、水田として利用されていた。遺跡の南側の水田地帯には、東西方向の低平な旧河道跡が明瞭に残り、これに沿う用水路も存在していた。鎌倉時代後期の層塔をはじめ中世石塔が多く残る浄土宗金亀山福王寺からは南西へ約120mの距離である。



第５図　益田平野の地形分類図と主要な中世遺跡



第８図　礫敷き断面図（H–H’）

３．発掘調査の概要

面積4,306m^{2}の発掘調査を行った結果、溝状の遺構によって全域が５つの街区に区画され、掘立柱建物跡、方形竪穴遺構、鍛冶炉、鉄滓廃棄遺構、墓など中世の遺構が発見されるとともに、大量の貿易陶磁器を含む中世の遺物が出土した。さらに、汀線に沿って舟着き・荷揚げ場の礫敷き遺構が二面検出されたことにより、中須西原遺跡は中世の湊町であることが判明した。

遺構面の最高部の標高は約1.0ｍである。遺構面の北は地表と同様に平坦面が続くが、街区１の東は遺構面の端部から斜面となって落込み、湿地特有の粘質土が堆積していた。このことから、中須東原遺跡との間に低湿地が存在すると考えられた。街区１の南側は、遺構面から礫敷き２、礫敷き１を埋めた造成土の面、さらに礫敷き２へと連続し、礫敷き２の南側は自然堆積の砂礫面が緩やかな斜面で下がり、その上に粘質土が厚く堆積する。街区２の遺構面の南端は、南東から北西にかけて急斜面から緩斜面へ変わり、街区５の南側と西側の斜面も緩やかであった。

遺構面以下の基本的な地層の堆積は、街区１の北側で検出された近世井戸SK38の発掘によって、遺構面の基盤である砂質土（厚30cm）から砂（厚10cm）へ、さらに灰褐色～黄褐色粘性土（厚20cm）、暗黒灰色～暗灰色土粘性土（厚45cm）へと変化し、標高０m前後で砂礫層に達することが確認されている。

写真18　中須西原遺跡空中写真（直上から）

（1）遺構の概要

区画溝・道路状遺構

遺跡は、南北方向の２条の溝状遺構と、これにほぼ直交する東西方向の溝状遺構によって全域が五つの街区に区画されていた。

礫敷きを備えた街区１と、竪穴状建物遺構を伴う街区２との間で南北方向に検出された溝１は、長さ約40m、幅2.5～4.0mを測る。南側は中央部をやや深く掘り込んだ断面（第９図①）、北側は緩斜面の断面（第９図②）を呈する。落込みの肩部からの深さは40㎝程度で、底部は標高0.3～0.4mを測り、明瞭な傾斜は認められない。溝１は、さらに北に延びて、街区３と４とを区画するが、次第に幅が狭まり（第９図③）、深さも浅くなって不明瞭となる。

街区１と街区２の北を東西方向に溝２が区画する。街区１の北は約20m、幅1.5～2.5mで、深さ約20cmの緩やかな斜面の浅い溝（第９図④）である。一方、街区２と３の間は幅６～８mで、両肩部からの斜面はかなり緩やか（第９図⑤）である。

街区５の東側を画する南北方向の溝３は、街区４との間は幅約2.5m、深さ0.3m（第９図⑥）、街区２との間は、西側を石列で区画し、深さ10cm程度の幅の広い浅い溝の東端をさらに50㎝の深さに掘り下げられ、その全幅は約５m（第９図⑦）を測る。街区２と５の間の溝の基盤は砂礫層である。

遺跡の発展段階に備わったと考えられる溝1は、南側の街区1と2の間の埋土の下層に新相の青磁碗E類、白磁皿E類、漳州窯系青花瓶などが混じり、さらに最下層に混入した肥前陶器皿の時期から17世紀初頭に埋められたと考えられる。溝1の北側と溝2についても、埋土の中層以下に混在する遺物が中世を主体とし、上層に少量の近世陶磁が混在することから、溝1の南側と同時期に機能し、廃絶したと考えられる。

一方、溝３は、掘られた時期は不明だが、埋土に含まれる中世の遺物はごく少量で、近世陶磁器が大半を占めている。遺構面上の遺物包含層についても、少量の青磁や備前を含むものの、主体は近世陶磁器である。他の溝跡とは異なり、溝３は近世の後半期に埋められたと推定される。

なお、これらの溝状遺構について、街区１と２の間の溝１と、溝３の東端の掘り込みは区画溝の性格が強いと考えられるが、溝２のように皿状に浅く掘り窪められた溝は、道路遺構の類型のひとつと考えられるものである。

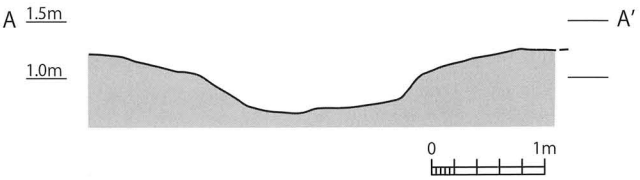
建物跡

掘立柱建物の柱穴等は約3,000検出されている。街区１の南側が最も密度が高く、街区２の南側でも多く検出されているが、規模を復元できた建物は少ない。

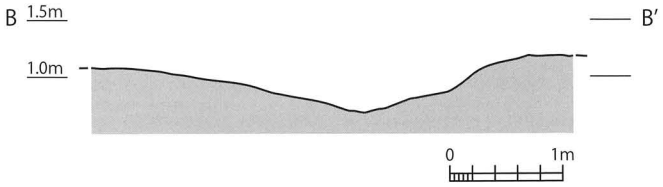
街区1の南側には、建物の長軸が街区の方向に沿う2間×3間と2間×2間の総柱建物が各1棟、さらに1間×2間の小規模な建物が数棟ある。また、長軸の向きが異なる1間×2間規模の建物も３棟確認されている。これらの建物は、幅広い時期差を含んでいるが、南側の舟着き・荷揚げ場とともに使用された港湾施設としての建物と、これと一体となって営まれていた鍛冶工房の建物が含まれる。街区1の北側は、南側と比較して遺構がかなり疎な状態で、近世井戸SK38の北東、街区の隅に2間×2間規模以下の建物が2、3棟重なる。

街区２では方形竪穴建物が２棟発見された。溝１に近い位置で検出されたSX41の掘り肩は長軸4.0m、短軸3.1mを測り、掘り込みの深さは５～15㎝と浅い。北東は後世の土壙が切り合っているが、残る隅部の柱穴には重複がない。２間×２間の建物規模だが、入口が推定される南側は、２間を三等分した位置で柱穴が検出され、建物の外側に約１m離れた位置に1.2mの間隔で庇の支柱と考えられる柱穴がある。SX41から西へ約3.5m離れて方形竪穴建物SX42が存在する。掘り肩は長軸4.5m、

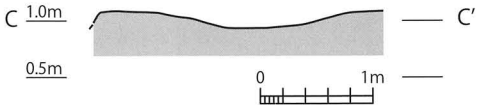
① 溝1　A－A′ 断面



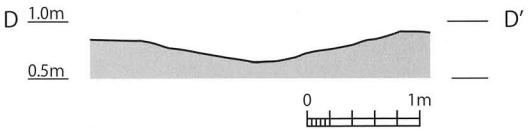
② 溝1　B－B′ 断面



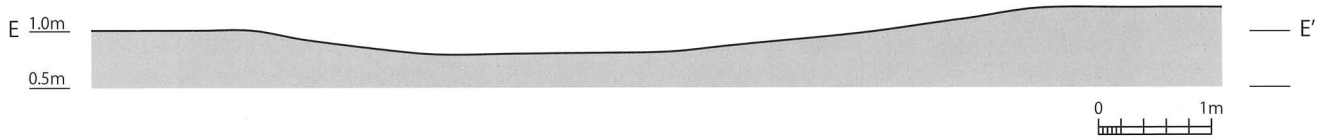
③ 溝1　C－C′ 断面



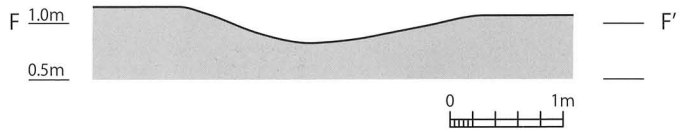
④ 溝2　D－D′ 断面



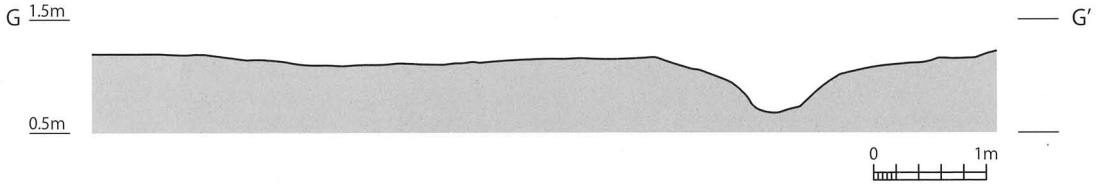
⑤ 溝2　E－E′ 断面



⑥ 溝3　F－F′ 断面



⑦ 溝3　G－G′ 断面



第９図　区画溝の断面図

短軸4.0mを測り、深さは10～15㎝である。２間×２間の建物で、四隅の柱穴に重複があり、建て替えが行われている。柱間に深さ10㎝程度の細い溝状遺構が検出され、建物の壁を地面に刳り込んで築いた可能性が考えられる。建物の主軸は磁北にほぼ合っている。これら方形竪穴建物は貯蔵施設や倉庫、蔵としての使い方が想定され、２棟とも中央に柱を立てない構造と考えられる。建物の時期は、埋土からの遺物が少量で、建物を構成する柱穴の遺物も決め手に欠けるが、SX41の遺構面から出土した永楽通寶から15世紀初頭以降と推定され、SX42もほぼ同時期と考えておきたい。街区２では

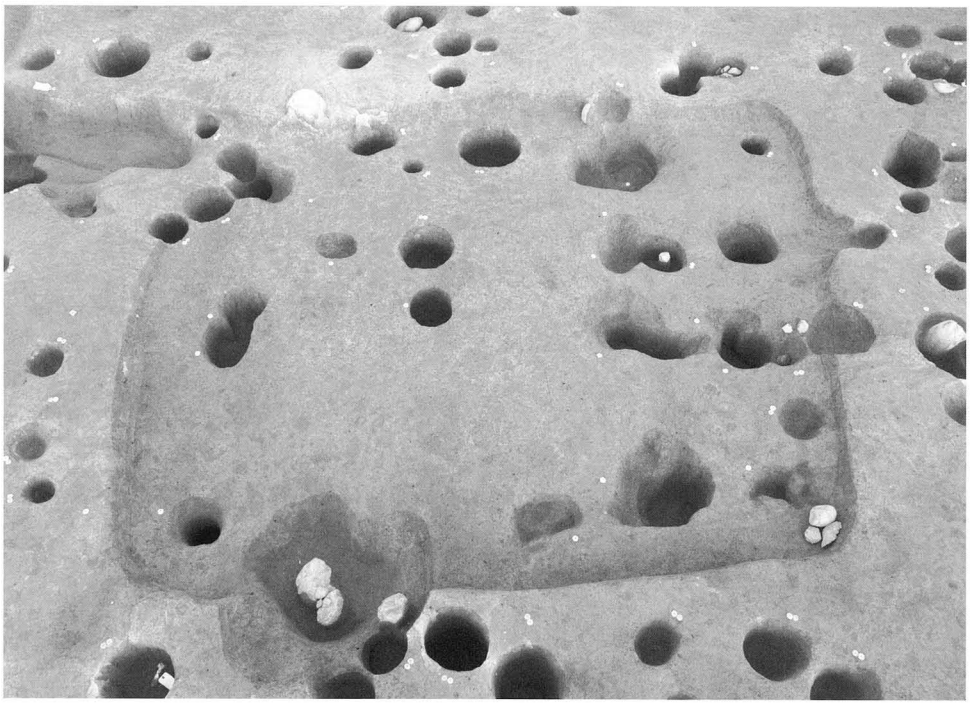


写真19　方形竪穴建物SX41（西から）

写真20　方形竪穴建物SX42（西から）

他に、１間×２間の小規模な建物が約10棟あり、このうち３棟は街区の向きとは方向が異なる。

街区３では建物跡は確認されていない。街区４では、近世の石積み井戸SK100の南側に１間×２間、１間３間の建物が各１棟あり、街区５には、溝３に平行する向きの１間×１間の建物１棟、１間×２間の建物２棟と、これらとは向きが違う１間×２間の建物２棟があった。

このように、中世の建物跡については、街区１と街区２の南側に集中しており、建て替えが繰り返された。しかし、これ以外では建物跡の分布が希薄であり、街区４と街区５の建物の一部は近世の可能性が考えられる。

鍛冶遺構

鍛冶に関連する遺構として炉跡24基と鉄滓廃棄土壙19基があった。

炉跡は、内部に滓・炭・焼土等を含み、周りの土が被熱して赤褐色を呈し、中には炉壁の内側が還元によって灰白色に硬化した状態のものもあった。長軸の長さは17㎝から70㎝までと様々で、形はほとんどが不整な円形ないしは楕円形である。

街区５でも３基の炉跡が検出されているが、ほとんどは街区１の特に南側に集中し、炉跡に鉄滓の廃棄土壙が隣接する場合が多い。

滓、羽口、炉壁状の焼土塊のグリッドごとの出土状況もこれに重なる。

街区１で発見された炉跡SX40とSX50の炭化物についてAMS年代測定を行ったところ、13世紀末～14世紀末の年代値が得られた。

炉跡の大半は中世の炉と考えられるが、個々の時期や建物との関係については整理中である。炉跡の周囲の土から鍛造剥片が採取され、鍛錬鍛冶が行われていたが、その製品についても不明である。

なお、街区５の南側では、基盤の砂礫層の斜面上に粘土で厚い盛土を行い、その造成面に、他の炉跡とは形状・規模が異なる長さ約2.5m、幅0.5mの細長い炉状の遺構が確認されている。

墓

墓は８基検出されている。縦183cm×横95cm×深さ20cmの長方形の木棺墓1基、桶棺墓と推定される直径67cm～94cmの円形の墓壙2基、不

写真21　炉跡SX50（炉内半截状態）

写真22　炉跡SX50（内容物除去後）

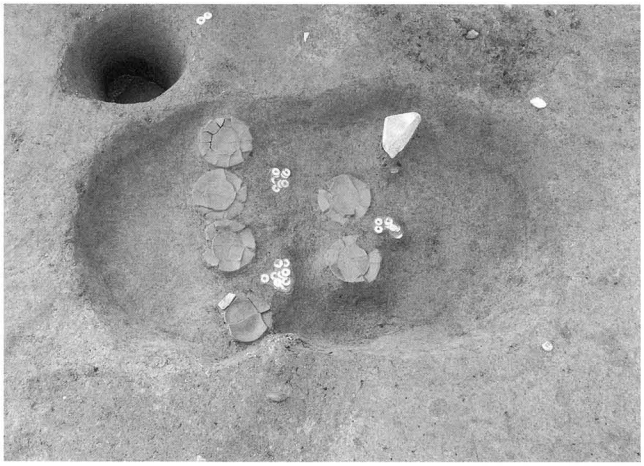


写真23　墓SX116

整な楕円形の浅い墓壙に複数の土師器皿と銭貨を供えた墓２基、墓壙は失われているものの土師器皿または土師器皿と銭貨がまとまって発見された３基などである。

方形木棺墓は中世前期と考えられるが、桶棺墓は後期に下り、土師器皿と銭貨を供える墓は16世紀代と考えられる。

墓SX116（写真23）は、長さ130cm、幅80cm、深さ８cmの楕円形の浅い墓壙で、６枚の土師器皿が二列に並び、永楽通寶、洪武通寶をはじめ銭貨30枚が３箇所にまとまっていた。銭貨の下には棺材の一部と考えられる薄い板状の木片が残存していた。

礫敷き遺構

調査区の南東、旧河道の汀線沿いで礫敷き面が２面検出された。（第７図、写真24・25）

北側の礫敷き１は、南西から北東の方向に延長25mにわたって築かれ、東端は東側への落ち込み斜面で途切れた状態で、西端は後述する礫敷き２と重なる。礫岩、砂岩の角礫が多用され、石材も大型で、礫が集中して高く盛り上がる部分もある。高津川に特有の青野山安山岩が西寄り含まれているが少ない。断ち割りの結果、礫敷き面の南北方向の幅は10m以上に及んでいた。

一方の礫敷き２は、北西から南東の向きに約30mの延長で検出された。幅は約３m、所により１mほどに狭まり、東寄りの部分で南側へ約2.5m方形に張り出した所がある。丸みを帯びた円礫が多く使用され、青野山安山岩も多く含まれている。断面の観察から、礫敷き１とは異なり表面的に築かれている。

礫敷き１が古く、後に礫敷き２が築かれた。断ち割り調査に伴い、２面の礫敷きの上下で採取した腐植土、炭、木片等の試料についてAMS年代測定を行ったところ、礫敷き１は15世紀前半を示す下層の資料と15世紀中頃から16世紀初めを示す上層の試料に挟まれていた。また、礫敷き２は、15世紀後半から17世紀前半を示す下層の資料と16世紀前半から17世紀中頃を示す上層試料に挟まれていた。このことから、礫敷き１は15世紀前半、礫敷き２は15世紀後半以降に構築されたと考えられる。

部分的に築かれ、護岸とは考えにくいこのような礫敷きは、舟着き・荷揚げ場の遺構と考えられて

写真24　礫敷きの検出状況（西から）

おり、礫敷き１からは舫い杭と推定される杭も発見されている。

２面の礫敷きの向きが異なるのは、前面の河道が変わり、位置と向きを変えて接岸施設を築き直す必要に迫られたためと考えられる。礫敷き２は、全体的に高津川上流の青野山安山岩が混在していることから、この河道の変動は、高津川の影響がより強まったことに起因すると考えられる。

写真25　礫敷きの検出状況（東から）

（２）遺物の概要

近世以降の陶磁器・瓦等、大量の鉄滓を含む遺物の総量は、コンテナ換算で261箱に及び、54,661点を数える。なお、貿易陶磁以外の破片点数については、再集計と産地・時代の識別等によって今後若干の変動があり得る。

種別

全体的な種類別、時代別の比率は、貿易陶磁器が７％（3,690点）、瓦質土器を含む国産陶器が７％（3,808点）、土師質土器20％（11,096点）、近世陶磁器・燻し瓦等30％（16,522点）、羽口・滓など鍛冶関連遺物29％（15,790点）、その他７％である。その他の遺物の内容は、産地不明陶磁器、土錘、滑石製石鍋、銭貨、釘状の鉄製品を主として少量の青銅製品を含む金属遺物、砥石、自然石等である。

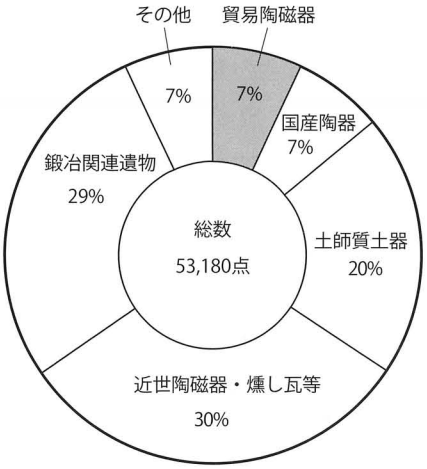
貿易陶磁器に関しては総点数3,690点を数え、中国陶磁器が全体のほぼ87％を占める。中でも青磁の点数がきわめて多い。碗はD類、Ｅ類が目立ち、Ｂ４類がこれに次ぐ。皿・坏では、稜花皿が目立ち、口縁部が外反するものと内湾する皿・坏・浅形碗が相当量出土している。

青磁に次ぐ白磁は全体の約22％を占め、青磁とともに中世前期のものが一定量出土しているが、決して多くない。器種が判別されたものの中では、15世紀代の白磁皿Ｄ類と16世紀の白磁皿Ｅ類の端反皿が白磁全体のそれぞれ28％、24％を占め、他を圧倒している。

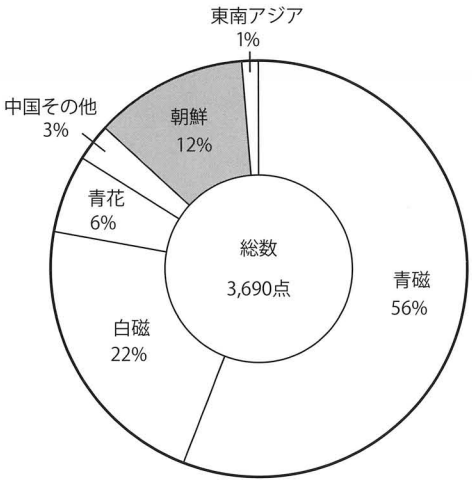
青花は碗・皿とも出土しているが、全体の量は少なく、貿易陶磁に占める比率は６％にとどまる。

第４表　貿易陶磁器集計表

産地	種別	器種	型式	時期	破片数	合計	
中国製品	青磁	碗	龍Ⅰ	D	34		
			同Ⅰ	D	11		
			同Ⅱ	D	0		
			同Ⅲ	D	3		
			B0	F	0		
			B1	E	13		
			B2	H	39		
			B3	I	19		
			B4	I・J	63		
			C2	H	10		
			C3	I	10		
			D	H～J	210		
			E	H・I	128		
			粗悪品		18		
			不明		521		
		皿・坏	同皿Ⅰ	D	12		
			龍皿		10		
			景皿	J	0		
			稜花皿	I・J	105		
			小坏		0		
			坏Ⅲ	F	11		
			坏Ⅳ	G	1		
			坏Ⅲ・Ⅳ	F・G	0		
			その他		310		
			不明		123		
		盤			31		
		小碗			5		
		その他			18		
		不明			358	2,063	
	青白磁	合子			2		
		その他			1		
		不明			0	3	
	白磁	碗・皿	Ⅳ	C	7		
			Ⅴ	C	22		
			Ⅶ	D	2		
			Ⅷ	D・E	7		
			Ⅸ(A)	F	31		
			B・C	G	0		
			D	H	226		
			E	I～K	192		
			小杯	J	13		
			菊皿	J	7		
			その他		117		
			不明		183		
		壺			1		
		不明			2	810	
	青花	碗	B	H	5		
			C	J	32		
			D	J	0		
			E	K	14		
			不明		47		
		皿・小坏	B	J・K	26		
			C	J	20		
			E	K	4		
			坏		2		
			不明		20		
		不明			9		
	粗製品	碗・皿		K	11		
		瓶		K	34		
		不明		K	0	224	
	褐釉				17		
	天目				69		
	その他				18	104	
朝　鮮	高麗	碗・皿			12		
	朝鮮王朝	碗・皿			329		
		壺・甕・瓶			87		
		その他			10		
		不明			1	439	
東南アジア	タイ	皿・その他			3		
	ベトナム	碗・皿・その他			44	47	3,690



第10図　出土遺物種別構成比



第11図　貿易陶磁器種別構成比

16世紀後半以降の漳州窯系などいわゆる粗製品も一定量あった。なお、陶器類については産地不明陶器の識別によって今後さらに増加する可能性がある。

朝鮮陶磁器の破片数は439点で、貿易陶磁器に占める比率は12%に達する。高麗時代の青磁・白磁12点を含むが、大半は朝鮮王朝陶磁で、15世紀以降の灰青陶器の碗・坏・皿類329点が主体を占める。その他、粉青沙器象嵌瓶、象嵌青磁碗・皿、刷毛粉青、軟質白磁、焼締陶器瓶、甕・壺類も出土している。

また、東南アジア産陶器として、ベトナム産の碗と鉄絵皿その他44点、タイ産の鉄絵皿・壺３点があった。ベトナム産陶器は匹見町殿屋敷遺跡から長胴壺が出土しているが、碗・皿・壺類は中須東原遺跡からの出土品も併せて市内では初めて確認された。東南アジア産陶器の出土は、島根県内では富田城跡や新宮谷遺跡などに限られ、山陰地方でも極めて稀である。

この他、中国元代の鉄絵瑠璃釉大鉢、中国褐釉擂座壺などの希少品も出土している。

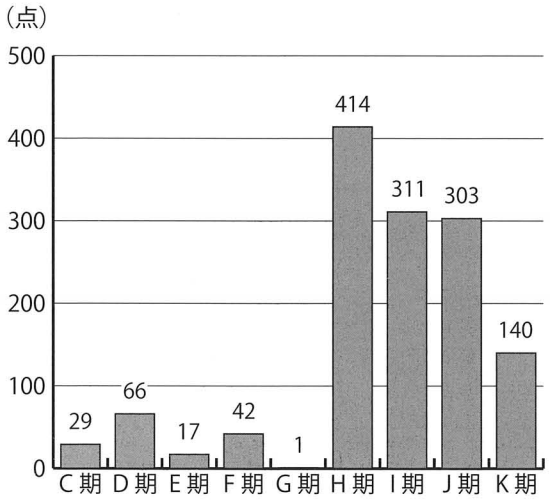
貿易陶磁による年代観

これらの貿易陶磁のうち、主に中国陶磁器の破片数を山本2010編年[16]に基づいて集計して得られた中須西原遺跡の年代観は、Ｃ期（11世紀後半～12世紀前半）から一帯での土地利用の萌芽がみられるが、以後、Ｆ期（13世紀中頃～14世紀初頭前後）にかけては一定の量があるものの増加するとはいえず、Ｇ期（14世紀初頭～14世紀中頃）もごくわずかであり、中世前期の出土数は全体的に少ない。

これに対して、中世後期は、一転してH期（14世紀後半～15世紀前半）に急増し、Ｉ期（15世紀中頃～後半）からＪ期（15世紀末～16世紀線半・中頃）にかけてやや減少傾向にあるものの繁栄が継続し、K期（16世紀中頃・後半～17世紀前半）にかけて確実に存続した。

遺跡の消長を貿易陶磁器だけで測ることはできないが、この貿易陶磁器の様相と出土傾向は中須西原遺跡の盛衰と使われ方をある程度反映したものと考えられる。

なお、近世遺物については、７・E区と８・E区に存在した廃棄土壙を中心とする一定数量の陶磁器をサンプルとして集計した結果、総数472点のうち、陶器75%、磁器25%であった。磁器のほとんどが肥前系で占められ、陶器は肥前系、京・信系、萩系と多様で、特に須佐焼が肥前を凌いでいる。17世紀後半に一定のまとまりが認められ、18世紀代に肥前磁器を中心として盛期を迎え、その下限は19世紀初頭に収まると考えられる。

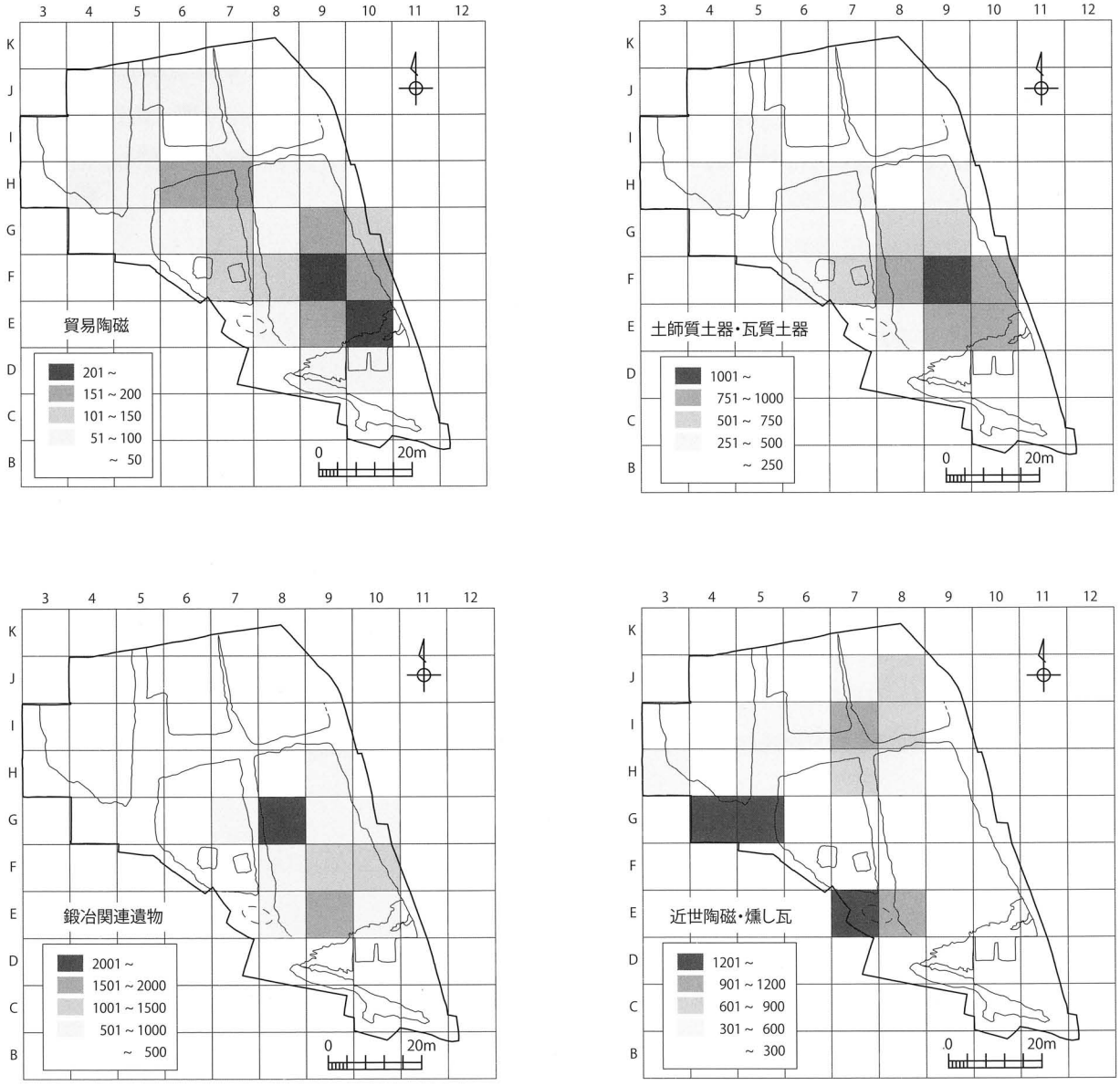


第12図　貿易陶磁器の時期別出土数

[16] 山本信夫「貿易陶磁の分類・編年研究の現状と課題」『貿易陶磁研究』№30、日本貿易陶磁研究会、2010年
Ｃ期……11世紀後半～12世紀前半
Ｄ期……12世紀中頃～12世紀後半
Ｅ期……13世紀初頭前後～13世紀前半
Ｆ期……13世紀中頃～14世紀初頭前後
Ｇ期……14世紀初頭～14世紀中頃
Ｈ期……14世紀後半～15世紀前半
Ｉ期……15世紀中頃～15世紀後半
Ｊ期……15世紀末～16世紀前半・中頃
Ｋ期……16世紀中頃・後半～17世紀前半

出土状況

第13図のグリッド別遺物分布図のとおり、貿易陶磁器は街区１の南寄りで非常に高い密度で出土し、街区２にも一定の量があり、調査区の北から北西にかけての街区３・４・５では減少する。土師質土器・瓦質土器についても同様の傾向があり、街区１の南側に集中し、街区２にかけて安定した出土が読み取れる。また、滓・羽口・炉壁・焼土塊等の鍛冶関連遺物も、鍛冶炉跡の分布に一致して、街区１からの出土が際立っている。一方、近世以降の陶磁器と燻し瓦は、近世遺物を主体とした廃棄土壙が存在する７・E区と８・E区の数量が必然的に多いが、これを除いた全体的な傾向としては、中世遺物の出土量に相反して、街区３と街区４・５にかけて一定量の出土が認められ、特に街区５の南側と溝３の埋土から大量に出土している。街区５は、中世にも使われていたが、近世以降も使用が継続した空間と考えられる。寛永16（1639）年に高津川の氾濫によって派川が遺跡の西側を北流し、海岸砂丘を貫いて日本海に通じた時期があるといわれ、このような周辺環境の変化に応じて、遺跡内で拠点的に使用される場が移動したと考えられる。



第13図　出土遺物分布図

特徴的な遺物

中世の湊を特徴付ける国内外の遠隔地から搬入された遺物のうち、代表的なものの一部を第14図に示した。

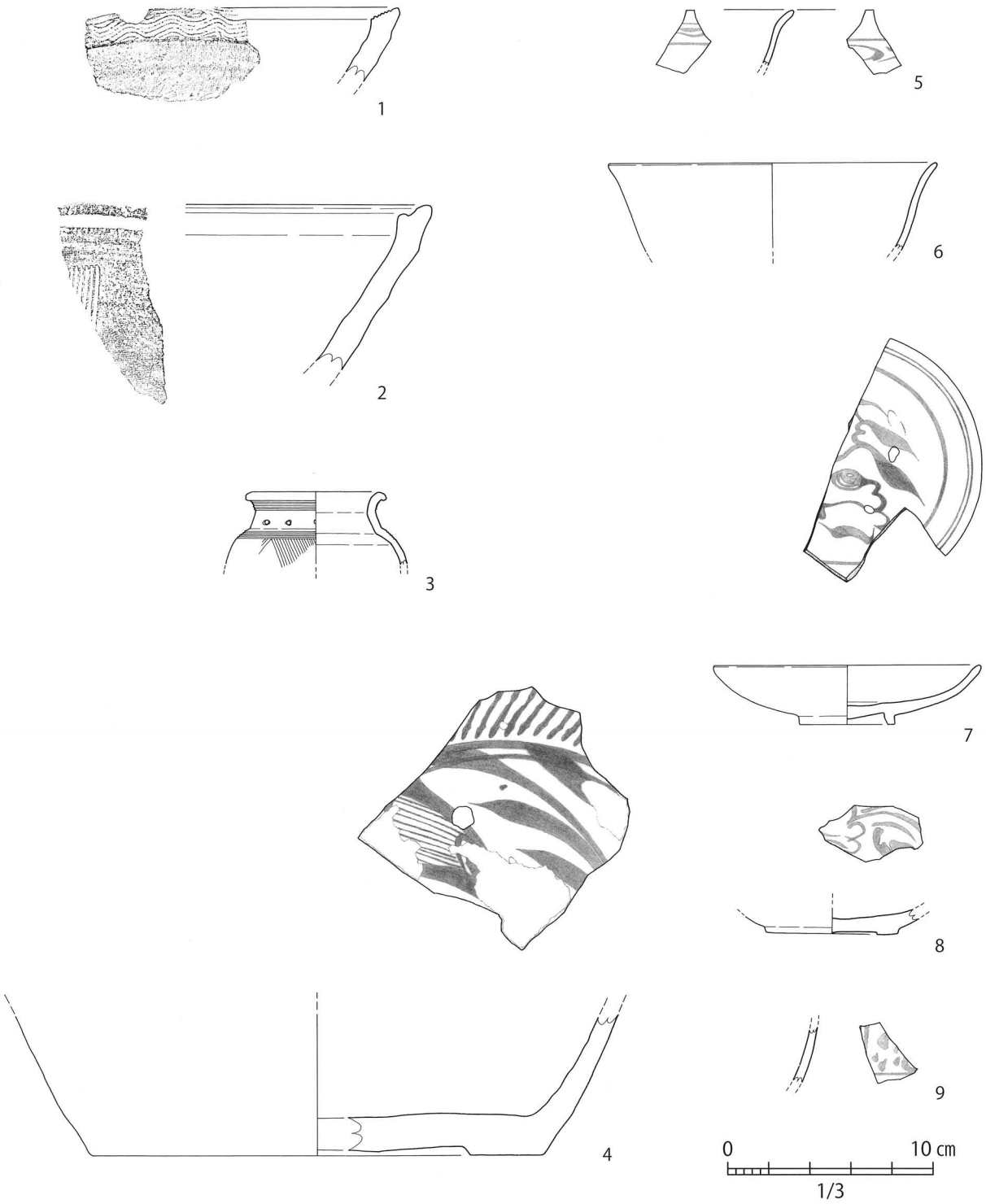
北陸地方の珠洲、越前が市内では中須西原遺跡において初めてその搬入が確認された。１は14世紀末から15世紀前半にかけての珠洲焼の片口鉢で、灰白色を呈し、内傾する端面に櫛状の工具で５条の波状文を施す。２は越前焼の擂鉢である。暗灰色で、口縁が内側に肥厚して内傾する口縁上面に沈線が巡り、15世紀の時期が考えられる。

３は中国の褐釉擂座壺である。口径は6.0cm、口縁を外側に折って、端部は丸い。口縁の下に横方向の細い沈線がめぐり、頸部には約１cm間隔で擂座が付く。小さな陶土を張り付けて、白色の釉を厚く載せている。頸部から体部にかけて小さな肩が付き、その下位には横方向と斜め方向の沈線が施される。器厚は約５mmと薄く、胎土は明褐色で、やや軟質の感がある。外面は暗茶褐色を、内面はやや明るい茶褐色を呈しており、14世紀の中国製品と考えた。

４は底径22cmの鉄絵瑠璃釉大鉢である。肉厚の底部はわずかに上げ底で、接地面は幅3.5cmと広い。見込みには直径１cm程度の胎土目が残る。胎土は明るい淡橙色で、砂粒をほとんど含まず、緻密である。灰白色の下地に灰色の複線で内側面と底面を画し、内側面に簾状文を、内底面に魚藻文と思われる文様が描かれ、鮮やかな瑠璃色の釉が部分的に残る。13世紀後半から14世紀にかけての元代のものと考えられている。

５～７はベトナム陶器の碗・皿である。５は鉄絵の碗で、口縁は端反りで、端部は丸い。口縁部の内面に薄い灰色の細い二条の線を巡らし、その間に草花文状の文様を描く。口縁外面にも同様の文様がある。６も碗だが、鉄絵の文様は描かれていない。口径は18cmで、５と同様に体部がやや内湾する深めの碗である。７は鉄絵の皿で、口径13.0cm、底径4.6cm、器高2.9cmを測る。口縁端部の内側に褐色の複線を、底部に暗灰色の細い線を巡らせ、見込みには暗灰色、所により褐色の草花文が描かれ、胎土目とその剥離痕が２箇所に観察される。透明な釉は高台まで掛かるが、畳付けと高台内は無釉である。これらの碗・皿はいずれも口縁端部が丸く、胎土は細かく密だが、やや軟質で釉の表面には貫入がある。これらは14世紀から15世紀にかけての時期が考えられ、同様の特徴を持つベトナム産と考えられる碗・皿は他に複数個体分の破片がある。

８・９は15世紀のタイの陶器である。８は皿の底部で、底径は6.4cm、高台は低く、畳付は約１cmの幅がある。見込みには黒色の顔料で草花文を描くが、その上に透明釉が掛かって淡い灰色を呈する。９は小型の壺の体部で、外面には方形の区画線と点状の文様が見える。内面は露胎で、器壁は３mmと薄い。これらを含め、タイの鉄絵は３点確認されている。



第14図　特徴的な遺物実測図

珠洲　擂鉢（内面）

珠洲　擂鉢（外面）

越前　擂鉢（内面）

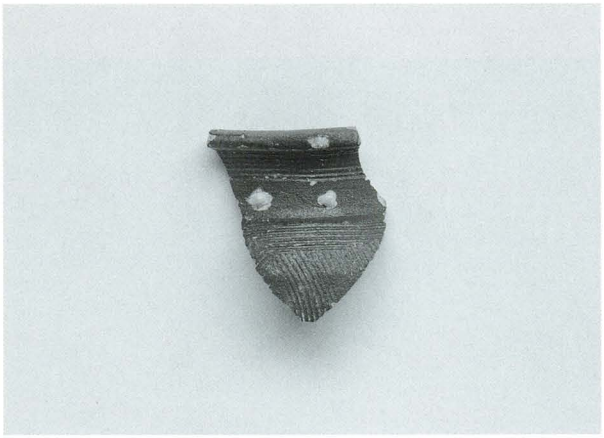
越前　擂鉢（外面）

鉄絵瑠璃釉大鉢（底面）

鉄絵瑠璃釉大鉢（内面）

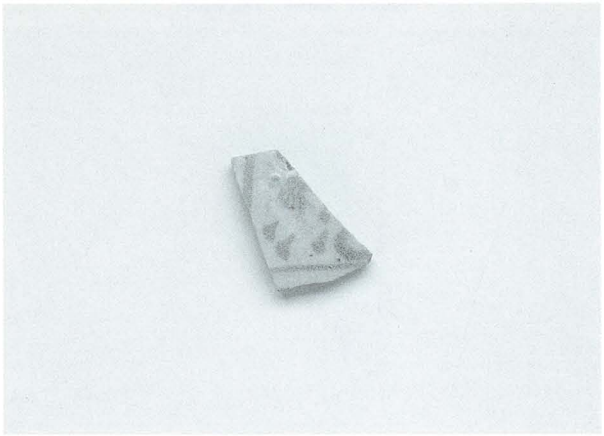
鉄絵瑠璃釉大鉢（側面）

写真26　特徴的な遺物（珠洲・越前・中国鉄絵瑠璃釉大鉢）

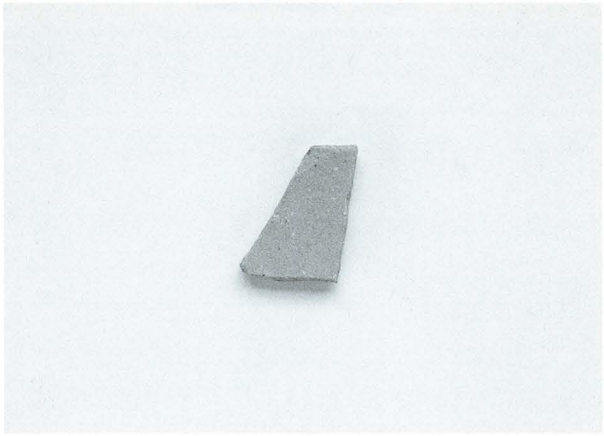


褐釉擂座壺（外面）

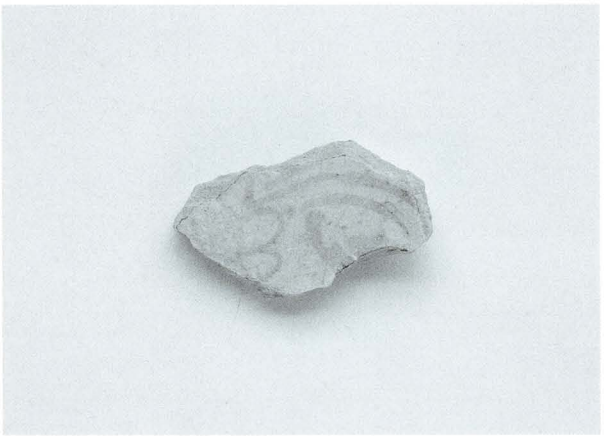
褐釉擂座壺（内面）



タイ鉄絵壺（外面）



タイ鉄絵壺（内面）



タイ鉄絵壺（内面）

タイ鉄絵壺（外面）

ベトナム鉄絵皿（内面）

ベトナム鉄絵皿（外面）

写真27　特徴的な遺物（褐釉擂座壺・タイ鉄絵・ベトナム鉄絵）

４．検討

中須西原遺跡は、海岸部に発達した砂丘の後背に立地し、潟湖の内水域に面して営まれた中世の湊である。益田氏の直接的な支配がこの地域に及んだ南北朝時代の14世紀後半以降に飛躍的に発展し、16世紀にかけて存続した。

南側の汀線沿いでは大規模な二面の礫敷きの舟着き・荷揚げ場の遺構が明瞭に検出され、その背後には区画溝あるいは道路によって街区が形成されて、方形竪穴建物を含む掘立柱建物が長期間にわたって建て替えが繰り返されたことが明らかになった。また、鍛冶工房も多く存在し、湊と一体化した形で鍛錬鍛冶が行われていたことが判明した。

15世紀後半以降に、遺跡の南側に面した河道の向きや位置が大きく変動したと考えられ、この環境の変化によって、15世紀前半に整備されたと考えられる大規模な礫敷きを廃棄し、さらに南側にやや規模の劣る新たな礫敷きが築き直された。水量や水深も変化し、接岸する船も小型化していったことが想像でき、湊の立地条件が次第に厳しいものになっていったことが推定される。

遺物に関して、特に注目されるのは朝鮮陶磁器の多さである。貿易陶磁器の12％を占め、朝鮮半島との直接的な人とものとの交流の可能性も考えられる量といえるのではないだろうか。また、タイやベトナムなど東南アジア産陶器が１％の比率で含まれる点も注目される。これらのことから、最盛期には、西日本海を介した東アジア規模の広範な交易ネットワークの一角に位置し、石見国西部における拠点的な湊として機能していたと考えられる。

中須西原遺跡は、17世紀前半に空白期があるが、それ以降も存続した。使用される場は、汀線沿いの遺跡の南側から次第に北側の街区へと移動し、新たに井戸も掘られて、江戸時代の中須湊に近接する生活の場へと変化していったことがうかがえるが、この段階では、中須西原遺跡自体の湊としての機能の大半は失われていたと思われる。

湊に適した潟湖の存在によって、益田川・高津川の河口域には中世初期から戦国時代にかけて沖手遺跡、中須西原・東原遺跡、今市などの港湾遺跡が次々と成立したが、そのことは、益田地域の社会的な情勢に加え、潟湖の陸化や海退によって、時代を経るごとに湊としての適地の環境が変わりやすいものになっていったことを示している。

その中で、中須西原遺跡は、益田氏の政治的な動向と経済的な活動を直接的に反映した遺跡であり、国内外の遠隔地とを結ぶ海上交通と内陸部を結ぶ河川交通の結節点に位置する集散地として機能していたことを、文献の記述と遺構・遺物の両面から検証することができる重要な港湾遺跡と評価することができる。

【参考文献】

鈴政信市『美都町史』、1968年
益田市『益田市誌（上巻）』、1975年
益田市『匹見町誌』、2007年
島根県教育委員会『沖手遺跡 専光寺脇遺跡―中世の大規模集落遺跡と弥生時代の墳丘墓―』、2008年

益田市教育委員会『沖手遺跡市道中吉田久城線道路改良工事に伴う文化財発掘調査報告書』、2010年
木原　光「石見国益田の中世港湾遺跡群―最近発見の中須西原・東原遺跡を含めた中世湊の変遷―」『日本考古学』第32号、181～192頁、日本考古学協会、2011年
村上　勇「地域研究と貿易陶磁・山陰－特に島根県益田川流域の発掘成果からの考察－」『貿易陶磁研究』№29、日本貿易陶磁研究会、2009年
村上　勇「パリア海退が中世地域社会に与えた影響について－日本海沿岸の遺跡を中心にして－」『西国城館論集Ⅰ 河瀬正利先生追悼論集』中国・四国地区城館調査検討会、2009年

第３章　調査の経過と概要

第１節　発掘調査の経過

中須東原遺跡は、益田平野の北側に広がる益田市中須町に所在する。

益田川左岸区画整理事業に先立ち平成９年から10年度に全域の分布調査を実施し、平成13年度から平成15年度までの３ヶ年をかけて区画整理事業南部地区の試掘調査を実施した。そして、平成17年度から中須町周辺の調査に着手した。

平成17年度に試掘調査（第１次調査）を行い、中須東原遺跡・中須西原遺跡の存在が確認された。この結果に基づき、平成18から21年度の春までの４ヶ年をかけて範囲確認調査（第２次・３次・５次・６次調査）を行い、遺跡の範囲を確定した。その後、平成21年度から22年度の上半期で遺跡の残存状況や時期、性格などを把握するための内容確認調査（第７次・８次・10次調査）を行い、平成22年度の下半期と23年度は区画整理事業で予定される道路予定地の本発掘調査（第11次・12次調査）を行った。

１．調査前の状況

遺跡の北側には、標高２～５ｍの砂丘が横たわる。この砂丘の裾野から南側に向かって標高が1.5～1.9m、地目が畑地のほぼ平坦な地形が広がり、平坦地の南辺に幅２ｍほどの里道が東西方向に延びる。この里道を境に南側は一段低くなり、標高0.6～0.9m、地目が田の地形が東西方向に続くが、旧河道の名残と考えられる。また、平坦地の中央には、遺跡を東西にちょうど２分する位置に、里道から直交して南北方向に延びる道（以下、「中央南北道路」とある場合はこの道のことをいう。）が砂丘まで続く。小字はこの中央南北道路を境に西側が「東原」、東側が「出合」である。

畑地は露地栽培、ハウス栽培が混在し、一部には雑草が覆い茂る荒地となっている休耕地もみられる。また、平坦面内には、ため池という地目がいくつか見られ、かつては点在していたようであるが、現況では埋め立てられており、その痕跡を見ることはできない。

２．試掘・確認調査

調査の方法と調査次毎の概要　第１次・２次・４次・５次・６次・９次・13次調査は遺物・遺構確認による遺跡の広がりを確認するための範囲確認調査であり、２ｍ×２ｍを基本とした試掘坑を調査次毎に１番から設定し、各層位毎に遺物を取上げながら、遺構の有無の確認を行った。土層図は、南北方向面とそれに直交する東西方向面の２面について１/20で実測を行い、堆積状況を35mmフィルムカメラ及びデジタルカメラで撮影した。遺構は、範囲確認調査ではその配置を簡易なメモにとどめたのみである。また、遺物が表出するなど特別な場合を除き、検出遺構に遺構番号は付与していない。

第１次調査（H17）は、まだ遺跡の存在が確認されていないこともあり、中須西原遺跡以西も含めた広範囲に49箇所の試掘坑を設け、調査状況を踏まえて最終的には44箇所で確認調査を行った。中世の遺跡が広範囲に広がっていることが確認されたものの、時期や範囲などの詳細は次年度以降継続して確認していくこととなった。

第２次調査（H18）は、14箇所の試掘坑を設定して実施したが、うち９箇所は中須西原遺跡の範囲確認目的であり、中須東原遺跡においては区画整理事業に先行する雨水幹線路予定地である遺跡中

央部南側の広がりを確認するため５箇所に試掘坑を設定して確認調査を行った。遺構は確認されなかったものの、中世遺物が散見され、遺跡の縁辺部との判断がなされたことから、当該地については平成19年度に本調査を実施することとなった。この本調査（第３次調査）の結果だけをいえば、近世以降の遺構が見つかったのみであることから、「３．本調査」の項での報告は省略する。

第４次調査（H19）は、遺跡東半の広がりを確認するため中央道路以東に20箇所試掘坑を設定して行った。出土遺物から中世後期を中心とする遺跡と考えられるようになり、羽口や鉄滓など鍛冶関連遺物、中須西原遺跡と同様の船着き場と考えられる礫敷き遺構の一部が発見された。

第５次調査（H20）は、旧河道が推定される南縁辺部、遺跡西半、北側の砂丘裾野に試掘坑32箇所を設定して実施し、諸制約により年度内に実施できなかった試掘坑15箇所については第６次調査として次年度に繰り越した。

以上の範囲確認調査でおおよその遺跡範囲が確定できたことを受け、平成21年度からは詳細な時期や遺構の残存状況などを確認するための内容確認調査に移行した。

第７次・８次調査は、10m×10mとなる調査区を基本として調査地選定を試みたが、地形的制約などから、大半は５m×10mで調査を行うこととなった。耕作の関係上、２次に分けて調査を行っているが、平成21年度の一連の調査であり、調査区名はA～Jのアルファベットで通しで呼称した。調査面積は、第７次・８次あわせて432m^{2}である。検出された遺構については、遺跡内の様相確認を目的とした調査であることから検出に終始し、基本的に完掘は行わず、必要に応じた半裁にとどめた。検出できた遺構については１/100で平板測量により図化し、土層は１/20で図化した。また、調査状況については随時35mmフィルムカメラ及びデジタルカメラで記録した。

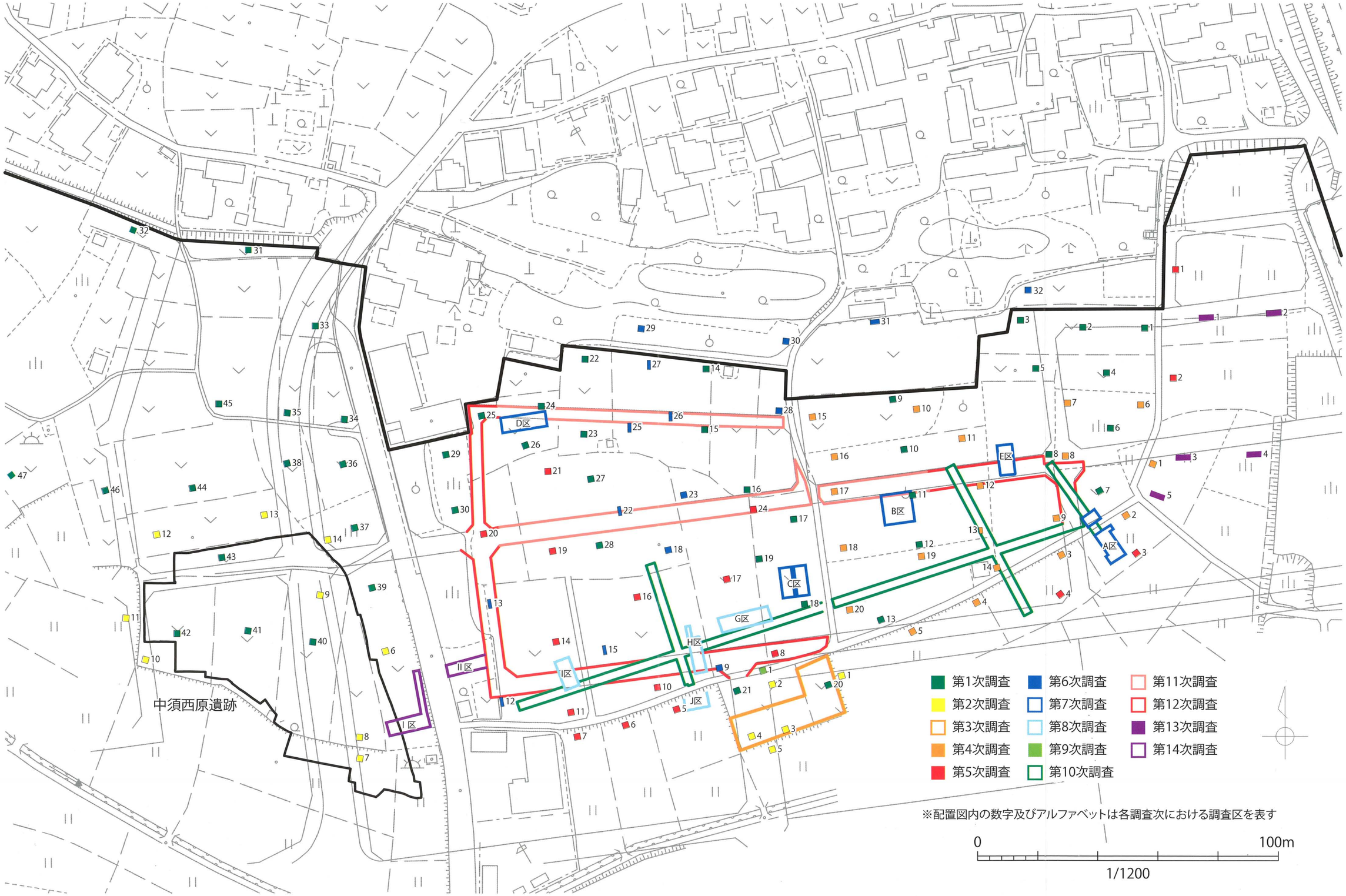
なお、第７次調査・８次調査では、次のとおり現地説明会を開催し、調査指導を受けている。

平成21年　９月　24日　近江俊秀（文化庁）、井上寛司（島根大学名誉教授）、大庭康時（福岡市
～25日　教育委員会）、五味文彦（東京大学名誉教授）、村上　勇（奥田元宋・小由女美術館館長）
10月　18日　現地説明会　※参加者41名
平成22年　３月　21日　小野正敏（国立歴史民俗博物館）、五味文彦、村上　勇　※所属は当時

第10次調査は、これまでの調査で比較的遺構・遺物密度が高い傾向にある遺跡の南部において東西方向に細長い調査区を設定して実施した。調査面積は、897m^{2}である。幅３m×長さ200mの東西トレンチを軸として、西区で１本、東区で２本、南北方向に交差するトレンチを設けた。東西トレンチの西から東に向かって10mピッチでグリッド分けし、１Ｇ…20Ｇと呼称した。次いで西区の南北トレンチ、東区の南北トレンチの順で21Ｇ…35Ｇと呼称し、遺物の取り上げ、遺構の検出を行った。また、第10次調査より、遺構の実測及び遺物の取上げに（株)CUBICによる遺跡調査システム「遺構くん」を導入し、デジタルで実施した。

第10次調査では、次のとおり現地説明会を開催し、調査指導を受けている。なお、10月以降の現地説明会、調査指導は第11次調査と兼ねている。

平成22年　６月　25日　村上　勇
６月　30日　大庭康時
９月　５日　井上寛司
午前中に、山陰考古学研究集会による現地見学会



第15図　中須東原遺跡の調査地位置図

9月 11日　小野正敏、中村唯史（島根県立三瓶自然館）、村上　勇

10月　1日　近江俊秀、大庭康時、村上　勇

10月　2日　現地説明会　※参加者120名

10月 24日　坂井秀弥（奈良大学教授）　※講演会出席のため来益

11月 20日　井上寛司、小野正敏、五味文彦、村上　勇

この他、以下の範囲確認調査を実施している。

第９次調査（H22）は、第２次調査で確認した雨水幹線路のうち未確認であった最西端のコーナー部分に１箇所設定して行い、遺跡の範囲内であることが確認された。

第13次調査（H23）は、第４次・５次調査で旧河道が確認されたさらに東側への遺跡の広がりあるいは地形の状況を確認するために実施したものである。

第５表　第１次調査結果一覧表

No.	発掘面積	調査所見	出土遺物（中世以前）	地表標高	遺跡の高さ		備考
					包含層	遺構面	
1	4.0		土師質土器２	1.29			－70cm(標高0.6m）以下は砂礫
2	4.0			1.42			－20cm(標高1.2m）以下は砂礫
3	4.0	下層の砂から弥生土器出土	弥生土器２、青磁１、染付１、土師質土器１、鉄滓１	1.52		2層上面(1.32)	2層固く締まる（人為的？） －70cm(標高0.8m）以下は砂→砂礫
4	4.0		土師質土器２	1.36			－50cm(標高0.85m）以下は砂礫
5	4.0	遺物包含層？	青磁２、土師質土器５、土錘１、鉄滓１	1.48	(0.83)		３層は遺物包含層状の色調
6	4.0	遺構面	青磁１、土師質土器８、土器１、土錘３	1.43		1.08	柱穴跡４、溝状遺構１
7	4.0	遺物包含層？ 遺構面	土師質土器12、土器１、瓦質土器２、備前２、土錘４、羽口１、鉄滓１	1.47	(1.27)	1.09	柱穴跡５、溝状遺構１ －45cm(標高1.0m）以下は砂礫
8	4.0	遺物包含層？	土師質土器１	1.38	(0.93)		４層は遺物包含層状の色調 －90cm(標高0.5m）以下は砂→粘土混砂→砂礫と続く
9		（実施せず）					
10	4.0		土師質土器２、鉄滓１	1.53			－100cm(標高0.55m）以下は砂→砂礫と続く
11	4.0	遺物包含層（厚さ10cm） 遺構面	土師質土器22、土器２、土錘１、石鍋６、鉄滓14	1.60	1.14	1.09	柱穴跡５、溝状遺構１
12	3.8	遺物包含層（厚さ30cm） 遺構面	白磁１、青磁２、染付１、土師質土器19、土器２、瓦質土器１、須恵器系２、石鍋２、鉄滓114	1.69	1.28	1.03	柱穴跡６、土坑１ 炭片、鉄滓が多い
13	4.0			1.58		(0.74)	標高0.74mに面あり －120cm(標高0.4m）以下は粘質土→砂質土→礫と続く
14	4.0	遺構面？	瓦質土器２、鉄滓２	1.58		(0.88)	標高0.88mに面あり －85cm(標高0.75m）以下は砂→砂礫と続く
15	4.0			1.52		(0.84)	標高0.84mに面あり －90cm(標高0.60m）以下は砂→粘質土混砂→砂礫と続く
16	4.0		土師質土器２、土器２、瓦質土器２、鉄滓２	1.55		(0.90)	標高0.90mに面あり －100cm(標高0.55m）以下は砂→砂礫と続く
17	4.0	遺物包含層（厚さ20cm） 遺構面	青磁２、土師質土器25、土器１、瓦質土器１、備前１、鉄滓19	1.81	1.21	1.01	柱穴跡２ －120cm(標高0.6m）以下は砂
18	4.0	遺物包含層（厚さ40cm） 遺構面	白磁３、青磁２、染付７、朝鮮陶磁２、天目１、土師質土器15、土器３、瓦質土器２、備前１、須恵器系１、土錘２、鉄滓15	1.88	1.32	0.92	柱穴跡６、土坑２
19	4.0	中近世遺物混在包含層 遺構面？	白磁２、青磁３、染付１、朝鮮陶磁２、土師質土器12、瓦質土器２、土錘２、鉄滓５	1.77		(1.14)	標高1.14mに面あり －95cm(標高0.8m）以下は砂→砂礫と続く
20	4.0	遺物包含層（厚さ20cm） 遺構面	染付３、土器２	1.52	1.12	(0.92)	柱穴跡３ －52cm(標高1.0m）以下は粘質土
21	4.0		土師質土器１、土錘１、鉄滓１	1.53			－48cm(標高1.05m）以下は粘質土→砂と続く
22	4.0	遺物包含層（２層下層） 遺構面	青磁２、土師質土器６、瓦質土器２、土錘１	1.66	1.40	(0.81)	柱穴跡１、礫３
23	4.0	遺構面？	青磁１、染付１、土師質土器６	1.50		(0.75)	標高0.75mに面あり. －70cm(標高0.8m）以下は砂→粘質土→砂→砂礫と続く

24	4.0	遺物包含層（厚さ25cm） 遺構面？	染付１、土師質土器３、瓦質土器１、石鍋１、鉄滓１	1.81	(1.18)	(1.03)	−78cm(標高1.05m) 以下は砂→砂礫と続く
25	4.0			1.88			−46cm(標高1.40m) 以下は砂→砂礫と続く
26	4.0		青磁１、土師質土器６	1.74			−60cm(標高1.15m) 以下は砂→砂礫と続く
27	4.0		土師質土器１、備前１、鉄滓１	1.52			−95cm(標高0.60m) 以下は砂→砂礫と続く
28	4.0	遺構面？	青磁４、朝鮮陶磁１、土師質土器14、瓦質土器１、須恵器系３、備前２、土錘１、石鍋、	1.54		(0.83) (0.68)	標高0.83m、0.68mに面あり ２層上層に遺物多い −46cm(標高1.43m) 以下は砂→砂礫と続く
29	4.0			1.75			−30cm(標高1.45m) 以下は砂
30	4.0		土器１	1.72			−30cm(標高1.40m) 以下は砂
31	4.8			2.13			−100cm(標高1.20m) 以下は砂
32		(実施せず)					
33		(実施せず)					
34	4.0		土師質土器１、鉄滓１	1.70			−90cm(標高0.80m) 以下は砂
35	4.0		鉄滓１	1.68			−80cm(標高0.95m) 以下は砂
36	4.0		瓦質土器１、土器１、鉄滓１	1.80			発掘最低面（標高0.45m）以下は厚い粘質土※低湿地
37		(実施せず)					
38	4.0			1.46			−80cm(標高0.65m) 以下は砂＋粘質土→砂礫と続く※低湿地
39		(実施せず)					
40	4.0	遺物包含層（厚さ45cm） 遺構面	白磁１、青磁４、朝鮮陶磁１、土師質土器27、瓦質土器４、炉壁１、土錘２、鉄滓26	1.67	1.57	1.07	柱穴跡３
41	4.0	遺物包含層（厚さ30cm） 遺構面	白磁１、青磁４、天目１、土師質土器14、土錘１、鉄滓２	1.82	1.46	1.17	土坑３（北半区）
42	4.0	遺物包含層（２層） 遺構面	土師質土器９、鉄滓２	1.70	?	1.30	柱穴跡６、土坑１
43	4.0	遺物包含層（２層） 遺構面？	染付１、土師質土器、土器１、土錘２	1.75	?	(1.25)	標高1.24mに41区遺構面と同質の面あり
44	4.0			1.57			−80cm(標高0.95m) 以下は砂→砂礫と続く
45	4.0			1.69			−90cm(標高0.75m) 以下は砂→砂礫と続く
46	4.0		土師質土器１、鉄滓３	1.65			−110cm(標高0.70m) 以下は砂→粘質土→砂と続く
47	4.0		青磁１、土師質土器３、土器２、須恵器系１、土錘１	1.68			−125cm(標高0.45m) 以下は砂礫
48	4.0		土師質土器３、鉄滓２	1.70			−110cm(標高0.80m) 以下は砂→砂礫と続く
49	4.0		土師質土器２、土器１、土錘１、鉄滓１	1.72			−100cm(標高0.70m) 以下は固く締まった礫層

第６表　第２次調査結果一覧表

No.	発掘面積	調査所見	出土遺物（中世以前）	地表標高	遺跡の高さ		備考
					包含層	遺構面	
1	4.0			0.82			下層は湿地状態
2	4.0			1.65			下層は湿地状態
3	4.0			1.5			砂質土５層（−60cm）上面が遺構面と同一面か
4	4.0	遺構面の可能性がある５層の直上層より中世遺物が若干出土	白磁２、瓦質土器２、鉄製品２、中世瓷器系陶器	1.48		(0.90)	砂質土５層（−55cm）上面が遺構面と同一面か
5	4.0			0.87		(0.98)	下層は湿地状態
6	4.0		白磁２、青磁３、瓦質土器２、土師質土器４	1.05			下層は湿地状態 遺跡の隣接地のため遺物が比較的多数出土
7	4.0	遺物包含層あり 敷石の遺構面あり	青磁３（うち盤１）、土師質土器11、土錘１	1.05	0.72		10～25cm大の円礫が人為的に敷かれた面があり、礫間に近世～中世の遺物を含む
8	4.0	遺物包含層あり 遺構面あり	白磁２、瓦質土器10、土師質土器12、中世土器２、銭貨１、鉄滓１	1.55	1.02	0.52	中世の遺物が多数出土
9	4.0	遺物包含層あり 遺構面ありか	青磁１、瓦質土器８、土師質土器１、朝鮮陶磁１、鉄滓１	1.74	1.44	0.70	砂質土５層（−70cm）上面が遺構面と同一面か
10	4.0		瓦質土器１	1.5		1.14	下層は湿地状態
11	4.0			1.18			下層は湿地状態
12	4.0		備前系１	1.6			
13	4.0		白磁１	1.56			
14	4.0		土師質土器４	1.52			下層は粘質土が厚く堆積し、その下は砂礫

第７表　第３次調査結果一覧表

No.	発掘面積	調査所見	出土遺物（中世以前）	地表標高	遺跡の高さ		備考
					包含層	遺構面	
1	4.0	遺物包含層なし 遺構面なし	備前系２	0.58			地表－30cm以下は砂→砂礫となる
2	6.0	遺物包含層なし 人工的な礫敷き面	白磁１、土師質土器３、土錘１、鉄滓14	0.7		0.45	地表－25cmの深さで、10～20cmの円礫を人為的に敷いた面を検出 南側はほぼすべて円礫、北側は円礫に風化礫、割石、細礫が混じり、鉄滓も多く出土
3	5.0	遺物包含層なし 人工的な礫敷き面	白磁２、瓦質土器４、備前１、瀬戸１	0.75		0.25 ～ 0.15	地表－50cmの深さで、10～15cmの円礫を人為的に敷いた面を検出 礫の大きさは均一で、平坦面が上に揃い、南側へ向けて緩く下がる
4	4.0	遺物包含層なし 遺構面なし	青磁１、土器１、瓦質土器４	0.83			地表－40cm、標高0.4m以下は粘質土→砂礫となる
5	4.0	遺物包含層なし 遺構面なし	土師質土器１	0.77			地表－50cm、標高0.3m以下は粘質土が厚く堆積する
6	4.0	遺物包含層なし 遺構面に柱穴など5	青磁１、土師質土器２、土錘３	1.37		0.92	地表－45cmの遺構面は安定した明黄褐色砂質土の上面
7	4.0	遺物包含層なし 遺構面なし	朝鮮陶磁１、土師質土器１、瓦質土器１、鉄滓１	1.34			地表－40cm以下は、人為的な土混じり礫層→砂礫となる 遺跡の縁辺部か
8	4.0	遺物包含層なし 遺構面なし 安定した面あり	白磁１、土師質土器１、瓦質土器１、土錘１、鉄滓２	1.43		－0.88	地表－50cmの遺構面は安定した明黄褐色砂質土の上面
9	4.0	遺物包含層なし 遺構面なし 安定した面あり	備前系１	1.15		－0.65	地表－50cmで安定した砂質土の上面
10	4.0	遺物包含層なし 遺構面なし 安定した面あり	土師質土器１、土器１	1.3		－0.90	地表－40cmで安定した砂質土の上面 遺跡の縁辺部か
11	4.0	遺物包含層なし 遺構面なし 安定した面あり	土師質土器18、瓦質土器１、備前系１、土錘１、鉄滓９	1.44		－0.95	地表－55cmで安定した砂層の上面 遺跡の縁辺部か
12	4.0	遺物包含層は不明瞭 遺構面に溝状遺構	青磁２、青花３、土師質土器４、土器７、瓦質土器９、備前系１、瀬戸２、鉄滓７	1.57	－1.15	0.82	地表－75cmの遺構面は安定した砂質土の上面
13	4.0	遺物包含層あり 遺構面に溝状遺構	白磁２、青磁２、土師質土器28、土器６、瓦質土器２、瀬戸１、滑石製石鍋１、土錘６	1.55	1.15	0.8	地表－70cmの遺構面は安定した砂質土の上面
14	4.0	遺物包含層は不明瞭 人為的な土混じりの礫層	青花１、土師質土器３、土器10、瓦質土器１、備前系１、瀬戸１、鉄滓３	1.4		－1.00	地表－40cm以下に人為的な土混じりの礫層がある
15	4.0	遺物包含層なし 遺構面なし 安定した面あり	土師質土器１、土器１、鉄滓１	1.4		－0.80	地表－60cmで安定した砂質土の上面 遺跡の縁辺部か
16	4.0	遺物包含層あり 遺構面に土坑、溝状遺構	土師質土器４、瓦質土器１、鉄滓４	1.5	1.10	0.80	地表－70cmの遺構面は固く締まった砂層の上面
17	4.0	遺物包含層なし 遺構面なし 安定した面あり	白磁１、青磁１、朝鮮陶磁１、土師質土器７、瓦質土器２、鉄滓12	1.55	1.00	0.78	地表－80cmで安定した砂質土の上面
18	4.0	遺物包含層あり 遺構面に土坑、柱穴など５	白磁２、青磁１、青花１、土師質土器18、土器２、瓦質土器３、鉄滓23	1.62	1.00	0.77	地表－90cmで安定した砂質土の上面
19	4.0	遺物包含層あり 遺構面に土坑、柱穴など11	白磁５、青磁４、青花１、朝鮮陶磁１、土師質土器24、瓦質土器17、備前系２、瀬戸１、土錘４、羽口１、鉄滓61	1.58	1.18	0.93	地表－65cmで安定した砂質土の上面
20	4.0	遺物包含層あり 遺構面に人為的な石列	白磁３、青磁１、朝鮮陶磁１、土師質土器10、土器１、瓦質土器３、土錘４、鉄滓５	1.65	1.05	0.65	地表－100cmで安定した砂質土の上面

第８表　第５次調査結果一覧表

No.	発掘面積	調査所見	出土遺物	地表標高	遺跡の高さ		備考
					包含層	遺構面	
1	4.0	遺物包含層なし 遺構面なし	石製品１、土師質土器１	0.66			地表－0.2m以下は、20cm以下の礫を含む砂礫層の堆積 自然堤防
2	4.0	遺物包含層なし 遺構面なし	瓦質土器１、白磁１、土師質土器３	0.63			地表－0.26m以下、砂⇒20cm以下の礫を含む砂礫層が堆積

3	4.0	遺物包含層なし 遺構面なし	青磁３、染付４、土師質土器１	0.69			地表－0.8m付近に調査区北側で確認されている礫敷き面からのものと考えられる転石あり 下層は湿地状を呈す
4	4.0	遺物包含層なし 遺構面なし		0.74			地表－0.5m以下は、湿地状の堆積
5	4.0	遺物包含層なし 遺構面なし	白磁１、土師質土器３	0.83			地表－0.54m以下は、粘質土（厚さ64cm）⇒砂が堆積し、湿地状を呈す Ｇ５周辺にはかつて礫敷き状のものがあったといわれるが、除去されている（土地所有者より）
6	4.0	遺物包含層なし 遺構面なし	須恵器２、青磁２、染付２、鉄滓５、白磁５、土師質土器９	0.76			地表－0.6mまでは人為的撹乱、洪水の痕跡があり（時期不明）、以下粘質土、砂層が互層に堆積し、調査区が水際に位置していたことを示す 炭、灰、大型鉄滓を比較的多く検出
7	4.0	遺物包含層なし 遺構面なし	染付２、鉄滓１、土師質土器１	0.79			地表－0.2m以下、粘質土が厚く堆積する湿地状
8	4.0	遺物包含層なし 遺構なし 安定した面あり	瓦質土器５、金属遺物１、須恵器１、染付１、鉄滓１、銭貨１、土師質土器６	1.61		（1.01）	地表－0.6～１mで安定した砂質土の堆積 安定した砂質土以下は、粘質土⇒礫層が堆積
10	4.0	遺物包含層あり 遺構面は２面（第１遺構面には柱穴、第２遺構面には人為的な集石あり）	瓦質土器８、金属遺物５、青磁３、染付７、朝鮮陶磁２、鉄滓１、土錘２、白磁９、土師質土器16、炉壁２	1.68	1.06	1.06 0.52	第１遺構面は地表－0.6mの灰黄褐色砂質土上面 地表－1.2mの砂質土上面で、20cm以下の礫のまとまりを検出
11	4.0	遺物包含層なし 遺構なし 安定した面あり	瓦質土器１、青磁２、染付１、鉄滓２、白磁４、土師質土器３	1.55		（1.38）	地表－0.57mで安定した面 地表－1.0m以下は粘質土⇒礫が堆積し、礫は南に下がる緩傾斜 遺跡縁辺部か
14	4.0	遺物包含層あり 遺構面に土坑、柱穴あり	石製品４、瓦質土器２、滑石製石鍋１、金属遺物１、須恵器３、青磁７、瀬戸１、染付１、中国陶磁２、朝鮮陶磁４、鉄滓２、天目茶碗１、土器15、銭貨２、土錘２、白磁２、土師質土器91、備前系２、	1.6	1.40	1.15	銭貨は朝鮮通宝１（1423～25年初鋳）、元豊通寶１（1078年初鋳） 鍛治関連遺構か
16	4.0	遺物包含層あり 遺構面に土坑、柱穴あり	瓦質土器２、金属遺物３、須恵器３、青磁６、染付５、土器２、土錘５、白磁５、土師質土器24	1.69	1.32	1.32	遺構面は地表－0.37mの砂質土上面であり、同砂質土は遺物包含層でもある 砂質土下層は、粗目の砂層が80cm以上堆積
17	4.0	遺物包含層あり 遺構面に土坑、柱穴あり	瓦質土器５、滑石製石鍋１、須恵器５、青磁４、染付８、土器３、土錘１、鉄滓１、銭貨２、白磁７、土師質土器39	1.66	1.24	1.24	出土銭貨の１つは洪武通宝（1368年初鋳） 遺構面は地表－0.42mの灰黄褐色土上面であり、同層は遺物包含層でもある 包含層下は砂層
19	4.0	遺物包含層あり 遺構面に溝状遺構あり	瓦質土器２、金属遺物４、須恵器２、青磁15、染付２、鉄滓２、土器７、土錘４、白磁８、土師質土器48、備前系１	1.59	1.28	0.82	遺構面は地表－0.77mのにぶい黄褐色土上面 地表－1m以下は砂層
20	4.0	遺物包含層なし 遺構なし	瓦質土器２、須恵器１、青磁２、鉄滓１、土錘１、白磁１、土師質土器８、備前系１	1.62			地表－0.2m以下は、砂質土（厚さ40cm）⇒砂層（厚さ55cm）⇒砂礫層の堆積 地表－1.3mで湧水
21	4.0	遺物包含層は不明瞭 遺構面に溝状遺構か？	瓦質土器４、金属遺物１、青磁６、染付４、土器２、白磁５、土師質土器９、	1.53	（1.28）	0.84	遺構面は地表－0.69mのにぶい黄褐色土上面 地表－1.1mで10cm大の礫層、以下砂礫層 遺跡縁辺部か
24	4.0	遺物包含層なし 遺構面なし	青磁２、染付４、朝鮮陶磁１、鉄滓３、天目茶碗１、土師質土器９、備前系１	1.56			遺跡縁辺部か 地表－1.2mで湧水

第９表　第６次調査結果一覧表

No.	発掘面積	調査所見	出土遺物	地表標高	遺跡の高さ		備考
					包含層	遺構面	
9	4.0	遺物包含層なし 遺構面に柱穴、土坑あり	瓦質土器３、金属遺物１、青磁３、染付13、鉄滓11、白磁５、土師質土器34	1.66		（1.1） 0.6 （0.3）	溝状遺構が検出されたが第１遺構面はやや不明瞭 地表－1.4mで礫のまとまりを検出（自然堤防or人為的集石）
12	2.8	遺物包含層なし 遺構面なし	染付１、中世須恵器１、土師質土器４	1.40			地表－0.5mで集石（近世以降） 試掘区南側は後世の撹乱あり
13	1.8	遺物包含層なし 遺構面なし	3、中世須恵器１、土錘１、土師質土器27	1.50			安定した土層堆積状態であるが、全体的に軟質 地表－0.7m以下、砂質土⇒砂⇒砂礫の堆積
15	1.8	遺物包含層なし 遺構面なし	金属遺物２、染付１、中世須恵器２、白磁４、土師質土器12	1.60		1.15	柱穴５、土坑１、溝状遺構１検出 地表－0.6m以下、砂質土⇒砂⇒砂礫の堆積
18	4.0	遺物包含層なし 遺構面なし	青磁１、鉄滓３、土錘４、白磁２、土師質土器19	1.58	1.3	1.3 0.7	地表－0.7m以下、砂質土⇒砂⇒砂礫の堆積

22	1.8	遺物包含層なし 遺構面なし 安定した面あり	金属遺物１、染付１、土師質土器１	1.58			地表－0.74m以下、砂の堆積（厚さ60cm以上） 地表－0.2mで安定した面（やや軟質）
23	4.0	遺物包含層なし 遺構面なし 安定した面あり？	瓦質土器７、青磁２、染付６、鉄滓５、白磁６、土師質土器９	1.50			地表－0.2mで安定した褐色土の堆積があるが、やや軟質 地表－0.64m以下、砂の堆積（厚さ70cm以上）
25	2.4	遺物包含層なし 遺構面あり？	染付１、鉄滓１	1.50		1.3	地表－0.2mの安定した褐色土上面で遺構の可能性のある変色が検出されたが、やや不明瞭
26	4.0	遺物包含層なし 遺構面なし 安定した面あり？	金属遺物４、青磁２、染付４、中世須恵器１、土器１、白磁２、土師質土器５	1.55			地表－0.3mで安定した明黄褐色土の面（しまり弱く、やや軟質） 地表－0.7m以下、異なる砂が互層状に堆積（厚さ70cm以上、氾濫痕？）
27	2.7	遺物包含層なし 遺構面なし 安定した面あり？	滑石製品１、青磁１、染付２、白磁１	1.56			地表－0.25mで安定した褐色土の面（しまり弱く、やや軟質） 地表－0.7m以下、砂質土⇒砂の堆積
28	4.0	遺物包含層なし 遺構面なし 安定した面あり	金属遺物２、染付１、白磁１、土師質土器１	1.66			地表－0.5mで安定した面 地表－1.1m以下、砂と粘質土が互層状に堆積（氾濫痕？）
29	4.0	遺物包含層なし 遺構面なし	染付２、白磁１	2.40			表層より砂が厚さ1.9m以上堆積
30	4.0	遺物包含層なし 遺構面なし	瓦質土器２、青磁１、染付１、土師質土器３	2.05			地表－0.5m以下は砂が厚さ1.6m堆積し、以下礫層にあたる 現代の耕作による撹乱著しい
31	4.5	遺物包含層なし 遺構面なし		2.00			表層より砂が厚さ1.0m以上堆積 地表－0.5mで湧水
32	4.0	遺物包含層なし 遺構面なし	土錘４、土師質土器４	1.80			地表－0.5m以下、非常に固くしまる暗オリーブ色土の堆積（遺構面に相当するか？） 地表－1.3m以下、砂礫⇒礫の堆積

３．本調査

調査の方法と概要　第11次・12次調査は、区画整理事業で計画されていた道路工事に先立って実施したものである。第11次調査は、遺跡北西部に計画された道路予定地を対象として、平成22年９月に着手し、平成23年３月まで実施した。調査面積は、1,183m^{2}である。第12次調査は、第11次調査に引き続く平成23年４月から、遺跡東部及び南西部に計画された道路予定地を対象として実施した。調査面積は、1,382m^{2}である。なお、第10次調査区は本調査時にも埋め戻しを行っておらず、隣接地であることから引き続き第11次・12次調査時にも精査を行うなどして遺構確認を行うこともあったが、遺物の取り上げ等のグリッドは第10次調査に基づいて行った。

第11次・12次調査は開発事業に先立つ本調査であり、いわゆる記録保存を視野に入れた調査をすべき案件である。土地区画整理事業という性格上、多くの権利者が絡み合い、遺跡の保存は容易なことではなく、その取扱いの結論に期間を要することは想像に難くなかったが、事業スケジュールから逆算して本調査に着手せざるを得ない時期を迎え、止む無く調査に着手した。ただし、益田市教育委員会ではその一方でなお、遺跡の現地保存の道を模索していた。このため、保存目的調査に準じて調査を行うこととし、遺構は検出されても完掘は避ける方向で進めることを調査指導会で確認し、面的な広がりを把握することに終始しながら、並行して事業者と協議が続けられた。最終的に遺跡の保存方針に転じことから、本調査は完掘しないまま終了することとなり、本調査とは言いながらも、重複する遺構もかなりあり、遺構を完掘していないことによる未確認の遺構も多数存在していると推される。また、検出遺構には、中世遺構とあわせて近世遺構も多く含まれていると考えられる。

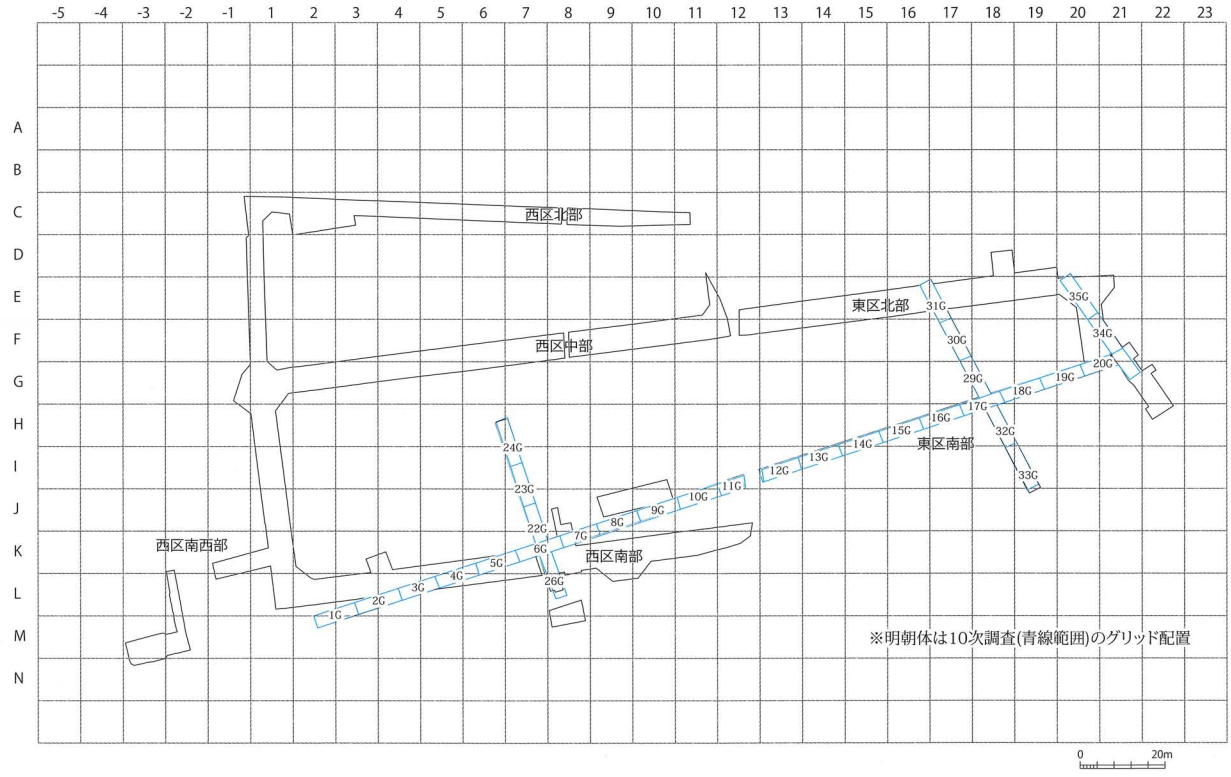
第11次・12次調査では、調査区内には世界測地座標軸系に基づき10m四方のグリッドを設定し、北西部を原点として南に向けてアルファベット順、東へ向けてアラビア数字順に呼称し、各区画の交差する名称をグリッド名とし、これに基づいて遺物の取上を行った。ただし、当初遺跡範囲外と想定

していた西側にも遺跡が広がっていることが調査途中で確認されたことにより、グリッドの当初原点とした北西部より西側については、西に向かってマイナスを付すこととした。これに加えて、本報告においては便宜上、大まかな位置を示すため、中央南北道路を境に東側を東区、西側を西区とし、またそれぞれの区域内を区画道路を基準として、北部・中部・南部に細分して呼称することとした（第16図）。

遺構の実測及び遺物の取上げは、基本的に（株)CUBICによる遺跡調査システム「遺構くん」を利用し、デジタルで実施した。近世遺構は中世遺構検出の妨げとなることから、基本的には検出した時点で位置を計測し、完掘をすることとした。出土遺物は時期判断が可能なものについては出土位置を記録し、それ以外は遺構またはグリッド毎に一括して取り上げた。また、調査地での写真撮影は35mm判フィルムカメラを使用し、適宜デジタルカメラにより補足した。

第11次・12次調査では、次のとおり現地説明会を開催し、調査指導を受けている。なお、第10次調査と重複する平成22年11月20日以前は省略する。

平成23年　3月 26日　井上寛司、小野正敏、村上　勇
～27日
7月 26日　井上寛司、大庭康時、五味文彦、禰宜田佳男（文化庁)、村上　勇、
～27日　山村亜希（愛知県立大学准教授）
8月　7日　現地見学会※参加者100名
平成24年　1月 29日　現地説明会※参加者（午前）70名、（午後）91名
30日　井上寛司、小野正敏、五味文彦、村上　勇、山村亜希
3月 11日　井上寛司、小野正敏、村上　勇
3月 18日　現地説明会※参加者140名



第16図　第10～14次調査の区域とグリッドの設定

4．遺構番号

遺構番号については、これまで調査次ごと、各調査区ごとに遺構の種類別に１から通し番号を付している。このため、例えばSK1が複数存在することとなっている。試掘・確認調査においては、調査区が接することもなかったため、まだそれでよかったのかもしれないが、第10次調査以降、調査区が隣接し、重なり合う場所が存在するようになった。

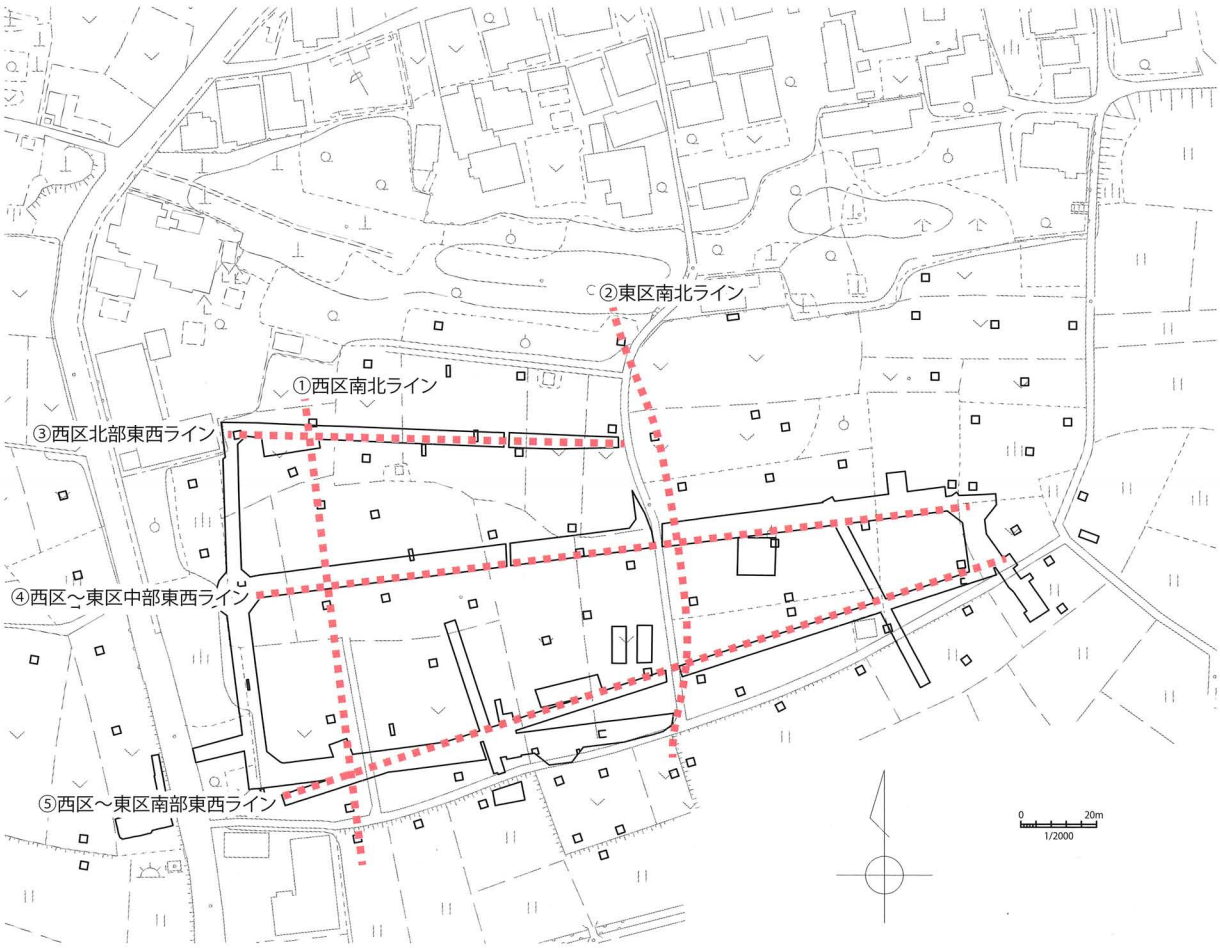
そこで、本報告書を作成するにあたり、整理を試みた。遺構を検出した形状をもとに分類をしており、今後の調査によって性格修正を必要とする遺構も予想される。このため、遺構の検出のみとした現状では、遺構の種類に関係なく通し番号で呼ぶのが望ましいと考えたが、調査が７年間に及んでいるため、すでに注記が終了している遺物もあり、作業が煩雑で、混乱も予想されたため、それぞれの遺構番号の先頭に調査次数を付加して呼称することとした。

第２節　基本層序

調査では、多くの土層が確認されたが、その堆積状況及び遺物出土状況から、大きく５つの基本層序にわけた。以下に層序の概要を示す。

＜Ⅰ層＞　現代の生活面及び畑の耕作土。30～40cmの堆積がみられる。中世から現代の遺物を含んでいる。

＜Ⅱ層＞　現代から近現代にかけての耕作に伴う鋤溝や土坑などがみられるが、近世期の遺物も出



第17図　基本層序ライン位置図

土している。

＜Ⅲ層＞　明黄褐色の砂質土層で、30～40cmの堆積がみられる。近世から中世にかけての遺物が包含されており、分層されるものと考えられた。しかし、その違いは微妙なものであり、掘り下げ段階では色調や土質での差異は認められず、一括してⅢ層としている。

＜Ⅳ層＞　暗褐色土層。Ⅳ層上面で広範囲にわたって土坑やピットを検出した。16世紀中頃～16世紀末遺物包含層。Ⅳ層は東に向かって浅くなり、17G以東では見られなくなる。

＜Ⅴ層＞　褐色土層。Ⅴ層上面で土坑やピットを検出した。西区においては下層にオリーブ色シルト層がみられる。15世紀後半～16世紀前半の遺物包含層。礫敷き遺構もこの層上面に相当する。

遺構面は遺跡南部で実施した第10次調査において、Ⅳ層上面、Ⅴ層上面の２面を確認した。遺構面２面が確認できるのは、10次調査16G以西である。遺跡中央～北部で実施した第11次調査では、１面を確認したのみで、かつ中世から近世遺構が同一面で検出された。遺構を検出後に下層確認を行ったが、第２遺構面は確認できなかった。２面確認できたのは遺跡南部のみであるが、Ⅳ層上面遺構の輪郭は不明瞭なものが多い。Ⅴ層上面遺構は砂質の東区南部でより明瞭で、西区南部ではⅤ層中に礫が混じり、面としてはやや不明瞭であった。

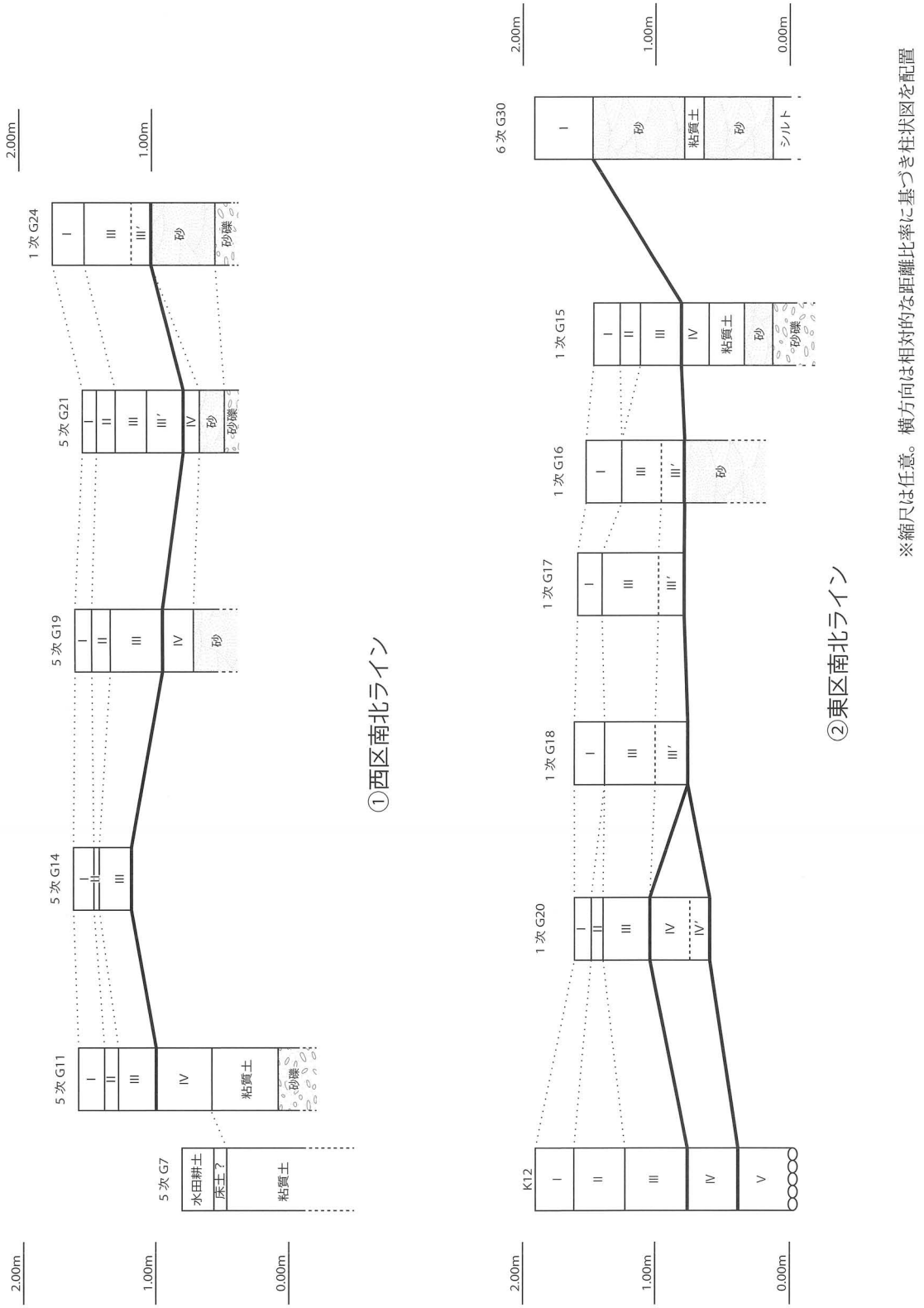
調査が行われる以前、一帯は畑地または草地、水田として利用されていた。したがって、耕作や洪水などによって過去の地表面は削り取られて撹乱されており、遺構が確認された面も本来の遺構掘り込み面とは異なるものと考えられる。

調査地の土層が基本的にシルト質または砂質であることや、下位に礫層や砂層が認められるなど、土層が堆積するうえで水の影響が大きかったことがうかがえる。

遺跡北側の砂丘帯は益田川堤防際から西向かって伸び、その最西端に福王寺が建つことで現在では終わりを見せているが、西区中部の西端において砂丘の続きが確認されており、本来遺跡が砂丘帯に囲まれるように立地していたことがわかる。

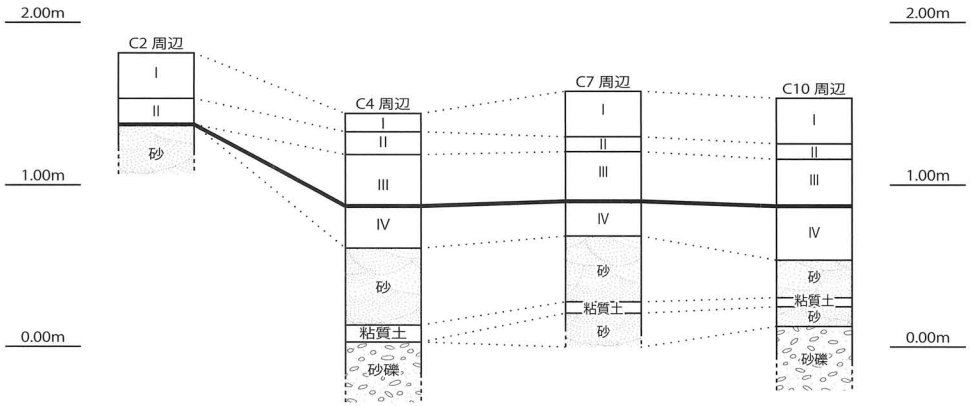
調査前の状況ではほぼ平坦な地形であったが、南北方向では北側の砂丘裾野と西区中部の間に位置する西区北部はやや窪地状を呈しており、湿地状の土層堆積を呈す。そして西区中部から南部に向かっては、中間地点よりもやや中部寄りを微高地のピークとして緩やかに下がっていく。よって、遺構はこの砂丘帯に並列する中部ライン、南部ラインの２つの微高地上それぞれにおいてその多くが検出されている。一方、東西方向を見てみると、西区北部から中部にかけての西端を最高点として、東から南東方向に緩やかに下がっていく。

中央南北道路を境に、東区の地山は砂質ベースであり、汀線沿いを除いて下層に礫、砂礫は見られない。その一方、西区は中部と南部の中間点周辺以北は同様に砂質をベースとするが、所々に砂礫がみられ、南部に至っては、遺構面の下層に20cm以下の円礫・角礫が汀線近くまで見られる。この礫に関しては、自然堆積と土地造成のための人為的堆積の両者が混在していると考えられるが、とくに汀線に近づくほど明確な区分けはできていない。



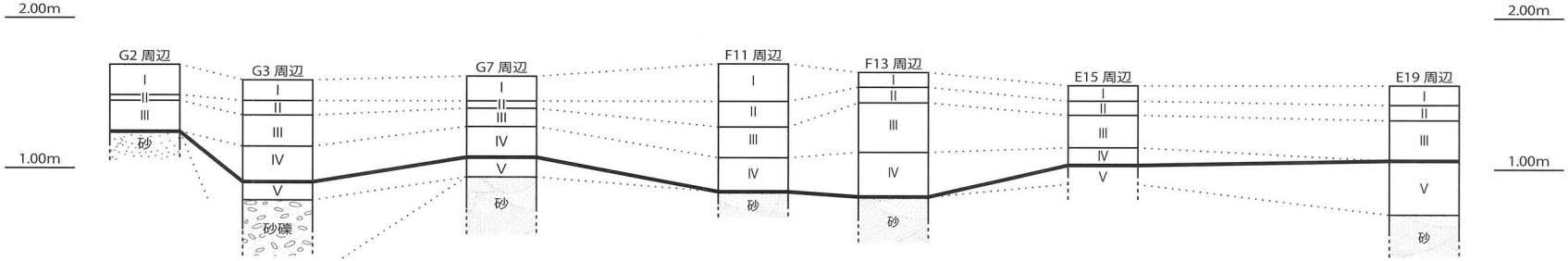
※縮尺は任意。横方向は相対的な距離比率に基づき柱状図を配置

第18図　基本層序と遺構の関係模式図（南北ライン）

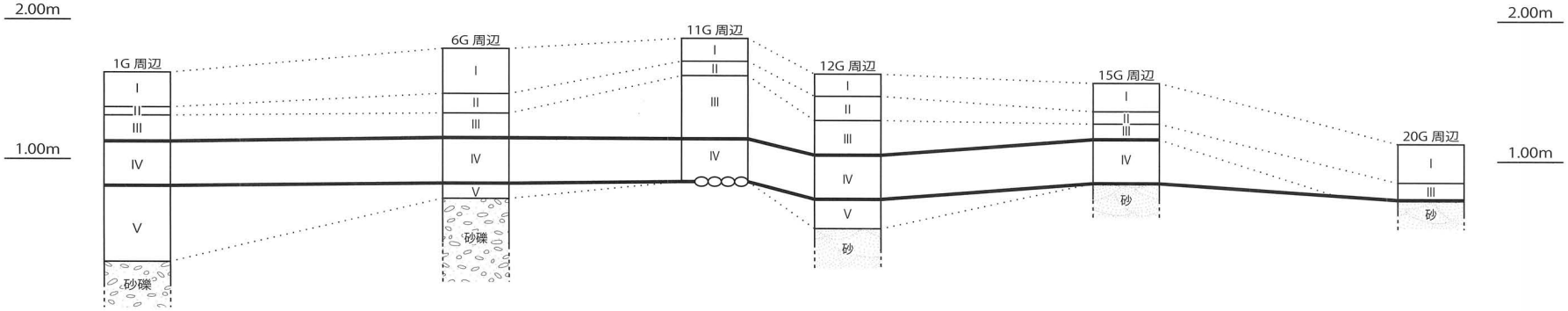


③西区北部東西ライン

※縮尺は任意。横方向は相対的な距離比率に基づき柱状図を配置

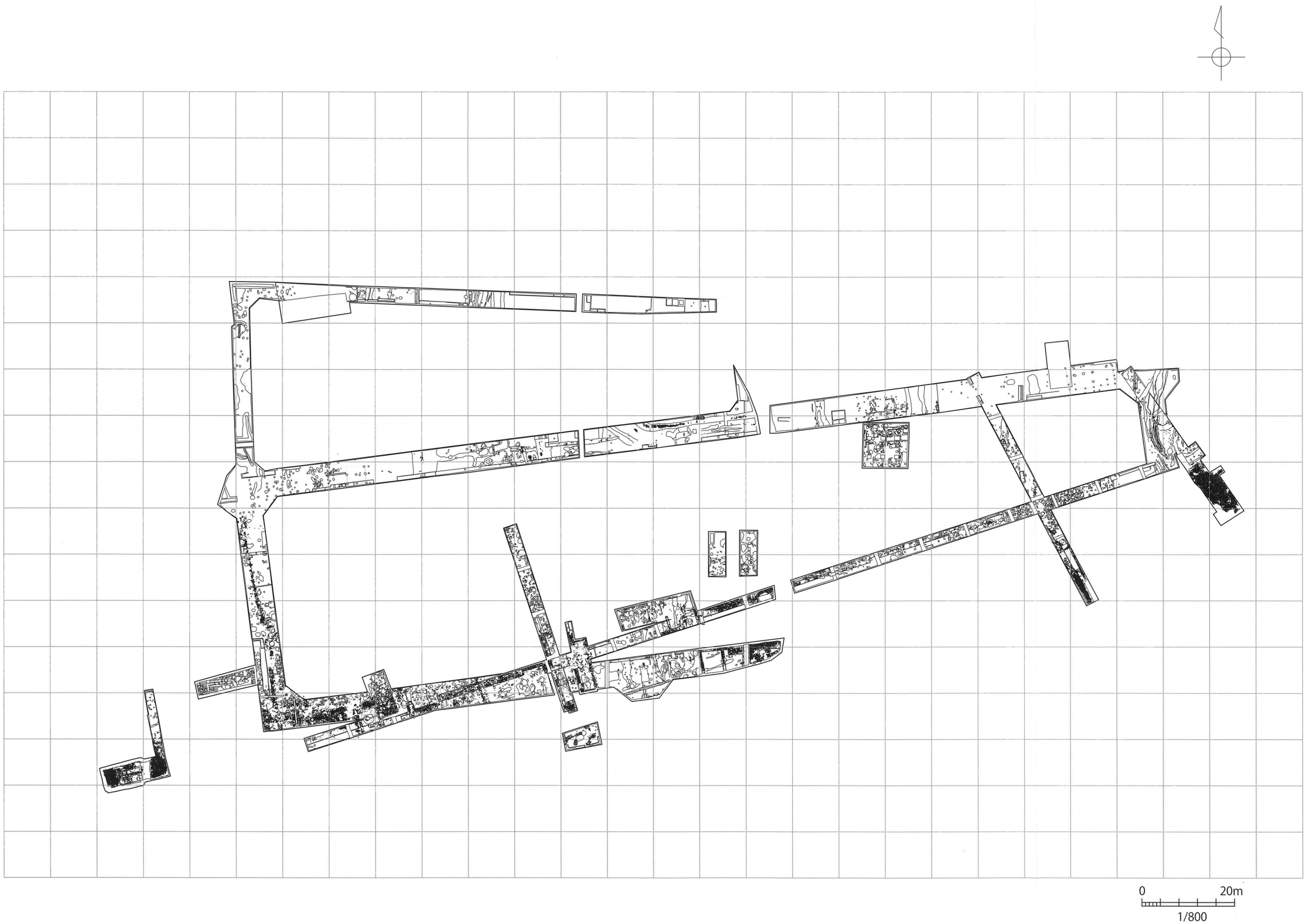


④西区～東区中部東西ライン

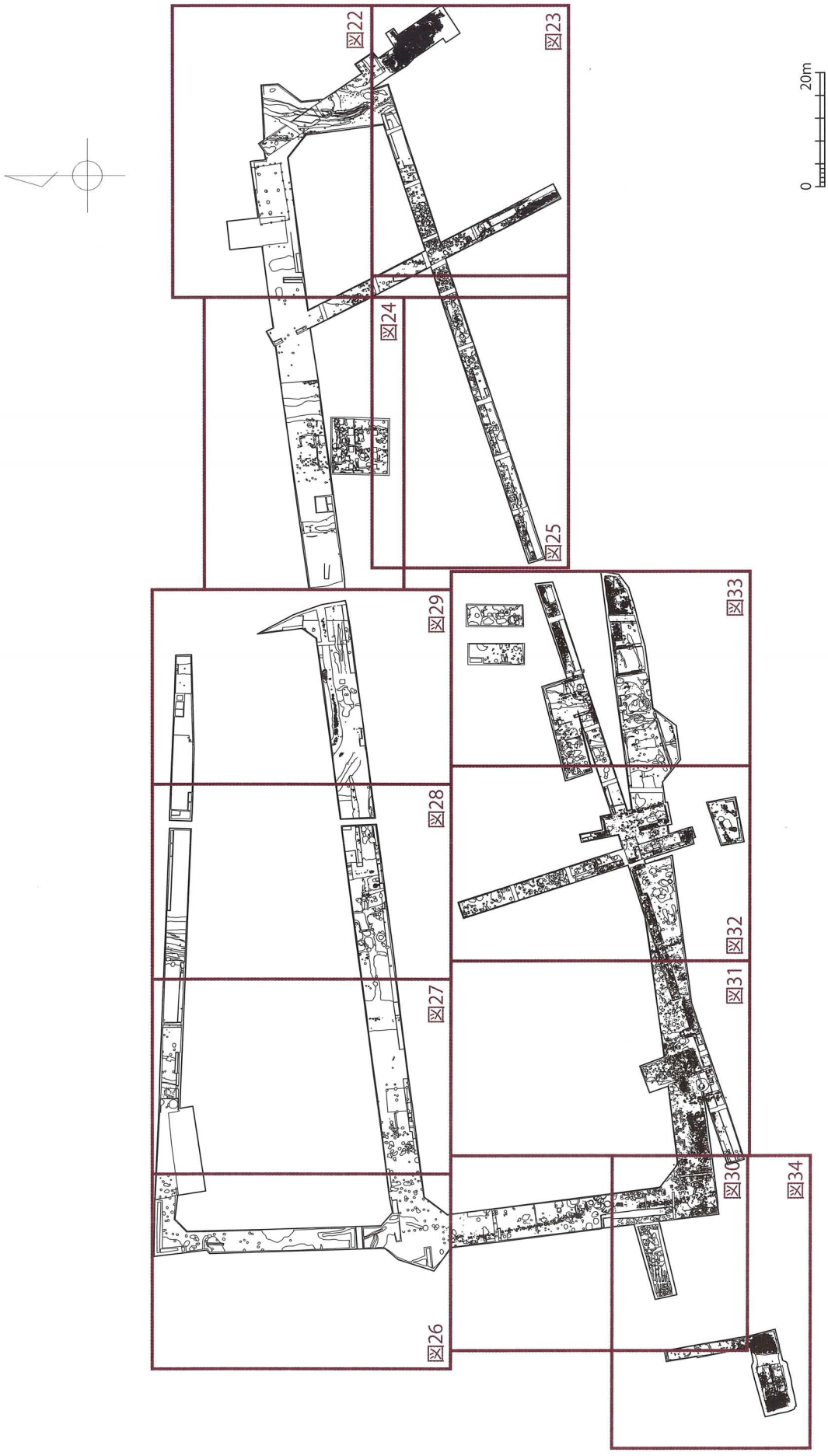


⑤西区～東区南部東西ライン

第19図　基本層序と遺構の関係模式図（東西ライン）

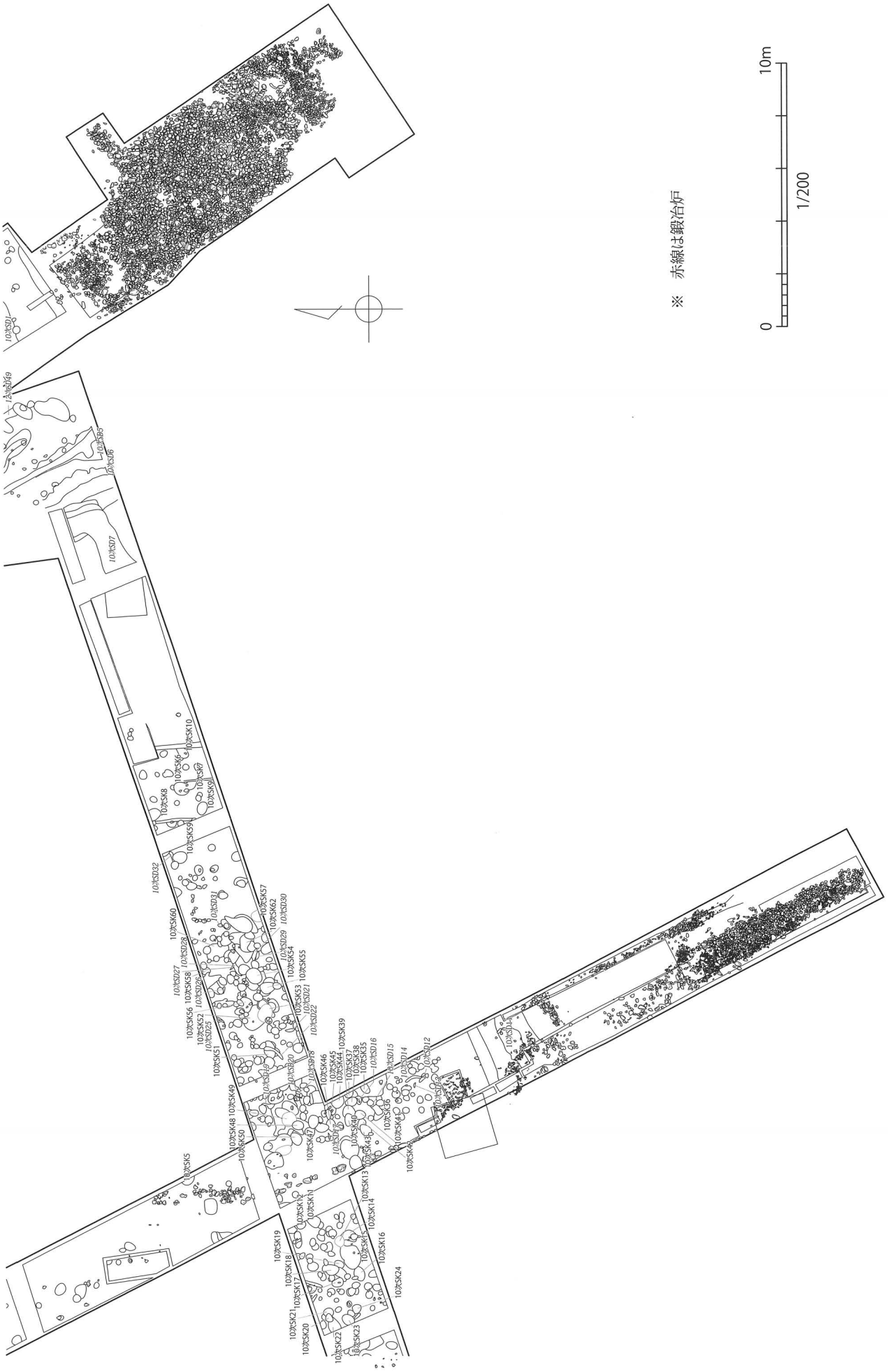


第20図　中須東原遺跡遺構配置図

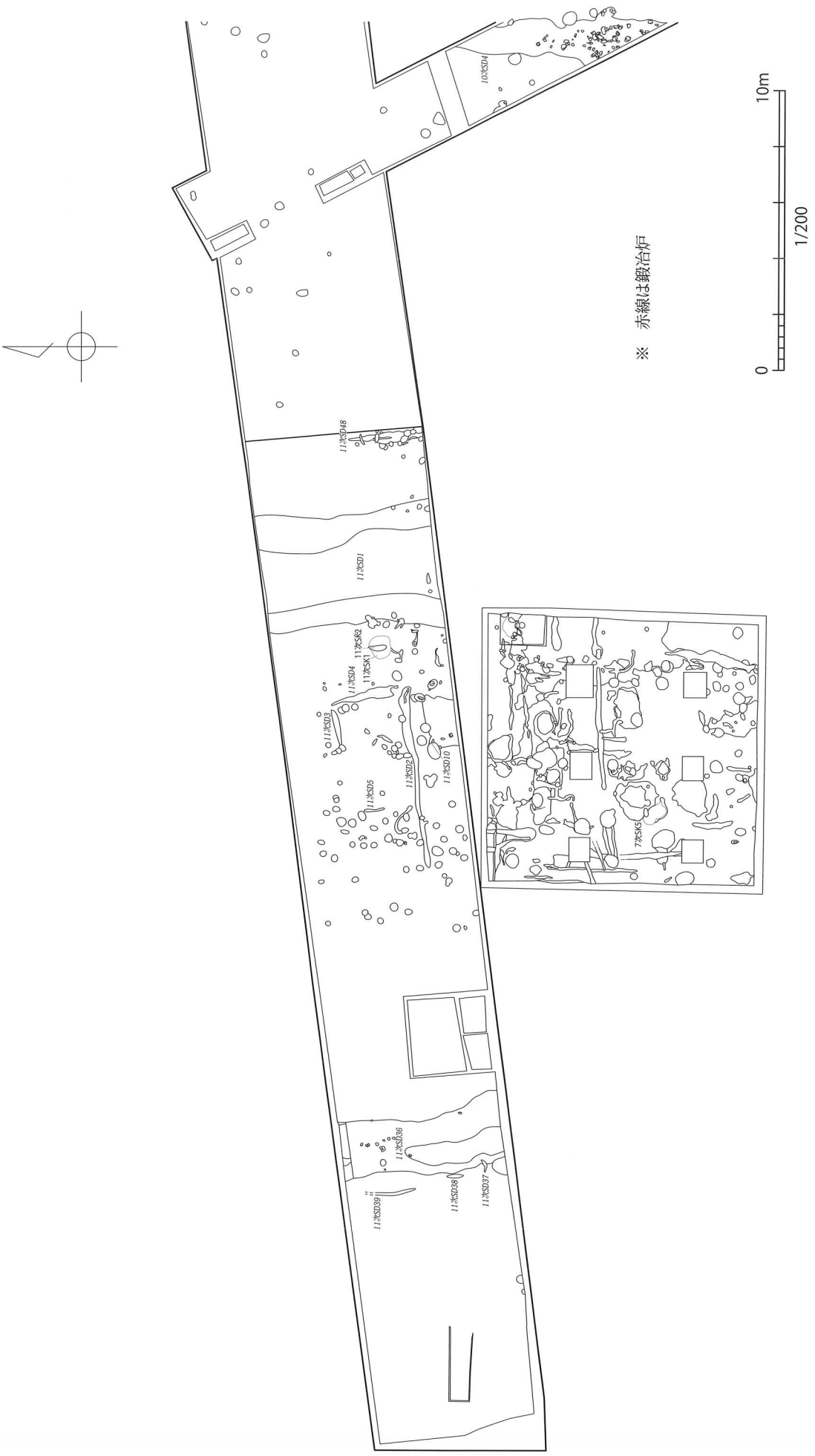


第21図　部分図配置図

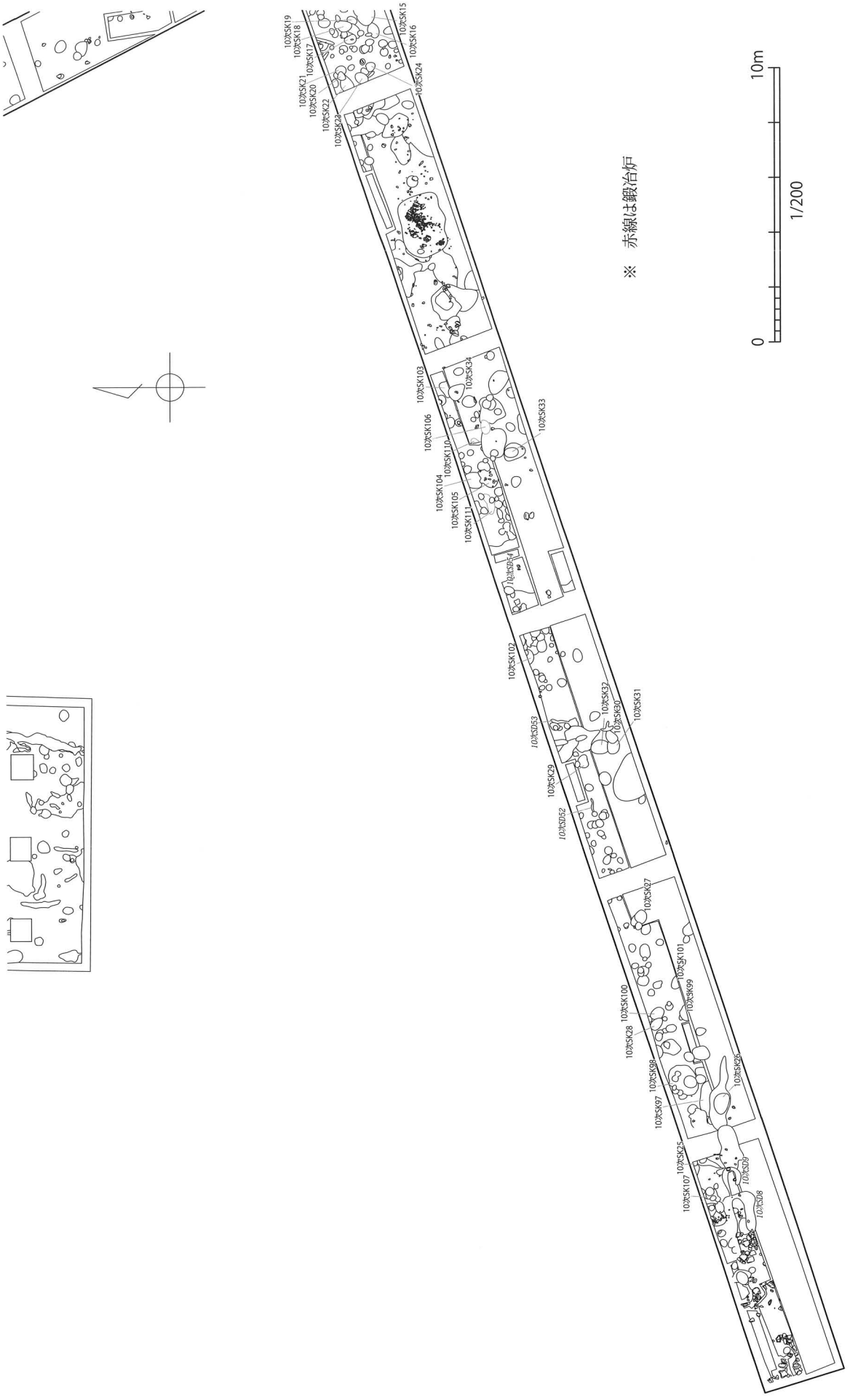
第22図　部分図１―東区北東部―



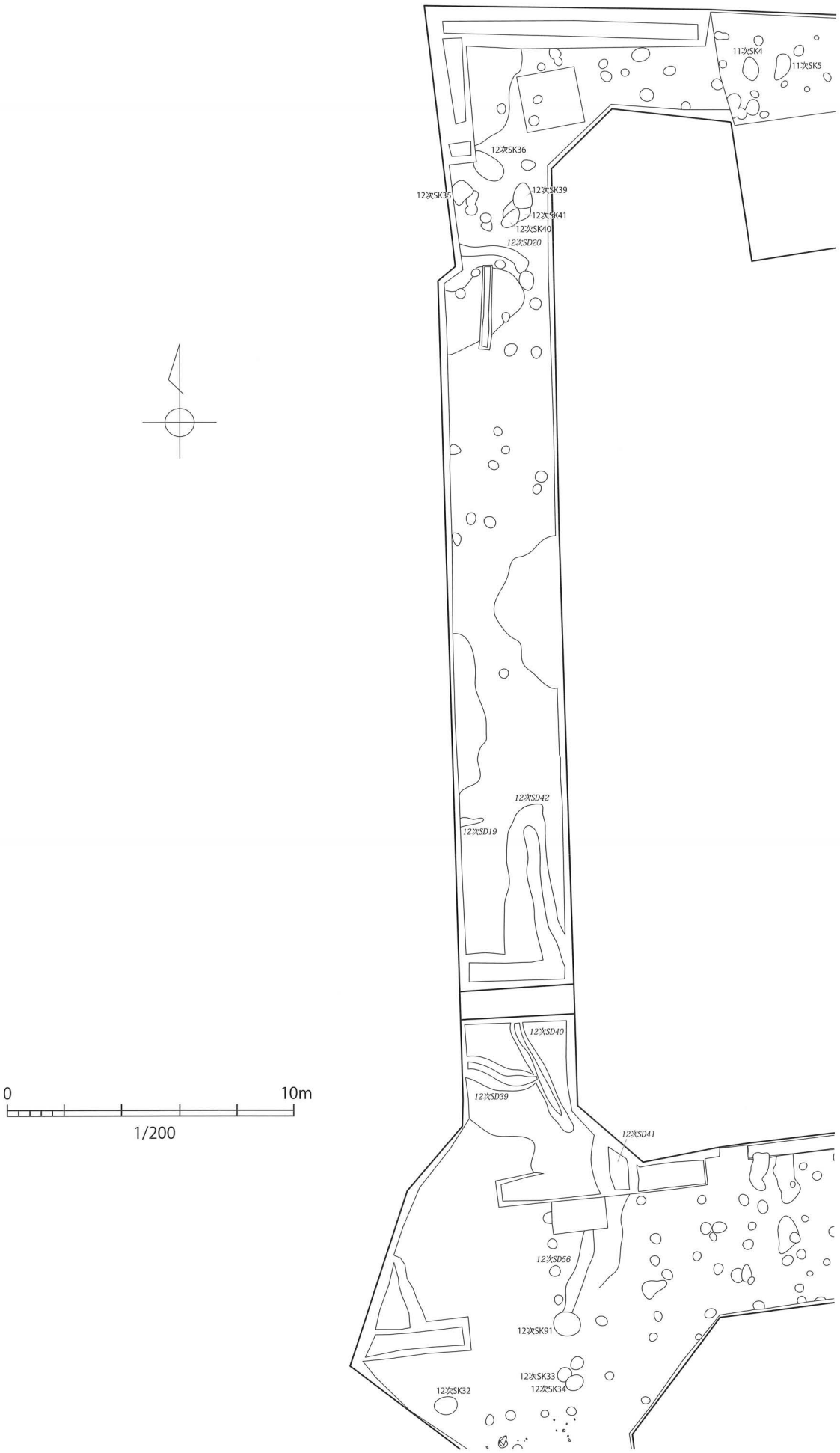
第23図　部分図２―東区南東部―



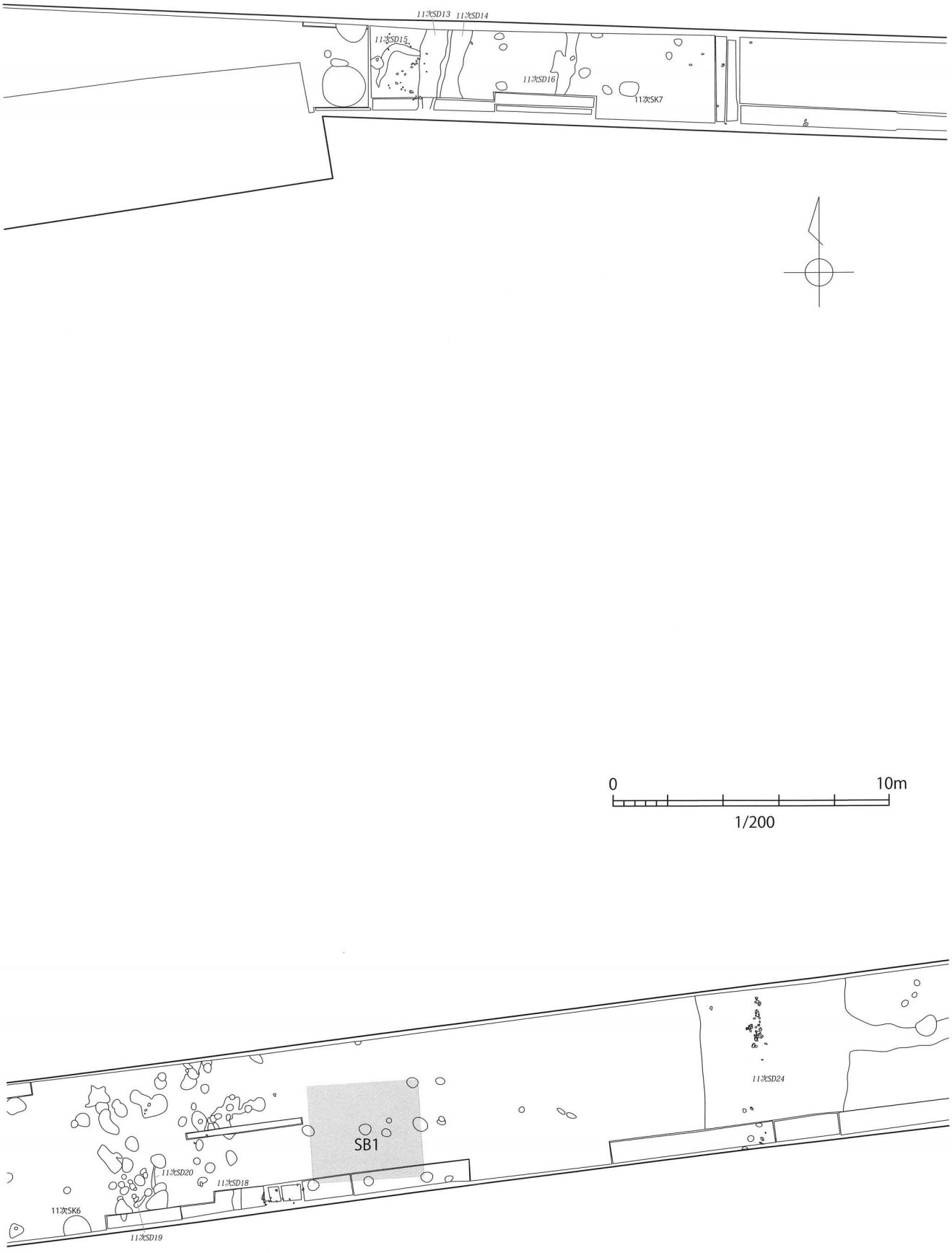
第24図　部分図３―東区北西部―



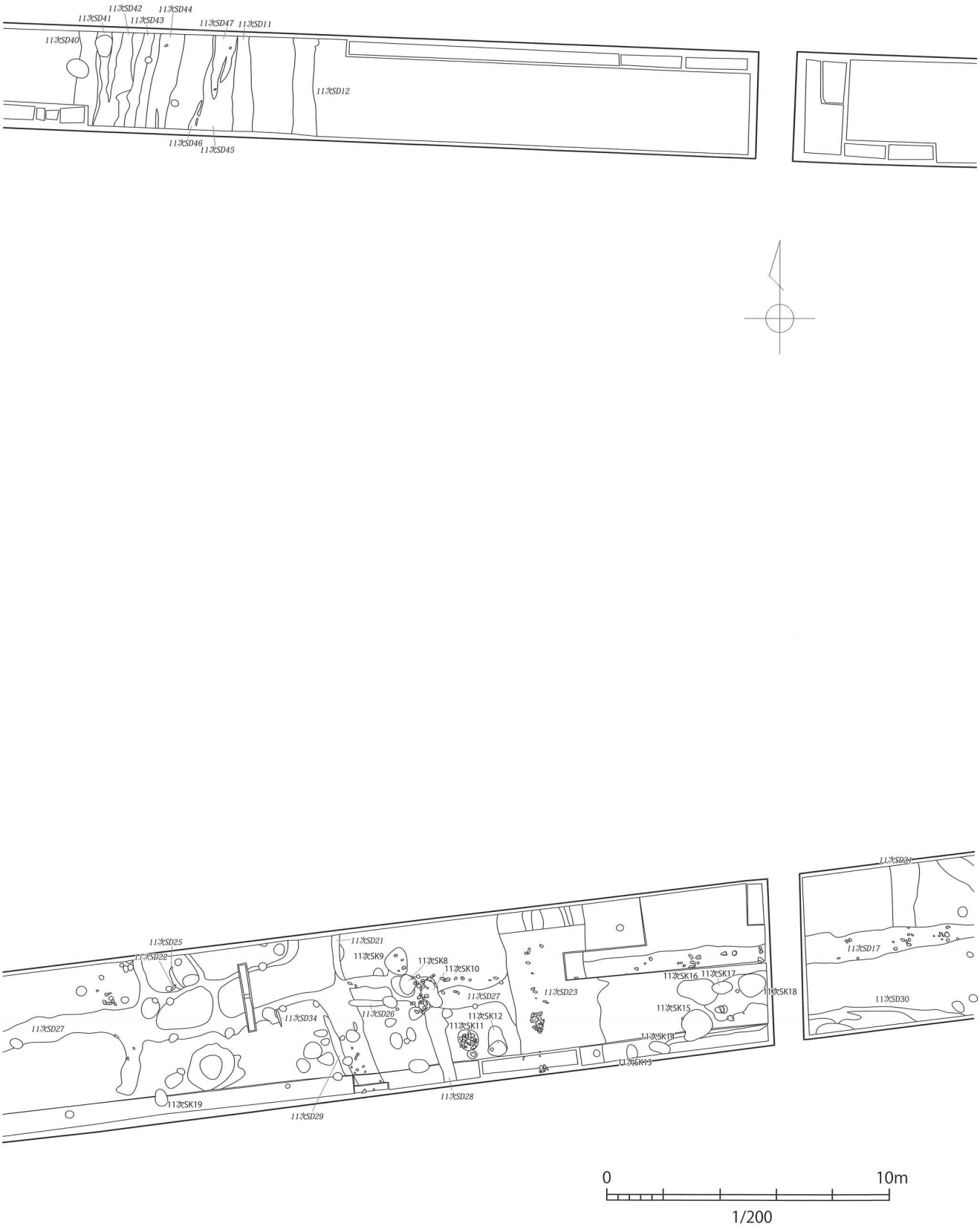
第25図　部分図４―東区南西部―



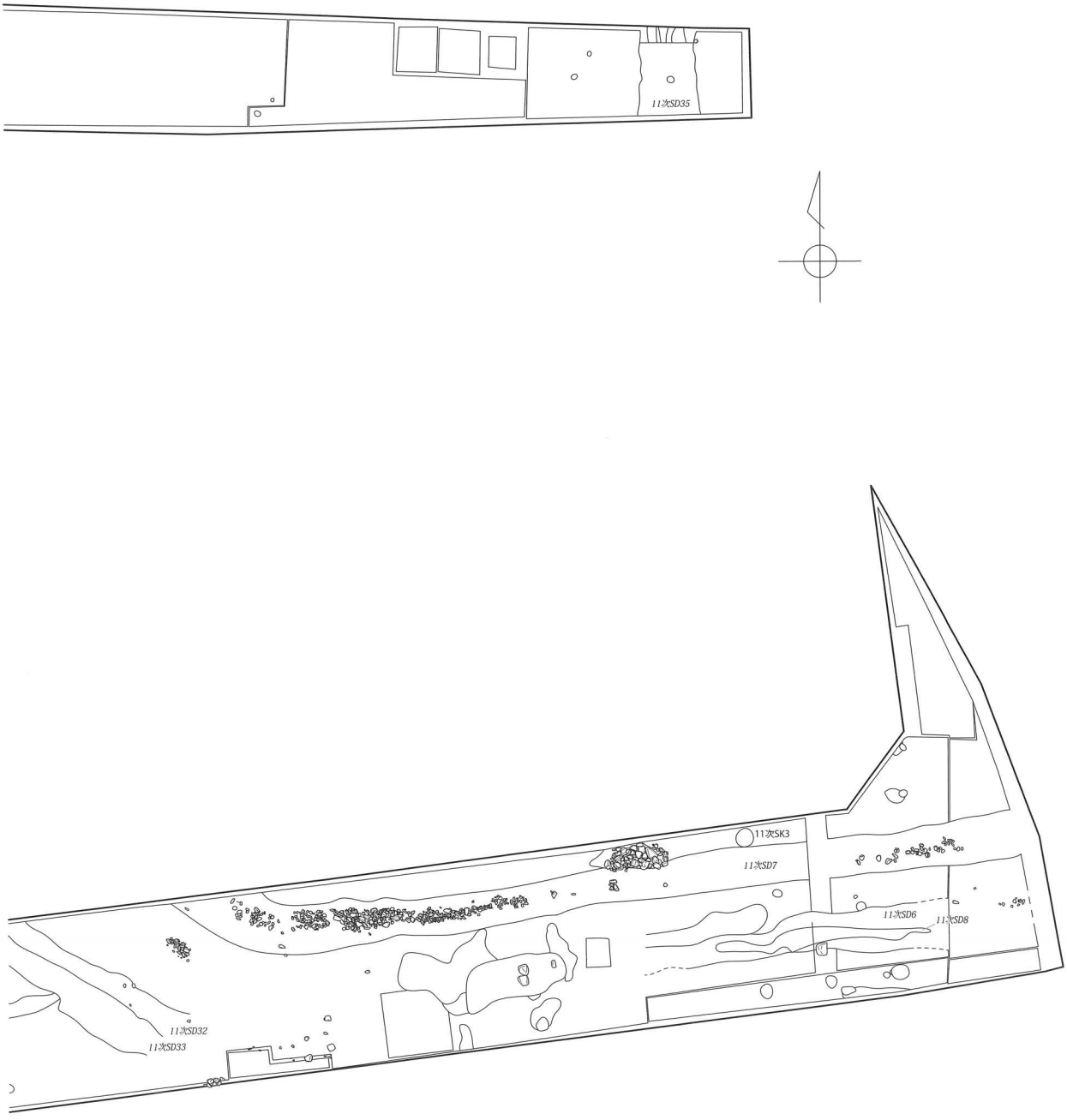
第26図　部分図５―西区北西部―



第27図　部分図６―西区北西中央部―



第28図　部分図７―西区北東中央部―

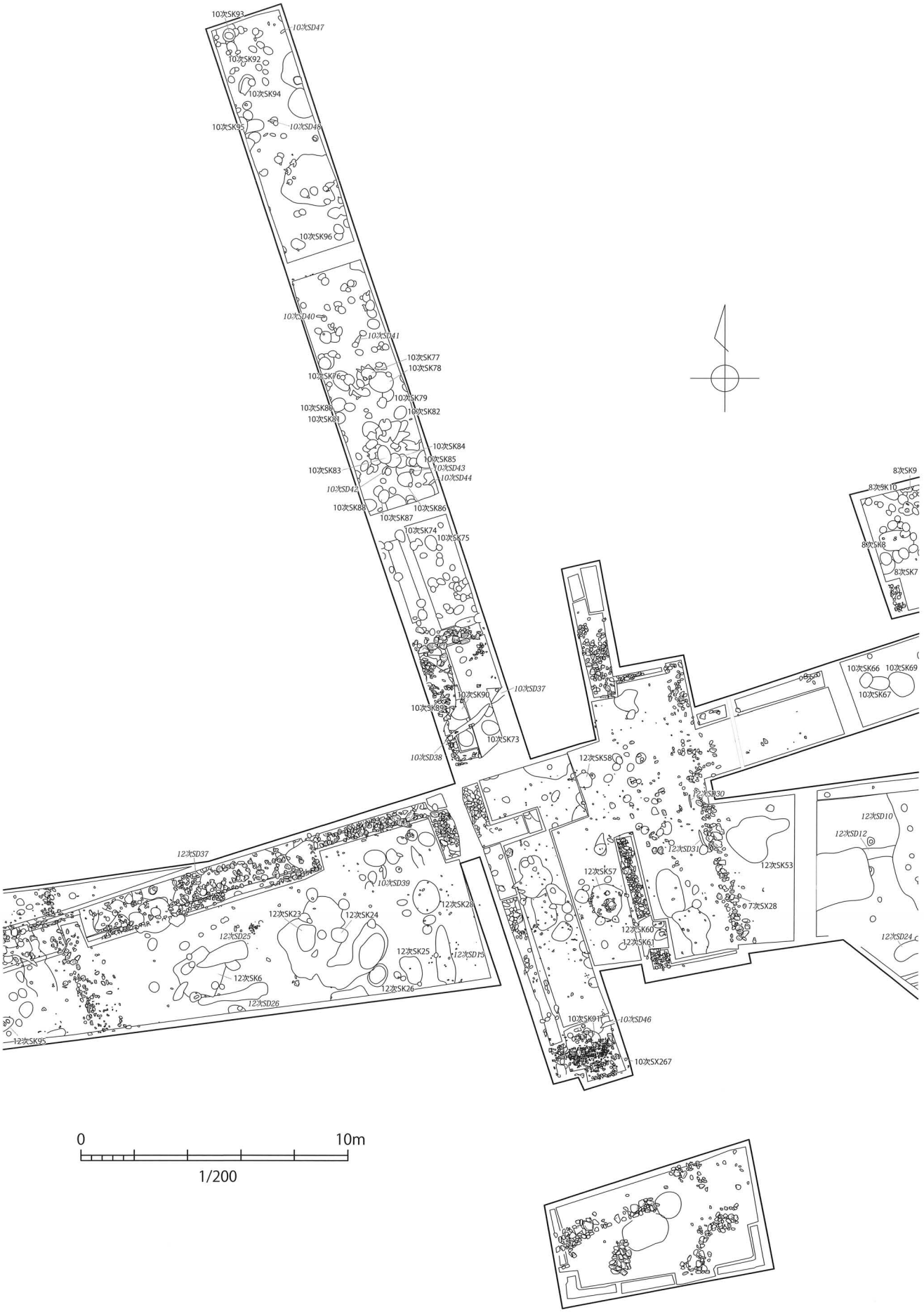


第29図　部分図８―西区北東部―

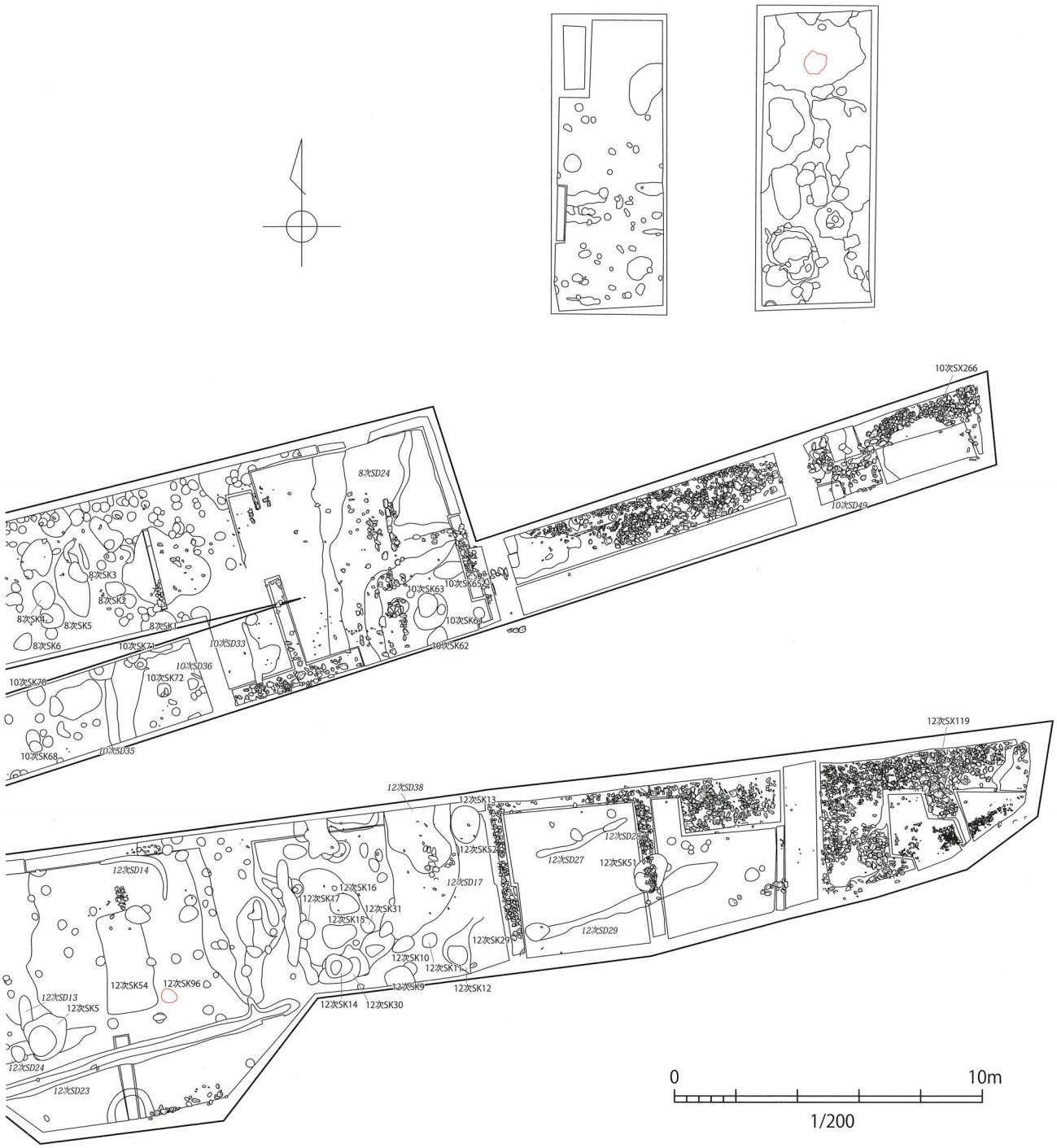
※　赤線は鍛冶炉

第30図　部分図９―西区南西部―

第31図　部分図10―西区南西中央部―

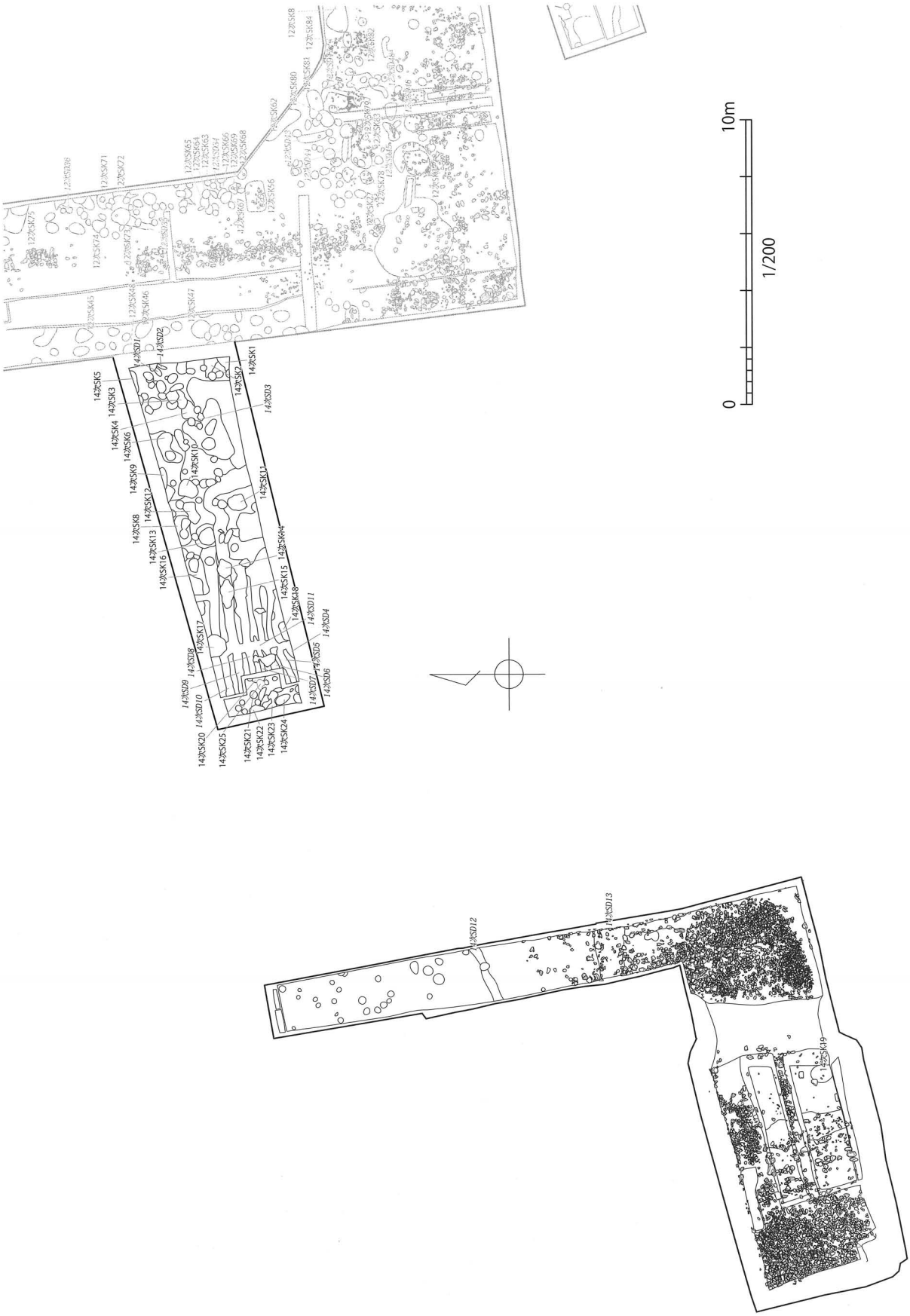


第32図　部分図11—西区南東中央部—



※　赤線は鍛冶炉

第33図　部分図12―西区南東部―



第34図　部分図13―南西区―

第３節　中世の検出遺構・出土遺物

１．検出遺構の概要

ここで述べる検出遺構は、第１節でも述べたように検出した平面形で種類分けをしたものである。土坑状の形状をしながらも、やや不整形なものについてはその他の遺構（SX）として計測している。また、検出遺構数については、明らかな近世～現代の遺構を除いた数字である。上面から掘り込まれた近世遺構が存在する可能性は否定できず、誤測も多分に含まれるかもしれないが、ここでは中世の検出遺構として報告する。

なお、第６次調査以前の範囲確認調査については、遺構を検出しているものの、非常に断片的なものであり、ここでは数量は省略する。

第７次調査のA区でその他の遺構（SX）として礫敷遺構が１箇所、B区で土坑５基、第８次調査のG区で土坑10基、I区で土坑１基を検出した。I区の土坑は墓と考えられる。

第10次調査では、土坑（SK）111基、溝状遺構（SD）55条、ピット893基、その他の遺構（SX）として礫敷遺構２箇所を含む266基を検出した。鍛冶炉や鉄滓廃棄土坑などの鍛冶関連遺構、溝状遺構には区画遺構と考えられるものが含まれる。また、礫敷遺構２箇所のうち１箇所は道路跡である。

第11次調査では、土坑（SK）19基、溝状遺構（SD）48条、ピット306基、その他の遺構（SX）77基を検出した。鍛冶炉などの鍛冶関連遺構、区画溝と考えられる溝状遺構を含む。

第12次調査では、土坑（SK）98基、溝状遺構（SD）56条、ピット722基、その他の遺構（SX）が礫敷遺構１箇所を含む119基を検出した。鍛冶炉などの鍛冶関連遺構、区画遺構として溝状遺構のほか石列が確認された。

第14次調査では、土坑（SK）25基、溝状遺構（SD）13条、ピット94基、その他の遺構（SX）が礫敷遺構１箇所を含む22基を検出した。この他、畑作を窺わせる畝状遺構が検出されている。

遺構密度は南部が密で、北側に向かって疎になる傾向にある。西区西端のグリッド１ラインは全体的に遺構面が浅く、中ほどに位置するG１グリッドでは、耕作土を除去した段階で遺構面に至る。

２．遺構

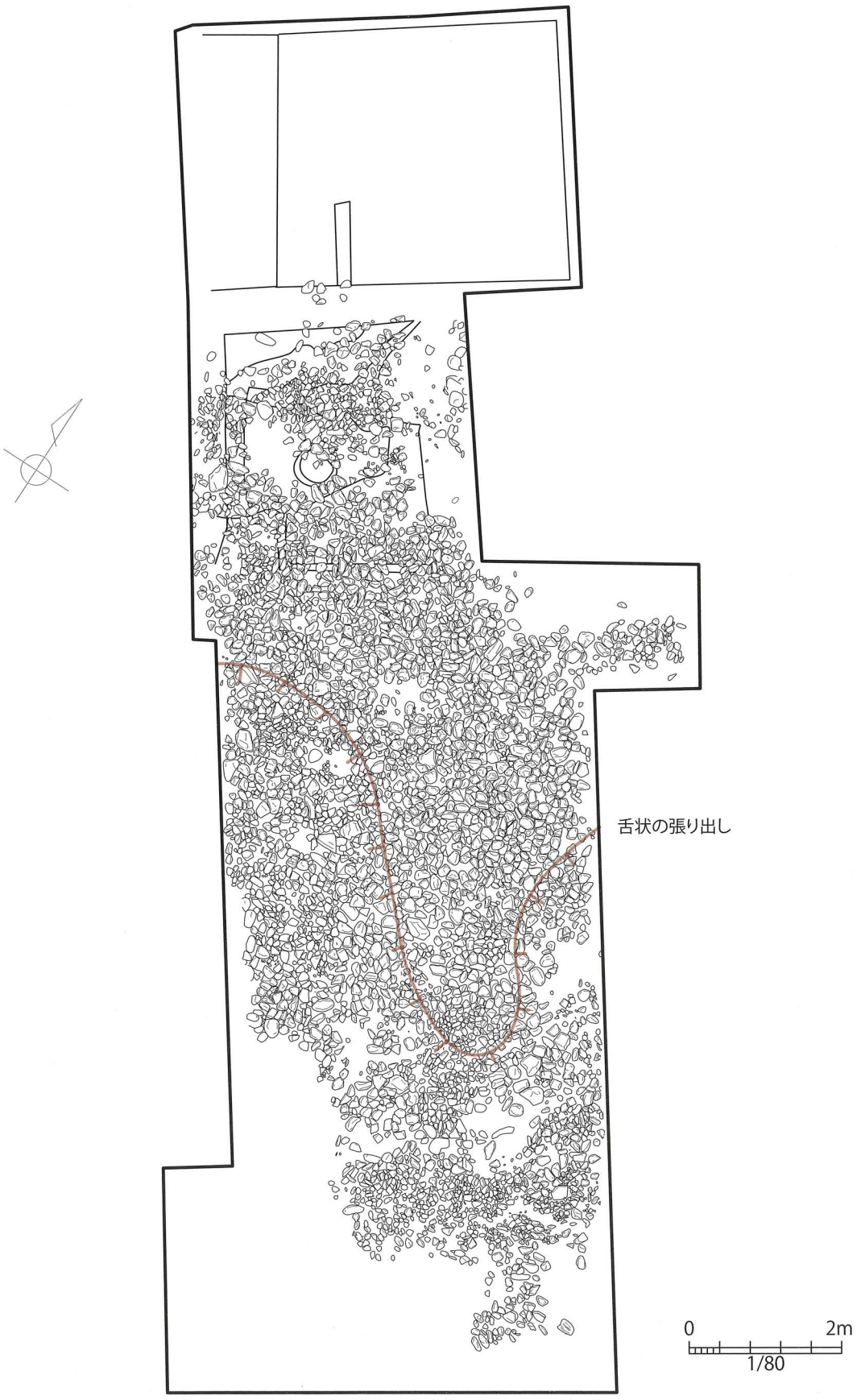
礫敷き遺構

ここで述べる礫敷き遺構は、船着き場と考えられる港湾施設としての礫敷き遺構である。遺跡の南部、汀線沿いの東端、南北中央道路付近、西端の３地点において計５箇所の礫敷き遺構が確認された。

７次SX１（第23図・第35図）

〔位置〕東区南東部のA区で検出した。X＝－144,615、Y＝－30,140周辺に位置する。

〔形態・規模〕直径３～40cm程の角礫や円礫で構成されるが、15cm前後の円礫が多数を占める。遺構は全体的には北から南に向かって緩やかに傾斜するが、中央部は幅1.4mで南に向かって舌状に張り出し、その両側が北から南に向かって傾斜角10°で下がっていく。北端の標高は0.3m、南端では－0.8m、遺構北端から南端までは水平距離で14mを測る。調査区南側でSX１埋没後の近世期の道路状に礫が敷き詰められた遺構が検出いるが、上述の舌状張り出しにより、調査区中央部でこの道路状遺構と交錯する。交錯周辺では直径２～３cmの円礫

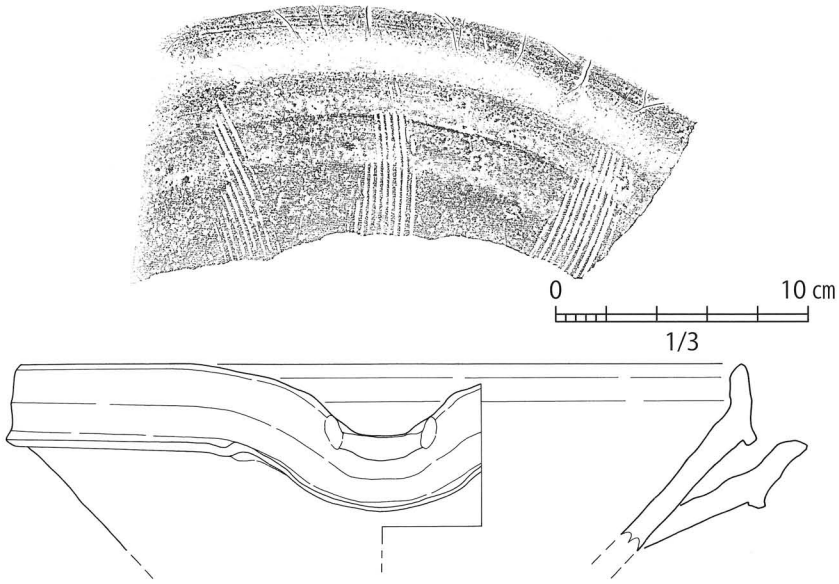


第35図　７次SX１遺構平面図

が目立ち、道路状遺構に伴うものと考えられたが、両遺構の礫の明確な違いの認められず、レベル的に区別ができた調査区西壁沿いを除き、調査において近世期道路状遺構の除去は行っていない。

〔堆積土〕水面上に位置する北部は灰白色の細砂からなる砂質土、水面下にあたる南部は黒褐色を主体とする砂質土に覆われていた。

〔出土遺物〕礫にはまり込む形で備前擂鉢1点が出土している。体部は直線的に開き、口縁部を上下に肥厚させて口縁帯を形成する。備前焼Ⅳ B期に比定される。



第36図　7次SX１出土遺物実測図

〔時期〕15世紀後半以降に機能したものと考えられる。

10次SX265（第23図・第37図）

〔位置〕東区南部の33Gで検出した。X＝－144,630、Y＝－30,168周辺に位置する。

〔形態・規模〕直径６～10cmの円礫で構成されるが、これに加えて遺構北端から南へ5.3m付近から南では２～３cmの円礫、玉砂利の割合が増加する。礫敷き遺構の末端と考えられるが自然の河原ともとれる様相を呈しており、判然としない。遺構は北端からこの礫の変化付近までは傾斜角10°で緩やかに下がるが、これを境に南に向かっては傾斜角30°と急な落ち込みを見せる。北部の標高は0.2～0.35mを測る。砂質の堆積土と常に湧水があいまって壁の崩落などがあり、遺構の南端の確認には至っていない。また、東側の７次SX１との間について発掘は行っていないものの、第４次調査時に、東西およそ40m間において、ピンポールを地面に差し込んでの地表下の礫の広がり確認を1mピッチで行い、７次SX１～10次SX265間は礫が連続していると推定された。

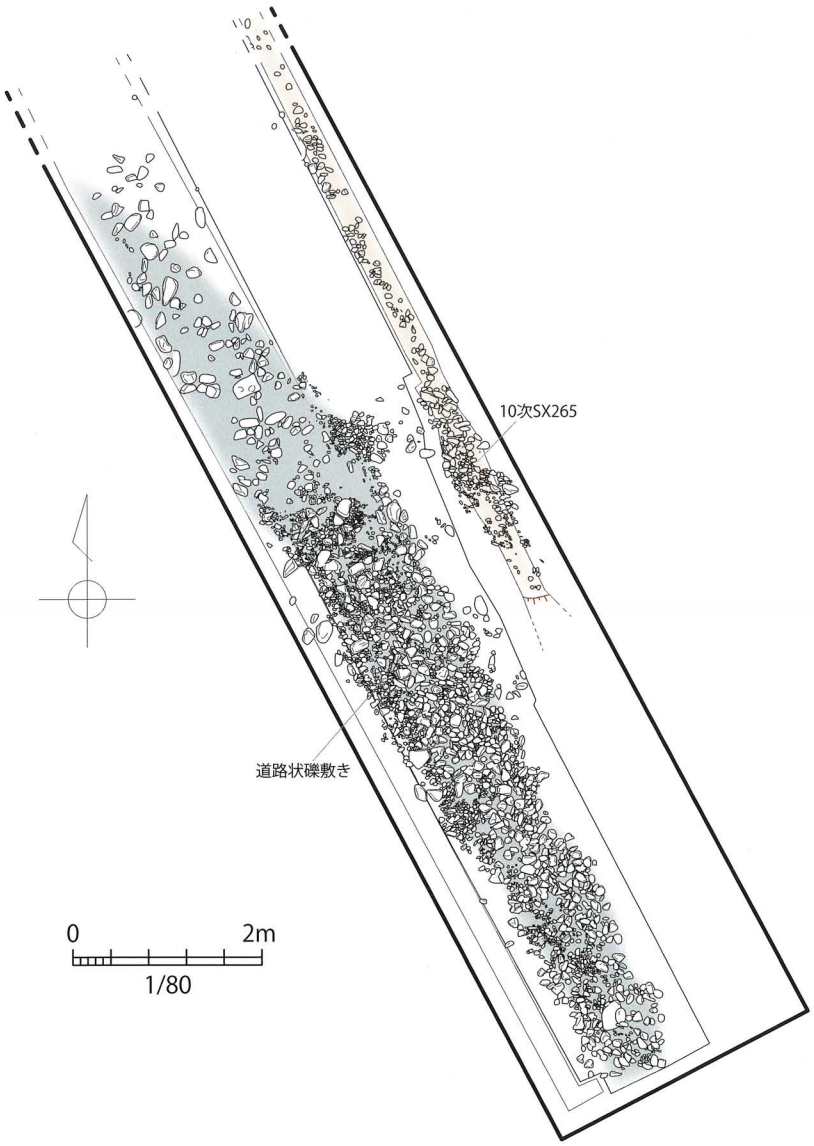
なお、SX265の上部にはオリーブ黒色の粘質土、砂質土の互層堆積（厚さ20cm）を挟んで道路状の礫敷き遺構が存在する。道路状遺構直上には、現代水田床土である灰黄色土が堆積しており、この灰黄色土中からは中世、近世の陶磁器が出土する。中世遺構との断定ができないため、別に項を設けての詳細報告は省略するが、概要は次のとおりである。

径２～20cmの円礫で構成され、西辺のみ１～２cmの玉砂利のまとまりが認められる。幅0.8～1mで、調査区南端で遺構の南端となる。南端から北へ８mほど調査区と並列するが、

SX265の落ち込み変化ライン辺りから西に向かって緩やかに曲がり調査区外へと続く。傾斜はなく、ほぼ平坦である。

〔堆積土〕水面上に位置する北部は細砂が混じる黒褐色粘質土、水面下にあたる南部は黒色粘質土が厚く堆積する。

〔時期〕遺物がないため単独で時期を検討するのは困難であるが、7次SX1と同一の礫敷き遺構と判断されることから15世紀後半と考えられる。

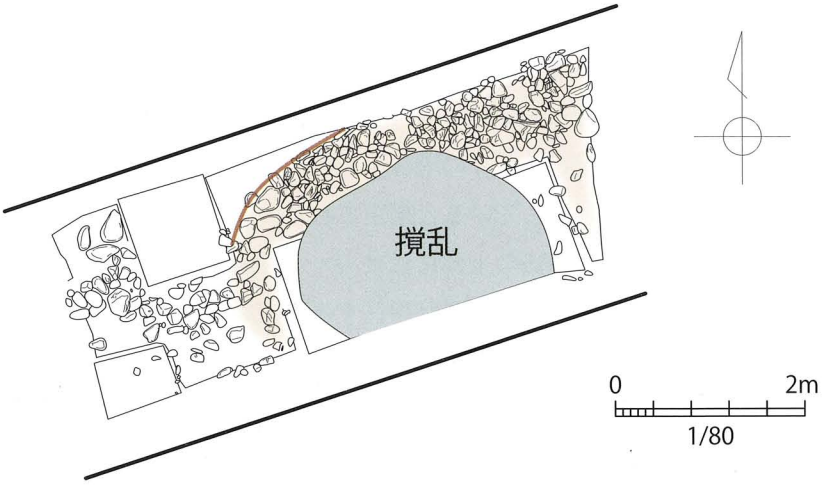


第37図　10次SX265遺構平面図

10次SX266（第33図・第38図）

〔位置〕西区の11Gで検出した。X＝－144,637、Y＝－30,236周辺に位置する。

〔形態・規模〕直径8～30cmの円礫、角礫で構成されるが、円礫が大半を占める。遺構北端は緩やかな円弧を描く。北東部は調査区外であるが、南北中央道路を挟んだ東隣の12Gでは確認されず、西部は礫は見られるものの面として一連の遺構とは認められないことから、最大でも8mほどと比較的東西幅は狭い。北端から南へ1.5m



第38図　10次SX266遺構平面図

幅、北から南に向かって緩やかに下がる様子が確認されたが、中央部が現代の撹乱を受けており不詳である。北端の標高は0.7mを測る。

〔堆積土〕にぶい黄褐色土が堆積する。Ⅳ層相当。鉄滓が混じる。

〔時期〕遺物がないため単独で時期を検討するのは困難であるが、周辺の出土遺物及び直上の埋土出土遺物を勘案し、15世紀中頃以降のものと考えられる。

12次SX119（第33図・第39図）

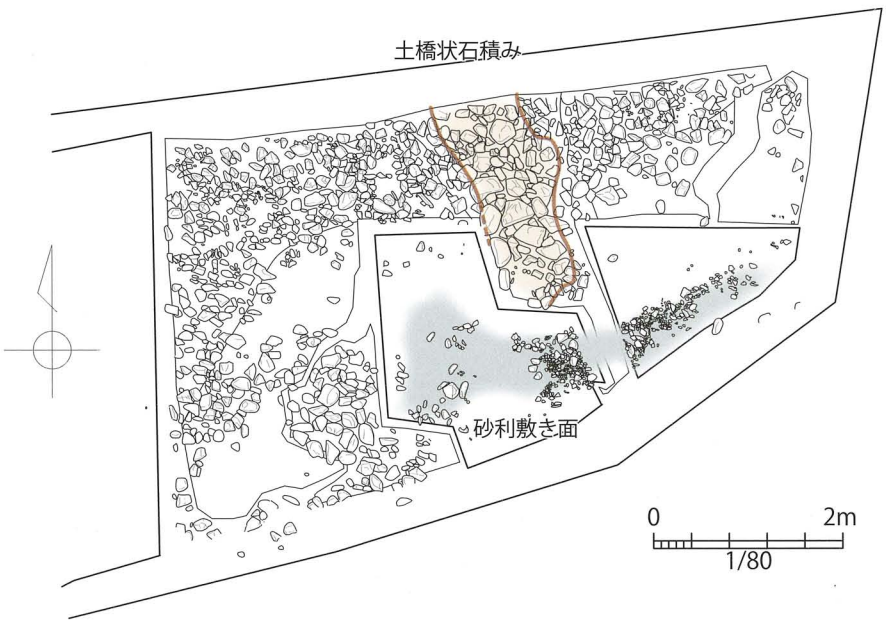
〔位置〕西区南部のK11～J12グリッドで検出した。X＝－144,650～－144,655、Y＝－30,250～－30,232に位置する。

〔形態・規模〕直径５～30cmの円礫、角礫で構成される。東西長16mにわたって確認されたが、K12グリッドで確認された土橋状石積み部を境に、東側では直径10～20cmの円礫が多用され、西側では直径５～15cmの角礫の占める割合が高い。また、同じく以西は礫密度がやや疎であり、次第に自然堆積との区別が不明瞭となる。遺構北端、南端は調査区外となるが、検出端の標高は、北辺で０m前後、南端で－0.2m、土橋状石積みの上面標高が0.2mを測る。遺構は北から南向かって傾斜角６～10°で緩やかに下がる。

土橋状石積みは、礫敷き遺構を構成する要素の一つと考えられるものである。整然と積み上げられたものではないものの、20～30cmの比較的大型の円礫、角礫を中心に断面台形に近い形で積み上げられている。幅75cm、調査区中央で南端を確認し、検出長は2.2mを測る。中に転用品と考えられる五輪塔の火輪部と見られる石材を含んでいる。

〔堆積土〕暗青灰色の粘性土、砂が堆積する。Ⅴ層相当。

〔時期〕五輪塔火輪は形状から室町時代の製作と推定される。層位的に10次SX266の下層に位置すると考えらえることから、15世紀中頃以前の可能性がある。



第39図　12次SX119遺構平面図

14次SX22（第34図・第40図）

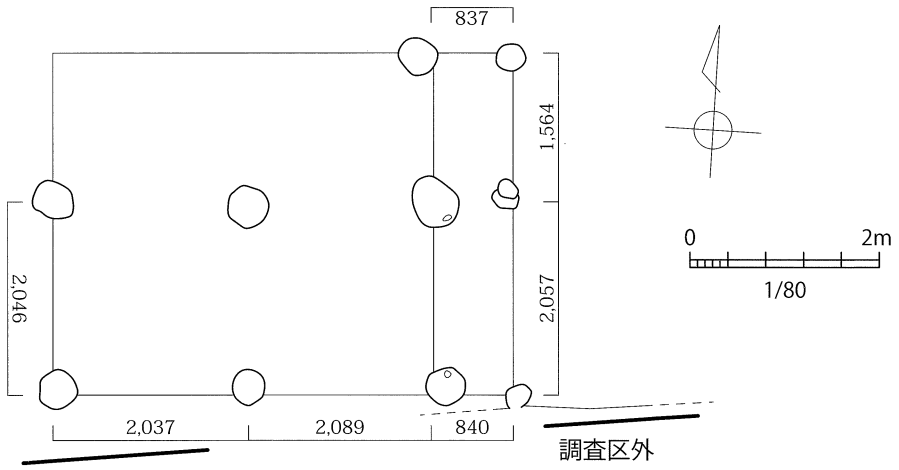
〔位置〕西区南西部のⅠ区で検出した。X＝－144,675、Y＝－30,367周辺に位置する。

〔形態・規模〕直径５～30cmの円礫、角礫で構成されるが、10cm前後の円礫が大半を占める。一部撹乱により途絶えるものの、調査区西端の中須西原遺跡で確認されている礫敷き１に続いていく。北から南に向かって緩やかに傾斜しながら下がり、南端は調査区外へ続いていく。

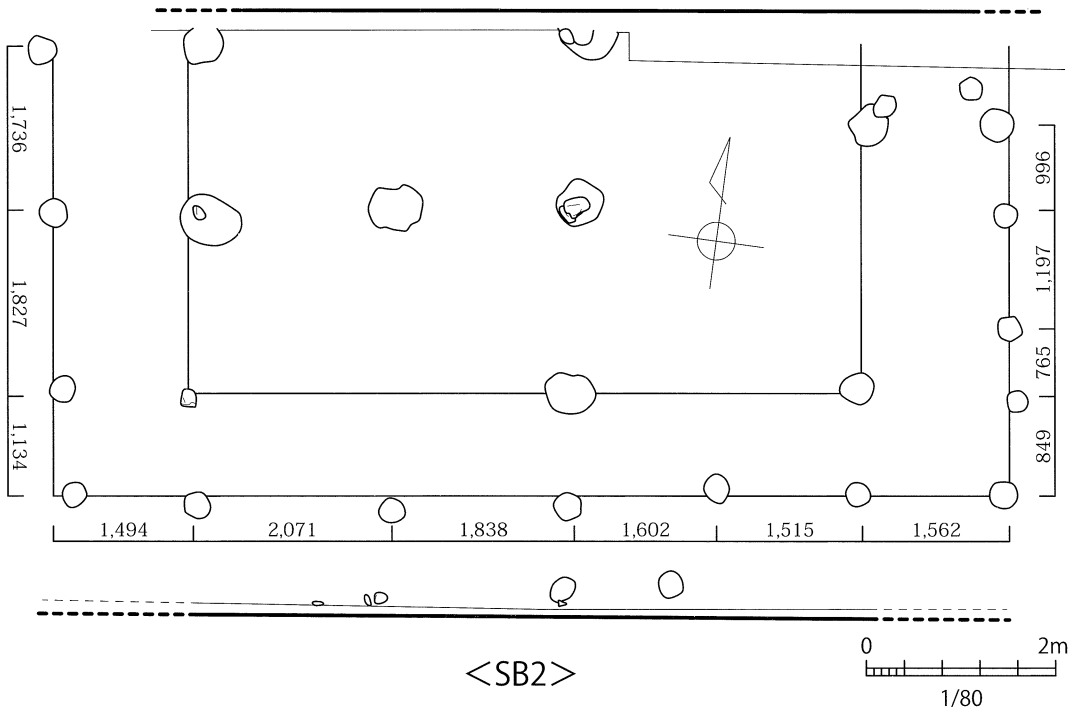
〔堆積土〕黄色砂と浅黄色砂、黄灰色粘質土が互層状に堆積する。

〔時期〕堆積土中から備前焼ⅣA期の擂鉢、龍泉窯系青磁碗D類が出土している。また、隣接する中須西原遺跡の礫敷き１が15世紀後半以前の構築と推定されていることから、15世紀後半以前に比定される。

第40図　14次SX22遺構平面図



＜SB1＞



＜SB2＞

第41図　SB１・SB２平面図

掘立柱建物跡

柱穴状のピットは、８次調査以降、2000基以上が確認されており、多くの建築活動があったことが推定できるが、掘立柱建物跡として復元できたものは第11次・12次調査の２棟である。東西に細長い調査区の形のため、完全な姿で復元できた建物跡はなく、調査区内に収まらずに北側あるいは南側にはみ出す。

SB１（第27図・第41図）

〔位置〕西区中部の西端、Ｇ３グリッド、X＝－144,615～－144,610、Y＝－30,326～－30,321に位置する。

〔規模〕建物東側の一辺に庇が付く。母屋の規模は桁行4.1m×梁間3.6mで、２間×２間、面積は15m^{2}を測る。柱間隔は200～210cmと比較的広い。東面に付く庇の柱穴は母屋から84cm離れ、柱間隔は母屋とほぼ同間隔である。南側は調査区の壁と接しており、南側へさらに拡張する可能性がある。

〔方位〕N－４°－Wの南北棟である。

〔時期〕遺物がないため単独で時期を検討するのは困難であるが、周辺の遺構や出土遺物状況、柱間が広いという特徴などから12世紀後半～13世紀前後と考えられる。

SB２（第22図・第41図）

〔位置〕東区北部の東端、Ｅ19グリッド、X＝－144,593～－144,588、Y＝－30,172～－30,160に位置する。

〔規模〕建物北側を除く三辺に庇が付く。母屋の規模は桁行7.0m×梁間3.6mで、３間×２間、面積は25m^{2}を測る。柱穴が確認できなかった箇所もあるが、柱間隔は170～310cmを測り、東側で広い。庇の柱穴は母屋から85～150cm離れ、柱間隔は80～200cm、西側では母屋と同間隔であるが、東側は母屋の柱穴間の半間間隔で確認された。母屋、庇ともに西側と東側で間隔が異なっており、３間×２間の東西棟を想定したが、あるいは２間四方規模の隣接する２棟の南北棟も検討する必要があろう。北側は調査区の壁と接しており、母屋は北側へさらに拡張し、庇も４面に廻る可能性がある。

〔方位〕N－82°－Ｅの東西棟である。

〔時期〕遺物がないため単独で時期を検討するのは困難であるが、周辺の遺構や出土遺物状況から15世紀後半～16世紀前半が想定される。

区画遺構

（１）溝状遺構

多くの溝状遺構（SD）が検出されたが、区画遺構と推測されるものが含まれる。ここでは、この区画遺構と考えられる溝状遺構のうち代表的なものについて記述する。

11次SD23（第28図・第42図）

〔位置〕西区中部の中央、Ｆ７グリッド、X＝－144,606、Y＝－30,284に位置する。

〔形態・規模〕幅３～４m、深さは南端で0.2mを測る。断面形状は逆蒲鉾状を呈するが、両側がわずかに窪んでいることから、この溝状遺構は道路跡と思われる。西側は、11次SD27と接する。

〔方位〕N－８°－W。

〔時期〕埋土中から、瀬戸美濃・稜皿や土師質土器・皿、瓦質土器・鍋が出土している。これらから、16世紀中頃以前と想定される。

11次SD24（第27図・第42図）

〔位置〕西区中部の中央、F４・F５・G４・G５グリッド、X＝－144,610、Y＝－30,310周辺に位置する。

〔形態・規模〕幅５～5.2m、深さは0.1～0.15mを測る。断面形状は平坦部分もあるものの、全体的に不整形である。東側は、11次SD27と接する。

〔方位〕N－２°－W。

〔時期〕埋土中から、越前・甕や備前・擂鉢などが出土しているが、時期判断可能な遺物は出土していない。検出面上、11次SD27との切り合い関係が認められず、一連・同一時期のものと判断されることから、14世紀代が想定される。

11次SD27（第27図・第28図・第42図）

〔位置〕西区中部の中央、F５～F７グリッド、X＝－144,608～－144,606、Y＝－30,306～－30,285に位置する。

〔形態・規模〕幅0.7～1.9m、深さ及び断面形状は不明である。ピットや不整形遺構が重複する。東側で11次SD24、西側で11次SD23と接する。

〔方位〕N－83°－E。

〔時期〕埋土中から、越前・甕や土師質土器片などが出土している。時期判断可能な遺物が少ないが、14世紀代としておきたい。

11次SD29（第28図・第42図）

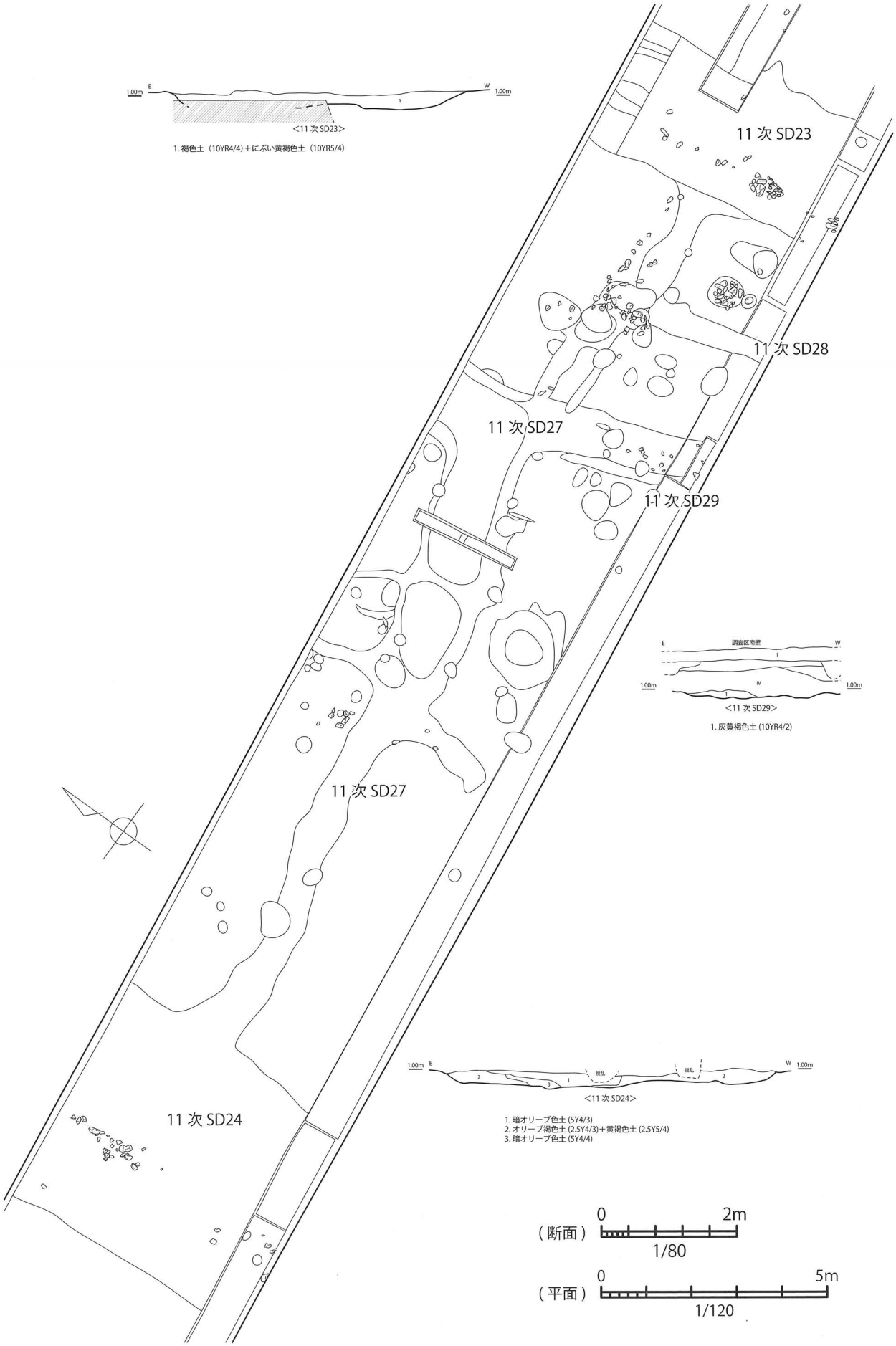
〔位置〕西区中部の中央、F６グリッド、X＝－144,608、Y＝－30,290に位置する。

〔形態・規模〕幅１m、深さ0.1mを測る。断面は浅く窪んだ形状を呈するが、全体的に不整形で、西側の立ち上がりは不明瞭である。11次SD27と交差する。

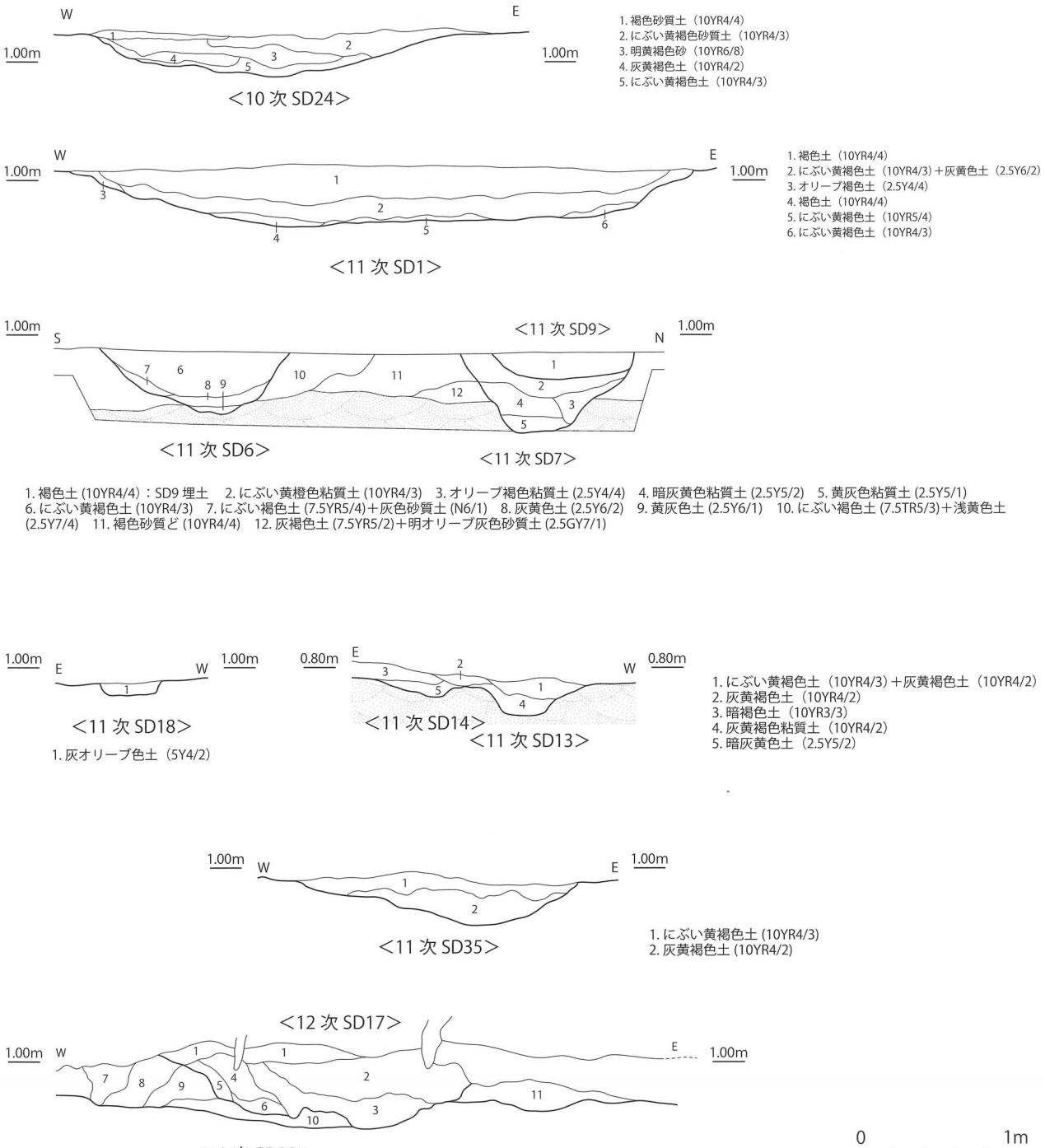
〔方位〕N－21°－W。

〔時期〕出土遺物がないため単独での時期判断が困難であるが、11次SD27と接続するものと判断されることから、14世紀代が想定される。

この他、平面図は省略するが、道路の可能性がある溝状遺構の断面図を第40図に紹介する。



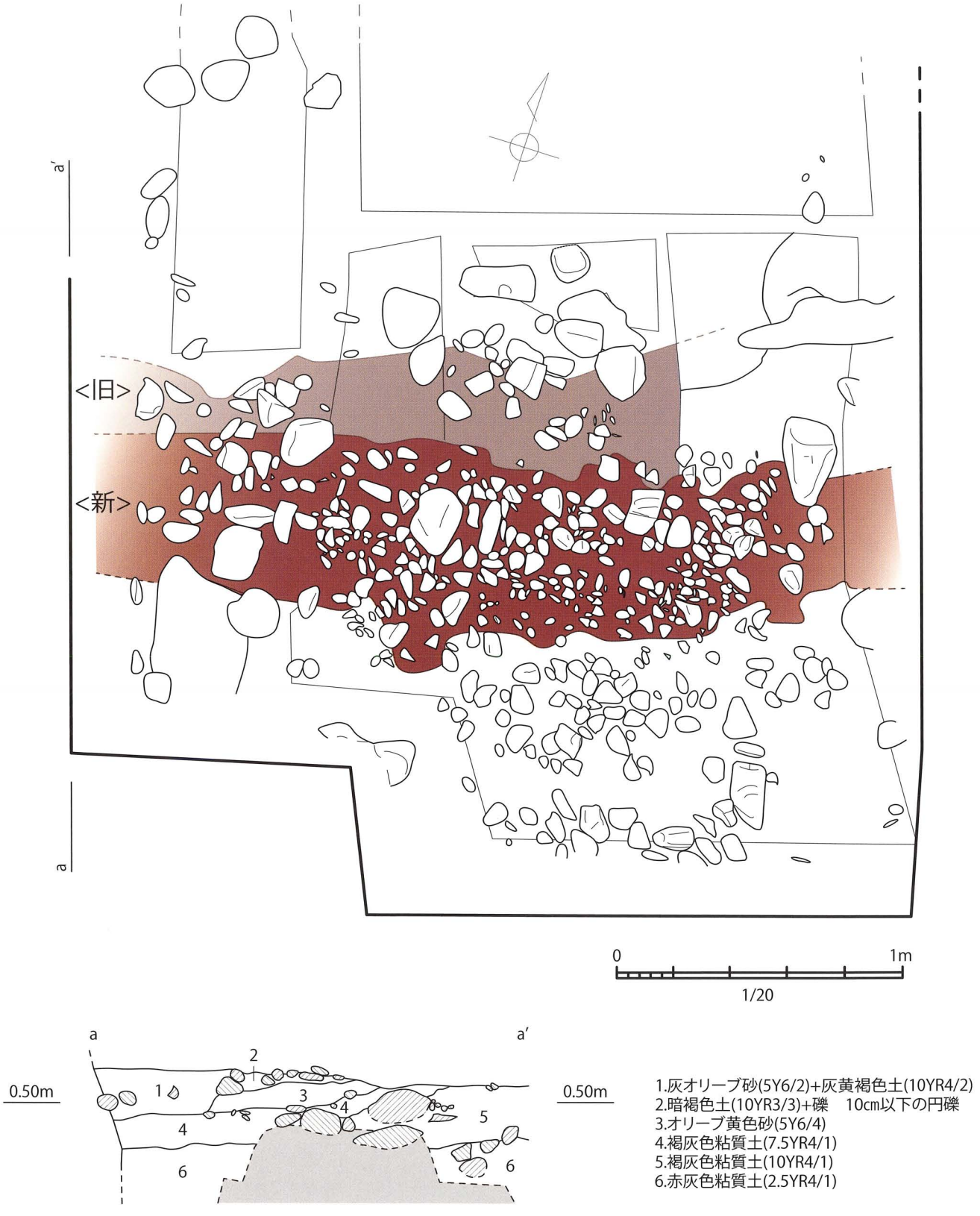
第42図　11次SD23～11次SD29平・断面図



第43図　溝状遺構（SD）土層図

（2）礫敷き遺構

ここで述べる礫敷き遺構とは、道路遺構である。



第44図　10次SX267平面図

10次SX267（第32図・第44図）

〔位置〕西区南部の26G、X＝－144,662、Y＝－30,278に位置する。

〔形態・規模〕幅0.5m、検出長2.5mを測る。東西端はそれぞれ調査区外に続く。長径３～20cmの円礫、角礫で構成されるが、10cm前後の円礫が大半を占める。断面形状はオリーブ砂層の上に、中央部がやや膨らんだ蒲鉾状を呈する。この遺構の北側で、検出幅35cmを測る異なる礫敷き遺構が検出されたが、SX267改修前の痕跡と考えられる。

〔方位〕N－71°－E。

〔時期〕時期の特定はできなかったが、16世紀代遺構面の下層に位置することから、16世紀以前としておく。

（３）その他

区画に関わる遺構として、上記２種遺構のほか、石列２列がある。検出はしながらも、現地調査時点では区画遺構としての認識はしていなかったものであるが、ここでは可能性のあるものとして提示しておく。

７次SX28（第32図）

〔位置〕西区南部の中央付近に設定したH区、X＝－144,648～－144,658、Y＝－30,275～－30,272に位置する。

〔形態・規模〕検出長7.4mを測る。径10～27cmの円礫、角礫で構成される。1.4～1.5m間隔でピット状に礫が抜けている箇所が看取され、柱が存在していた可能性がある。築地塀の基礎構造が想定される。

〔方位〕N－15°－W。

〔時期〕周辺の遺構や出土遺物状況から16世紀が想定される。

12次SX120（第30図）

〔位置〕西区西部のH～J１グリッド、X＝－144,626～－144,644、Y＝－30,348～－30,344に位置する。

〔形態・規模〕長さ23.1mを測る。径７～25cmの円礫、角礫で構成されるが、角礫が大半を占める。築地塀の基礎構造、間垣状の遺構などが想定される。

〔方位〕N－11°－W。

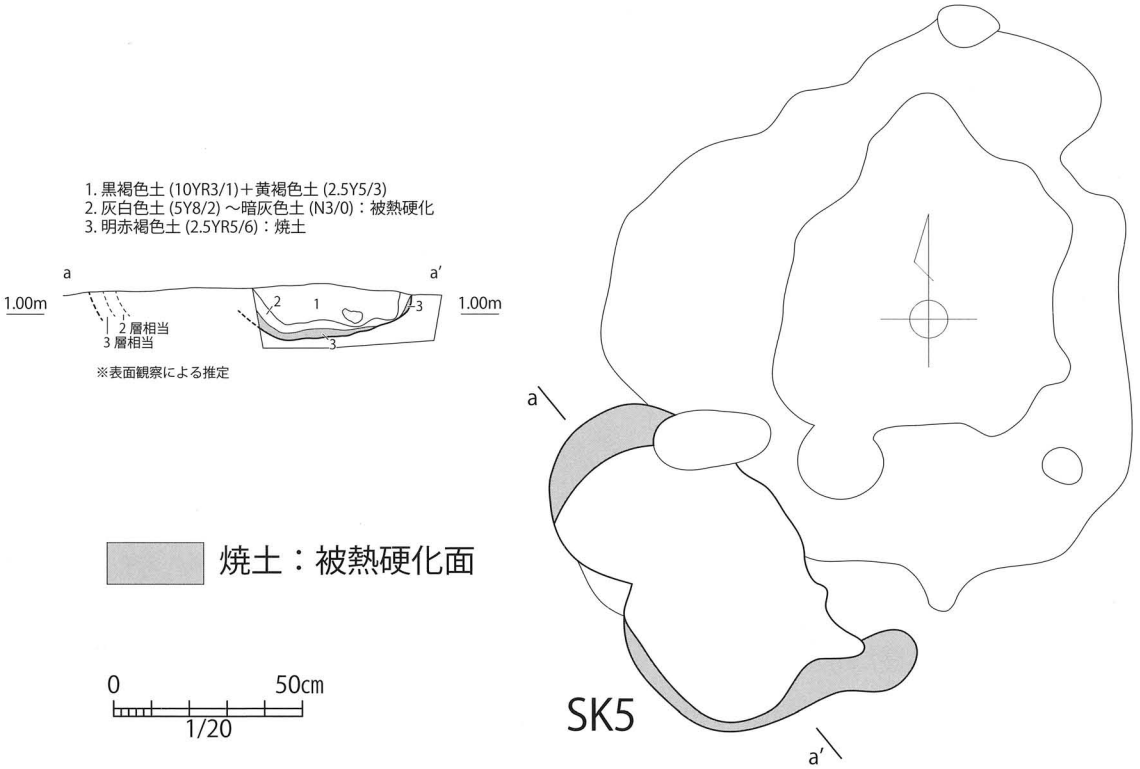
〔時期〕不明。

土坑

7次SK５（第24図・第45図）

〔位置〕東区北部のＢ区、Ｘ＝－144,607、Ｙ＝－30,211に位置する。

〔形態・規模〕直径0.4m、深さ0.3mを測る不正円形。周囲及び底部が赤く被熱硬化しており、鍛冶炉である。表面観察により、SK５の北側に隣接して、別の鍛冶炉が存在すると考えられる。



第45図　７次SK５平・断面図

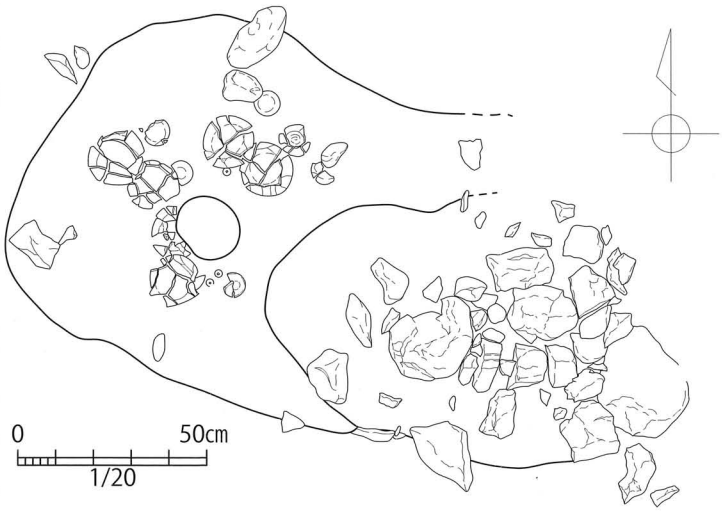
8次SK11（第31図・第46図）

〔位置〕西区南部のＩ区、Ｘ＝－144,660、Ｙ＝－30,317に位置する。

〔形態・規模〕南東部を８次SX５によって切られる。長径は検出長0.89m、短径0.86mを測る隅丸長方形と考えられる土坑墓である。遺構面と埋土に土色、土質の際が認められず、本来の掘り方は不明である。材木とみられる木片が出土しており、本来は木棺が納められていた可能性がある。検出範囲中央部には後世のものと考えられるピット１基が存在する。

〔堆積土〕不明。

〔出土遺物〕口径11～12cmの土師質土器坏が６枚、口径７cmの土師質土器小皿が５枚出土している（実測図は未掲載）。坏と小皿各１枚を１セットとして埋葬



第46図　８次SK11遺構図

されたことが看取されることから、ピットによって抜き取られた部分にも小皿が１枚存在していたと推定され、本来坏と小皿の６セットが埋葬されていたものと考えられる。このほか、永楽通宝２枚、太平通宝（？）１枚、元豊通宝１枚、聖宋元宝１枚、天聖元宝１枚、銘不明１枚の計７枚の銭貨が出土している。

第10表　第８次調査　SK土坑計測表

遺構名	X	Y	検出レベル	グリッド	平面形	長径	短径	備考
SK1	−144644.61	−30261.65	0.980	G区	楕円形	1.16	0.49以上	
SK2	−144643.09	−30262.76	1.060	G区	不整楕円形	0.68	0.50	
SK3	−144642.85	−30264.02	1.080	G区	不整楕円形	0.76	0.44	
SK4	−144643.36	−30265.19	1.070	G区	楕円形	0.95	0.70	
SK5	−144643.78	−30264.53	1.090	G区	隅丸方形	0.92	0.82	
SK6	−144645.10	−30265.80	1.100	G区	不整楕円形	0.69	0.57	
SK7	−144643.91	−30267.09	1.055	G区	楕円形	0.64	0.52	
SK8	−144643.58	−30266.80	1.050	G区	不整楕円形	1.33	0.79	
SK9	−144641.14	−30266.37	1.050	G区	（隅丸方形）	0.26以上	0.41	
SK10	−144641.32	−30267.02	1.055	G区	楕円形	0.67	0.33	
SK11	−144660.98	−30317.51	0.890	I区	（隅丸方形）	0.89以上	0.86	8次SX５に切られる。墓

第11表　第10次調査　SK土坑計測表

遺構名	X	Y	検出レベル	グリッド	平面形	長径	短径	備考
SK1	−144606.67	−30143.46	0.915	20G	楕円形	0.50	0.34	
SK2	−144607.00	−30146.42	0.970	34G	不整楕円形	0.83	0.32	
SK3	−144603.28	−30147.18	1.010	34G	（隅丸方形）	0.48以上	0.55	
SK4	−144591.64	−30157.10	0.810	35G	隅丸方形	0.66	0.54	
SK5	−144614.44	−30177.59	1.110	29G	（円形）	0.55	0.22以上	
SK6	−144614.77	−30162.72	1.085	19G	不整楕円形	0.68	0.56	
SK7	−144615.06	−30162.39	1.080	19G	楕円形	0.53	0.28	
SK8	−144613.22	−30163.53	1.055	19G	不整楕円形	0.40以上	0.41	
SK9	−144615.34	−30163.19	1.095	19G	不整楕円形	0.51	0.35	
SK10	−144614.53	−30161.13	1.055	19G	不整楕円形	0.58	0.34	
SK11	−144619.36	−30178.88	1.125	17G	不整楕円形	0.56	0.42	
SK12	−144619.05	−30179.08	1.130	17G	不整楕円形	0.37	0.30	
SK13	−144620.25	−30179.98	1.150	17G	円形	0.44	0.27	鍛冶炉
SK14	−144621.00	−30179.58	1.155	17G	不整楕円形	0.62	0.37	
SK15	−144620.55	−30179.99	1.160	17G	不整形	0.98	0.74	
SK16	−144621.10	−30180.80	1.140	17G	楕円形	0.55	0.42	
SK17	−144620.36	−30181.56	1.100	17G	不整楕円形	0.45	0.32	
SK18	−144619.93	−30180.72	1.115	17G	不整楕円形	0.51	0.39	
SK19	−144620.19	−30180.74	1.130	17G	不整円形	0.36	0.33	
SK20	−144620.11	−30182.76	1.115	17G				SK21・SK22に切られる
SK21	−144619.86	−30182.69	1.100	17G	不整円形	0.40	0.23	
SK22	−144620.08	−30183.30	1.115	17G	楕円形	0.51以上	0.43	
SK23	−144620.72	−30183.03	1.115	17G	不整楕円形	0.49	0.38	
SK24	−144620.86	−30182.43	1.110	17G	不整円形	0.38	0.32	
SK25	−144632.92	−30222.27	0.940	12G				壁に切られる
SK26	−144633.67	−30219.79	1.065	13G	楕円形	0.78	0.50	
SK27	−144630.58	−30213.55	1.000	13G	楕円形	0.63	0.43	
SK28	−144631.33	−30217.04	1.050	13G	楕円形	0.49	0.38	
SK29	−144628.42	−30207.69	1.035	14G	隅丸長方形	0.49	0.34	
SK30	−144629.53	−30206.57	1.030	14G	隅丸長方形	0.46	0.32	
SK31	−144629.81	−30206.91	1.025	14G	隅丸長方形	0.53	0.46	
SK32	−144629.48	−30207.31	1.020	14G	不整楕円形	0.64	0.54	
SK33	−144625.76	−30196.42	1.125	15G	楕円形	0.53	0.34	
SK34	−144624.06	−30194.56	1.200	15G	不整楕円形	0.83	0.47	
SK35	−144621.39	−30173.88	1.080	32G	楕円形	0.34以上	0.31	
SK36	−144621.98	−30174.84	1.020	32G	不整楕円形	0.53	0.31	
SK37	−144620.89	−30174.15	1.110	32G	（楕円）	0.37	0.17以上	
SK38	−144620.72	−30174.69	1.115	32G	不整楕円形	0.48	0.34	
SK39	−144620.58	−30175.14	1.130	32G	不整円形	0.55	0.47	
SK40	−144620.69	−30175.49	1.070	32G	不整楕円形	0.48	0.26	
SK41	−144621.34	−30175.00	1.100	32G	隅丸方形	0.42	0.39	
SK42	−144621.28	−30175.22	1.040	32G	楕円形	0.44	0.26	
SK43	−144621.58	−30175.63	1.070	32G	隅丸長方形	0.47	0.37	
SK44	−144620.51	−30174.36	1.120	32G	（隅丸方形）	0.49	0.27以上	

SK45	−144620.25	−30174.83	1.130	32G	（楕円）	0.49	0.28	
SK46	−144620.08	−30175.22	1.145	17G	不整楕円形	0.48	0.37	
SK47	−144619.42	−30175.57	1.185	17G	円形	0.39	0.36	
SK48	−144619.03	−30175.48	1.180	17G	不整円形	0.41	0.39	
SK49	−144618.62	−30175.46	1.155	17G	円形	0.59	0.51	鍛冶炉
SK50	−144618.94	−30176.10	1.150	17G	不整楕円形	0.49	0.39	
SK51	−144617.66	−30172.83	1.140	18G	楕円形	0.73	0.42	
SK52	−144617.57	−30171.54	1.125	18G	不整楕円形	0.96	0.61	
SK53	−144617.64	−30171.53	1.125	18G	不整楕円形	0.68	0.52	鍛冶炉
SK54	−144616.95	−30169.90	1.100	18G	楕円形	0.66	0.54	
SK55	−144617.97	−30170.27	1.120	18G	不整楕円形	0.58	0.44	
SK56	−144616.66	−30170.67	1.100	18G	不整円形	0.66	0.52	
SK57	−144617.44	−30167.72	1.155	18G	（円形）	0.41以上	0.30以上	鍛冶炉
SK58				18G	楕円形	0.51	0.28	
SK59	−144614.36	−30165.51	1.100	18G	円形	0.54	0.48	
SK60				18G	不整楕円形	0.91	0.61	
SK61	−144645.17	−30252.35	1.140	9G	楕円形	0.79	0.49	
SK62				18G	楕円形	0.72	0.57	
SK63	−144643.92	−30252.65	1.100	9G	隅丸長方形	0.79	0.67	
SK64	−144643.50	−30252.21	1.095	9G	不整楕円形	1.30	0.37	
SK65	−144642.73	−30251.22	1.055	9G	不整楕円形	0.96	0.57	
SK66	−144648.70	−30267.94	1.040	8G	不整楕円形	0.59	0.43	
SK67	−144648.70	−30267.94	1.040	8G	楕円形	0.79	0.48	
SK68	−144648.59	−30264.98	1.020	8G	隅丸方形	0.41	0.40	
SK69	−144648.44	−30265.30	1.005	8G	楕円形	0.55	0.46	
SK70	−144646.63	−30265.35	1.055	8G	不整楕円形	0.65	0.59	
SK71	−144645.58	−30262.13	1.025	8G	（円形）	0.42	0.22以上	
SK72	−144646.57	−30260.72	1.005	8G	不整円形	0.48	0.47	
SK73	−144650.25	−30281.67	0.980	22G	不整円形	0.64	0.58	
SK74	−144642.80	−30285.33	1.130	22G	隅丸長方形	0.48	0.38	
SK75	−144643.48	−30284.04	1.115	22G	楕円形	0.60	0.43	
SK76	−144636.92	−30287.30	1.130	23G	楕円形	0.85	0.57	
SK77	−144636.73	−30286.72	1.155	23G	不整楕円形	0.55	0.44	
SK78	−144636.86	−30286.25	1.170	23G	不整楕円形	0.91	0.75	
SK79	−144637.81	−30285.98	1.155	23G	不整円形	0.46	0.43	
SK80	−144638.05	−30287.36	1.130	23G	不整円形	0.55	0.52	
SK81	−144638.41	−30287.75	1.175	23G	（円形）	0.40	0.32以上	
SK82	−144638.12	−30285.36	1.150	23G	楕円形	0.52	0.44	
SK83	−144639.61	−30285.98	1.130	23G	不整楕円形	0.70	0.50	
SK84	−144639.94	−30285.69	1.130	23G	（隅丸方形）	0.59	0.54	
SK85	−144639.82	−30284.48	1.150	23G	（不整円形）	0.67	0.4以上	
SK86	−144641.14	−30285.08	1.125	23G	不整円形	0.59	0.53	
SK87	−144641.72	−30286.09	1.125	23G	楕円形	0.49	0.40以上	
SK88	−144641.66	−30286.69	1.125	23G	（楕円）	0.35以上	0.42	
SK89	−144649.33	−30284.03	0.830	22G	（楕円）	0.63	0.40以上	
SK90	−144649.16	−30283.10	0.840	22G	（楕円）	0.55以上	0.75	墓
SK91	−144661.94	−30277.94	0.995	26G	不整楕円形	0.56	0.45	
SK92	−144624.72	−30291.74	1.145	24G	隅丸長方形	0.53	0.30	
SK93	−144624.14	−30291.88	1.155	24G	不整楕円形	0.33	0.25	
SK94	−144626.03	−30290.90	1.155	24G	不整形	0.67	0.35	
SK95	−144627.23	−30291.36	1.155	24G	（不整楕円形）	0.64	0.24以上	
SK96	−144632.22	−30289.20	1.205	24G	不整楕円形	0.54	0.39	
SK97	−144633.42	−30220.63	0.885	13G	（楕円）	1.38	0.53以上	
SK98	−144631.73	−30219.54	0.850	13G	不整楕円形	1.34	0.96	
SK99	−144632.31	−30217.12	0.850	13G	楕円形	0.62	0.36	
SK100	−144630.95	−30216.97	0.870	13G	不整楕円形	0.54	0.43	
SK101	−144631.99	−30215.91	0.890	13G	不整楕円形	0.49	0.34	
SK102	−144626.53	−30203.63	0.860	14G	（楕円）	0.57	0.27以上	
SK103	−144623.67	−30193.85	1.020	15G				SK34に切られる
SK104	−144624.50	−30197.72	0.960	15G	（隅丸方形）	0.57	0.46以上	
SK105	−144625.55	−30197.38	0.950	15G	不整円形	0.81	0.72	
SK106	−144625.08	−30195.82	1.090	15G	不整形	0.65	0.39	鍛冶炉
SK107	−144633.23	−30223.67	0.830	12G	隅丸長方形	0.50	0.38	
SK108	−144658.94	−30301.24	0.810	4G	不整円形	0.64	0.58	
SK109	−144661.17	−30305.78	0.810	4G	不整円形	0.53	0.31	
SK110	−144624.61	−30196.12	1.050	15G	（楕円）	0.29	0.20	鍛冶炉
SK111	−144625.45	−30198.21	0.885	15G	不整楕円形	0.83	0.27	鉄滓廃棄土坑

第12表　第11次調査　SK土坑計測表

遺構名	X	Y	検出レベル	グリッド	平面形	長径	短径	備考
SK1	−144597.63	−30206.43	1.027	E15	円形	0.61	0.27	鍛冶炉

SK2	−144597.81	−30206.75	1.020	E15	楕円形	0.87	0.82
SK3	−144599.24	−30247.03	0.874	E11	楕円形	0.60	0.52
SK4	−144572.50	−30340.38	1.394	C1	不整円形	0.84	0.57
SK5	−144572.36	−30339.09	1.379	C2	不整円形	0.94	0.56
SK6	−144616.16	−30335.18	1.143	G2	（円形）	0.99	0.66以上
SK7	−144573.92	−30314.93	0.817	C4	隅丸長方形	0.71	0.62
SK8	−144606.50	−30288.70	0.919	F7	不整円形	0.72	0.61
SK9	−144606.69	−30288.81	0.911	F7	楕円形	0.95	0.62
SK10	−144607.14	−30288.48	0.934	F7	楕円形	1.04	0.63
SK11	−144608.95	−30286.83	0.960	F7	不整円形	0.83	0.74
SK12	−144608.87	−30286.18	0.953	F7	不整円形	1.02	0.68
SK13	−144609.23	−30281.30	0.922	F7	（長方形）	0.53	0.38
SK14	−144609.05	−30280.13	0.938	F7	不整円形	0.74	0.41
SK15	−144608.23	−30279.32	0.996	F8	不整円形	1.25	1.05
SK16	−144606.89	−30278.19	1.018	F8	不整円形	1.42	0.27
SK17	−144606.89	−30277.93	1.004	F8	不整円形	0.72	0.41
SK18	−144607.02	−30277.08	0.985	F8	不整円形	0.97	0.78
SK19	−144610.56	−30297.87	0.847	G6	楕円形	0.65	0.41

第13表　第12次調査　SK土坑計測表

遺構名	X	Y	検出レベル	グリッド	平面形	長径	短径	備考
SK1	−144607.38	−30148.30	1.128	F21	不整円形	1.42	1.16	
SK2	−144658.46	−30312.72	1.195	K4	隅丸長方形	0.69	0.54	
SK3	−144659.63	−30312.76	1.202	K4/L4	円形	0.79	0.69	
SK4	−144664.69	−30320.79	1.020	L3	不整円形	2.31	2.15	
SK5	−144657.57	−30265.10	1.127	K9	不整円形	1.04	0.90	
SK6	−144659.92	−30293.51	0.980	K6/L6	不整五角形	1.98	1.88	
SK7	−144664.21	−30339.65	1.170	L2	不整円形	1.00	0.92	
SK8	−144661.46	−30333.42	1.101	L2	不整楕円形	1.22	0.71	
SK9	−144656.24	−30253.66	1.189	K10	（隅丸長方形）	0.32以上	0.87	
SK10	−144655.05	−30253.51	1.174	K10	不整楕円形	0.76	0.48	
SK11	−144654.49	−30252.30	1.168	K10	楕円形	0.61	0.43	
SK12	−144655.88	−30250.98	1.205	K10	（不整楕円形）	1.92	0.92以上	
SK13	−144651.21	−30251.57	1.177	K10	楕円形	1.21	0.94	
SK14	−144655.21	−30255.26	1.183	K10	不整円形	0.91	0.80	
SK15	−144654.22	−30255.07	1.190	K10	不整楕円形	1.13	0.84	
SK16	−144653.89	−30255.11	1.188	K10	楕円形	0.94	0.65	
SK17	−144654.10	−30256.21	1.175	K10	円形	0.65	0.57	
SK18	−144645.10	−30342.53	1.345	J1	不整円形	0.81	0.70	
SK19	−144647.66	−30342.35	1.346	J1	楕円形	1.26	0.99	
SK20	−144648.28	−30342.59	1.372	J1	不整円形	0.85	0.50	
SK21	−144648.13	−30342.35	1.354	J1	楕円形	1.28	0.99	
SK22	−144647.48	−30341.13	1.117	J1	円形	0.64以上	0.94	
SK23	−144658.67	−30288.85	0.921	K7	不整楕円形	1.03	0.85	
SK24	−144658.05	−30287.87	0.924	K7	円形	0.63	0.53	
SK25	−144658.86	−30284.87	0.955	K7/L7	不整楕円形	1.19	0.78	
SK26	−144659.32	−30286.29	0.914	K7/L7	楕円形	0.72	0.56	
SK27	−144648.05	−30341.67	1.377	J1	不整円形	0.54	0.50	
SK28	−144656.10	−30284.69	1.001	K6	楕円形	1.27	0.99	
SK29	−144655.88	−30250.98	1.207	K10	攪乱で不明	1.95		
SK30	−144655.86	−30255.89	1.117	K10	不整楕円形	1.44	0.68	
SK31	−144653.99	−30254.44	1.123	K10	不整方形	0.57	0.47	
SK32	−144620.10	−30350.38	1.319	H-1	不整円形	0.83	0.58	
SK33	−144619.33	−30346.67	1.312	G1	円形	0.55	0.43	
SK34	−144619.64	−30346.34	1.322	G1	円形	0.66	0.55	
SK35	−144577.11	−30350.68	1.352	C-1	方形	0.70	0.62	
SK36	−144575.80	−30349.82	1.332	C1	楕円形	1.30	0.76	
SK37	−144646.85	−30343.78	1.343	J1	楕円形	1.17	0.81	
SK38	−144647.07	−30345.95	1.381	J1	楕円形	1.05	0.92	
SK39	−144576.93	−30348.12	1.336	C1	不整円形	0.93	0.65	
SK40	−144578.41	−30348.92	1.324	C1	楕円形	0.80	0.51	
SK41	−144577.80	−30347.93	1.332	C1	不整円形	0.98	0.82	
SK42	−144641.35	−30346.42	1.342	J1	不整円形	0.84	0.63	
SK43	−144640.16	−30344.88	1.351	J1	不整円形	1.10	0.73	
SK44	−144635.18	−30344.76	1.291	I1	不整円形	1.15	0.98	
SK45	−144652.80	−30345.29	1.198	K1	不整円形	0.64	0.55	
SK46	−144654.88	−30344.73	1.171	K1	楕円形	0.80	0.47	
SK47	−144656.71	−30345.33	1.245	K1	円形	0.68	0.65	
SK48	−144653.86	−30345.89	1.181	K1	円形	0.60	0.35以上	
SK49	−144645.39	−30346.94	1.227	J1	隅丸方形	1.08以上	1.05	
SK50	−144641.83	−30344.83	1.206	J1	円形	0.66	0.63	

SK51	−144652.75	−30245.64	0.901	K11	楕円形	1.36	1.01	
SK52	−144652.45	−30252.36	0.945	K10	不整楕円形	1.36	0.94	
SK53	−144653.66	−30271.07	1.047	K8	不整楕円形	2.39	1.75	
SK54	−144657.10	−30262.21	0.848	K9	長方形	3.22	1.47	
SK55	−144661.50	−30308.49	1.026	L5	隅丸長方形	0.97	0.53	
SK56	−144658.47	−30339.87	1.226	K1	長方形	1.04	0.70	鉄滓廃棄土坑
SK57	−144657.36	−30277.88	1.090	K8	不整円形	1.40	1.28	
SK58	−144652.11	−30278.79	1.096	K8	不整円形	0.69	0.24	
SK59	−144658.27	−30301.02	0.755	K5	円形	0.59	0.50	
SK60	−144657.54	−30275.53	0.769	K8	円形	0.41	0.30	
SK61	−144658.13	−30275.38	0.784	K8	不整楕円形	0.53	0.42	
SK62	−144659.67	−30337.32	1.177	K2/L2	不整円形	1.59	0.36以上	
SK63	−144656.72	−30339.86	1.227	K2	円形	0.26	0.19	
SK64	−144656.66	−30340.23	1.230	K1	楕円形	0.36	0.26	
SK65	−144656.84	−30340.42	1.228	K1	不整円形	0.44	0.35	
SK66	−144657.30	−30340.47	1.216	K1	不整円形	0.41	0.31	
SK67	−144657.41	−30340.65	1.236	K1	楕円形	0.50	0.36	
SK68	−144658.09	−30339.40	1.241	K2	（方形）	0.25以上	0.38	
SK69	−144657.86	−30340.26	1.214	K1	不整円形	0.42	0.36	
SK70	−144648.69	−30340.99	1.138	J1	円形	0.94	0.46以上	
SK71	−144653.30	−30340.80	1.253	K1	楕円形	0.75	0.56	
SK72	−144653.56	−30340.91	1.247	K1	楕円形	0.74	0.66	
SK73	−144653.78	−30341.41	1.254	K1	不整円形	0.67	0.63	
SK74	−144653.03	−30341.68	1.217	K1	不整円形	0.51	0.46	
SK75	−144650.55	−30340.67	1.192	K1	不整円形	0.99	0.76	
SK76	−144656.64	−30301.22	0.915	K5	（楕円）	1.28	0.43以上	
SK77	−144662.31	−30340.46	0.944	L2	楕円形	0.42	0.26	
SK78	−144662.62	−30339.83	0.926	L2	楕円形	0.52	0.28	
SK79	−144661.47	−30338.10	1.043	L2	不整円形	0.55	0.47	
SK80	−144660.74	−30337.51	1.086	L2	不整円形	0.68	0.47	
SK81	−144660.55	−30337.67	1.107	L2	不整楕円形	0.99	0.45	
SK82	−144662.06	−30335.80	0.984	L2	不整円形	0.39	0.28	
SK83	−144663.55	−30338.29	0.871	L2	不整楕円形	0.79	0.42	
SK84	−144661.78	−30335.18	0.989	L2	楕円形	0.55	0.27	
SK85	−144645.94	−30344.50	1.036	J1	円形	0.46	0.34	
SK86	−144645.55	−30344.39	1.027	J1	楕円形	0.88	0.69	
SK87	−144647.58	−30344.01	1.060	J1	楕円形	1.56	1.11	
SK88	−144646.95	−30343.07	1.013	J1	円形	1.40	1.34	
SK89	−144646.52	−30342.07	1.098	J1	楕円形	0.49	0.36	
SK90	−144661.94	−30343.56	0.967	L1	円形	0.45	0.43	
SK91	−144617.53	−30346.20	1.289	G1	円形	0.98	0.86	
SK92	−144660.53	−30311.16	1.099	L4	隅丸方形	0.72	0.62	鍛冶炉
SK93	−144661.57	−30303.22	0.978	L5	（隅丸長方形）	1.36	0.97	
SK94	−144660.35	−30301.39	0.998	L5	不整楕円形	0.90	0.59	
SK95	−144661.72	−30300.43	0.998	L6	不整楕円形	0.87	0.51	
SK96	−144656.69	−30260.53	1.202	K9	楕円形	0.51	0.43	鍛冶炉
SK97	−144640.57	−30343.81	1.391	J1	（長方形）	1.11以上	1.45	
SK98	−144657.23	−30305.60	1.056	K5	隅丸長方形	0.82	0.67	鍛冶炉

第14表　第14次調査　SK土坑計測表

遺構名	X	Y	検出レベル	平面形	長径	短径	備考
SK1	−144657.45	−30346.55	1.287	壁に切られて不明			
SK2	−144657.19	−30346.18	1.296	壁に切られて不明	0.69	0.39	
SK3	−144655.81	−30347.18	1.297		0.64	0.30以上	P18・P19・P20に切られる
SK4	−144656.11	−30347.56	1.283	（不整円形）	0.67	0.56	
SK5	−144654.07	−30346.52	1.311	（隅丸長方形）	0.82	0.16以上	
SK6	−144655.50	−30349.13	1.315	不整楕円形	1.20	0.57	
SK7	−144657.07	−30348.22	1.301	楕円形	0.59	0.34	
SK8	−144655.63	−30351.80	1.281	（隅丸長方形）	1.07	0.51以上	
SK9	−144655.11	−30349.96	1.284	（楕円形）	0.78	0.23以上	
SK10	−144656.20	−30350.98	1.278	不整楕円形	0.74	0.65	
SK11	−144658.17	−30351.25	1.305	不整楕円形	0.70	0.59	
SK12	−144656.11	−30351.65	1.296	不整楕円形	0.84	0.50	
SK13	−144657.06	−30352.48	1.263	不整円形	0.91	0.81	
SK14	−144657.28	−30353.14	1.291	隅丸長方形	0.67	0.54	
SK15	−144657.44	−30353.84	1.293	不整楕円形	1.04	0.48	
SK16	−144656.11	−30353.65	1.295	（隅丸長方形）	1.31	0.35以上	
SK17	−144656.77	−30355.91	1.295	（隅丸方形）	0.77	0.55以上	
SK18	−144659.66	−30356.00	1.274	不整楕円形	0.71	0.21	
SK19	−144678.72	−30371.69	0.584	不整円形	0.97	0.79	
SK20	−144658.83	−30357.24	0.886	楕円形	0.49	0.13以上	

SK21	−144658.27	−30357.84	0.902	円形	0.29	0.29	
SK22	−144658.28	−30358.53	0.895	（楕円形）	0.53	0.25以上	
SK23	−144658.81	−30358.41	0.877	不整形	0.58以上	0.38	
SK24	−144659.66	−30357.92	0.839	楕円形	0.53	0.33	
SK25	−144658.77	−30357.46	0.89	不整楕円形	0.37	0.25	鍛冶炉

3．出土遺物

中須東原遺跡では調査の方針上、中世遺構は平面形を確認するにとどめ、掘り上げていないため、遺物は包含層を中心に出土している。出土遺物の中には、弥生土器等の古代遺物もみられるが、ごくわずかであり、主体を占めるのは中世以降の遺物である。

以下、種別ごとに順を追って説明したい。

（1）貿易陶磁器

青磁（第47図1～25）

1、2は同安窯系青磁碗で、体部から口縁部に向かって緩やかに内湾する。内外面の体部に櫛描文が施される。3～11は龍泉窯系青磁の碗である。3、4は体部が逆ハの字状に開き、口縁はわずかに外反する。外面は無文で、内面は飛雲文を描く。4は口縁端部を輪花状に仕上げる。5～8は、外面に蓮弁文を持つものである。5、6は外面に鎬蓮弁文をもち、6は器形が浅く、蓮弁の幅は狭い。7、8は線描きの蓮弁文をもつB4類。7は口縁が内湾する。8は腰の丸みが強く、体部は内湾しながら立ち上がる。高台は小さく器壁が厚い。9は碗の高台で、見込みにスタンプを押捺する。10は口縁端部を外反させるD類。11はC類で、外面口縁下に雷文帯を巡らせ、体部下半に簡略化した蓮弁文を描く。

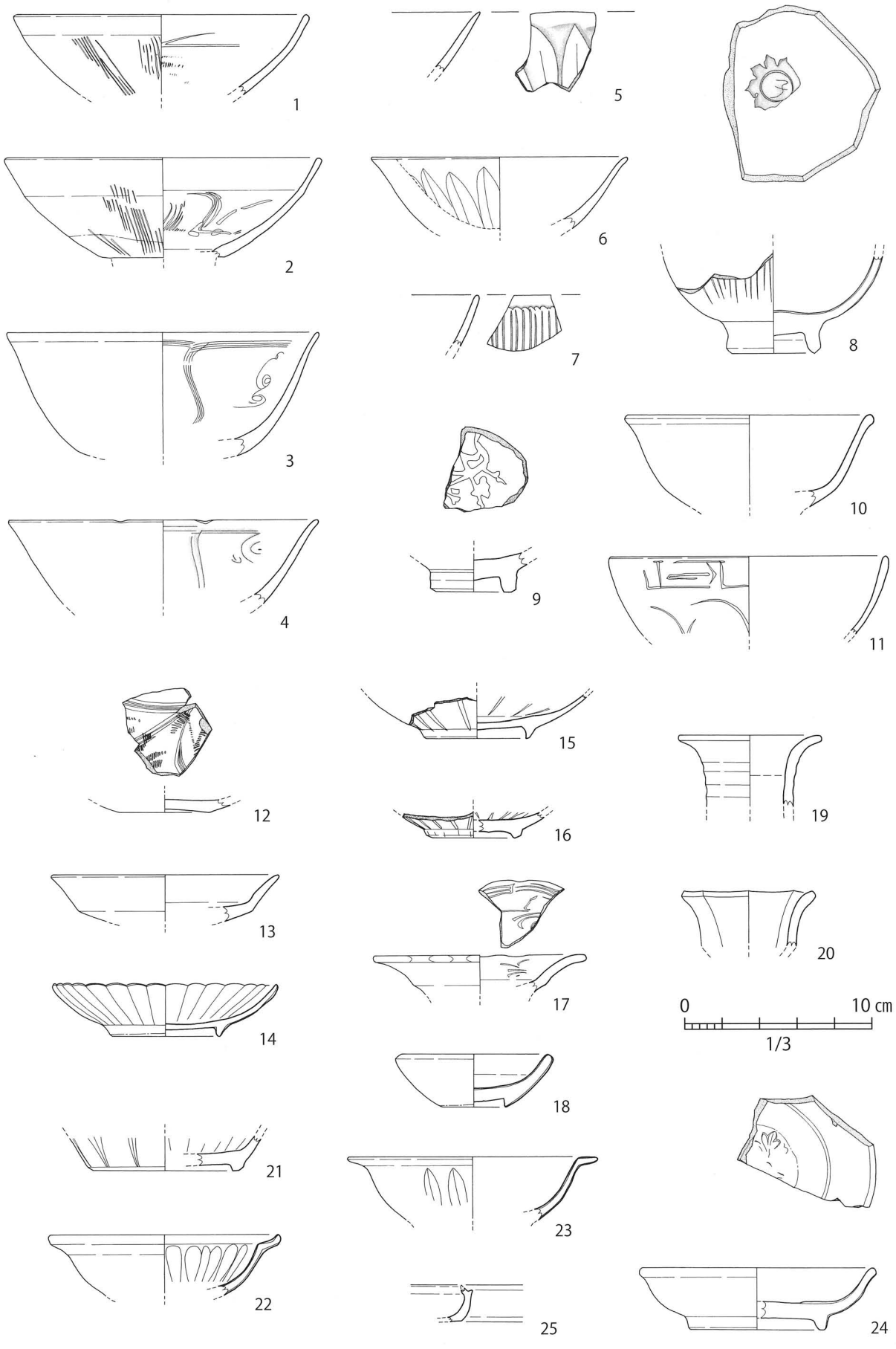
12～18は皿。12は同安窯系青磁。平底の底部から外方へ向かって大きく開く。見込みにはヘラによる文様と、クシ状工具によるジグザグ状の文様が描かれる。13は龍泉窯系の皿で、体部中位で屈曲し、大きく外反する。見込みはクシ状工具によってジグザグ状の文様が描かれる。14～16は菊皿である。14、15は景徳鎮窯系。14は幅の狭い花弁を持ち、内面と外面には緑灰色の釉が、高台内には灰白色の釉が厚くかけられる。15はヘラ状工具によって幅の広い花弁が描かれている。16はヘラ状工具で花弁が表現され、釉は高台脇までかけられ、露胎である高台内は橙色に発色する。胎土はやや陶器質で、器表は小さな貫入が多く入る。17は龍泉窯系の稜花皿。腰折れの器形で、内面に草花文を描く。18は碁笥底の皿で、体部から口縁に向かってゆるく内湾する。

19は花生の口縁部である。頸部には凸線が3条以上巡り、口縁端部は大きく外反する。20は龍泉窯系の多角坏で、青緑色の釉が厚くかけられている。内面の口縁下に沈線が1条巡る。21～24は龍泉窯系の坏。21は体部を蓮弁状に仕上げる。22の体部は丸みが強く、口縁部を外反させ、端部を上方につまみ出す。体部内面に蓮弁文を彫りこみ、釉が厚くかけられている。23は22と器形は似るが、口縁端部を水平に引出している。体部外面に幅の狭い鎬蓮弁文を施し、釉が厚くかかる。24は腰が強く張り、口縁部を外反させた後、端部を丸く収める。見込みにスタンプを押した後に施釉し、見込みの釉を丸く剥ぎ取る。

25は青白磁の合子の身で、外面は無文である。

白磁（第48図26～45）

26～32は碗。26、27はⅣ類で、玉縁状口縁をもつ。28はその底部と思われる。高台は低く、断面は台形状を呈する。29はⅨ類で、口縁端部の釉薬を剥ぎ取る。30は体部から口縁部に向かって逆ハの



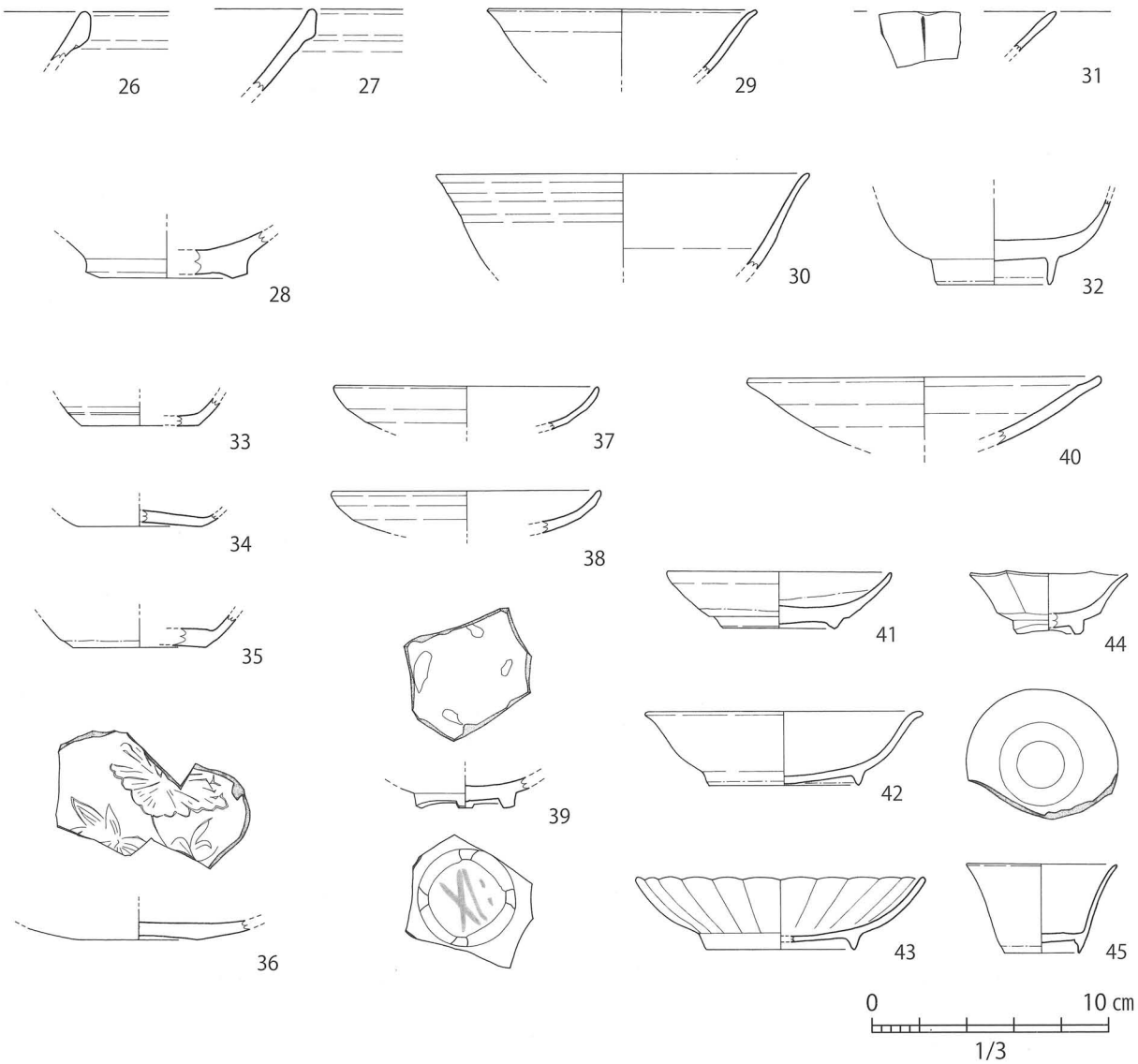
第47図　出土遺物（1）青磁

字状に直線的に開き、口縁端部はかるく外反させる。内外面とも無文。31は浅形の碗。口縁端部は外反し、輪花状を呈する。内面に白堆線を入れ、花弁を表現している。32は碗の底部。高くて細い高台を持ち、強く張った腰から内湾して体部へ続く。高台端部を除いて光沢の少ない透明釉がかけられる。

33～43は皿。33～35はⅨ類の皿で、外面底部は釉が拭き取られ、露胎となる。33、35は、体部下半以下は施釉されないが、34は一度釉をかけた後、底部のみ拭き取られている。36はⅧ類。底部は平底で、施釉した後に釉薬を削り取る。見込みに草花文を押捺する。37～39はD群の皿で、体部から内湾しながら口縁部へ向かう。39は底部で、高台部に４カ所抉りを入れる。また、高台内に墨書が認められるが、内容は判別不能である。40は大形の皿で、体部は直線的に大きく開く。やや陶器質で、細かな貫入が多く入る。41はD群の皿。口縁部はかるく内湾し、釉は内外面とも体部上半のみ掛かる。やや陶器質で、細かな貫入がはいる。42はE群の皿で、口縁端部は端反になる。43は景徳鎮用系の菊皿で、白濁した釉薬がかかる。

44はＤ群の多角坏で、高台端部に抉りを入れる。体部下半まで施釉され、器表には貫入が多く入る。

45はＥ群の坏。器壁は非常に薄く、体部から口縁部に向かってラッパ状に開く。施釉した後に、



第48図　出土遺物（２）白磁

見込みの釉を輪状にはぎ取る。

青花（第49図46～65）

46～54は碗。46～48はC群で、47、48はくぼんだ見込みから口縁部にむかって大きく開く。46は外面に丸を三つ結合した文様を一面に描く。48は全面に大きな貫入が入り、器壁にスが目立つ。景徳鎮窯の周辺窯で生産された可能性もある。49～51はE群で、底部は上げ底状の饅頭心となる。49は見込みが大きく盛り上がり、器壁には貫入が目立つ。50は見込みに人物文を、高台内には「大明年造」の年款を描く。51は内外面とも胴部に文様はなく、外面口縁下に唐草文帯を巡らせる。52～54は粗製の碗。52は体部から直線的に口縁へ続き、外面に草花文と思われる文様を描く。53、54は体部が開く器形で、高台内は施釉されない。53は高台端部に籾殻痕が付着する。外面胴部に草花文と思われる文様を一筆で描き、見込みの釉は輪状にはぎ取られている。54は断面台形の厚手の高台をもち、やや陶器質である。外面体部にはアラベスク文を簡略化したような文様を描く。釉は黄白色、呉須は暗灰色を呈し、貫入が多く入る。

55～65は皿。55～58は碁笥底をもつC群。55は底部から口縁に向かって直線的に立ち上がる。内外面とも口縁から胴部のみに施釉し、高台周辺と見込みにはかからない。貫入が多く入り、漳州窯系と考えられる。56は、外面胴部に文様が描かれているが、モチーフは判然としない。57は見込みにモチーフ不明の文様が描かれている。58は見込みの中央に鉄分の多い土を置いて魚文を表現している。外面は無文。59～61はB群。59は高台の断面は三角形を呈し、端部は細く尖る。見込みには折菊文を、高台内には二重圏線内に「福」の字款を描く。60、61は文様構成を同じくする。60は小形で、高台断面は低い台形を呈する。見込みには十字花文、外面胴部には唐草文を描く。61は60より大形で、高台は細くて高い。62は口縁部が端反りとなるタイプ。胎土は灰白色～淡橙灰色、釉は透明感のある灰緑色を呈し、器表に貫入が多く入る。釉は高台脇までかけられ、高台端部に籾殻痕が残る。なお、器表の一部は釉がはじかれ、部分的に露胎となる。粗製の一群に属するもので、漳州窯系と考えられる。63、64は口縁部を欠くが文様構成からE群と判断した。63は、高台の断面が三角形を呈する。外面は無文で、界線も描かれない。見込みには山水文と思われる文様が描かれる。64は外面高台と胴部の境に界線が描かれ、見込みの文様は龍文と思われるが、小片のため詳細は不明である。65は口縁部が内湾する大形の皿。呉須は暗い藍色を呈し、文様はにじむ。釉は灰色がかった透明釉である。全面に施釉されているため、高台端部に砂が付着している。粗製の一群に属するものである。

中国陶器（第50図66～68）

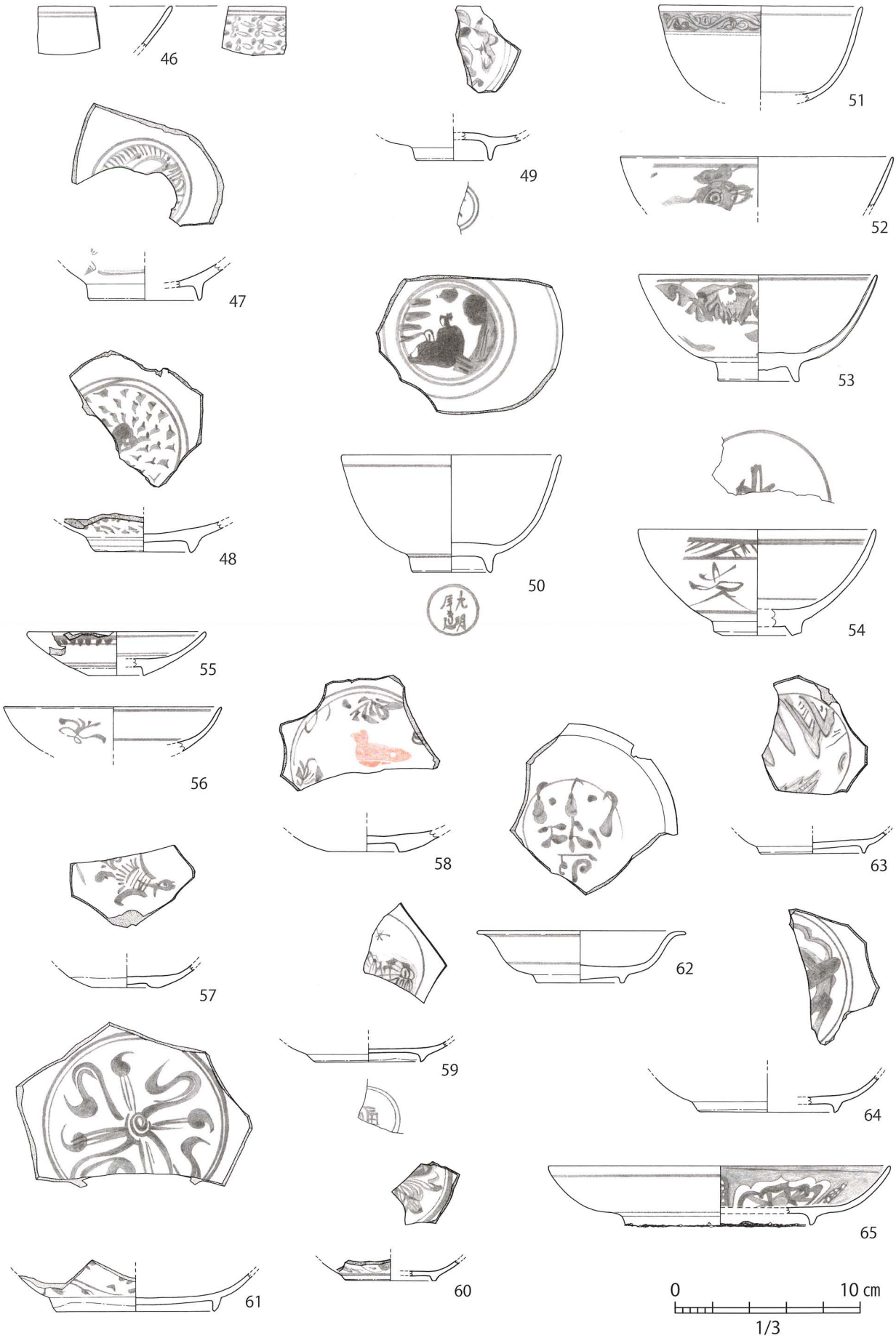
66は中国製天目碗の底部である。高台は浅く削り出され、体部は直線的に開く。高台端部に胎土目跡が残る。67、68は褐釉陶器。67は甕の口縁部と思われる。頸部は短く、やや内傾して立ち上がり、端部は受口状に成形する。内外面に灰黄褐色の釉がかかり、朝鮮製の可能性もある。68は鉢で、体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部は端部を玉縁状に肥厚させる。

タイ陶器（第50図69）

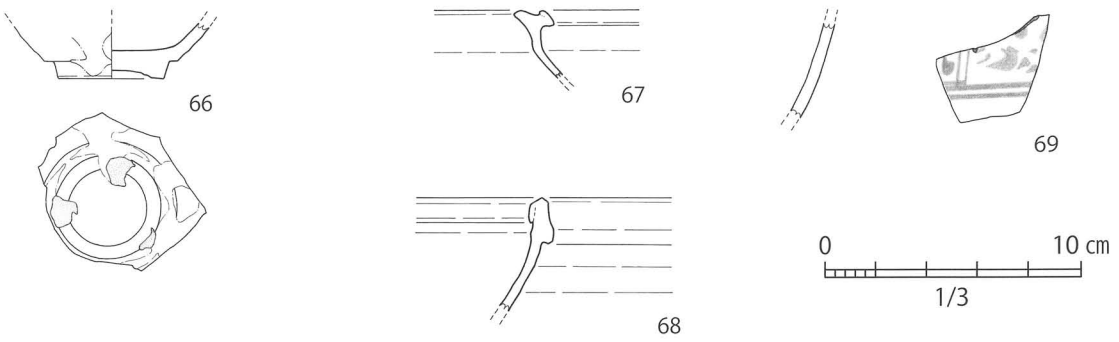
69はタイの鉄絵壺である。白色粒子を多く含んだにぶい橙色の胎土に白釉がかけられた後、鉄絵が描かれている。スコタイ窯のものとみられ、15世紀頃に比定される。

朝鮮陶磁器（第51図70～85）

70、71は青磁の碗で、象嵌が施されたものである。70は口縁がやや内湾し、内面口縁下に雷文帯状の文様を象嵌で施す。71は胴部から口縁部へ内湾しながら立ち上がり、外面胴部に突帯をつけ、



第49図　出土遺物（3）青花



第50図　出土遺物（４）中国陶器・タイ陶器

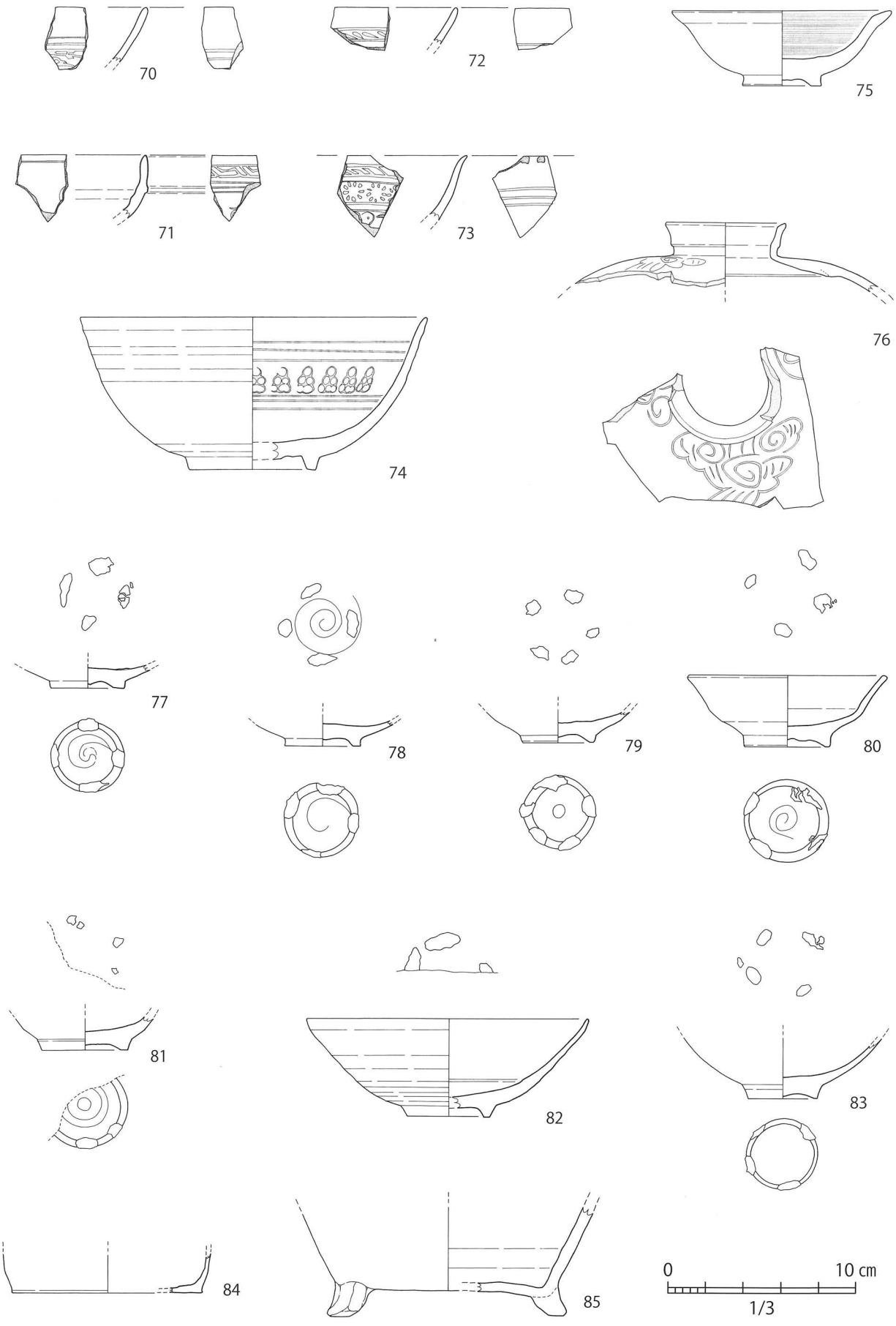
その上に雷文帯状の象嵌を入れる。72～75は粉青沙器。72～74は碗で、72は内面口縁下に簡略化した雷文帯を象嵌で施す。73は口縁端部を軽く外反させ、内面胴部に菊の印花文と丸文を施す。74は断面四角形の高台をもち、体部から口縁にむかってゆるやかに立ち上がる。外面は無文で、内面胴部に象嵌が施される。見込みには胎土目跡が２カ所確認される。75は坏。全体的に厚手につくられ、口縁端部は外方へ引き出す。内面に刷毛目を施し、外面は無文である。高台端部に胎土目跡が残る。

76は高麗青磁の梅壺で、肩は強く張る。口縁下方に段を設けて口縁帯状をなし、端部はわずかに外反させる。外面胴部にはモチーフは不明であるが、雲文状の文様が線刻されている。内外面とも施釉される。

77～80は灰青陶器の坏。77、78はほぼ同様の器形で、高台は断面台形を呈し、腰部は大きく開く。褐灰色の釉が全面にかかり、底部と見込みに砂目跡が残る。79の高台は断面三角形を呈する。胎土は灰色～褐色で、底部と見込みに砂目跡が残る。80は腰部が折れたのち、口縁へ向かってハの字状に広がる。全面に青灰色の釉薬がかかり、見込みと底部に砂目跡が残る。

81～83は白磁。81は坏で、高台は断面台形を呈する。全面に灰白色の釉がかかり、見込みと高台端部に砂目跡が残る。82、83は碗。82は浅形の碗で、断面台形の高台から口縁に向かってハの字状に大きく開く。見込みと体部の境に、見込み側に落ちる段を有する。全面施釉され、高台端部と見込みに砂目跡が残る。焼成はやや軟質である。83の高台は小さく、わずかに竹の節状を呈する。腰は張らず、口縁部へ向かい丸みを持って立ち上がる。全面に青みがかった透明釉がかかり、高台端部と見込みに胎土目跡が各４カ所残る。

84、85は施釉陶器。84は船徳利の底部である。全体的に薄手につくられ、外面に灰褐色の釉薬がかかる。85は鉢と思われる。底部の際に断面方形の獣足状の足を張り付ける。胎土は精良で、暗赤褐色土と灰白色土がマーブル状に混じる。内外面に施釉され、内面体部下半は回転ナデ、上半はタタキ痕がわずかに確認できる。なお、図化することはできなかったが、同一個体と思われる口縁部の破片が出土しているが、波状に曲線を描くことから、口縁は輪花あるいは片口を有すると推測される。



第51図　出土遺物（５）朝鮮陶磁器

（２）国産陶磁器

中世須恵器（第52図86～89）

86～88は東播系須恵器の鉢。86は口縁部を肥厚させ、端部を上方へつまみ上げる。87は口縁部を丸く肥厚させ、端部を内側へつまみ出す。88は底部を絞り、高台状に仕上げている。内面は使い込まれ、摩耗している。

89は甕の胴部である。焼成は良好で、固く焼き締まる。外面は３mm四方の格子タタキ、内面はカキメで調整される。

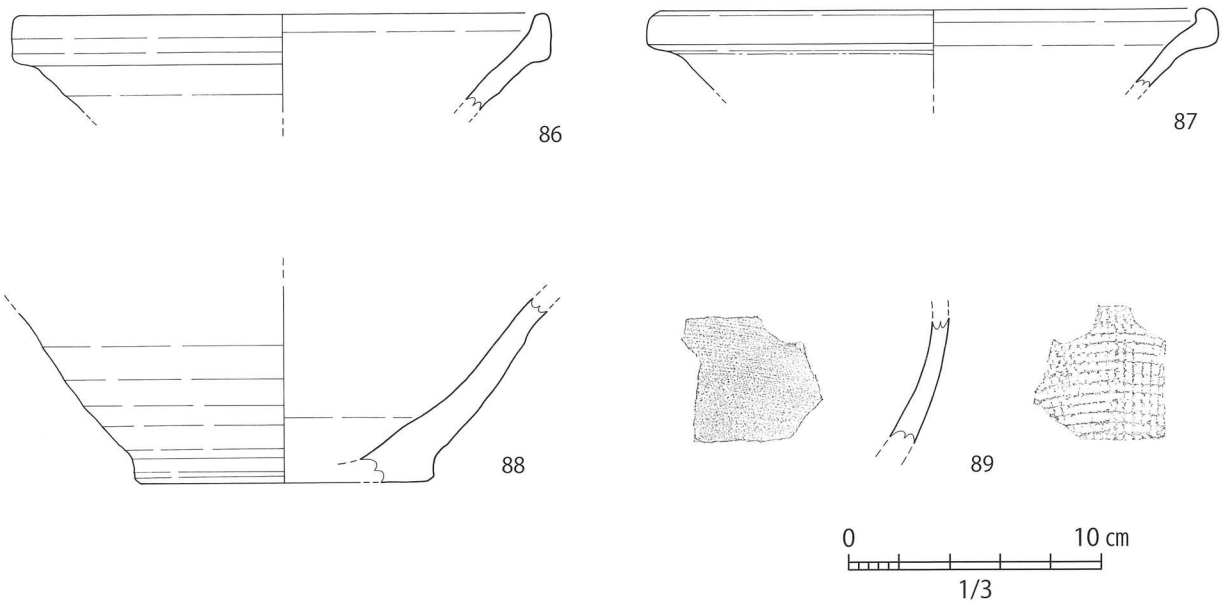
備前焼（第53図90～100）

90～93は擂鉢。90の体部は大きく外方に開き、口縁帯を直立させ、凹線を２条巡らせる。口縁端部は内傾する面をつくり、Ⅴ期に相当すると思われる。91は口縁帯を肥厚させ、凹線を２条巡らせる。スリ目は５条以上を１単位とし、放射状に入れるほか、斜め方向にもスリ目を入れている。胎土は淡茶橙色を呈し、暗赤褐色の微粒子を多く含む。狭義の備前焼とは言えない可能性もあるが、備前系として分類した。92は底部で、体部へ向かって大きく開く。スリ目は６条１単位として放射状に入れられる。93のスリ目は12条１単位とし、放射状に入れられるほか、横方向にも入れられている。

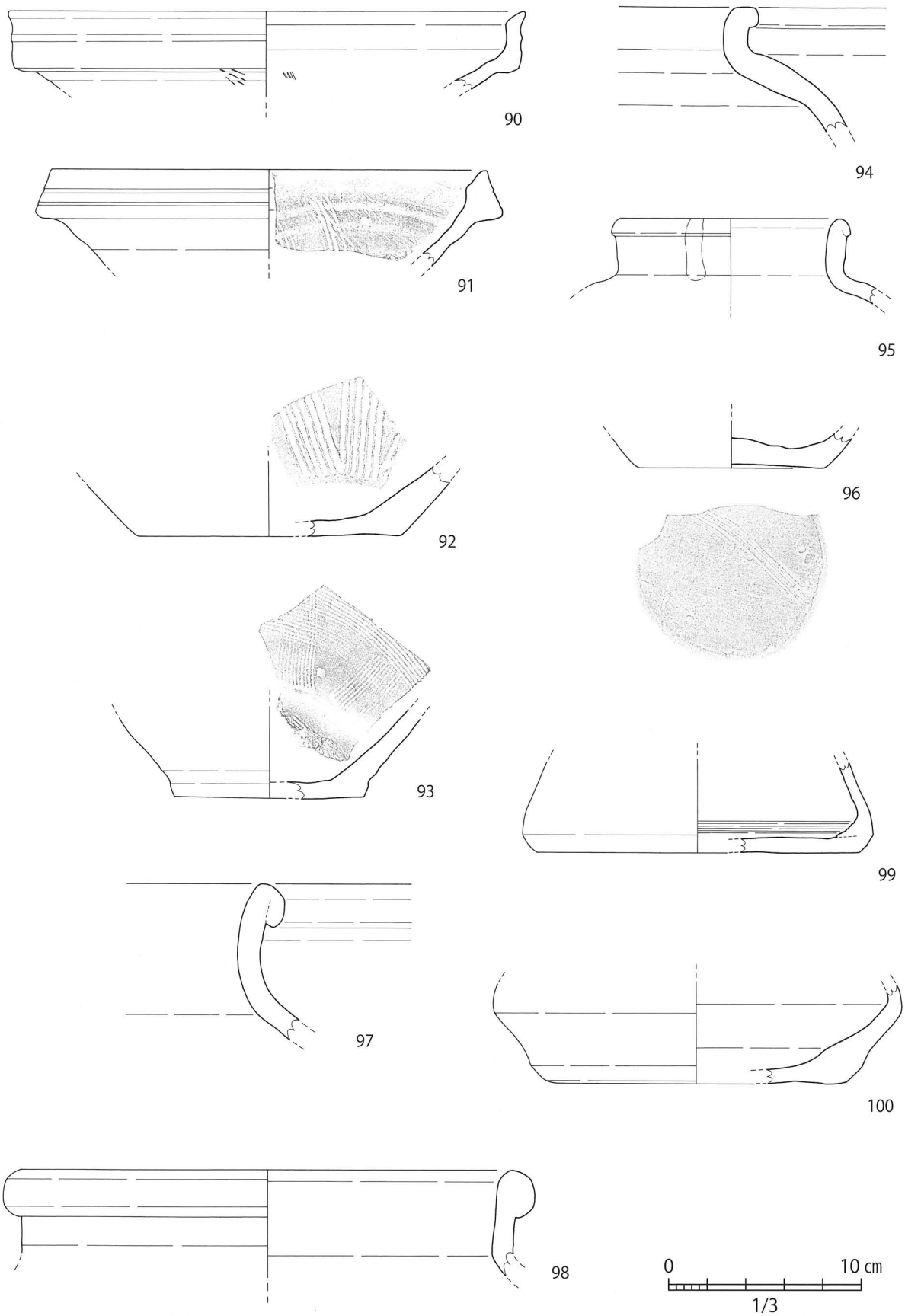
94～96は壺。94は頸部が短く、ほぼ直立して立ち上がり、口縁部は外方につまみだし、端部を平坦に仕上げる。ⅢB期と思われる。95は94と比較すると頸部は長く、やや外傾して立ち上がり、口縁端部は小さな玉縁状となる。口縁部から肩にかけてゴマ釉がかかり、一部は自然釉が流れ落ちている。ⅣA期と考えられる。96の外面底部はナデで仕上げられ、斜め方向に５条の沈線が入る。

97、98は甕。97の頸部は長く、やや外傾して立ち上がり、口縁端部は丸く玉縁状に仕上げる。ⅢB期あるいはⅣA期と考えられる。98は頸部が短く、やや外傾して立ち上がる。口縁端部は丸く玉縁状に仕上げ、ⅢB期と考えられる。

99、100は鉢類。99は袋状にすぼまる器形。外面には黄褐色のゴマ釉がかかる。100は底部から体部に向かってハの字状に開いたのち、肩部で屈曲する。



第52図　出土遺物（６）中世須恵器



第53図　出土遺物（7）備前焼

瓷器系（第54図101～108）

101は東海系の山茶碗で、体部は逆ハの字状に大きく開く。内外面には自然釉がかかる。

102は壺で、頸部は直立して立ち上がり、口縁端部は玉縁状に仕上げる。103は壺あるいは甕である。口縁部は外傾して立ち上がり、端部をわずかに外方につまみ出す。外面の口縁下に凸線を1条、内面口縁の中位に凹線を1条巡らせる。102、103は信楽焼の可能性がある。104、105は越前焼。104は甕で、口縁部を大きく外反させ、端部を上下に引き出している。105は鉢で、体部は丸みを持ち、口縁部をわずかに外反させ、端部に凹線を1条巡らせる。

106は東海系の鉢。高台は貼り付け高台で、ハの字状に開く。体部下半はケズリ。内面は使用により、磨滅している。

107、108は甕で、同様の器形である。107は頸部が短く、口縁端部は肥厚させ、玉縁状となる。焼成良好で、暗灰色を呈する。108は、肩があまり張らない。頸部は短く外反して立ち上がり、端部は肥厚して長い玉縁状となる。内面口縁端に1条の沈線を巡らせている。内面胴部はナデ、外面は細かい平行タタキで調整する。107、108は瓷器系に分類したが、中世須恵器の可能性もある。

瀬戸・美濃陶器（第54図109～117）

109、110は天目碗である。109は体部が直線的に開き、口縁端部は外方へ屈曲させる。体部下半は錆釉がかけられている。古瀬戸後期様式Ⅱ期に属すると考えられる。110は底部で、高台は断面四角形を呈し、外面に錆釉がかけられている。111、112は灰釉皿。111の高台は貼り付けで、断面は四角形を呈する。高台脇まで施釉され、露胎部分との境は暗橙色に発色する。見込みには印花文が押される。112は高台が丸みを帯びた台形で、高台脇まで施釉される。高台内には窯道具跡が付着する。113は鉄釉皿で、高台はごく小さく削り出される。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁端部は輪花状に仕上げる。全面に施釉後、見込みの釉は輪状に拭き取られる。114、115は卸皿。114は体部が丸みを持ち、口縁端部は外反したのちに上方へつまみ出す。内面および外面体部下半まで施釉される。115の底部は回転糸切で、残存する部分は施釉されていない。

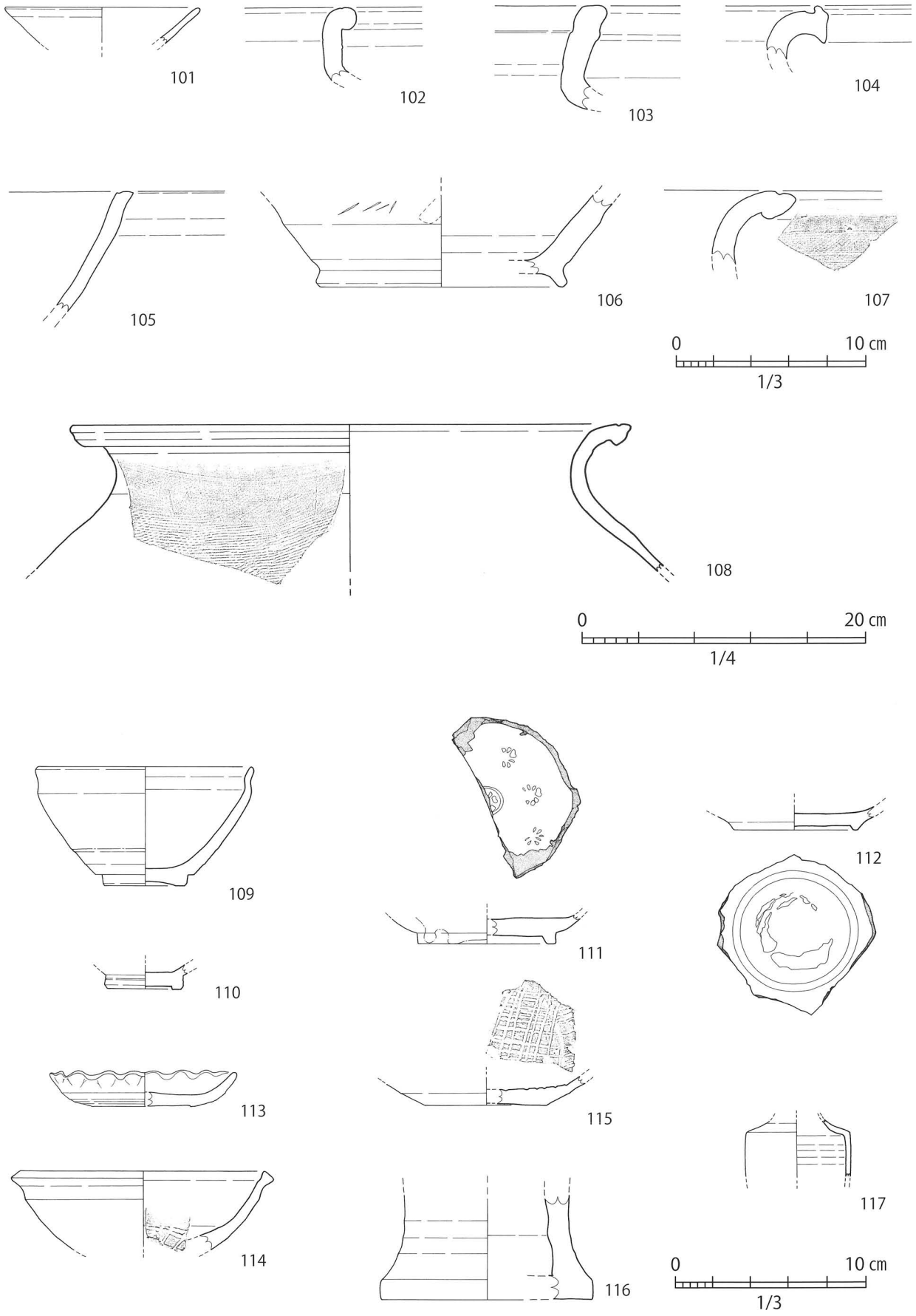
116は瓶子で、平底の底部から内湾しながら胴部へ立ち上がる。外面と底部は灰釉がかかる。117は茶入で、胴部は直線的に立ち上がり、肩は強く張る。外面に黒茶色の釉がかかる。

土師質土器（第55図118～131）

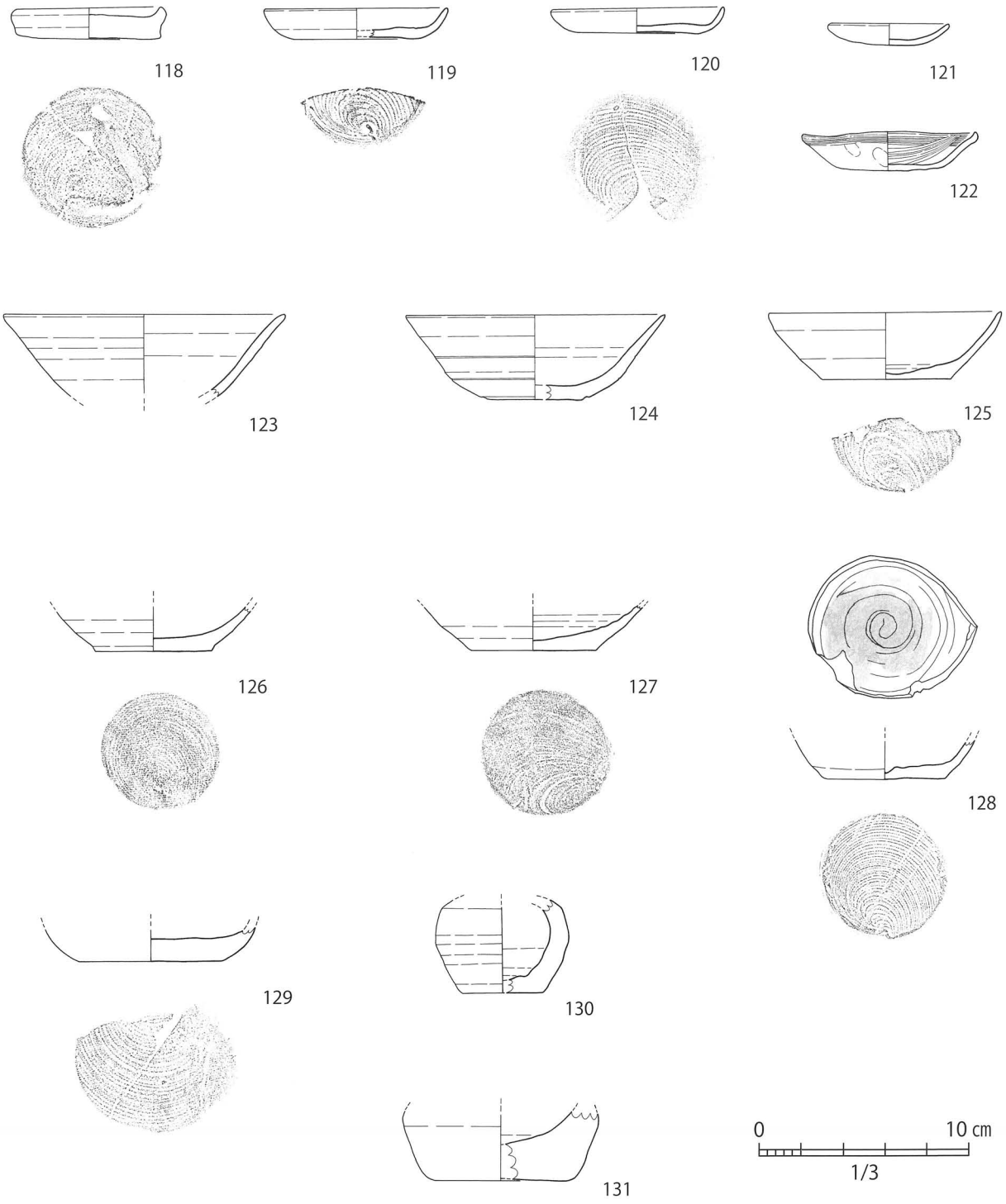
118～122は皿。118は口径と底径をほぼ同じくし、体部は短く立ち上がる。底部は回転糸切。119、120は底部と体部の境は丸みを帯び、体部は短く立ち上がる。口縁部はわずかに内湾し、器壁は薄い。いずれも底部は回転糸切。121は手づくね成形された皿で、底部と体部の境は丸みを帯びる。器高は浅く、器壁も薄い。122は既述の一群と比較して胎土の色調は白みを帯び、手づくね成形である。京都系土師器に分類されるものである。内外面にはススが付着し、燈明皿として使用された可能性がある。

123～129は坏。123、124は、体部が逆ハの字状に大きく開き、口縁部はわずかに外反させる。124の底部は回転糸切。125は124と比較して底径が大きく、器高は低い。口縁部はわずかに内湾させ、底部は回転糸切である。126～128は底部をわずかに高台状に絞る。底部は回転糸切。128は内面底部にススが付着し、燈明皿として使用されたと考えられる。129は器壁がやや厚手で、内面底部は平坦に仕上げられる。底部は回転糸切。

130は小壺である。肩は丸く、球状に仕上げられる。胎土に暗橙色の粒子を多く含む。131は浅い鉢状を呈しており、内外面、底部ともナデで仕上げる。用途は不明である。



第54図　出土遺物（８）瓷器系、瀬戸・美濃陶器



第55図　出土遺物（９）土師質土器

瓦質土器（第56図～第57図132～145）

132、133は防長型の擂鉢である。132は体部がやや内湾しながら立ち上がり、口縁端部は内側に向かって折り返され、断面三角形を呈する。スリ目は８条１単位で、放射状に入れられている。焼成はやや軟質で、色は淡灰褐色を呈する。133の体部はやや外反しながら直線的に伸び、口縁端部は内側に大きく折り返されている。内面は横方向のカキメが施されたのち、スリ目が入れられる。132、133はいずれもⅡ期に相当すると考えられる。134は鉢で、体部は丸みを持ち、口縁端部はわずかに肥厚させる。内面は斜め方向のつよいカキメが施されている。

135は浅鉢型の製品である。体部は逆ハの字状に開き、口縁端部は外傾した面を持つ。内外面ともナデ調整が行われる。外面にススが付着しており、焙烙として使われた可能性もある。136は防長型の鍋で、体部はほぼ直立し、当初は足がつく足鍋であった可能性もある。口縁部は外反し、端部を肥厚させるⅢ形式に相当する。137は羽釜。体部は丸みを帯び、中位に鍔を張り付ける。内面はヨコハケ調整、外面はコゲが付着している。

138～143は火鉢。138、140は器壁が薄く、直線的に立ち上がり、２条の突帯の間にスタンプを巡らせている。内面はナデ調整。139、141、142は、口縁端部を外方へ肥厚させて玉縁状に仕上げ、突帯との間にスタンプを巡らせる。142は深鉢形火鉢と思われる。内面調整は、139がヨコハケ、141、142が横方向のカキメである。143は甕形火鉢と思われる。肩は張り、頸部はやや内傾して口縁端部を外方へ大きく肥厚させる。内面は横方向のカキメ調整を行う。144は風炉である。体部は内湾し、口縁端部を内側に引出し、平坦面をつくる。外面に突帯を２条巡らせ、その間には花文のスタンプを押捺する。外面は丁寧にミガキがかけられ、奈良産の可能性もある。145は風炉あるいは浅鉢の脚部で、獣脚状に仕上げる。

（３）その他

石製品（第58図146～150）

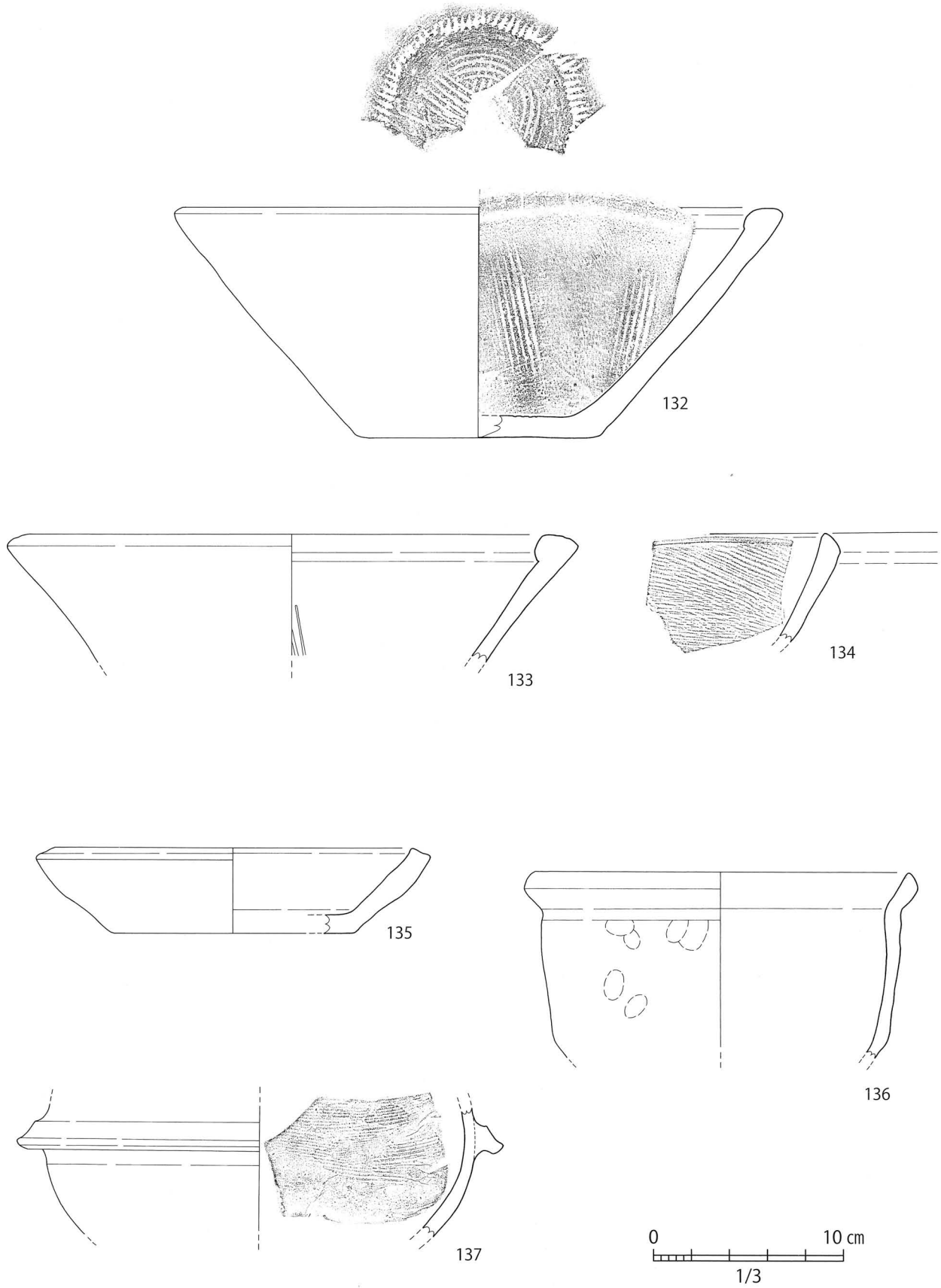
146～148は石鍋である。146は体部から口縁部まで直線的にのび、口縁下に断面三角形の鍔を巡らせる。147はやや小型で、体部は丸みが強い。鍔の断面は台形を呈し、外面にノミ痕がはっきり残る。148は体部から口縁部にかけて丸みを持ち、外面口縁下に瘤状の大きな把手がつく。石鍋Ⅱ類に相当し、11世紀代に比定される。149は滑石製品で、石鍋の鍔周辺部分を転用したものである。平面形は舟形に加工し、中央に刳り込みを入れているが、用途は不明である。

150はL３区から出土した花崗岩製五輪塔の地輪である。幅42.5cm、高さ32.5cm、４面に薬研彫りで梵字を施す。底部には粗いノミ痕を残し、それ以外は丁寧なはつり仕上げとなっている。出土地に隣接する福王寺境内には、同様な花崗岩製の「島根県指定文化財　福王寺十三重塔」や元徳二年（1330）の銘文を持つ五輪塔が存在し、益田市における花崗岩製石造物の実態を解明する上で貴重な資料と言える。

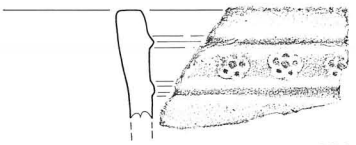
なお、今回は図化することができなかったが、砥石が出土している（図版34）。最も大きなものは図版34の荒砥で、長さ約18cm、幅約12cm、厚みは最大で９cmを測る。その他に、中砥、仕上砥も出土している。

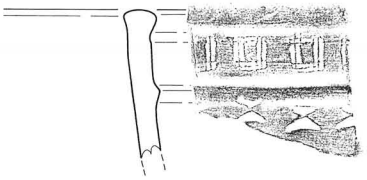
金属製品（第59図151～164）

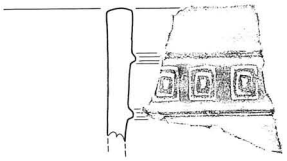
151～162は銭貨である。151は開元通宝（初鋳年621年）。152～160は北宋銭で、152は咸平元宝（初鋳年998年）。153は祥符元宝（初鋳年1008年）。154は天聖元宝（初鋳年1023年）。155は皇

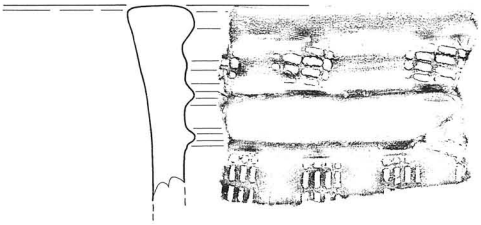


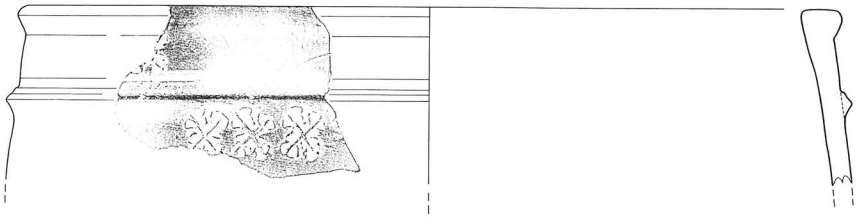
第56図　出土遺物（10）瓦質土器①

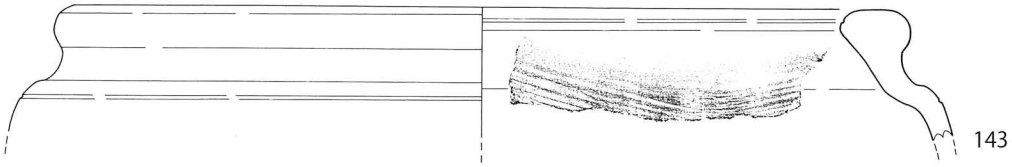

138

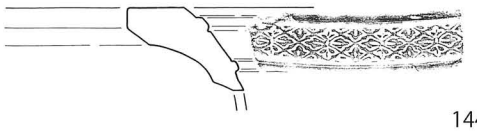

139

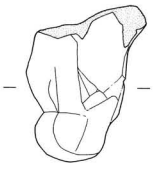

140

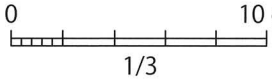

141


142

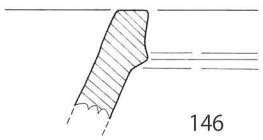

143


144

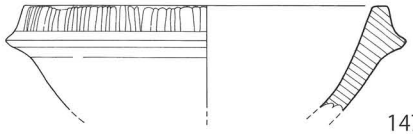

145



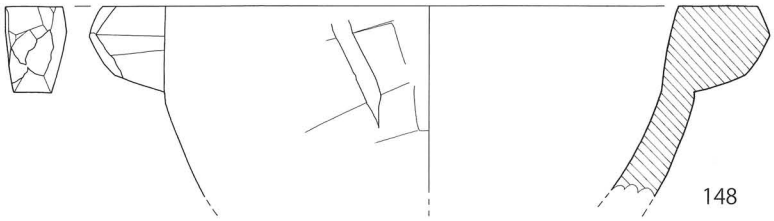
第57図　出土遺物（11）瓦質土器②



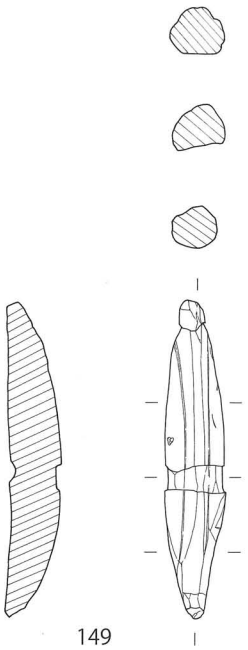
146



147



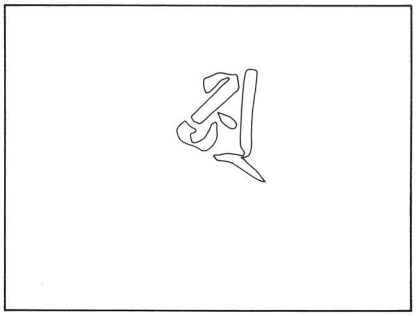
148



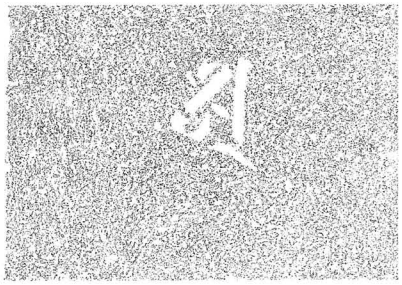
149

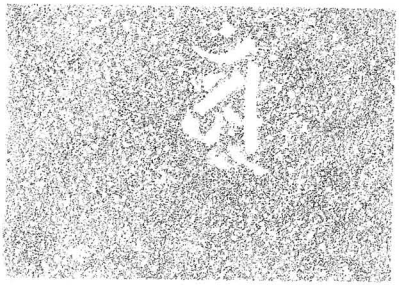
0 10 cm

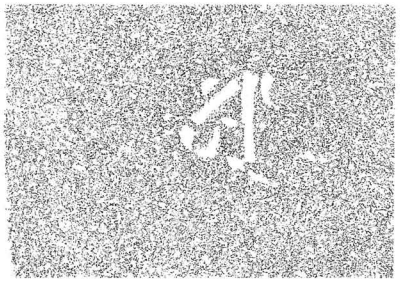
1/3

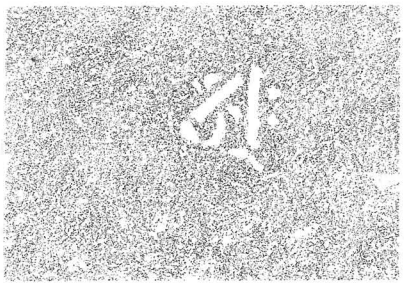


150





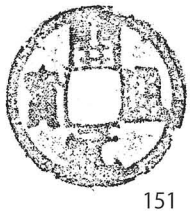


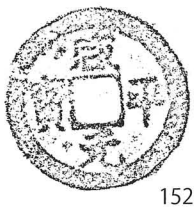


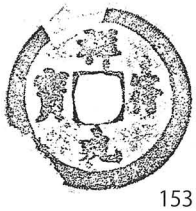
0 40 cm

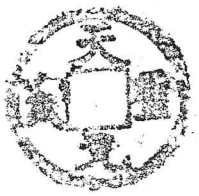
1/8

第58図　出土遺物（12）石製品

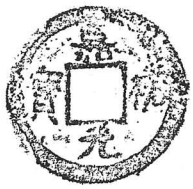

151

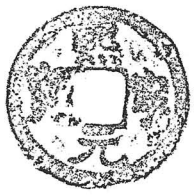

152

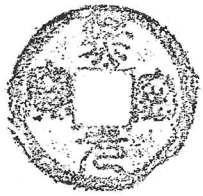

153

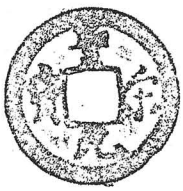

154

155

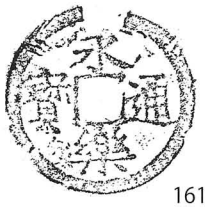

156

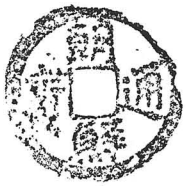

157

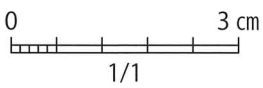

158

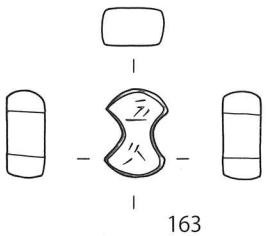

159

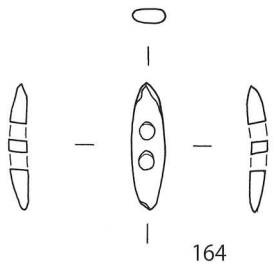
160

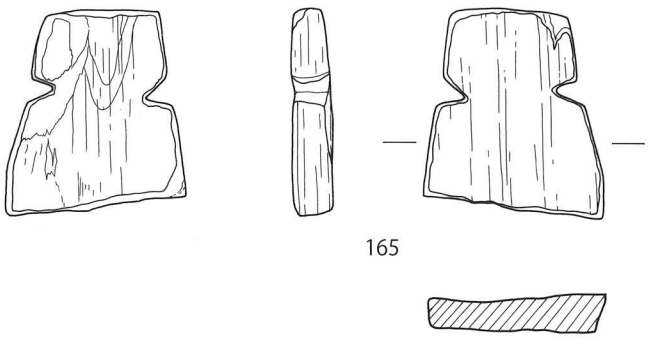

161

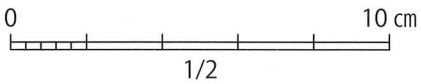

162




163


164


165



第59図　出土遺物（13）金属製品、木製品

宋通宝（初鋳年1039年）。156は嘉祐元宝（初鋳年1056年）。157～158は熙寧元宝（初鋳年1068年）。159は聖宋元宝（初鋳年1101年）。160は大観通宝（初鋳年1107年）。161は明銭の永楽通宝（初鋳年1408年）。162は朝鮮李朝のもので、朝鮮通宝（初鋳年1423年）である。

163は分銅である。表面に線刻で「匁」の字が施される。形態的特徴から、繭形分銅Bタイプと考えられる[1]。

164は銅製品で、甲冑金具と考えられる。長さ3.3cm、幅0.9cm、形状はアーモンド状を呈し、中央に２箇所穿孔されている。

木製品（第59図165）

165は第14次調査Ｉ区礫敷き上面から出土した荷札である。出土地点には木片や荒縄等の有機物が出土しており、礫敷きの窪地上に滞留したことによる堆積層と考えられる。

荷札は、長さ5.5cm、幅4.8cm、厚さ1.1cmで、上部に切れ込みが施され、下部は切り落とされている。

（４）鍛冶関連遺物

調査の手法

調査において検出された鍛冶関連遺物（以下、関連遺物）に関する考古学的所見について、以下のような手法により記載する。該当する記載項目が存在しない場合は飛び番号となる。

①出土遺構・遺物の種類：遺物の出土遺構（個別）と種別。

②計測値：当該遺物の長さ（写真の上下）、巾（写真の左右）、厚さについては、最大部位値の測定値（cm）。重さは総重量値（ｇ）。

③遺存度：当該遺物の保存状態の記載。

④表面観察所見：当該遺物の表面観察の所見。

⑤備　考：特記事項について記載。

鍛冶関連遺物の記載

１）第60図１

① 碗形滓・Ｋ８区、遺構検出時

② 長さ（上下）5.3cm、巾（左右）4.8cm、厚さ2.7cm、重さ52ｇ。

③ ほぼ原状を留める

④ 表面はクレーター状の窪みが２か所ある。裏面は浅い凹凸部をもち、全体的に緩く湾曲する。

⑤ 特記事項なし。

２）第60図２

① 碗形滓・K11～12区間あぜ部

② 長さ（上下）7.5cm、巾（左右）7.5cm、厚さ3.6cm、重さ204ｇ。

③ 原状を留める。

④ 表面は楕円状の平坦面となり、一部に黒色の気泡孔がある。裏面は玉状の突起部がある。

⑤ 特記事項なし。

---

[1] 小畑弘己「度量衡」『中世都市 博多を掘る』海鳥社、2008年

碗形滓	流動滓	羽口	炉壁	再結合滓	鉄塊	切鉄
1 2 3 4 5 6 7 8	9 10	11 12 13 14 15	16 17	18	19 20 21 22	23 24

第60図　鍛冶関連遺物一覧

3）第60図3

① 碗形滓・F13区、５層

② 長さ（上下）8.6cm、巾（左右）5.8cm、厚さ4.0cm、重さ190ｇ。

③ 表面と裏面に原状を留める。側面の一部を欠く。

④ 表面は黒灰色（タール状）で凹凸があり、小粒石とスサ状繊維を含む瘤（炉壁の一部）が溶着する。裏面は全体に細粒砂が付着し黄橙色を呈する。

⑤ 特記事項なし。

4）第60図4

① 碗形滓・11G区

② 長さ（上下）10.3cm、巾（左右）7.5cm、厚さ4.2cm、重さ346ｇ。

③ 原状を留める。

④ 表面はほぼ平坦で、中心が若干窪む。表面に繊維状痕が多数みられる。淡黄色を呈する。裏面は茶褐色を呈し、緩く湾曲する。

⑤ 特記事項なし。

5）第60図5

① 碗形滓・11G区、Po49

② 長さ（上下）9.5cm、巾（左右）9.5cm、厚さ4.2cm、重さ408ｇ。

③ 表面と裏面に原状を留める。側面の一部を欠く。

④ 表面は中心に凹部を２か所もち、平坦である。欠損部は灰黒色で気泡孔がある。裏面には繊維状痕がみられ、球形状を呈する。

⑤ 特記事項なし。

6）第60図6

① 碗形滓・E20～F20区、SD48

② 長さ（上下）12cm、巾（左右）11cm、厚さ５cm、重さ654ｇ。

③ ほぼ原状を留める。

④ 表面は全体がクレーター状に窪み、一部にスサ状繊維が認められる。下側面は羽口との接合部と思われ、通風孔に関連すると考えられる半円状の形状が残る。裏面は球形状で、表面には細粒砂が付着している。

⑤ 特記事項なし。

7）第60図7

① 碗形滓・K11区、Po150

② 長さ（上下）16cm、巾（左右）17cm、厚さ７cm、重さ1,486ｇ。

③ ほぼ原状を留める。

④ 表面は中心部が僅かに盛り上がる。側面と裏面の一部に灰白色の粘土板（炉壁）が付着する。裏面は球形の突起をもつ凹凸が顕著で、スサ状繊維が認められる。黒褐色を呈し、緩やかに湾曲する。

⑤ 特記事項なし。

8）第60図8

① 碗形滓・14G区、Po86
② 長さ（上下）17.5cm、巾（左右）15.5cm、厚さ８cm、重さ1,908ｇ。
③ 原状を留める。
④ 表面は緩やかな凸部を２か所もつが全体としては平坦である。裏面は球形状を呈し、底部および側面に小粒石、細粒砂、鍛造剥片が多く付着する。淡黄色を呈する。
⑤ 特記事項なし。

９）第60図９
① 流動滓・16G区
② 長さ（上下）6.5cm、巾（左右）3.4cm、厚さ1.3cm、重さ32ｇ。
③ 表面と裏面に原状を留める。側面の一部を欠く。
④ 表面は流動状の質感をもち、気泡状の凸部がある。裏面は細粒砂が付着する。
⑤ 特記事項なし。

10）第60図10
① 流動滓・E19区
② 長さ（上下）8.5cm、巾（左右）5.2cm、厚さ3.2cm、重さ154ｇ。
③ 原状を留める。
④ 表面に流動状の瘤をもつ。裏面は茶褐色を呈し、スサ状繊維と鍛造剥片が付着する。破断面は灰黒色で、気泡孔が多数ある。
⑤ 特記事項なし。

11）第60図11
① 羽口・F13区
② 長さ（羽口長軸方向）10.5cm、巾（左右）6.5cm、厚さ４cm、重さ312ｇ。
③ 断面で４分の１程度残存。通風孔の外面の一部に原状が残る。
④ 表面は緩い孤状の曲面をもつ円柱状の破片。羽口先端部は黒色のタール状を呈し、一部ガラス状となる。
⑤ 特記事項なし。

12）第60図12
① 羽口・K１区、SK75
② 長さ（羽口長軸方向）11cm、巾（左右）10cm、厚さ４cm、重さ488ｇ。
③ 断面で２分の１程度残存。通風孔と外面の一部に原状が残る。
④ 通風孔の復元内径は2.5cm程度と推定される。外面は緩い孤状の曲面をもつ円柱状の破片で、表面には直線が斜格子状にクロスし、大粒の石とスサ状繊維痕が見られる。羽口先端部は灰黒色のタール状を呈する。
⑤ 特記事項なし。

13）第60図13
① 羽口・K11区、灰色土
② 長さ（羽口長軸方向）７cm、巾（左右）7.8cm、厚さ3.2cm、重さ238ｇ。
③ 断面で２分の１程度残存。通風孔と外面の一部に原状が残る。

④ 通風孔の復元内径は2.4cm程度と推定される。外面は断面が四角形で、羽口先端部は灰黒色のタール状を呈し、小さい気泡孔が見られる。破断面には、小粒石とスサ状繊維痕が確認できる。

⑤ 特記事項なし。

14）第60図14

① 羽口・34G区

② 長さ（羽口長軸方向）3.8cm、巾（左右）10.8cm、厚さ4.7cm、重さ284ｇ。

③ 断面で２分の１程度残存。通風孔と外面の一部に原状が残る。

④ 羽口先端部で、通風孔の復元内径は2.4cm程度と推定される。外面は断面が四角形と思われる。表面は灰黒色のタール状を呈し、一部ガラス状となる。気泡孔が見られる。

⑤ 特記事項なし。

15）第60図15

① 羽口・Ｌ４区、SX144

② 長さ（羽口長軸方向）7.4cm、巾（左右）5.5cm、厚さ3.9cm、重さ284ｇ。

③ 断面で４分の１程度残存。通風孔と外面の一部に原状が残る。

④ 外面は断面が四角形と推定され、羽口先端部は黒色のタール状となる。気泡孔が多数見られる。

⑤ 特記事項なし。

16）第60図16

① 炉壁・Ｆ９区、溝状落ち込み部

② 長さ（上下）４cm、巾（左右）９cm、厚さ2.3cm、重さ58ｇ。

③ 表面と裏面に原状を留める。側面は全て破面。

④ 表面には塊状の浅い凹凸があり、灰黒色のガラス状で気泡孔も多い。

⑤ 特記事項なし。

17）第60図17

① 炉壁・K11区、Po182

② 長さ（上下）8.4cm、巾（左右）5.2cm、厚さ3.2cm、重さ94ｇ。

③ 表面と裏面に原状を留める。側面は全て破面。

④ 表面に太い指突痕が見られる。灰白色を呈する。裏面の破断面は黒色のガラス状をなし、気泡孔が多数見られる。

⑤ 特記事項なし。

18）第60図18

① 再結合滓・17G区

② 長さ（上下）10.9cm、巾（左右）14.9cm、厚さ3.8cm、重さ510ｇ。

③ 表面と裏面に原状を留める。側面は全て破面。

④ 表面は平坦で、茶褐色を呈する。裏面は瘤状の凹凸をもつ。表裏面ともに多数の鍛造剥片、小粒石、スサ状繊維を含み、一部に錆化した箇所がいくつか見られる。

⑤ 特記事項なし。

19）第60図19

① 鉄塊・E15区

② 長さ（上下）3.7cm、巾（左右）4.5cm、厚さ2.3cm、重さ52ｇ。

③ 原状を留める。

④ 小塊。表面はやや丸みがあり、楕円状の球体をなす。淡黄色で、一部茶褐色を呈する。

⑤ 特記事項なし。

20）第60図20

① 鉄塊・F11区

② 長さ（上下）4.5cm、巾（左右）6.2cm、厚さ2.8cm、重さ86ｇ。

③ 表面と裏面に原状を留める。側面は全て破面。

④ 表裏面ともに瘤状の凹凸が見られる。原形は厚さ1.2cm程度の板状と思われる。茶褐色を呈する。

⑤ 特記事項なし。

21）第60図21

① 鉄塊・Ｌ２区

② 長さ（上下）5.3cm、巾（左右）7.6cm、厚さ4.6cm、重さ258ｇ。

③ ほぼ原状を留める。

④ 表面は瘤状の凹凸があり、不整形な楕円形を呈する。一部に楕円状の破面が見える。

⑤ 特記事項なし。

22）第60図22

① 鉄塊・E13～E14区間あぜ部

② 長さ（上下）7.7cm、巾（左右）8.5cm、厚さ5.5cm、重さ498ｇ。

③ ほぼ原状を留める。

④ 表面は浅い凹凸をもち、不整形な楕円形を呈する。破面は黒褐色を呈する。

⑤ 特記事項なし。

23）第60図23

① 切鉄・E13区

② 長さ（上下）2.8cm、巾（左右）3.3cm、厚さ2.7cm、重さ40ｇ。

③ 表面の一部に原状を留めるものの、その他を欠く。

④ 厚さ１cm程度の板状素材と厚さ５㎜程度の板状素材が接合する。表面は淡黄色を呈すが、素材部分は茶褐色を呈する。

⑤ 特記事項なし。

24）第60図24

① 切鉄・F11区

② 長さ（上下）5.2cm、巾（左右）8.3cm、厚さ３cm、重さ286ｇ。

③ 表面と裏面に原状を留める。側面は全て破面。

④ 表面に瘤状の凹凸がみられるが、原形は板状素材と思われる。

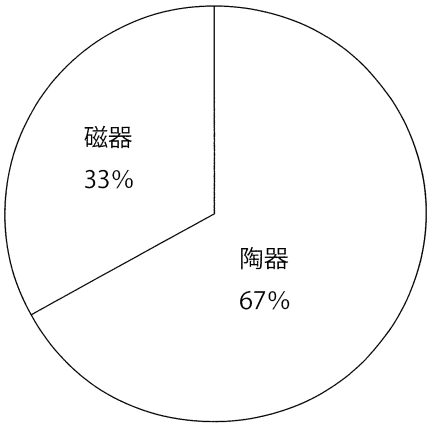
⑤ 特記事項なし。

第４節　近世の出土遺物

中須東原遺跡の近世遺物について、以下に概略を紹介する。近世遺物は陶磁器と瓦が大部分を占め、遺物コンテナ170箱を数える。分類の対象は、遺構出土のものとし、包含層資料は含まない。

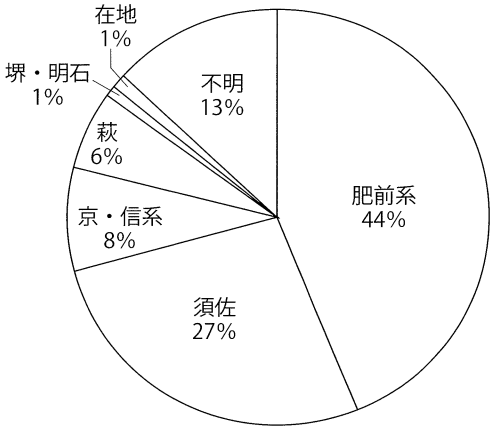
今回集計を行ったのは９遺構であり、総数は破片数で587片を数える（第15表）。

まず、近世の陶器と磁器の比率では、陶器67％、磁器33％と陶器主体の様相が窺え、近世前半期を中心とした遺物群であることが看取できる。このことは出土品の中に、1854年（安政元年）に開窯し津和野藩からも資金援助を受けていた喜阿弥焼（益田市喜阿弥町）や、島根県西部で広く生産された在地系の石見焼等の製品がほとんどみられないことからも明らかである。



第61図　第11次・12次調査における近世陶磁器の比率

陶器製品では、碗・皿（大皿含む）といった器種を中心に、肥前系の製品が主体を占め、地理的にも近い長門の須佐焼や萩焼が補完する構成となっている。ただし、擂鉢をはじめとする鉢類に限っては、須佐焼が主体的な様相を呈し、肥前系や関西系の堺・明石産の擂鉢はごく少量確認される程度である。また、磁器製品では、その大半が肥前系で占められ、1858年に開窯した白上焼（益田市白上町）や、萩市の小畑焼など在地系の磁器製品は含まれていない。



第62図　第11次・12次調査出土の近世陶器の産地別比率

中須東原遺跡で確認された近世遺構を概観すると、その初現は九陶編年Ⅱ期の砂目積み技法をもつ溝縁皿と考えられ、僅かながらも砂目内面蛇ノ目釉剥ぎ皿など17世紀中ごろに比定される肥前系磁器が確認される。近世陶磁器が増加するのは刷毛目碗や呉器手碗、京・信系陶器碗を中心とするⅢ期からで、コンニャク印判技法や陶胎染付碗など磁器製品も一定量認められる。なお、Ⅲ期の特筆すべき遺物として、肥前系の大皿や三彩大皿が挙げられる。18世紀以降では、二重網目文や雨降文、外青磁などⅣ期の磁器碗が主体を占める。Ⅴ期に含まれる遺物として広東碗が出土しているものの、端反碗は認められない。このことから本遺跡の下限は、19世紀初頭までに収まると考えられる。

以上のことを踏まえ、紹介できなかった包含層資料の様相も加味して若干の考察を行いたい。中須東原遺跡の近世陶磁器[2]は、17世紀中ごろから僅かながらも存在が確認され[3]、17世紀後半から18世紀中ごろにかけて盛期を迎えたと考えられる。その後は、18世紀後半から19世紀初頭にかけて減

---

[2] 近世陶磁器の編年に関しては、九陶編年に基づいている。
Ⅰ期　1580～1610年代
Ⅱ期　1600～1650年代（時期の場合は1610～）
Ⅲ期　1650～1690年代
Ⅳ期　1690～1780年代
Ⅴ期　1780～1860年代

[3] 絵唐津や胎土目をもつものがほとんど存在しない。

少傾向となる(4)。また、出土遺物の器種構成から窺える特徴として、農村部の近世遺跡としては陶胎染付の割合が低く、逆に京・信系陶器碗の出土が目立っている。さらに、肥前系の大皿（三彩含む）や肥前青磁の香炉、水滴、瓦質火鉢、燻瓦などの存在から、遺跡に隣接する福王寺関連の遺物群が含まれていることを考慮する必要がある。

第15表　第11次・12次調査 近世遺構出土陶磁器集計表

				11次 SD6	11次 SD7	11次 SD9	12次 SD1	12次 SK18	12次 SK19	12次 SK20	12次 SK37	12次 SK49	小計
陶器	肥前系	碗	呉器手	3			21	5	7	1			37
			刷毛目	1								3	4
			京焼風				1						1
			不明			1	4		1				6
		皿	胎土目皿	1									1
			溝縁皿（砂目）	1			8				1		10
			中皿				4		1				5
			大皿	2			9	2	1		40	2	56
			その他				1						1
		鉢	擂鉢										0
			片口				2						2
			片口（刷毛目）				1			1			2
		壺・甕		6			12	2					20
		仏飯器							1				1
		香炉・火入					3		1				4
	京・信	碗		7			1		2	1		19	30
	萩	碗		1			1		4	1		4	11
		鉢					8						8
		その他・不明					1						1
	須佐	碗	沓型碗				5						5
		鉢	擂鉢	4		1	49	7	9	2			72
			片口				5						5
			捏鉢	2			3		3			2	10
	堺・明	鉢	擂鉢				3						3
	在地	碗											0
		鉢	擂鉢				2						2
		香炉・火入					1						1
	その他・不明			2		4	10	8	4	3	1	12	44
磁器	肥前系	碗	小碗				2					1	3
			中碗	4		1	6	2	13	3	1	23	53
			白磁					3	3				6
			陶胎染付	3			1		2			10	16
			くらわんか				1					2	3
			猪口				3		3	2		2	10
			小杯				1		1			2	4
		皿	小皿										0
			中皿		1	1	3	1		1		9	16
			白磁皿	1			3						4
		瓶		3			3		1			2	9
		型物（水滴）						1					1
	その他・不明			1			1	9				9	20
炻器	備前	徳利（ぺこかん）		1									1
瓦質	佐野	甕					4		20		7	1	32
土器	在地	ほうろく		1					2	1		1	5
燻瓦				38	11			6	7				62
合計				82	12	8	183	46	86	16	50	104	587

(4) 遺物包含層の陶磁器も同じ傾向である。

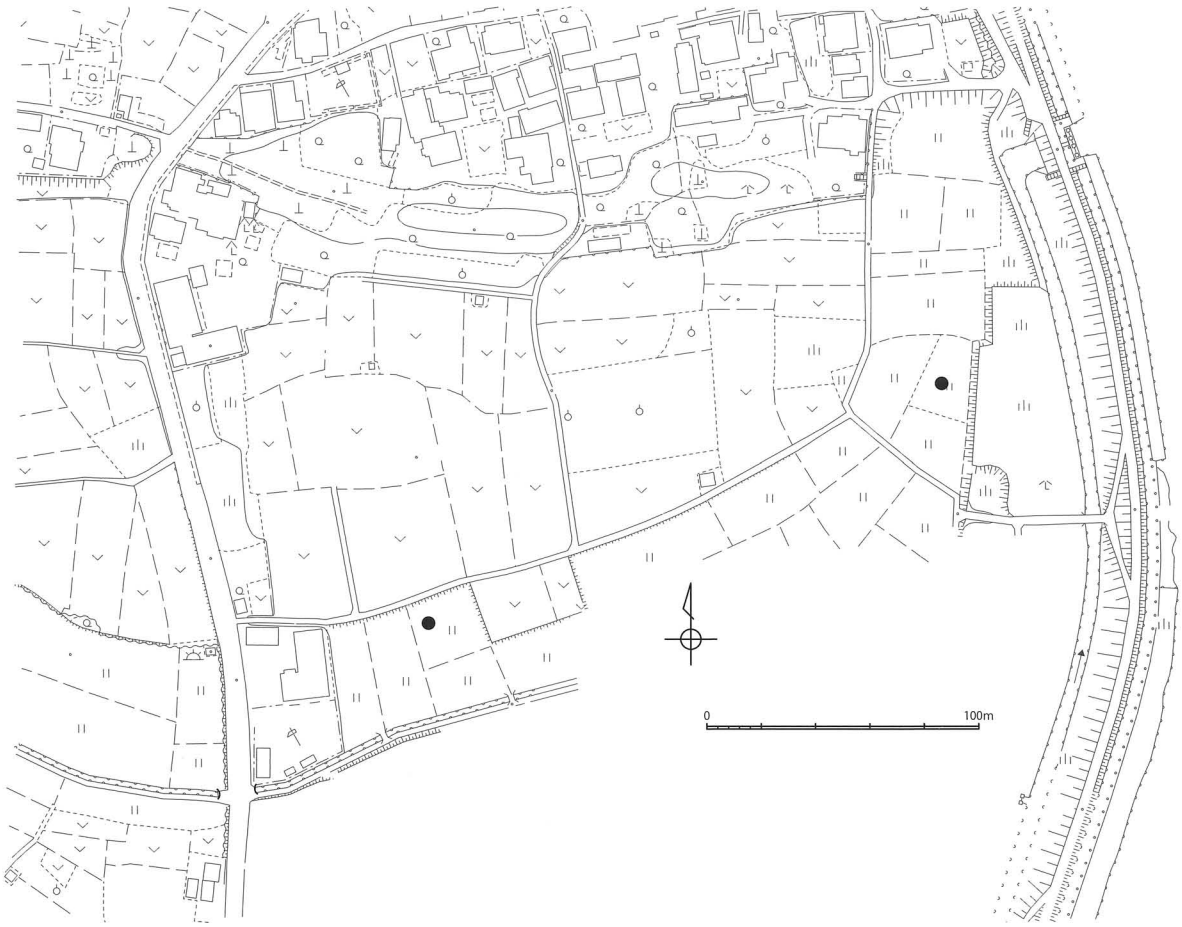
第４章　自然科学分析

第１節　放射性炭素年代測定

中須東原遺跡内におけるボーリング調査で採取した土壌資料について、株式会社地球科学研究所に依頼し、AMS法（加速器質量分析法）による放射性炭素分析（C14分析）による年代測定を行った。

この測定結果については、次頁のとおりである。

分析資料の採取地は、第63図のとおりである。



第63図　ボーリング箇所位置図

No.25231

益田市教育委員会　　様

(株)地球科学研究所

件名：中須東原遺跡発掘調査に係る放射性炭素年代測定業務

放射性炭素年代測定の依頼を受けました試料について、別表の結果を得ましたのでご報告申し上げます。

報告内容の説明

未補正14C年代 (y BP) ：(同位体分別未補正) 14C 年代 "measured radiocarbon age"
試料の 14C／12C 比から、単純に現在(AD1950年)から何年前(BP)かを計算した年代。

14C年代 (y BP) ：(同位体分別補正) 14C 年代 "conventional radiocarbon age"
試料の炭素安定同位体比(13C／12C)を測定して試料の炭素の同位体分別を知り
14C／12C の測定値に補正値を加えた上で、算出した年代。
試料のδ13 C値を-25(‰)に基準化することによって得られる年代値である。
(Stuiver,M. and Polach,H.A.(1977) Discussion:Reporting of 14C data. Radiocarbon, 19 を参照のこと)
暦年代を得る際にはこの年代値をもちいる。

δ 13C (permil) ：この安定同位体比は、下式のように標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)で表現する。

$$\delta\ ^{13}C\ (‰) = \frac{(\ ^{13}C/\ ^{12}C)[試料] - (\ ^{13}C/\ ^{12}C)[標準]}{(\ ^{13}C/\ ^{12}C)[標準]} \times 1000$$

ここで、 13C／12C [標準] ＝ 0.0112372である。

暦 年 代 ：過去の宇宙線強度の変動による大気中14C 濃度の変動に対する補正により、暦年代を算出する。　具体的には年代既知の樹木年輪の 14C の測定、サンゴのU-Th年代と14 C年代の比較、湖の縞状堆積物の年代測定により補正曲線を作成し、暦年代を算出する。

使用したデータセット ： Intcal09
Heaton,et.al.,2009, Radiocarbon 51(4):1151-1164,
Reimer,et.al, 2009, Radiocarbon 51(4):1111-1150,
Stuiver,et.al,1993, Radiocarbon 35(1):137-189, Oeschger,et.al.,1975,Tellus 27:168-19
(海洋性の試料に対しては、Marine09を使用)

較正曲線のスムース化に用いた理論
A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates
Talma, A.S., Vogel,J.C.,1993,Radiocarbon 35(2), 317-322

測定方法などに関するデータ

測定方法　AMS ： 加速器質量分析

処理・調製・その他 ： 試料の前処理、調製などの情報

前処理　acid-alkali-acid ： 酸 - アルカリ - 酸洗浄
acid washes ： 酸洗浄
acid etch ： 酸によるエッチング
none ： 未処理

調製、その他
Bone Collagen Extraction ： 骨、歯などのコラーゲン抽出
Cellulose Extraction ： 木材のセルローズ抽出

分析機関　BETA ANALYTIC INC.
4985 SW 74 Court, Miami, Fl, U.S.A 33155

Radiocarbon Dating Report　　Geo Science Laboratory

C14年代測定結果

益田市教育委員会 **様** No.25231

試料データ	未補正14C年代(y BP) (measured radiocarbon age)	δ13C(permil)	14C年代(y BP) (Conventional radiocarbon age)
Beta- 342661	480 ± 30	-26.9	450 ± 30

試料名 (43259) NHR-Tr
測定方法、期間 AMS-Standard
試料種、前処理など plant material acid/alkali/acid
2sigma calendar: Cal AD 1420 to 1460 (Cal BP 530 to 490)

Beta- 342662	7220 ± 40	-25.8	7210 ± 40

試料名 (43260) NHR-B1-09-26
測定方法、期間 AMS-Standard
試料種、前処理など plant material acid/alkali/acid
2sigma calendar: Cal BC 6210 to 6190 (Cal BP 8160 to 8140),Cal BC 6180 to 6170 (Cal BP 8130 to 8120),Cal BC 6160 to 6140 (Cal BP 8110 to 8090),Cal BC 6110 to 6010 (Cal BP 8060 to 7960)

Beta- 342663	7040 ± 40	-22.3	7080 ± 40

試料名 (43261) NHR-B1-10-17
測定方法、期間 AMS-Standard
試料種、前処理など plant material acid/alkali/acid
2sigma calendar: Cal BC 6020 to 5890 (Cal BP 7970 to 7840)

Beta- 342664	7360 ± 30	-25.9	7350 ± 30

試料名 (43262) NHR-B1-10-87
測定方法、期間 AMS-Standard
試料種、前処理など plant material acid/alkali/acid
2sigma calendar: Cal BC 6250 to 6210 (Cal BP 8200 to 8160),Cal BC 6190 to 6180 (Cal BP 8140 to 8130),Cal BC 6170 to 6160 (Cal BP 8120 to 8110),Cal BC 6140 to 6110 (Cal BP 8090 to 8060)

Beta- 342665	7380 ± 40	-28.1	7330 ± 40

試料名 (43263) NHR-B1-11-28
測定方法、期間 AMS-Standard
試料種、前処理など plant material acid/alkali/acid
2sigma calendar: Cal BC 6250 to 6080 (Cal BP 8200 to 8030)

年代値はRCYBP(1950 A.D.をO年とする)で表記。モダン リファレンス スタンダードは国際的な慣例としてNBS Oxalic AcidのC14濃度の95%を使用し、半減期はリビーの5568年を使用した。エラーは1シグマ(68%確率)である。

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12=-26.9:lab. mult=1)

Laboratory number: **Beta-342661**

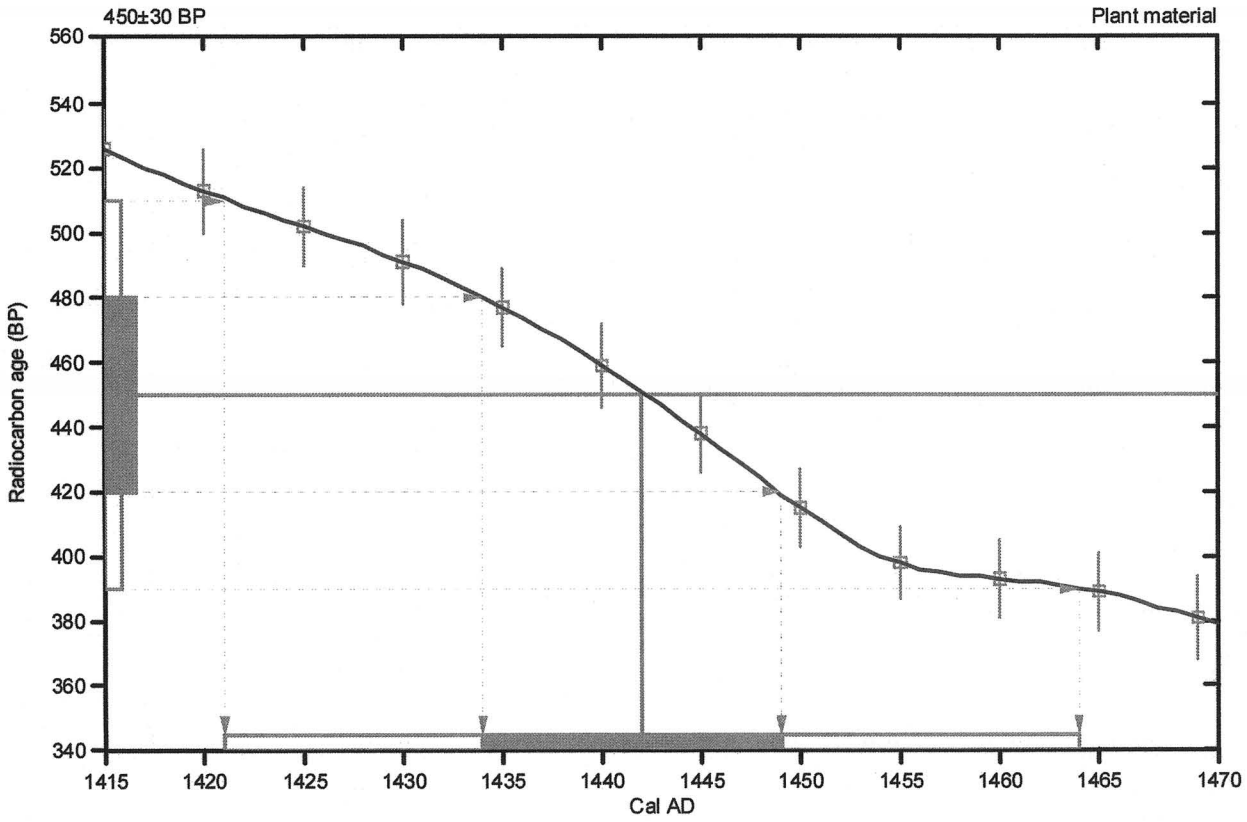
Conventional radiocarbon age: **450±30 BP**

2 Sigma calibrated result: (95% probability) **Cal AD 1420 to 1460 (Cal BP 530 to 490)**

Intercept data

Intercept of radiocarbon age with calibration curve: Cal AD 1440 (Cal BP 510)

1 Sigma calibrated result: (68% probability) Cal AD 1430 to 1450 (Cal BP 520 to 500)



References:

Database used

INTCAL09

References to INTCAL09 database

Heaton,et.al.,2009, Radiocarbon 51(4):1151-1164, Reimer,et.al, 2009, Radiocarbon 51(4):1111-1150, Stuiver,et.al,1993, Radiocarbon 35(1):137-189, Oeschger,et.al.,1975,Tellus 27:168-192

Mathematics used for calibration scenario

A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates
Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2):317-322

Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

4985 S.W. 74th Court, Miami, Florida 33155 • Tel: (305)667-5167 • Fax: (305)663-0964 • E-Mail: beta@radiocarbon.com

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12=-25.8:lab. mult=1)

Laboratory number: **Beta-342662**

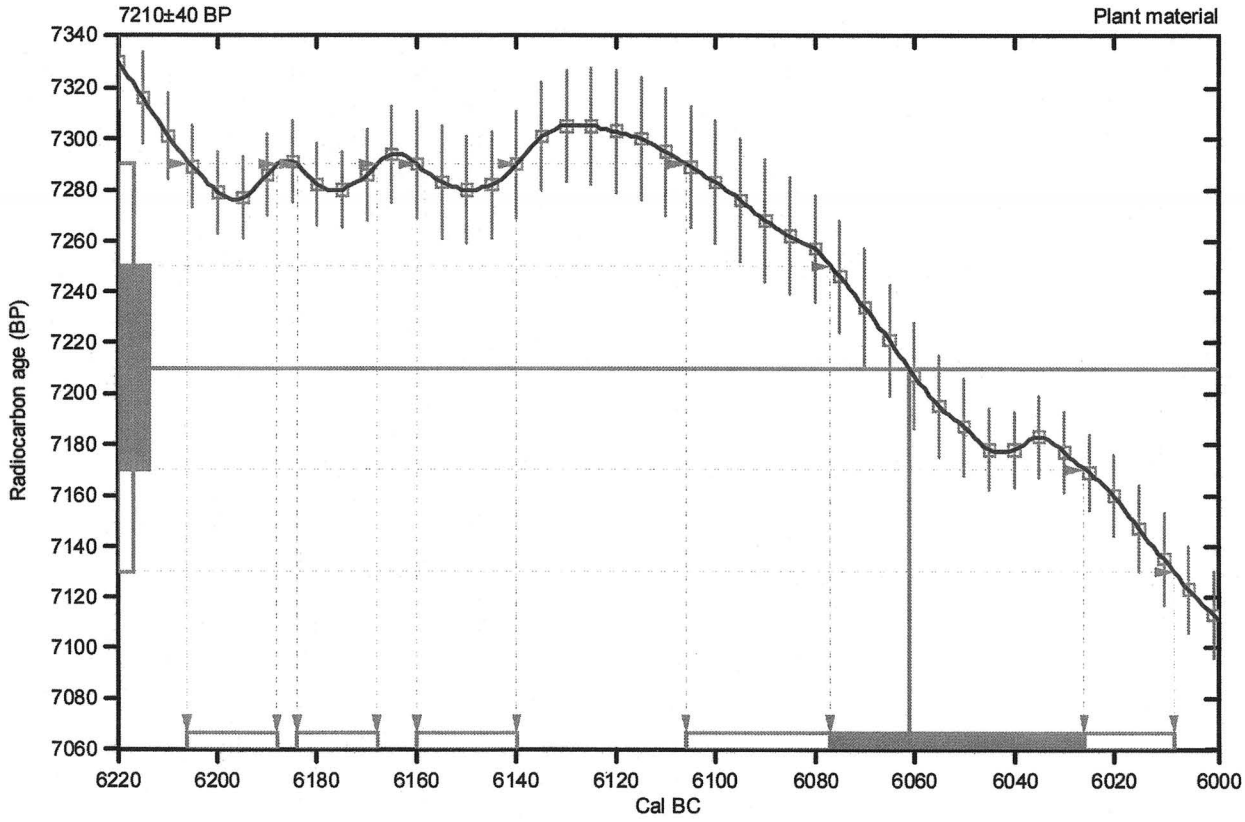
Conventional radiocarbon age: **7210±40 BP**

2 Sigma calibrated results: (95% probability) **Cal BC 6210 to 6190 (Cal BP 8160 to 8140) and Cal BC 6180 to 6170 (Cal BP 8130 to 8120) and Cal BC 6160 to 6140 (Cal BP 8110 to 8090) and Cal BC 6110 to 6010 (Cal BP 8060 to 7960)**

Intercept data

Intercept of radiocarbon age with calibration curve: Cal BC 6060 (Cal BP 8010)

1 Sigma calibrated result: (68% probability) Cal BC 6080 to 6030 (Cal BP 8030 to 7980)



References:

Database used

INTCAL09

References to INTCAL09 database

Heaton,et.al.,2009, Radiocarbon 51(4):1151-1164, Reimer,et.al, 2009, Radiocarbon 51(4):1111-1150, Stuiver,et.al,1993, Radiocarbon 35(1):137-189, Oeschger,et.al.,1975,Tellus 27:168-192

Mathematics used for calibration scenario

A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates
Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2):317-322

Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

4985 S.W. 74th Court, Miami, Florida 33155 • Tel: (305)667-5167 • Fax: (305)663-0964 • E-Mail: beta@radiocarbon.com

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12=-22.3:lab. mult=1)

Laboratory number: **Beta-342663**

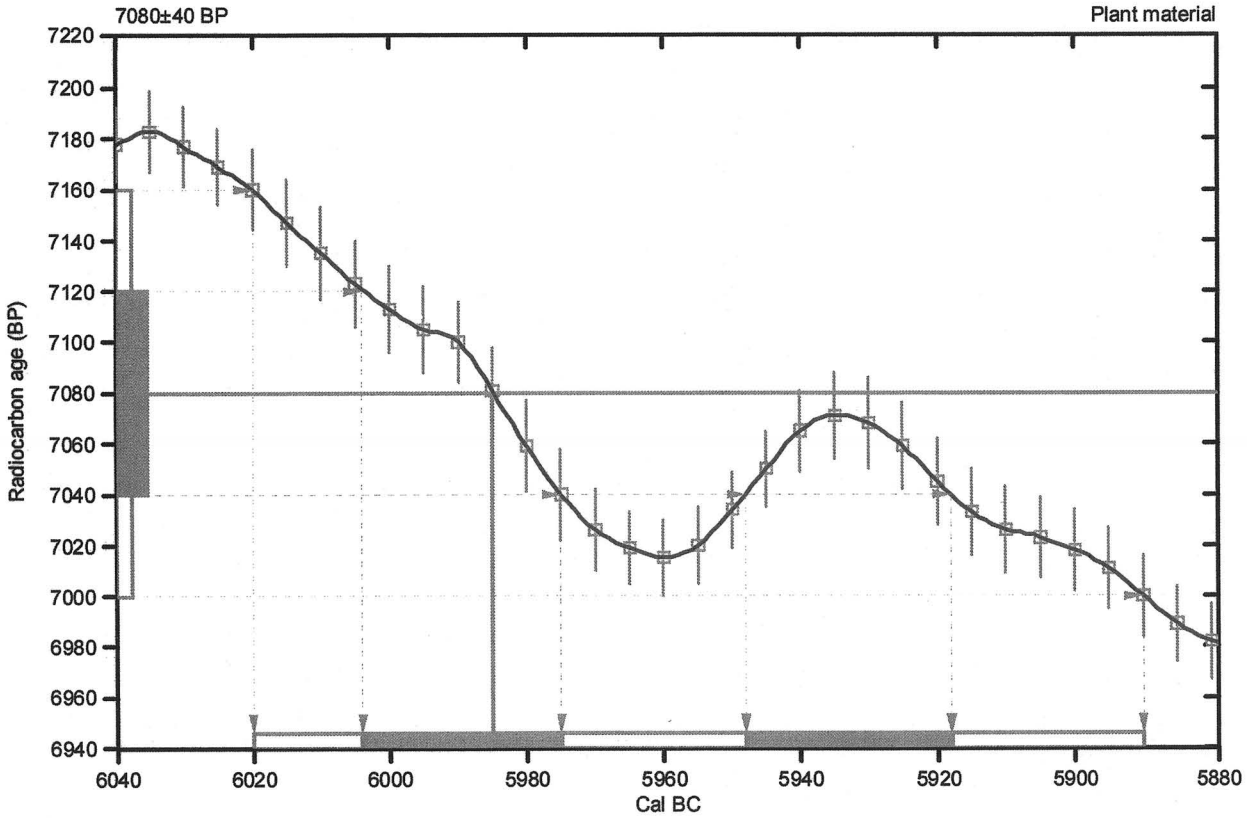
Conventional radiocarbon age: **7080±40 BP**

2 Sigma calibrated result: (95% probability) **Cal BC 6020 to 5890 (Cal BP 7970 to 7840)**

Intercept data

Intercept of radiocarbon age with calibration curve: Cal BC 5980 (Cal BP 7940)

1 Sigma calibrated results: (68% probability) Cal BC 6000 to 5980 (Cal BP 7950 to 7920) and Cal BC 5950 to 5920 (Cal BP 7900 to 7870)



References:

Database used

INTCAL09

References to INTCAL09 database

Heaton,et.al.,2009, Radiocarbon 51(4):1151-1164, Reimer,et.al, 2009, Radiocarbon 51(4):1111-1150, Stuiver,et.al,1993, Radiocarbon 35(1):137-189, Oeschger,et.al.,1975,Tellus 27:168-192

Mathematics used for calibration scenario

A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates
Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2):317-322

Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

4985 S.W. 74th Court, Miami, Florida 33155 • Tel: (305)667-5167 • Fax: (305)663-0964 • E-Mail: beta@radiocarbon.com

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12=-25.9:lab. mult=1)

Laboratory number: **Beta-342664**

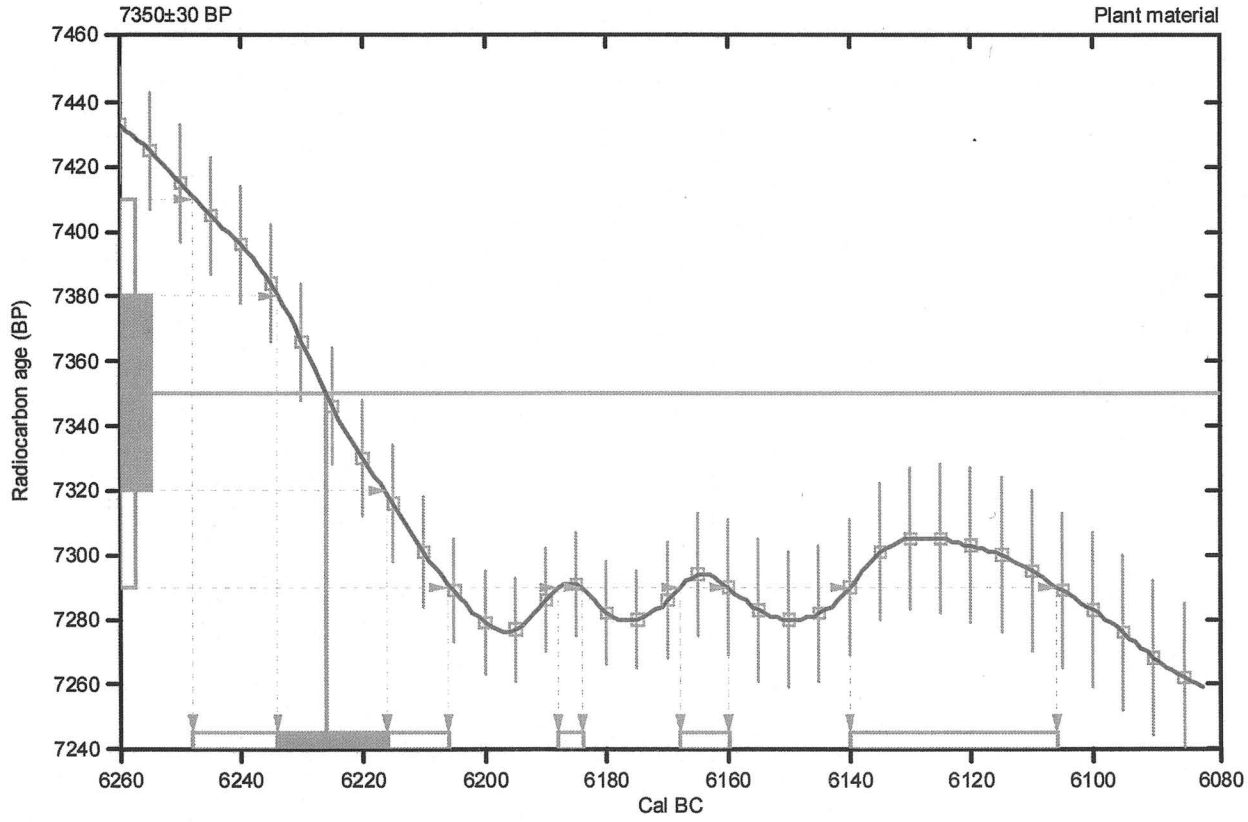
Conventional radiocarbon age: **7350±30 BP**

2 Sigma calibrated results: (95% probability) **Cal BC 6250 to 6210 (Cal BP 8200 to 8160) and Cal BC 6190 to 6180 (Cal BP 8140 to 8130) and Cal BC 6170 to 6160 (Cal BP 8120 to 8110) and Cal BC 6140 to 6110 (Cal BP 8090 to 8060)**

Intercept data

Intercept of radiocarbon age with calibration curve: Cal BC 6230 (Cal BP 8180)

1 Sigma calibrated result: (68% probability) Cal BC 6230 to 6220 (Cal BP 8180 to 8170)



References:

Database used

INTCAL09

References to INTCAL09 database

Heaton,et.al.,2009, Radiocarbon 51(4):1151-1164, Reimer,et.al, 2009, Radiocarbon 51(4):1111-1150, Stuiver,et.al,1993, Radiocarbon 35(1):137-189, Oeschger,et.al.,1975,Tellus 27:168-192

Mathematics used for calibration scenario

A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates
Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2):317-322

Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

4985 S.W. 74th Court, Miami, Florida 33155 • Tel: (305)667-5167 • Fax: (305)663-0964 • E-Mail: beta@radiocarbon.com

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12=-28.1:lab. mult=1)

Laboratory number: **Beta-342665**

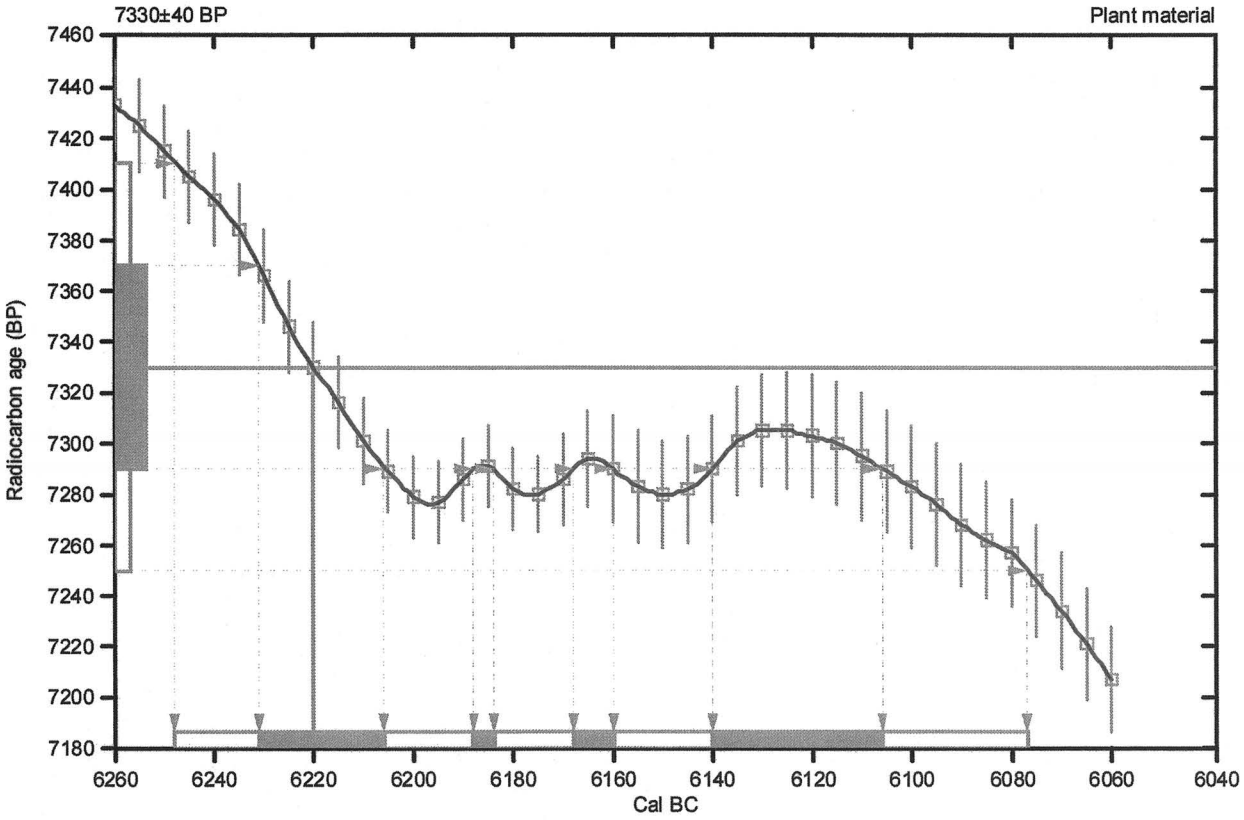
Conventional radiocarbon age: **7330±40 BP**

2 Sigma calibrated result: (95% probability) **Cal BC 6250 to 6080 (Cal BP 8200 to 8030)**

Intercept data

Intercept of radiocarbon age with calibration curve: Cal BC 6220 (Cal BP 8170)

1 Sigma calibrated results: (68% probability) Cal BC 6230 to 6210 (Cal BP 8180 to 8160) and Cal BC 6190 to 6180 (Cal BP 8140 to 8130) and Cal BC 6170 to 6160 (Cal BP 8120 to 8110) and Cal BC 6140 to 6110 (Cal BP 8090 to 8060)



References:

Database used

INTCAL09

References to INTCAL09 database

Heaton,et.al.,2009, Radiocarbon 51(4):1151-1164, Reimer,et.al, 2009, Radiocarbon 51(4):1111-1150, Stuiver,et.al,1993, Radiocarbon 35(1):137-189, Oeschger,et.al.,1975,Tellus 27:168-192

Mathematics used for calibration scenario

A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates
Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2):317-322

Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

4985 S.W. 74th Court, Miami, Florida 33155 • Tel: (305)667-5167 • Fax: (305)663-0964 • E-Mail: beta@radiocarbon.com

第５章　総括

第１節　集落の変遷、構造について

１．はじめに

１次から14次に及ぶ発掘調査において、12世紀代から19世紀代に至るかなりの時期幅を持った遺物が出土し、遺構も高密度で検出されることから、複数時期にわたって集落が営まれていたことは容易に推測されるところである。しかしながら、16世紀以前における遺物の出土はその大半が包含層中であること、検出した遺構に埋土の違いなどから複数時期の存在が認められるものの同一面での混在検出かつ時期を特定できる遺構が少ないことから、遺構から集落の変遷を理解するのは容易ではない。

遺跡は総面積40,000m^{2}を超えるものと推定されており、これまでに調査を行った範囲はそれから見れば極めて限定的な範囲でしかないが、現時点で得られた資料を基に、明らかになったことを整理するとともに、若干の考察と課題の提示をしてまとめとしたい。

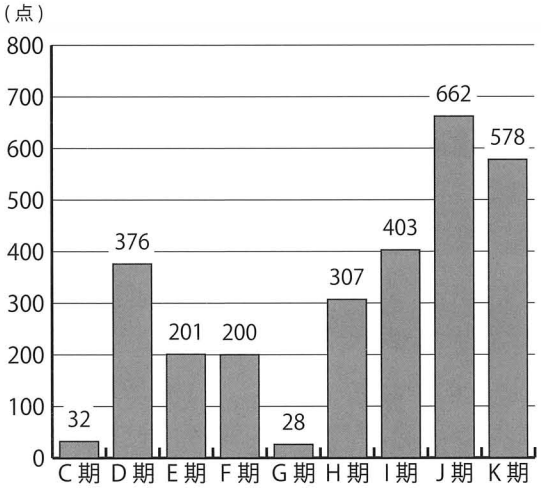
２．出土遺物から見た集落の消長と変遷

調査において確認された遺物は、青磁・白磁・青花・土師質土器・瓦質土器・木製品・鍛冶関連遺物など多岐にわたる。このほか、弥生土器や須恵器などの古代以前の遺物も若干ではあるが出土している。

このうち、交易の物証の一つであり、時期判断が比較的可能な貿易陶磁器を中心として、時期別・種類別の分布状況とその消長から集落の変遷について考えてみたい(1)。

第64図は貿易陶磁器出土数の時期別の推移を示したものである。また、第65～69図は、貿易陶磁器（青磁・白磁・青花）の時期毎の分布と奢侈品(2)、朝鮮陶磁器、土師質土器、土錘の分布状況を示したものである。

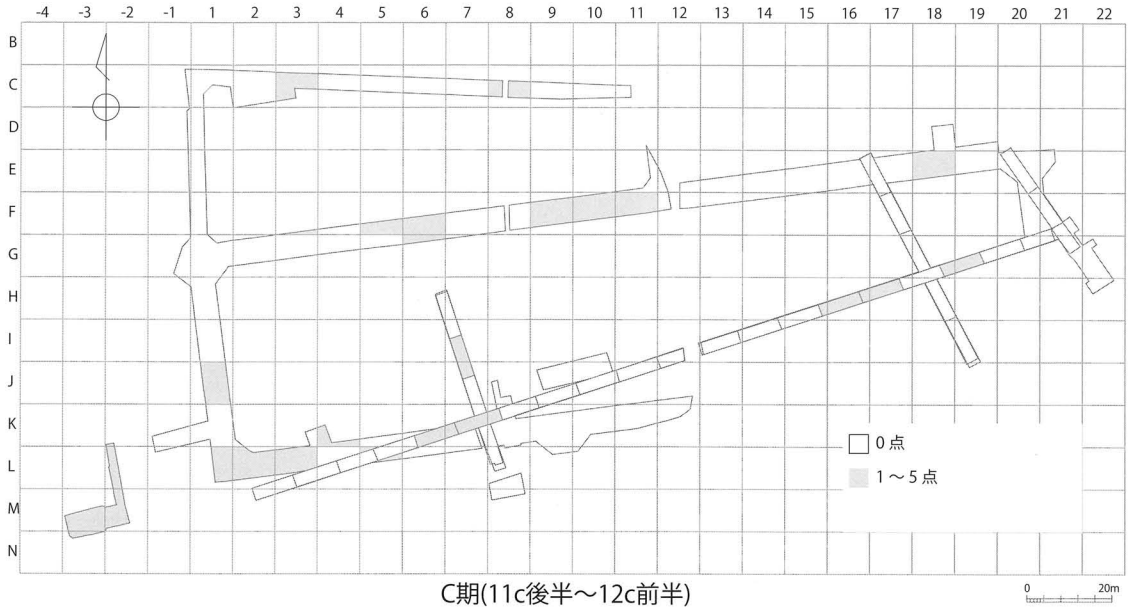
12世紀前半までは遺物出土量はごくわずかである。遺跡中央部、南西部、南東部に散見されるにすぎず、集落が形成されていたと積極的に言える状況にはない。



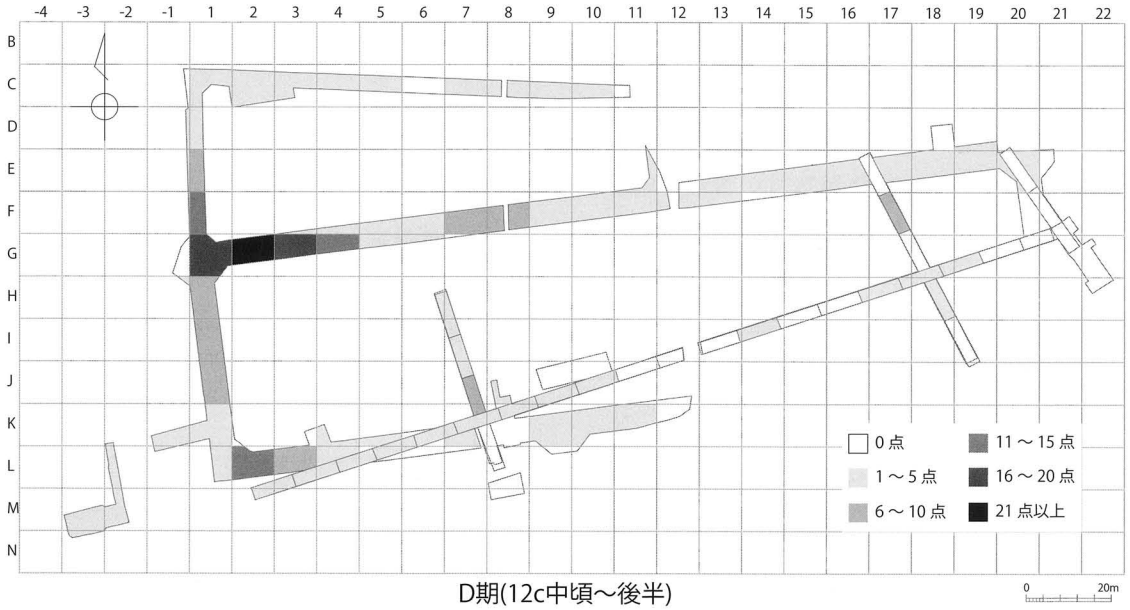
第64図　貿易陶磁器の時期別出土数

(1) 貿易陶磁器の編年に関しては、山本2010編年に基づいている。
C期……11世紀後半～12世紀前半
D期……12世紀中頃～12世紀後半
E期……13世紀初頭前後～13世紀前半
F期……13世紀中頃～14世紀初頭前後
G期……14世紀初頭～14世紀中頃
H期……14世紀後半～15世紀前半
I期……15世紀中頃～15世紀後半
J期……15世紀末～16世紀前半・中頃
K期……16世紀中頃・後半～17世紀前半

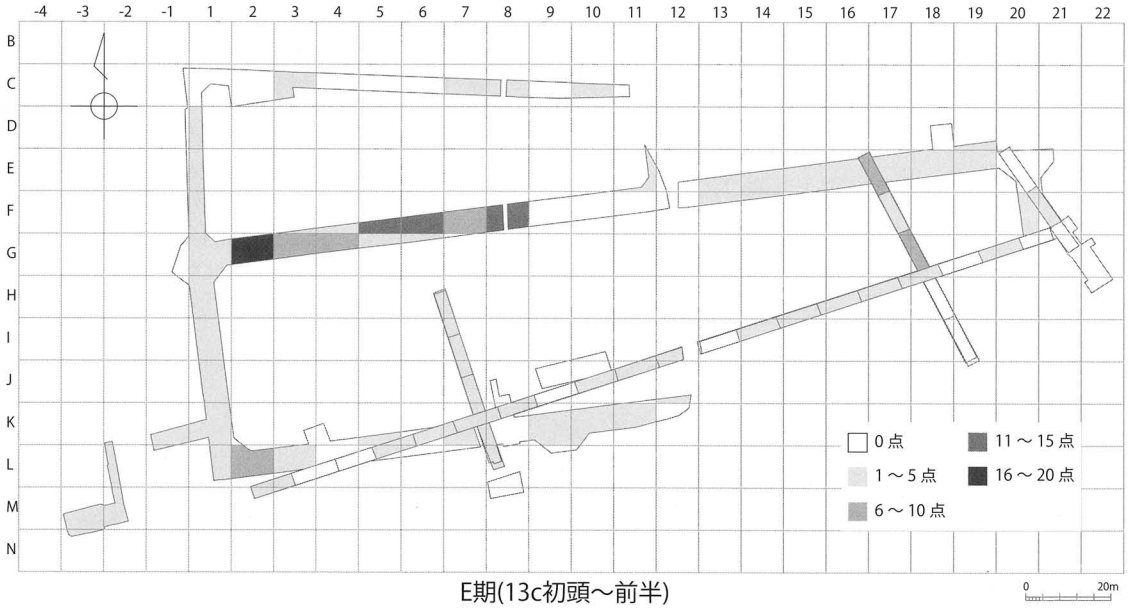
(2) 本報告では、青白磁合子、天目茶碗、茶入、青磁香炉・花生を奢侈品として抽出・分類した。



C期(11c後半～12c前半)

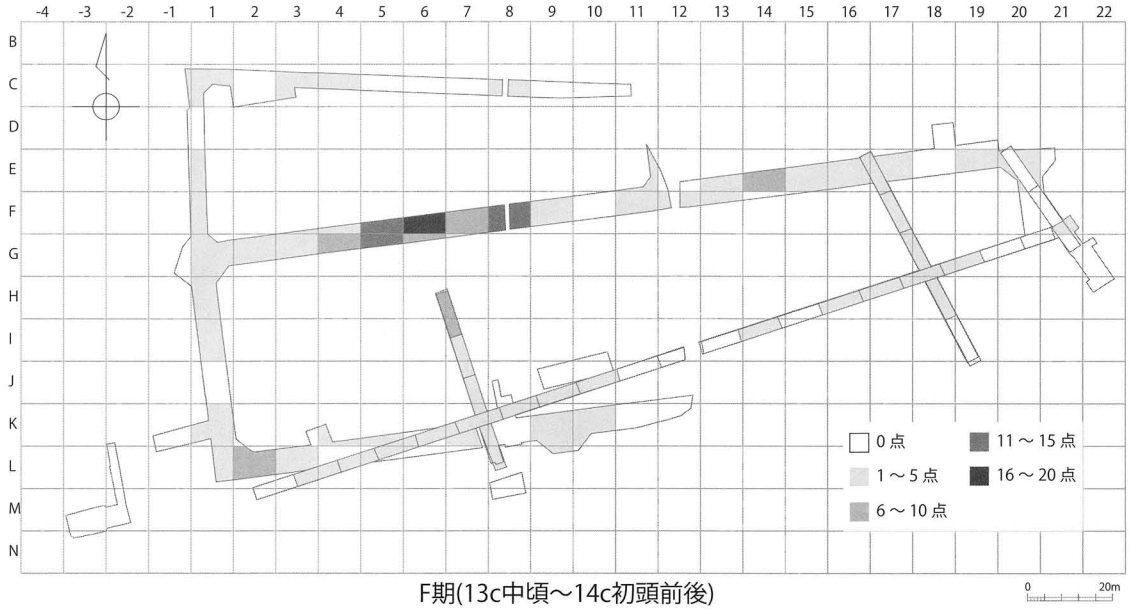


D期(12c中頃～後半)

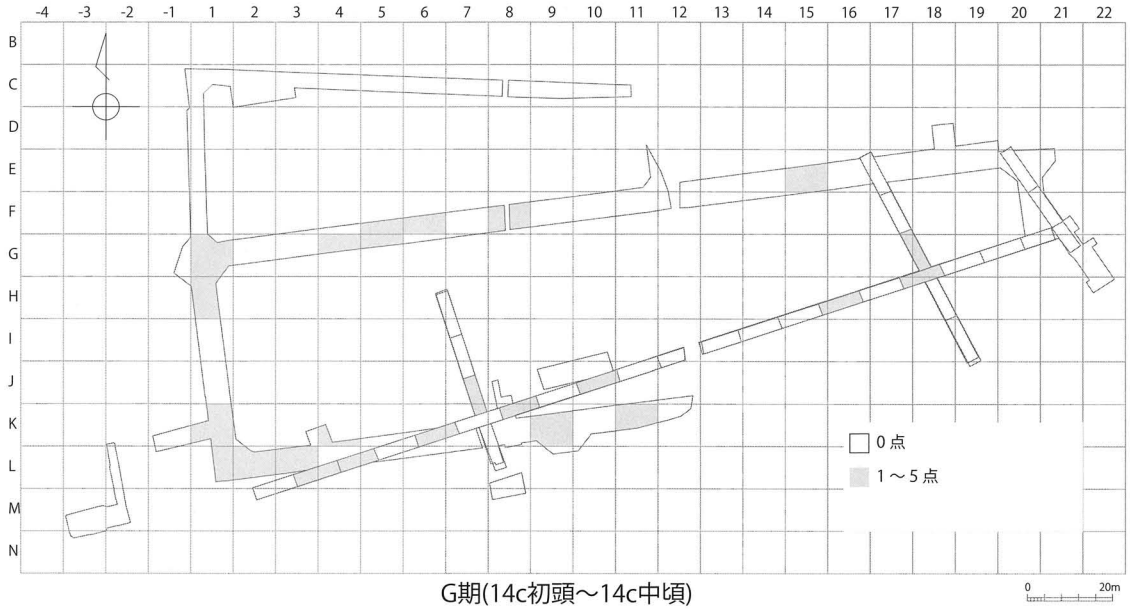


E期(13c初頭～前半)

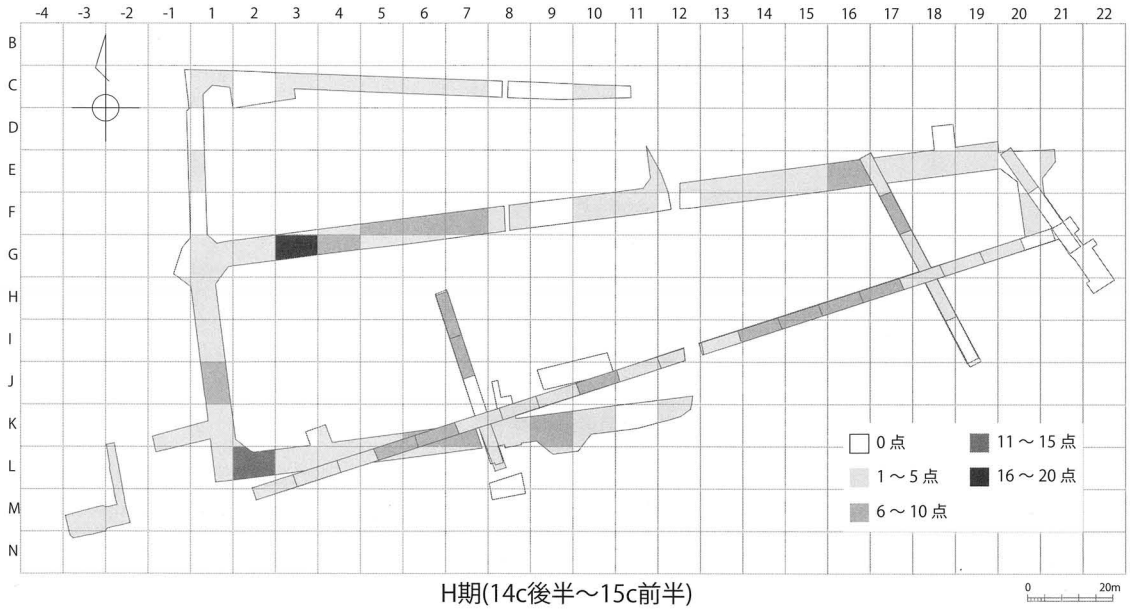
第65図　貿易陶磁器出土分布図１（C～E期）



F期(13c中頃～14c初頭前後)

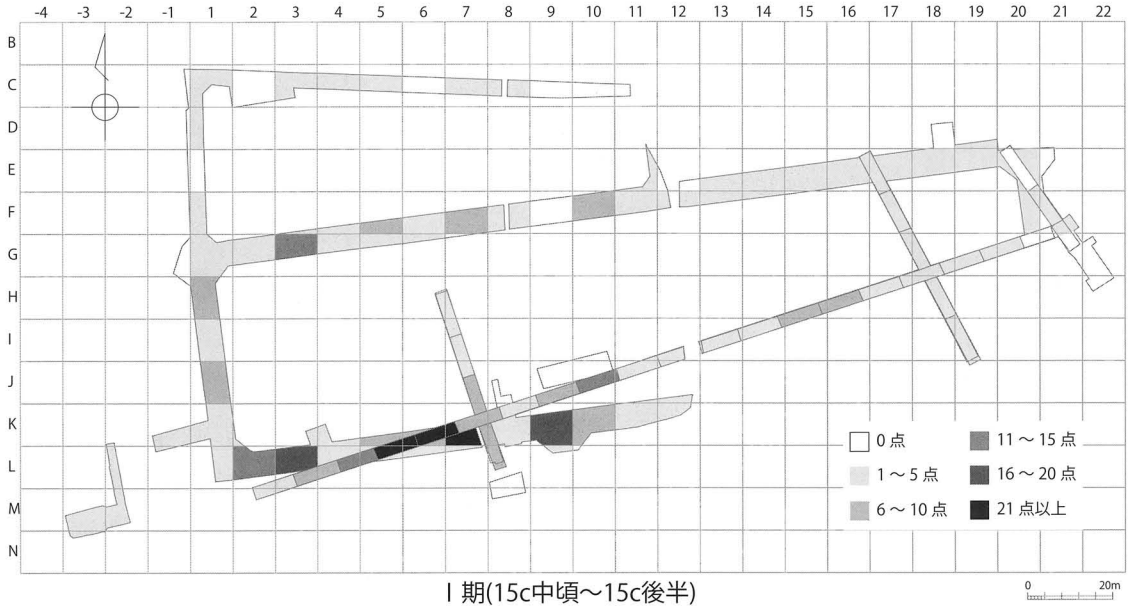


G期(14c初頭～14c中頃)

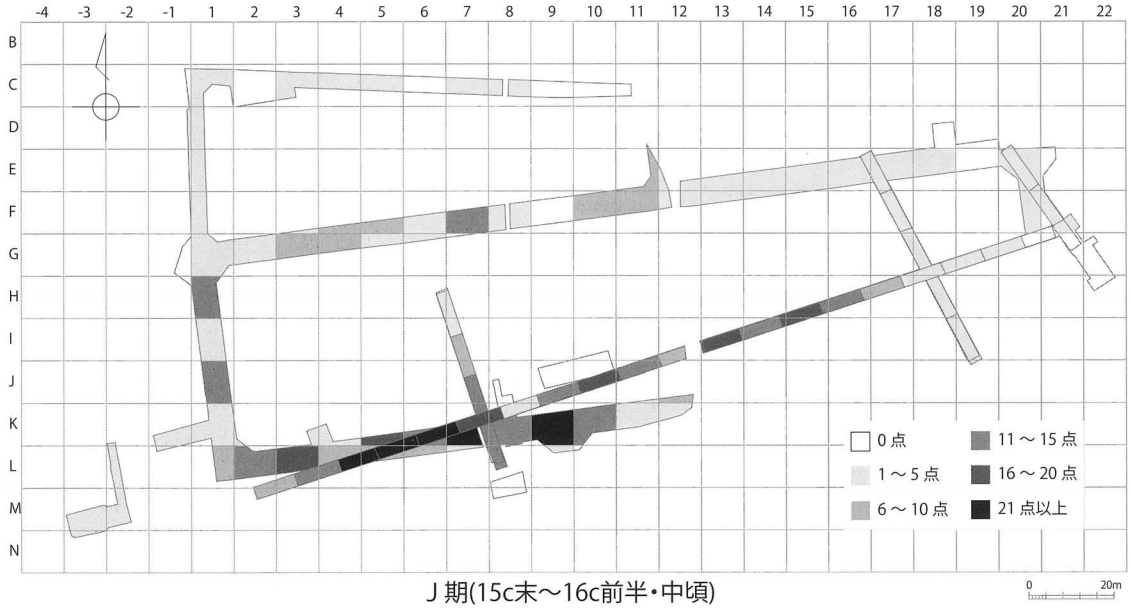


H期(14c後半～15c前半)

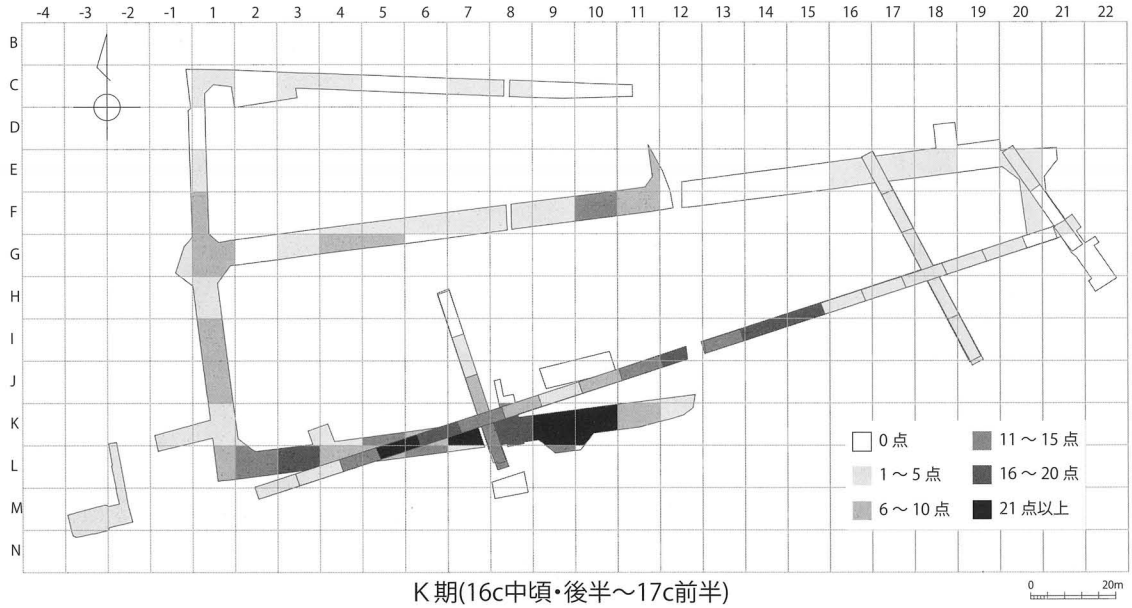
第66図　貿易陶磁器出土分布図２（F～H期）



Ⅰ期(15c中頃～15c後半)

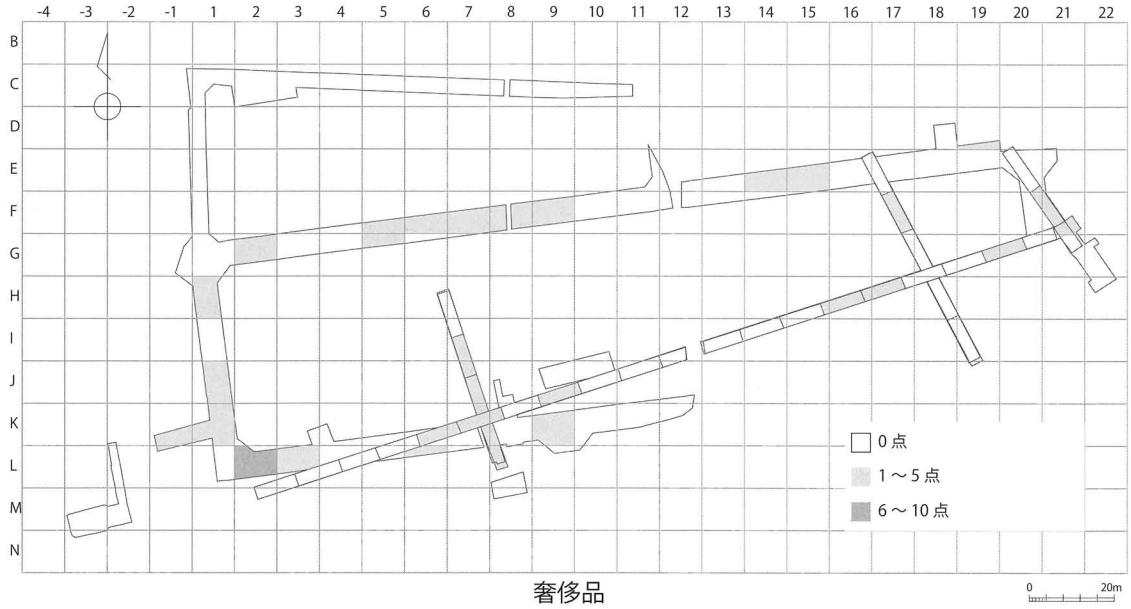


J期(15c末～16c前半・中頃)

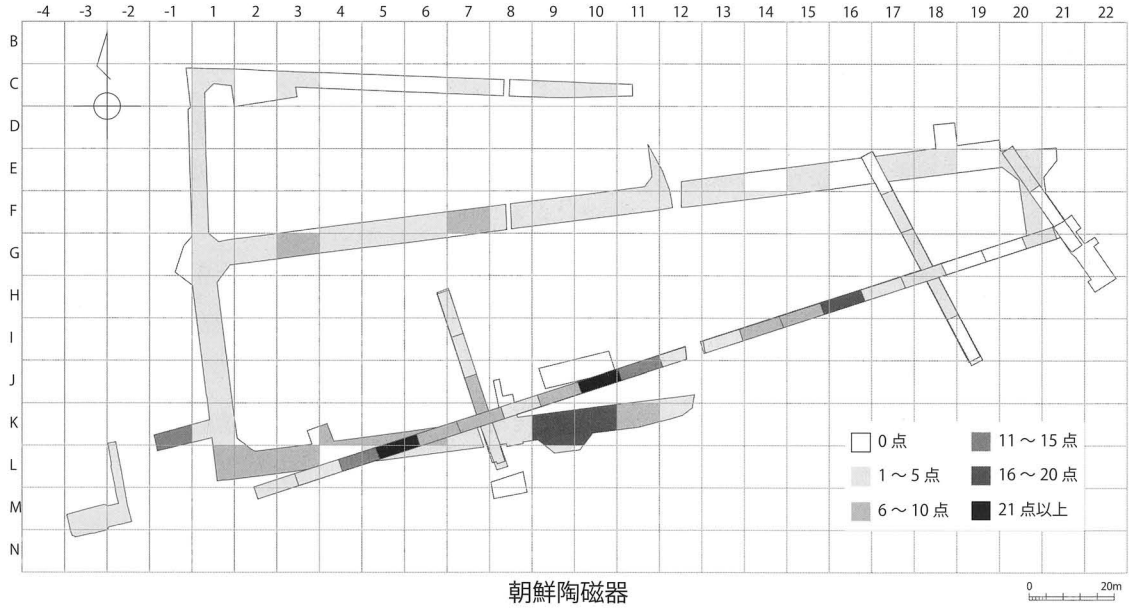


K期(16c中頃・後半～17c前半)

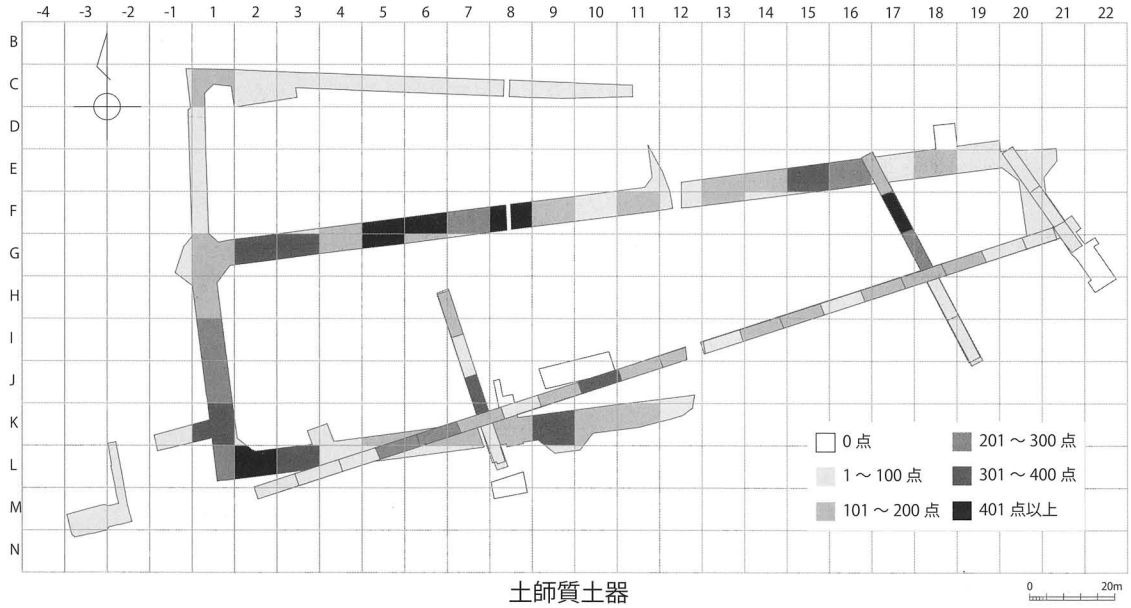
第67図　貿易陶磁器出土分布図３（Ⅰ～K期）



奢侈品

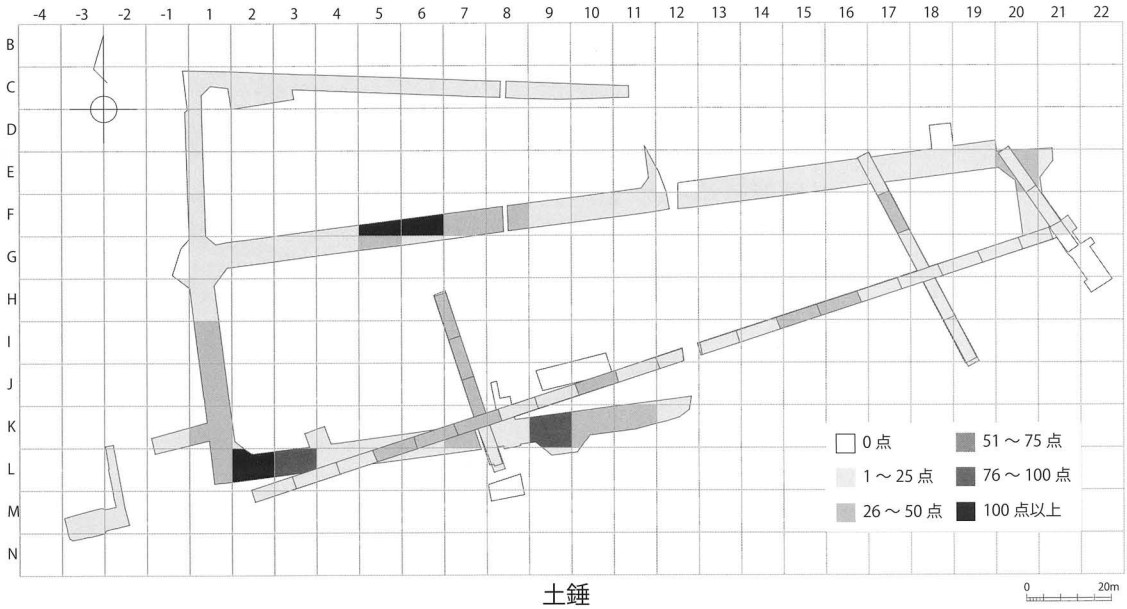


朝鮮陶磁器



土師質土器

第68図　出土遺物分布図１（奢侈品・朝鮮陶磁器・土師質土器）



土錘

第69図　出土遺物分布図２（土錘）

12世紀中頃以降後半にかけて、出土陶磁器の急激な増加が見られる。その分布は、西区西部のG2・L2周辺を中心とする砂丘先端部に密で、特にG2周辺で顕著である。この時期に集落が形成された可能性が高く、かつ中世前半における盛行期でもある。

続く13世紀から14世紀にかけては、集落の停滞期ともいえる様相を呈している。13世紀前半に遺物量が前期から半減近く落ち込むものの、14世紀初頭にかけては一定の出土量を保っている。分布域は、その中心を前期からは東に移動していく。

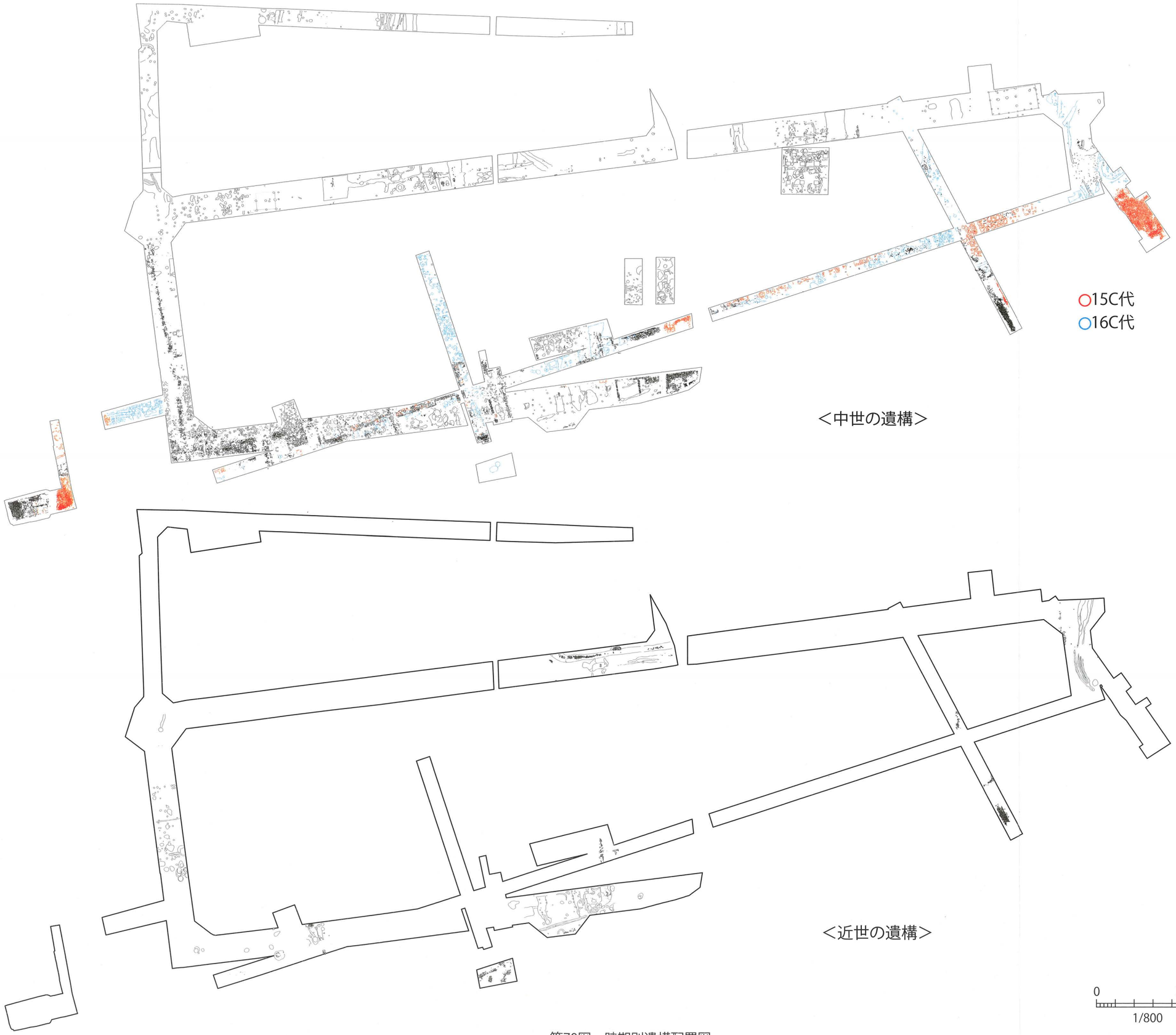
14世紀以前（中世前半）は、全域で遺物が散見されるものの、その中心は遺跡の内陸部、西区中央部から東区北部にかけての一帯とみることができよう。

14世紀初頭から14世紀中頃にかけては、中世前半における衰退期、集落における空白期ともいえるほど出土量の落ち込みを見せている。今のところ、この事象に関する特定の要因は見いだせないが、社会的（政治的・経済的）要因と自然環境の変化によるものとの２つがあげられよう。

14世紀後半以降、急激な出土量の増加に転じ、盛行期に移行したことが窺える。集落の中心は、K7～K9を中心とする南側の汀線沿いに移行しており、この場所で15世紀末から16世紀中頃に最盛期を迎える。

以後、遺物量は減少に転じ、貿易陶磁器に替わって肥前系陶磁器を中心とした遺物群が19世紀初頭まで確認できる。17世紀後半から18世紀中頃に集落として３度目の盛期を迎えたと考えられるが、間断なく続いていたのではなく、17世紀前半に空白期ともいえる時期があったことが窺われる。また、寺院関連の遺物も多く含まれており、近世期における集落のあり方が変容した可能性も考えねばならない。

以上のことをあらためて集落全体で見ると、集落の形成は、12世紀中頃以降に開始され、現在の福王寺周辺を中心とする内陸西部に12世紀後半には一応の完成をみる。その後、中心を東に移しながら14世紀中頃には急速に衰退し画期を迎える。14世紀後半以降中心をやや南に変えて再開され、16世紀初頭まで当時の汀線近くへ徐々に拡大を続け最盛期を迎える。16世紀中頃以降、急激な港としての縮小はないものの、衰退していったものと考えられ、17世紀前半に次の画期を迎えて近世に



第70図　時期別遺構配置図

第16表　中須東原遺跡出土遺物集計表

種類		器種		時期	破片数	合　計	
中国製品	青磁	碗	龍Ⅰ	D	182		
			龍Ⅳ	G	2		
			同Ⅰ	D	96		
			同Ⅱ	D	2		
			同Ⅲ	D	7		
			B0	F	2		
			B1	E	194		
			B2	H	54		
			B3	I	44		
			B4	I・J	163		
			C2	H	25		
			C3	I	10		
			D	H～J	100		
			E	H・I	36		
			粗悪品		24		
			不明		486		
		Ⅲ・坏	同Ⅲ Ⅰ	D	81		
			龍Ⅲ		17		
			景Ⅲ	J	19		
			稜花Ⅲ	I・J	51		
			小坏		6		
			坏Ⅲ	F	9		
			坏Ⅳ	G	15		
			坏Ⅲ・Ⅳ	F・G	5		
			坏		53		
			その他		2		
			不明		55		
		盤			14		
		小碗			1		
		その他			7		
		不明			557	2,319	
	青白磁	合子			12		
		その他			2		
		不明			7	21	
	白磁	碗・Ⅲ	Ⅳ	C	12		
			Ⅴ	C	20		
			Ⅶ	D	1		
			Ⅷ	D・E	14		
			Ⅸ（A）	F	186		
			B・C	G	8		
			D	H	157		
			E	I～K	573		
			小杯	J	13		
			菊Ⅲ	J	5		
			その他		4		
			不明		273		
		壺			15		
		不明			14	1,295	
	青花	碗	B	H	20		
			C	J	156		
			D	J	17		
			E	K	92		
			不明		152		
		Ⅲ・小坏	B	J・K	88		
			C	J	77		
			E	K	80		
			坏		1		
			不明		78		
		不明			142		
	粗製品	碗		K	89		
		Ⅲ		K	63		
		不明		K	19	1,074	
	褐釉				63		
	天目				23		
	南蛮系				18		
	その他				98	202	
朝鮮王朝		碗			133		
		Ⅲ			125		
		壷			13		
		その他			131		
		不明			3	405	
東南アジア					7	7	5,323

種類			器種	破片数	合　計	
日本製品	備前		甕・壷	310		
			擂鉢	351		
			その他	33	694	
	備前系		甕・壷	50		
			擂鉢	13	63	
	瀬戸美濃		碗	50		
			Ⅲ	132		
			天目	48		
			卸Ⅲ	12		
			鉢・大Ⅲ	19		
			瓶	3		
			その他	11		
			不明	4	279	
	中世須恵器		甕・壷	207		
			鉢	479		
			その他	3		
			不明	8	697	
	土師質		Ⅲ	15,229		
			坏	544		
			鉢	410		
			火鉢	30		
			鍋	245		
			擂鉢	134		
			甕	151		
			釜	37		
			その他	47		
			不明	1,532	18,359	
	瓦質		鉢	989		
			擂鉢	714		
			鍋・足鍋	770		
			火鉢	354		
			甕	251		
			羽釜	60		
			焙烙	2		
			風炉	7		
			その他	50		
			不明	601	3,798	
	瓷器系	常滑	壷・甕	5		
		越前	壷・甕	41		
			擂鉢	13		
		信楽	壷・甕	12		
		在地	甕	124		
			鉢	8		
			その他	2		
		瓷器系	甕	253		
			鉢	17		
			その他	3		
			不明	9	487	24,377
	近世以降		磁器	9,711		
			陶器	11,387		
			いぶし瓦	827		
			瓦（近世）	351		
			土器	384		
			瓦質土器	49	22,709	
	国産その他			43	43	
	生業関係	石製品	石鍋	115		
			砥石	53		
			その他	17		
			不明	8	193	
		滑石		9		
		土錘		2,176		
		その他		1	2,186	
		銭貨		105		
		古代遺物		98		
		銅製品		32		
		その他		393	628	
計				55,459	55,459	55,459

至ったと想定される。

物証の一つである貿易陶磁器から見た場合、２つの空白期ともいえる時期を挟んでおり、交易が間断なく続いていたとは言い難いものの、集落としては12世紀後半以降19世紀初頭までの長期間にわたり継続して営まれていたことは間違いなく、この遺跡の一つの特徴といえる。

なお、この消長は貿易陶磁器のみから推測したものであり、今後、在地産である土師質土器や国産陶器の消長と総合的に検討されるべきものと考えている。

３．遺構について

次に、集落を構成する遺構についてみてみることにしたい。

礫敷き遺構（舟着場）

まず港湾施設についてであるが、発見されたのは、汀線沿いの緩斜面にこぶし大から頭大の礫を敷き詰めた礫敷き遺構である。物資を荷揚げした舟着き場跡と考えられる。

東部の礫敷き遺構（７次SX1、10次SX265）、中央部の礫敷き遺構（10次SX266、12次SX119）、西部の礫敷き遺構（14次SX22）の３群が確認されている。それぞれの間隔は100m前後を測るが、間を繋ぐ礫敷き遺構はこれまでの調査範囲において確認されておらず、それぞれが独立していたものと考えられる。出土遺物が少ないためそれぞれ推定構築時期ということになるが、東部から15世紀後半、中央部15世紀中頃、西部が15世紀後半以前の構築と考えられ、時期的にもズレが認められる。ただし、少なくとも東部と西部の礫敷き遺構は同一時期に独立して構築されたものと理解される。また、それぞれの存続期間は不明であるが、３群全てが並存した時期が存在する可能性も残されている。ただ、いずれにしても、礫敷き遺構（舟着場）は集落盛期に構築されたものであり、この整備をきっかけに集落の最盛期を迎えたとみることができよう。

東部の礫敷き遺構（７次SX1、10次SX265）は同一の遺構と判断された。これにより、東部の礫敷き遺構は、東西長（推定）40mとなる中須東原遺跡最大規模の礫敷き遺構である。

中央部の礫敷き遺構（10次SX266、12次SX119）は、12次SX119が10次SX266よりも古く、時期差のある２つの異なる礫敷き遺構と考えている。使用されている石材や形態の違い、堆積土の違い、それぞれの表面の傾斜角の違いなどから一連の礫敷き遺構とは判断できないが、調査区が隣接地とはいえ10m近く離れており、点と点とを結ぶ中での誤測の可能性も否めない。

同時期に異なる場所で礫敷き遺構（舟着場）が存在していた可能性に関し、場所の違いによる出土遺物の種類、性格の違いはこれまでのところ認められない。取扱い物資の違いなど用途によるもの、船体の違いによる荷揚げ場所の違いなど機能面での使い分けが存在したものと推測される。比較的出土遺物が少ない東部の最大規模の礫敷き遺構（舟着場）は、他の礫敷き遺構と比べて大型の円礫が多用されているという点でも違いが認められる。通常の物資の荷揚げが行われたと考えるよりも、港口に対し集落の中でも最深部に位置しており、付近に鍛冶関連遺構、遺物の密集地も存在していることから、船の補修などを行うドックの性格を備えていたことを可能性として提示しておく。

使用石材は全体的に高津川水系のものが少なく、益田川水系のものが多用されている[(1)]。ただし、全ての礫敷き遺構について、厳密な礫材分析を行っているわけではなく、今後の課題の一つである。

---

(1) 中村唯史氏のご教示による。

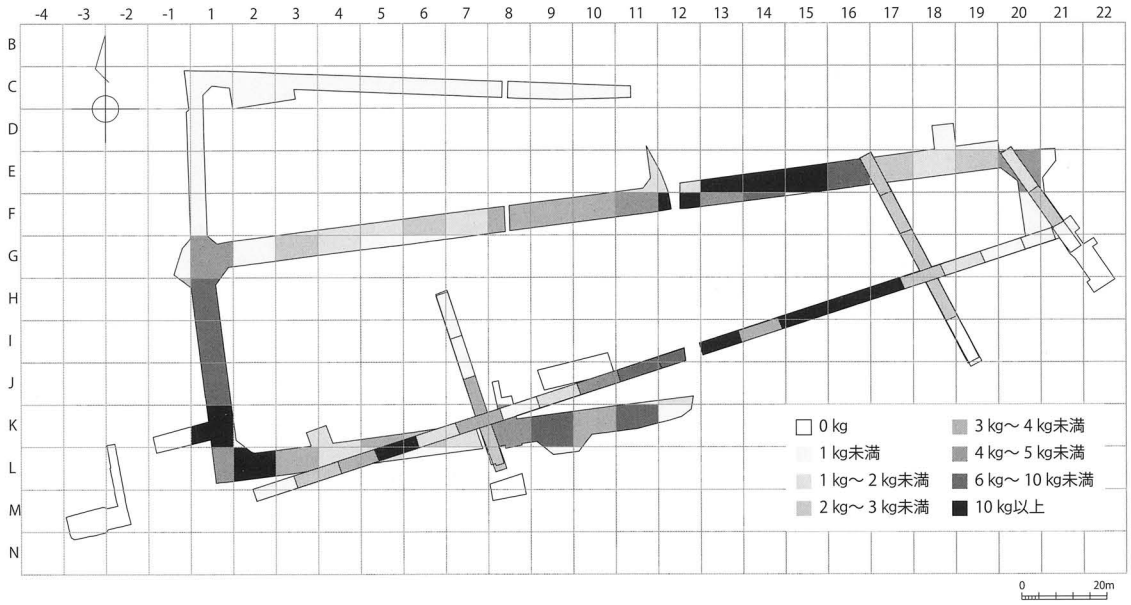
掘立柱建物

２棟の掘立柱建物を復元することができた。桁行２間×梁間２間のSB1と３面庇が付く桁行３間×梁間２間のSB2である。前者を12～13世紀、後者を15～16世紀のものと考えている。時期も異なり、方向性などの共通性は見いだせない。

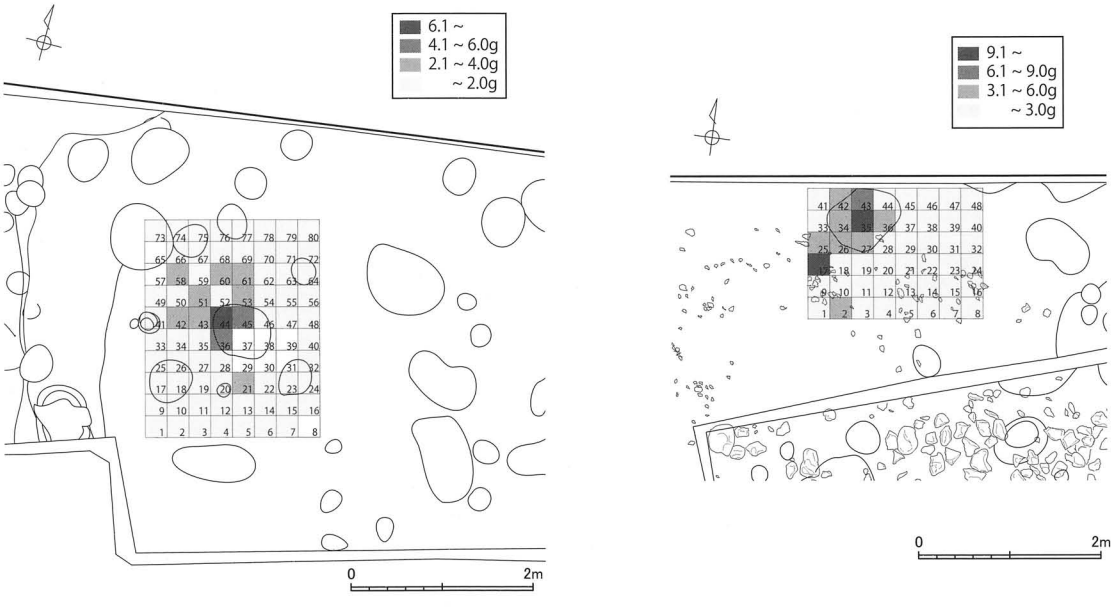
SB1は、中世前半、集落成立期の遺構と考えられる。東へ10mの場所に位置する11次SD24（14世紀代）とは時期が異なるものの、共通の方向性がみられることから、狭隘な地形的制約に起因する地割の踏襲があるものと判断される。

鍛冶関連遺構

鍛冶関連遺構として、地表面が赤色に被熱硬化した鍛冶炉11基が確認されている。この他にも、鉄滓を廃棄したと考えられる廃棄土坑や性格は不明ながらも鍛冶炉周辺において炭化物や粘土粒、焼



第71図　鍛冶関連遺物出土分布図



12次SK92　　12次SK98

第72図　土壌サンプリングメッシュ模式図

土が混在した鍛冶に関連する土坑と考えられる遺構も確認されている。碗形滓や鍛造剥片、粒状滓、羽口などが見つかっていることから、精錬鍛冶及び鍛錬鍛冶を行った鍛冶工房の存在が想定される。

未製品が見つかっていないため、何を製作していたのかは不明である。また、沖手遺跡では見られた鋳造関連の遺物も見られない。

第71図は、鍛冶関連遺物の分布状況を示したものである。東区と西区南西部にまとまりが認められる。東区北部のまとまりは、遺構から時期を特定することはできなかったが、陶磁器分布を参考にすれば14世紀代に比較的機能していた一帯である。また、東区南部は15世紀代、西区南西部は15～16世紀代のものである。

第72図は、鍛冶工房における作業空間配置の手掛りとするため、鍛冶炉周辺に25cmメッシュを組んで土砂を採取し、鍛造剥片の分布状況を示したものである。

第17表　第10次調査鍛冶関連遺物集計表

単位：g

グリッド名	羽口	碗形滓（鍛冶滓）	流動滓	鉄塊	再結合滓	合計	グリッド名	羽口	碗形滓（鍛冶滓）	流動滓	鉄塊	再結合滓	合計
1G	80	920	0	30	0	1,030	18G	50	1,750	0	100	0	1,900
2G	170	1,910	130	150	0	2,360	19G	10	160	0	25	0	195
3G	190	2,930	0	0	0	3,120	20G	0	170	0	0	0	170
4G	675	12,040	0	310	0	13,025	21G	0	130	0	0	0	130
5G	80	1,560	100	200	0	1,940	22G	160	3,410	0	215	0	3,785
6G	420	2,550	0	430	0	3,400	23G	0	190	0	0	0	190
7G	0	680	0	240	0	920	24G	0	40	0	0	0	40
8G	0	1,280	0	80	0	1,360	25G	欠番					
9G	130	4,170	0	660	0	4,960	26G	20	2,230	0	50	0	2,300
10G	180	5,430	0	790	0	6,400	27G	欠番					
11G	50	7,510	0	940	0	8,500	28G	欠番					
12G	0	17,110	0	180	0	17,290	29G	30	2,505	0	230	0	2,765
13G	30	3,650	0	270	0	3,950	30G	30	2,420	0	0	0	2,450
14G	110	10,980	0	570	0	11,660	31G	110	1,815	0	310	0	2,235
15G	200	15,870	0	710	0	16,780	32G	0	310	0	150	0	460
16G	270	17,350	200	650	0	18,470	33G	0	0	0	0	0	0
17G	80	1,660	0	300	590	2,630	34G	860	1,860	0	215	0	2,935
17G+32G	90	2,500	0	210	100	2,900	35G	0	1,140	0	0	0	1,140

第18表　第11次・12次調査鍛冶関連遺物集計表

単位：g

グリッド名	羽口	炉壁	碗形滓（鍛冶滓）	流動滓	再結合滓	鉄塊	切鉄	合計
C1			160					160
C2			500					500
C3	60		100					160
C4			210					210
C5			440					440
C6	0		280					280
C7	0		780			150		930
C8	0		280					280
C9	30		710					740
C10	0		240					240
C11	0		330					330
D1			50					50
D18			40					40
D19	50		420			170		640
E1			150			50		200

E8			10					10
E11	30		1,920					1,950
E12	50		1,800			90		1,940
E13	285		25,190	0		1,380	500	27,355
E14	350		19,120			1,200		20,670
E15	340		11,900			2,600		14,840
E16	160		8,320			510		8,990
E17	60		1,860	220		210		2,350
E18			1,050			129		1,179
E19			2,200	150		10		2,360
E20			3,930			180		4,110
F1	0		450	30		185	0	665
F3	0		710			600		1,310
F4			900			100		1,000
F5			930			200		1,130
F6	10	0	2,320			510		2,840
F7	50	0	960					1,010
F8	10	0	2,850			270		3,130
F9	60	60	3,460			80		3,660
F10	10	0	3,160			240		3,410
F11	90	0	3,460			340	320	4,210
F12	30	0	10,820		50	40		10,940
F12			3,190					3,190
F13	490		3,250	250		635	80	4,705
F14	50		7,090			350		7,490
F16			10					10
F20			350					350
F21			30					30
G1			3,640			460		4,100
G-1			260			20		280
G2			880					880
G3	90		1,910			560		2,560
G4			1,340			70		1,410
G5			350			120		470
G6			200			140		340
H1	130		6,420					6,550
H-1			2,150					2,150
I1	20		6,260			360		6,640
J1	200		7,280			400		7,880
J11			100					100
J12			1070					1,070
K1	1,820		10,100			350		12,270
K3			1,350					1,350
K4	10		1,410			110		1,530
K5	200		3,630			95		3,925
K6			2,320					2,320
K7	50		1,620		40	150		1,860
K8	30		4,040			420		4,490
K9	20		8,490			190		8,700
K10	60		3,690			160		3,910
K11	290	100	6,225			150		6,765
K12	20		860					880
L1			4,200			395		4,595
L2			9,690			400		10,090
L3	30		3,720			85		3,835
L4	230		1,150			195		1,575

L5	30	1,630		1,660
L6		130		130
L7		260		260
L9		800	125	925
L10		40		40

墓

７次SK5において、口径11～12cm、底径5.4cm、器高3.5cmをタイプとする土師質土器坏と口径７cm、底径3.5～4.7cm、器高1.8cmをタイプとする土師質土器小皿を１セットとした６セットの副葬品が出土している。出土状況からは、明らかなセット関係を意識した副葬、配置形態が窺える。この土師質土器大小品が副葬された墓は10次においても１基、10次SK90が確認されている。ただし、土師質土器大小を伴うことでは共通であるが、明らかなセットを意識した副葬形態ではない。

墓の時期を決定する上で大きな役割を果たすのは、出土した土師質土器である。良好な一括資料であるものの、当地域では土師質土器の研究があまり進んでいないのが現状で、時期決定を行う上での論拠に乏しい状況にある。口縁端部を丸く収めるもの、弱く面取りがなされたものや沈線状の窪みをもつものがみられるなど、大内氏館跡の編年（北島2010）と対比するならば、大内Ⅱ式に並行するもので14世紀末～15世紀前半に比定され、出土銭貨に永楽通宝が見られることを加味すれば15世紀前半に位置づけられよう。

４．遺物について

本書では、平成22・23年度に発掘調査を行い、かつ調査面積がある程度まとまっている調査区を対象として、出土遺物のカウントを行った。方針としては、グリッドごとに破片数を分類した上で集計し、接合する２点は１点とした。

ここでは遺物集計を通して明らかとなった出土遺物の傾向についてまとめたい。

（１）種別ごとの出土傾向（第73図、第74図）

①古代の遺物

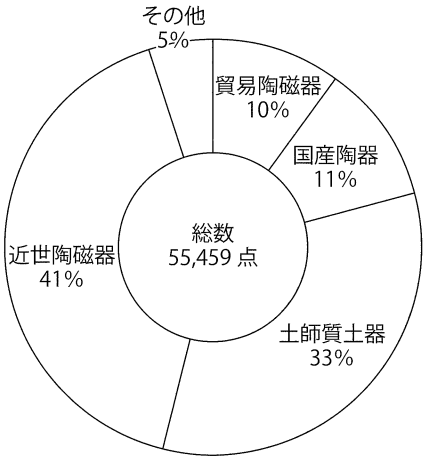
合計98点出土しており、その内訳は、弥生土器17点、古代須恵器30点、土師器51点である。遺物数および遺構が確認されていないことを考え合わせると、当該期に集落が営まれていたとは考えがたく、周辺からの流れ込みと考えられる。

②貿易陶磁器

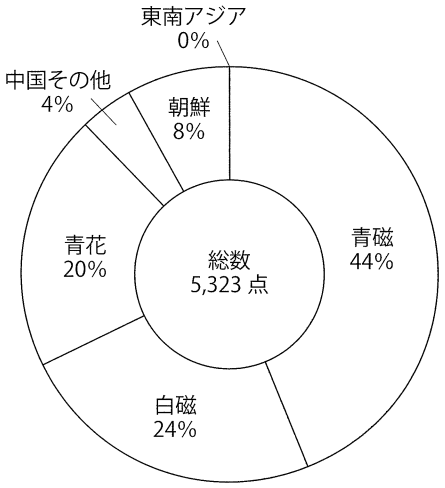
貿易陶磁器は5,323点出土しており、これは遺物総数の約10％にあたる。このうち中国製が92％と主体を占め、その他に朝鮮製、東南アジア製などが出土している。貿易陶磁器の内訳をみると、青磁44％、白磁24％、青花20％と、青磁が約４割を占めている。

朝鮮製陶磁器は、貿易陶磁の約８％を占める。碗、皿といった供膳具が主体であるが、瓶などの貯蔵具も多くみられる。時期的には16世紀代に位置づけられる灰青陶器、白磁が主体を占めている。碗の中には、茶の湯に使用されるような大ぶりのものは少なく、小ぶりなものが主体であった。また、高麗青磁の梅瓶といった希少品も出土しており、このような製品を手にすることのできた階級層が存在していたことが推測される。

なお、東南アジア産の陶磁器は７点出土しており、タイ鉄絵壺（第50図69）のほか、ベトナムの白磁碗などがある。貿易陶磁器全体の比率からみると約0.1％と少数であり、商品として大規模に流



第73図　出土遺物の種別構成比



第74図　貿易陶磁器の種別構成比

通したものというより、交易従事者の所持品といった別の性格も考えられる。

③国産陶磁器

中世須恵器、備前焼、常滑焼、越前焼、信楽焼、瓷器系などが出土している。もっとも多数を占めるものは備前焼であり、備前系と分類したものを合わせると、757点にのぼる。ついで瓷器系が273点、越前焼が54点出土している。また、少数ではあるが、常滑焼（５点）、信楽焼（12点）もみられ、いずれも壺・甕といった貯蔵具のみ出土している。このことは、器種を選択した上で持ち込まれた結果と考えられ、商品である内容物を運ぶためのコンテナ容器であった可能性も考えられる。なお、国産陶磁器については、時期別の集計を示し得ておらず、今後の課題である。

瀬戸・美濃陶器は供膳具（碗、皿）と調理具（卸皿、鉢類）、貯蔵具が出土している。当遺跡での供膳機能は、輸入陶磁器と瀬戸・美濃が担っているが、比率にすると、20：１と圧倒的な割合で輸入陶磁器が使用されていることが特徴といえる。ただし、天目茶碗においては、中国産が23点に対して瀬戸・美濃が48点と比率が逆転しており、これらの使用者間に経済的な格差があったとも推定される。

④土師質土器

皿・坏といった供膳具が15,773点（土師質の86％）と大量に出土している。その他には、調理具である鉢類、貯蔵具の壺・甕類、火鉢などがみられる。土師質土器の皿・坏の大量消費は、饗宴、儀式等が行われたことを示しており、そのような行為を行いうる階級層が周辺に居住していたことを示している。

⑤瓦質土器

総計3,798点出土しており、調理具が1,703点（瓦質の45％）、煮炊具が832点（瓦質の22％）である。擂鉢、鍋類は防長系に属するものが多数出土している。沖手遺跡での胎土分析の結果、防府市内の岩淵遺跡・原遺跡のものと胎土が類似しており、当該方面から持ち込まれた可能性が指摘されている。中須東原遺跡出土の瓦質土器も、器形等から考え、山口県内から搬入されたものも存在する可能性がある。

また、風炉の中には、胎土および調整方法などから、奈良産と考えられるものも出土している。

⑥近世陶磁器

総数22,709点が出土しており、今回カウントした遺物総数の41％を占めている。そのうち、肥前系の陶磁器が半数近く占める。中には、遺跡に隣接する福王寺に関連する遺物群と推定されるものも出土している。

⑦生産・生業関連遺物

鍛冶関連遺物は、羽口、炉壁、鍛冶滓、再結合滓、鉄塊系遺物、鉄製品などが出土している。羽口には断面形が円形のものと方形のものが認められた。炉壁は出土量が少なく、製錬に使用されたものは認められなかった。碗形鍛冶滓は径５～20cm程度のものが出土しており、流動滓も出土している。再結合滓には表面に鍛造剥片が観察され、周辺で鍛打作業が行われていたと推測される。鉄塊系遺物には小塊状のもの、銑鉄と思われるものなどが存在し、鍛冶原料あるいは鍛冶工程上で生じたものと考えられる。鉄製品は、釘、楔、鑿、小柄、火打石などが出土しているが、未成品と思われるものは確認できなかった。

土錘は2,176点出土しており、潟湖や河川、そして日本海に隣接するといった立地環境を利用して、漁撈が行われていたことが推測される。

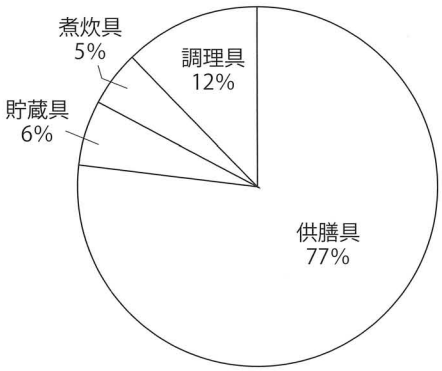
⑧石製品・金属製品

滑石製石鍋は115点、別の製品に転用されたものが９点出土している。砥石は53点あり、荒砥、中砥、仕上砥がそれぞれ出土している。

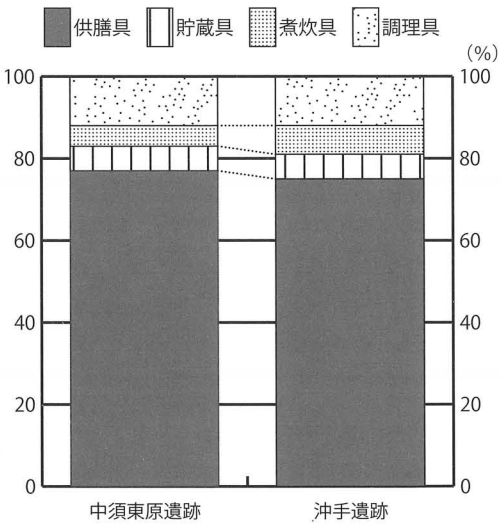
銭貨は105点出土しており、北宋銭が主体である。少数ではあるが、唐代の開元通宝や、明銭の永楽通宝、朝鮮李朝の朝鮮通宝なども出土している。

（２）機能別の出土傾向（第75図、第76図）

陶磁器を機能別にみると第75図のとおりで、供膳具が77％、貯蔵具６％、煮炊具５％、調理具12％を占める。供膳具に土師質土器の皿・坏が含まれているため顕著な差となっているが、土師質土器を除いた比率をみると、供膳具42％、貯蔵具16％、煮炊具12％、調理具30％であり、供膳具が多数を占めていることに変わりはない。



第75図　機能別の構成比



第76図　中須東原遺跡と沖手遺跡の機能別構成比の比較

ここで、沖手遺跡の出土傾向と比較してみたい。沖手遺跡は益田川右岸に位置する、中世から近世前半にかけて営まれた大規模な集落遺跡である。集落は道路跡や柱列によって区画され、この区画に平行して建物跡が復元できることから、計画性に基づいてつくられたと考えられる。遺跡の立地や出土遺物の内容から、水運を利用した交易・流通に関わる集落の可能性が指摘されている。

第76図は、中須東原遺跡、沖手遺跡出土遺物を機能別に比較したものである。沖手遺跡では、供膳具75％、貯蔵具６％、煮炊具７％、調理具12％（土師質土器を含む）と、供膳具が８割強で最多、次いで調理具

が１割弱、煮炊具、煮炊具がそれに次ぐという中須東原遺跡の状況と近似していることがわかる。このことは、両遺跡の性格や立地環境の類似にその原因が求められる可能性もあるが、今後の資料の増加を待ちたい。

（３）石西地域における中世遺跡の消長（第19表）

第19表は、益田市域を中心とした中世遺跡の出土遺物から、遺跡の消長を示したものである。これを見ると、遺跡群は大きく２つのグループに分けることができる。一つは中世前半（11世紀後半～13世紀）に盛期を迎えるグループ、もう一つは中世後半（14世紀後半～16世紀）に盛期を迎えるグループである。前者は、仙道地域（美都）の遺跡群、三宅御土居跡、沖手遺跡、中須東原遺跡であり、益田川流域に立地する。後者は殿屋敷遺跡、山根ノ下遺跡、大年ノ元遺跡、森下遺跡、上久々茂土居跡、三宅御土居跡、中須東原・西原遺跡、中世今市船着場跡であり、高津川および益田川の流域に立地する。いずれのグループも、河川の中流域と下流域に遺跡が分立した状況であり、当時、各遺跡（集落）間には河川を介した有機的なつながりが存在していたと考えられる。さらに言うならば、物資の集散地としての港湾と、消費地としての集落ととらえることができ、前者の遺跡群は沖手遺跡および中須東原遺跡に、後者の遺跡群は中須東原、西原遺跡に集積された商品が河川をさかのぼり、消費地である各遺跡へ流通したものと推測される。

なお、14世紀前半を中心とした時期に盛期を迎える遺跡は見つかっておらず、当該期の状況は不明である。

第19表　石西地域の中世遺跡消長表

→は遺跡の存続期間、■は遺跡の盛期を表す。

	遺跡名	地域	性格	奈良	平安			鎌倉		室町		安土桃山	江戸
				700	800	900	1000	1100	1200	1300	1400	1500	1600
1	殿屋敷遺跡	匹見	居館						→	→	→	→	
2	山根ノ下遺跡		居館							→	→		
3	森下遺跡	美都	居館						→	→	→		
4	大年ノ元遺跡		生産							→	→		
5	下都茂原遺跡		集落		→	→	→	→	→				
6	酒屋原遺跡		集落		→	→	→	→	→	→	→		
7	粟島原遺跡		墓					→					
8	東仙道土居遺跡		墓					→	→				
9	上久々茂土居跡	益田	居館						→	→	→		
10	三宅御土居跡		居館				→	→	→	→	→	→	
11	七尾城跡		山城							⇢	→	→	
12	中世今市遺跡		湊・市町									→	
13	沖手遺跡		集落				→	→	→	→	→	→	
14	中須西原遺跡		湊・集落					→	→	→	→	→	
15	中須東原遺跡		湊・集落					→	→	→	→	→	

※消長表は各遺跡の報告書を参考に作成した。

５．集落の構造について

中須東原遺跡の集落は、中須西原遺跡の様相及び検出された遺構から、直線状にあるいは方形に巡る溝状遺構（道路遺構）によって区画されていると推測される（第77図）。こうした集落構造の形成は、少なくとも14世紀段階まで遡ることができよう。検出した溝状遺構の大半は南北一方向のみであるが、区画的様相を呈する溝状遺構が検出された西区中央部においても、区画に伴うと考えられる建物

跡は確認されておらず、町屋の様子は不明である。また、11次SD6、11次SD7は近世の溝状遺構（道路遺構）ではあるが、道路の側溝にあたる遺構と考えられる。西側で北に向かって弓なりに曲がる地割は、現代に踏襲されていることがよくわかる事例である。

溝状遺構（道路遺構）に関して、西区中央部の西寄りで見つかった12次SD24であるが、この場所は明治期の地引図に見られ、現在でも遺跡北側の厳島神社から遺跡を縦断して中島町に至る道に重なる可能性があるものであり、中世以来の中須における主要道路の一つと考えられる。

遺跡南部では、確認できた溝状遺構は４条にすぎないが、その一方で南部でのみ石を伴う区画遺構が確認されている。礫敷き道路（10次SX267）、石列（７次SX28、12次SX120）がこれにあたる。前者は16世紀以前、後者は16世紀以後の時期が推定されているので同時期のものではないが、水際に近い集落南部の低湿、軟弱な環境に対する構造物構築の違いがあるのかもしれない。

また、西区南部では、低湿、軟弱地形に対して大量の礫が地固めに使われたと考えられる造成跡が確認されている。火をうけた礫も散見されることから、火事場整理によるものともとらえられる。遺跡南西部から中央道路までの西区南部全域にわたって広範囲に確認されるもので、16世紀以降南側に集落が拡大していったことが窺える。

礫敷き遺構（舟着場）が地形的には、現地形における南端里道部に見られる河岸段丘沿いに構築されており、河岸段丘地形が中世の地割を維持したものと判断される。ただし、中央部の礫敷き遺構（10次SX266）部のみ、現地形よりも北側に10mほど内湾した地形であったことが窺える。

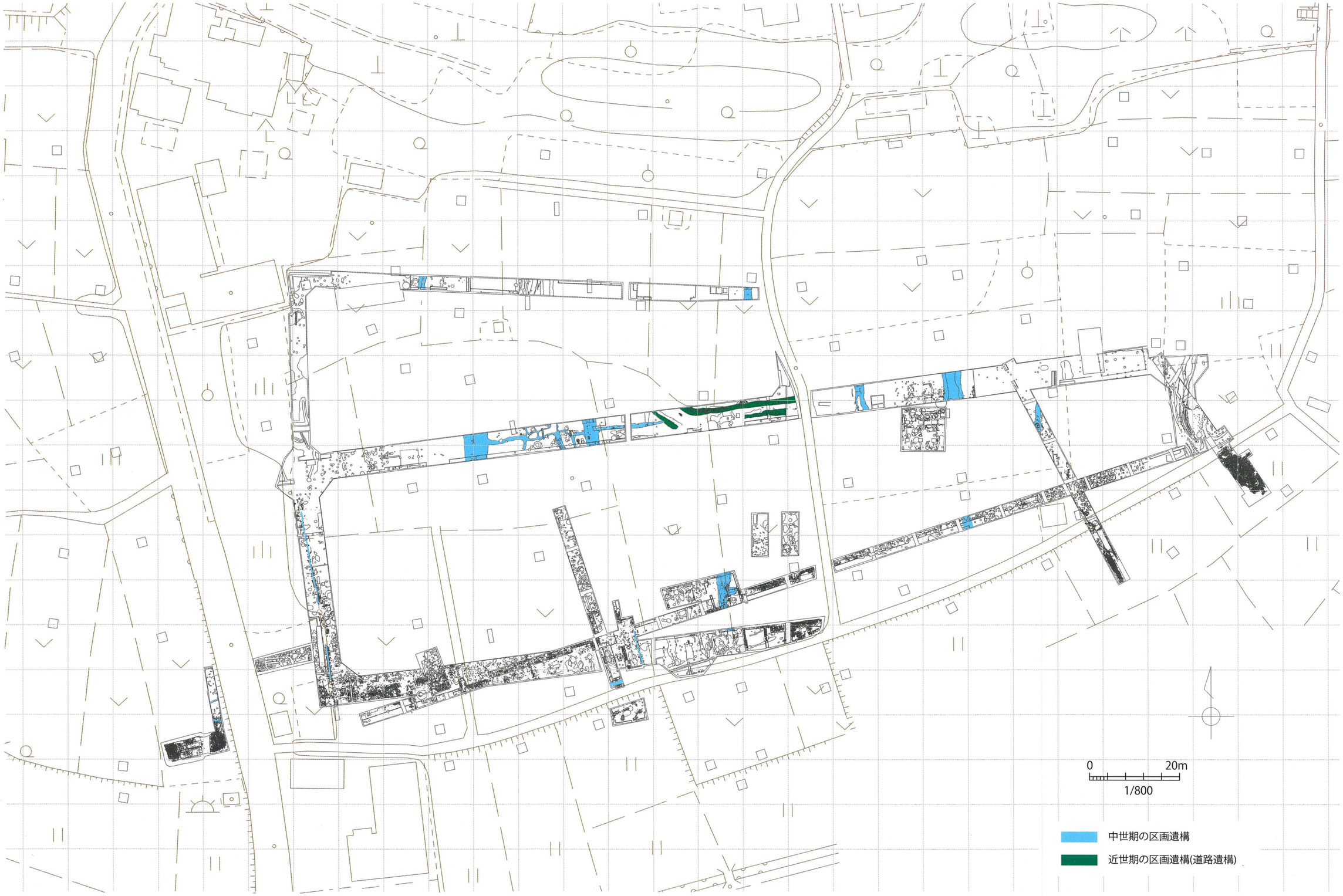
現在見られる水田あるいは畑地の地割、明治期の地引図と調査で確認した区画遺構を対照させると、中世の土地区画がうまく対応しないものも認められるものの、基本的には中世の土地区画を維持しながら現代に至っていることがわかる。このことは、いずれの時期においても、海と砂丘、湖に挟まれた狭隘な地形的制約が、遺構のあり方に影響を及ぼしているためと思われる。

６．集落の性格について

中須東原遺跡が立地する場所は、益田川と高津川が合流して日本海へと繋がる潟湖の縁辺部に位置する。少なくとも近世期以降、昭和に至るまでたびたび水害被害にあった場所であり、ある面では集落を営むのに適した立地条件とは言えない。それにもかかわらず、中須東原遺跡が中世から近世に至る長期にわたって営まれ続けたのには、東西方向に広がる日本海広域交易圏の中継点と内陸へ向かう南北方向の広大な交易圏の結節点にあたるという立地条件があったからであろう。また、その成立には、遺跡周辺に存在したとされる安福寺、あるいは隣接地の福王寺（中世当時の場所は不明）といった宗教勢力の存在も無関係ではないだろう。

こうした諸条件があって、中須東原遺跡は、12世紀後半に成立し、海運や水運など港湾関係に携わる人々が活動した集落として発展していったものと考えられる。なお、集落成立期から港としての性格を有していたかといえば、この時期の港湾施設が発見されていないことから積極的に肯定できるものではないが、貿易陶磁器が多数出土しており、交易活動に関わっていた人々が存在していたことは疑いようのないところである。また、集落形態や性格は２つの画期において変容しているとは思われるが、総じて豊富に出土する多様な貿易陶磁器や大規模な礫敷き遺構（舟着場）という港湾施設の設備面からも、益田平野において長期的に機能した拠点湊に位置付けられよう。

その一方で、中世後半における湖（河川）に向けての造成に表されるように、砂丘と湖（河川）に



第77図　区画遺構分布図

挟まれた狭隘な地形により、消費地としての町場の発展には制約があったものと推察される。建物復元に至っていないものの多くの柱穴が見つかっており、町屋の形成がなされていたことは事実である。供膳具や調理具も多数出土しており、畑も見つかるなど、一定程度の生活は行われていたと考えられるが、限定的な調査とはいえ生活飲料として必要不可欠な井戸が見つかっていないことから、居住空間として活発に利用されていたとは言い難く、生活居住域というよりは、商業地域あるいは生産活動を行う場ととらえることができる。つまりは、消費地としての機能よりも、東西方向に広がる日本海広域交易における中継、補給港として、あるいは益田川、高津川水系域に形成された城館や集落へ物資を運搬する結節点としての機能が優越した港湾集落であったと推測される。

港を構成する港湾施設のうち発見されているのは舟着場だけであり、物流管理施設や倉庫といったその他の未発見施設という遺跡単体の課題もあるが、のみならず遺跡の北側砂丘の背後に広がる現在の中須集落一帯あるいは中須西原遺跡や沖手遺跡といった有機的に結びついていたであろう周辺域の遺跡も含めた広範な地域を対象として、港湾都市という都市空間におけるそれぞれのエリアの位置づけも検討課題であろう。

また、成立時期が異なるもののほぼ併存していた沖手遺跡、戦国期に益田氏の貿易拠点・市場町として成立したと考えられている今市遺跡など益田川下流域における性格が近似する遺跡がどのようなあり方をし、どのように関わっていたのか、今後検討していく必要があるし、益田川、高津川水系域ですでに調査が行われ、価値評価がなされている城館跡などについても、近年のこうした港湾遺跡の調査によって蓄積されてきた資料に基づき、総合的に再検討していくことで、新たな面が見えてくるものと期待される。

第２節　まとめ

１．河口域の歴史的環境と港湾遺跡の展開

中須地域における原始・古代の状況はよく分かってないが、沖手遺跡の下層から縄文時代後期から晩期頃の丸木舟二艙が発見され、当時すでに内水域を航行する人々の活動があったことが知られる。同遺跡からは弥生土器や土師器、須恵器も一定の量が出土しており、花粉分析によって、飛鳥・奈良時代には、アシやガマが覆う湿地帯の一部がすでに水田化していたことが明らかにされている。また、中須西原・東原遺跡からも、少量ではあるが弥生時代から古代にかけての遺物が出土している。このような原始・古代以降の潟湖の内水域における人々の生活の常態化や農地の開発と、式内社櫛代賀姫神社の創建や、平安時代の万寿３（1026）年に大津波で流出したといわれる五つの寺院（五福寺）に関する根強い伝承とは無関係ではないだろう。

高津川・益田川の河口域に形成された潟湖には、風と波を防ぐ海岸部の砂丘の発達や日本海側の干満の差の少ない潮位など、湊の立地に適した自然条件が整い、さらに、潮流や風向きの利もあって、中世の時代には港湾遺跡が次々と成立した。当時の潟湖の様子は、河川によって運ばれた土砂の流出によってかなり陸化が進み、内海というよりも、河川が複雑に交錯し、大小の河川堤防や中洲が存在して、湿地が広範囲に存在するような状態であったと想像される。このような景観は大洪水のたびに大きく変化することになり、港湾遺跡の消長に繋がったと考えられる。

港湾遺跡の中でいち早く成立した沖手遺跡は、11世紀末に成立し、12世紀にかけて繁栄したが、13世紀以後は衰退した。中須東原遺跡は12世紀中頃には成立し、沖手遺跡と同時期に機能し、14世

紀前半の空白期を経て、14世紀後半から中須西原遺跡を含めて再整備され、15世紀以降に最盛期を迎えた。16世紀に入ると両遺跡の貿易陶磁器は徐々に減少を始めるが、この頃、益田川の上流に新たに今市が成立した。

中世の河口域には、潟湖を見下ろす益田川右岸の丘陵上に式内社の櫛代賀姫神社があり、その境内地に明治初年まであった真如坊（益田本郷の式内社染羽天石勝神社別当寺勝達寺の分坊）には建長七（1255）年在銘の阿弥陀如来立像が安置されていた。建久年間（1190～1199）に益田兼高が石見府中の上府八幡宮から浜八幡宮を勧請したことにより、櫛代賀姫神社は次第に衰退する一方、浜八幡宮は当地方の二十一村の総氏神として繁栄した。境内には、江戸時代中期の年号と中須村の願主名が刻まれた石灯籠も数基確認され、中須村との関係が深かったことがうかがえる。中須西原・東原遺跡に隣接する浄土宗金亀山福王寺境内には、鎌倉時代後期の御影石（六甲花崗岩）と考えられる層塔をはじめ、由良石（京都府宮津市）を含む花崗岩、伊根石（京都府与謝郡伊根町）、日引石（福井県大飯郡高浜町）、福光石（島根県大田市）などの石材による中世石塔が多く残る。中世の石塔は、この他、河口域を取り巻くように大塚墓地、真如坊墓地、専光寺墓地、下本郷墓地などにも広く点在している。さらに、中須地域には益田本郷の時宗萬福寺の前身といわれる安福寺跡があり、湊と関係の深い厳島神社・恵比寿神社も存在する。厳島神社は江戸時代に浜田組七浦大年寄を務めた中須村大賀家の鎮守社であった。このように、潟湖を形成した砂丘を含め、一帯には古代以降の港湾地域としての歴史的環境、自然環境が現在もなお色濃く残されている。

2．湊町を特徴づける遺構

中須西原・東原遺跡では、それぞれで汀線沿いに人工的な礫敷き面が検出された。このような限定的に築かれた礫敷き面については、青森県十三湊遺跡、兵庫県兵庫津遺跡、香川県高松城下層遺跡、同県直島・積浦遺跡、福岡県博多遺跡群、佐賀県徳蔵谷遺跡など中世の港湾遺跡で検出されており、舟着き・荷揚げ場の遺構と考えられている。中須西原・東原遺跡では、遺跡に面した河道の変動や湊町の発展拡充に応じて、礫敷きが再構築され、また、水際で新たな敷地の拡張が行われていた。

舟着場の背後の町屋部分は、溝あるいは溝状に浅く掘り窪められた道路によって街区が形成され、倉庫や港湾管理施設の掘立柱建物が建ち並び、長期間にわたって建て替えが繰り返された。中須西原遺跡では、その一角に方形竪穴建物が存在し、中須東原遺跡では、集落の成立期における中心的な建物の可能性が考えられる建物SB1を中心に、中世前期を通じて貿易陶磁が密度高く出土する区域があった。この建物の東側に接して南北方向に確認された道路跡は、明治10年代の「益田中須村地引図」（巻頭図版３）に描かれ、中須東原遺跡の範囲を大きく三等分する西側の道に重なる可能性がある。この道は、砂丘を横断し、途中で２箇所の小さな折れを持って厳島神社へと通じ、その南端は、礫を混在させて水際部分を造成した拡張区にも繋がっている。湊町と、砂丘の北側に広がる低平な微高地に推定される日常的な居住区域や神社とを結ぶ当時の幹線道の一つと考えられる。

さらに、中須西原・東原遺跡には多くの鍛冶工房が濃密に重なっていた。湊町として、造船や船の修理に必要な釘や鎹などの製作に関わる鍛冶師も内包していたと思われるが、個々の遺構は小規模ではあるものの、消費レベルを超えた密集度ともいえ、「大中洲鍛冶名」に直接結びつく遺跡と考えられる。長期間にわたって精錬鍛冶、鍛錬鍛冶が盛んに行われていたが、その製品については今後の解明を待ちたい。

3．貿易陶磁から見た遺跡の盛衰

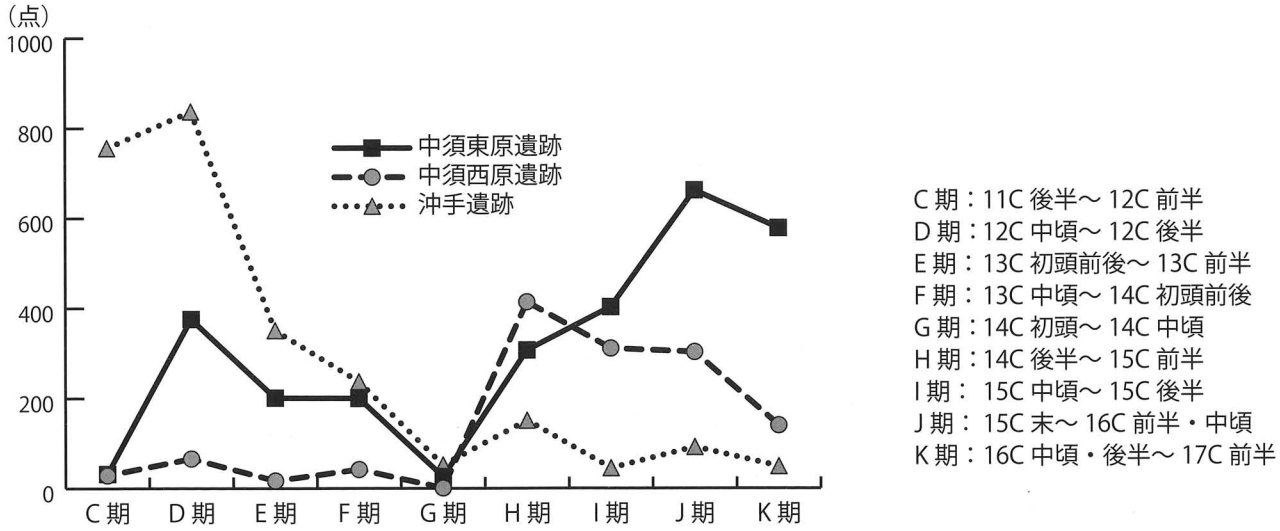
沖手遺跡、中須西原・中須東原遺跡それぞれの貿易陶磁器の時期別出土数は第78図のとおりである。港湾遺跡の中でいち早く成立した沖手遺跡は、C期に突然出現した感があり、D期にかけての量は中須西原・東原遺跡と比較して圧倒的に多い。しかし、E期以降は、H期にわずかな増加がみられるものの、衰退の一途をたどる。

中須西原遺跡は、C期からF期にかけて一定量があるものの、出土数は全体的に少ない。しかし、中世後期のH期は飛躍的に増加し、J期にかけて安定的な量があり、K期の16世紀後半は減少を始める。一方、中須東原遺跡は、C期からD期にかけて著しい増加がみられ、F期まで安定した量があるものの、F期から激減する。中世後期は、H期から急激に増加し、J期をピークとしてK期に減少する。

このように、両遺跡の時期別出土数の頻度については異なる傾向があるが、中須西原・東原遺跡の全体として見れば、12世紀中頃をピークとして14C初頭までの盛行期と、14世紀後半から16世紀にかけての最盛期がある。

石見府中を本拠としていた在庁官人藤原氏が11世紀後半から益田地域の本格的な開発に着手し、12世紀中頃に開発を進めた益田平野とその周辺部を摂関家に寄進して荘園益田荘が成立すると、藤原氏は荘官に任じられて益田氏を称するようになった。この頃、河口域の流通拠点として沖手遺跡が成立した。また、荘園年貢の京都への輸送のための交通路の整備に伴い、新たに中須東原遺跡も成立し、次第に機能を拡充していった。鎌倉時代の益田氏は、石見府中から「益田本郷」に本拠を移したが、石見国守護の北条氏によって地頭職を没収され、「益田本郷」を離れて益田川中流域の「山道」地域に一旦退いた。中世前半における中須東原遺跡の盛行期は、この時期に重なっている。益田氏が益田地域の開発に大きく関わっているものの、権力基盤が確立しておらず、荘園領主が優位にあった段階である。なお、三宅御土居跡には、益田氏館以前に益田荘の政所が存在した可能性が推定されている。

貿易陶磁器が急増し始める14世紀後半は、益田氏が荘園領主に代わって益田荘の実権を掌握し、再び「益田本郷」を本拠として館の三宅御土居跡と七尾城、城下町の整備を進めるとともに、中須地



第78図　沖手遺跡・中須西原・東原遺跡の貿易陶磁器時期別出土数

域を海上交通と高津川・益田川を介して内陸部と結ぶ河川交通の結節点として重要視し、これを新たに加えて「益田本郷」域を再編成した時期にあたる。

中須東原遺跡は、沖手遺跡からやや遅れて成立し、規模としては大きな差があるものの、中世前期においては沖手遺跡とともにD期を最盛期として同時に機能していた。中世の全時期を通じて中須地域の中心として機能し、中世後期には中須西原遺跡もその拠点の一角を占めた。それぞれの遺跡における使用期間や最盛期に時間差があり、さらに場の使われ方、機能の差もあったと考えられるが、その検証は今後の課題としたい。

なお、F期からの衰退とG期の空白はすべての遺跡に共通している。文永・弘安の役の後における元による倭人への管理強化と貿易振興の両立に起因する日本商人とのトラブルや、元末期の内乱等で日元貿易が極めて不安定となった時期でもあるが、この空白期の原因については不明である。

4．益田湊へ運び込まれたもの・運び出されたもの

貿易陶磁器の1m^2あたりの出土点数、1点あたりの面積は、中須西原遺跡では3,690点に対して0.8点/m^2、1.181m^2/点、中須東原遺跡については5,323点に対して1.9点/m^2、0.526m^2/点である。

貿易陶磁器に関しては、特に朝鮮陶磁器の出土量の多さに注目しておきたい。貿易陶磁器全体に対する朝鮮陶磁器の比率は、中須西原遺跡は12％（439点）、中須東原遺跡では８％（405点）に達する。梅瓶や白磁皿など若干の高麗陶磁も含まれるが、大半は朝鮮王朝陶磁であり、15世紀から16世紀初めまでの灰青陶器の碗・坏・皿がそれぞれ63％、76％を占めている。

伯耆国・出雲国・石見国における朝鮮陶磁器を出土する遺跡の分布と数量（第79図）の中で、中須西原・東原遺跡からの出土量は群を抜いている。さらに、62遺跡、総点数1,147点のうち、益田市内の遺跡からの数量は964点に上り、全体の84％に及ぶ。その大半は高津川・益田川河口域の港湾遺跡群が占め、河川を通じて中国陶磁器とともに内陸部の中世遺跡にも搬入されている。この量と、地域的ともいえる特異な出土状況から、15世紀以降における益田と朝鮮半島との間には人と物の往来を含めた強い結び付きがうかがえる。

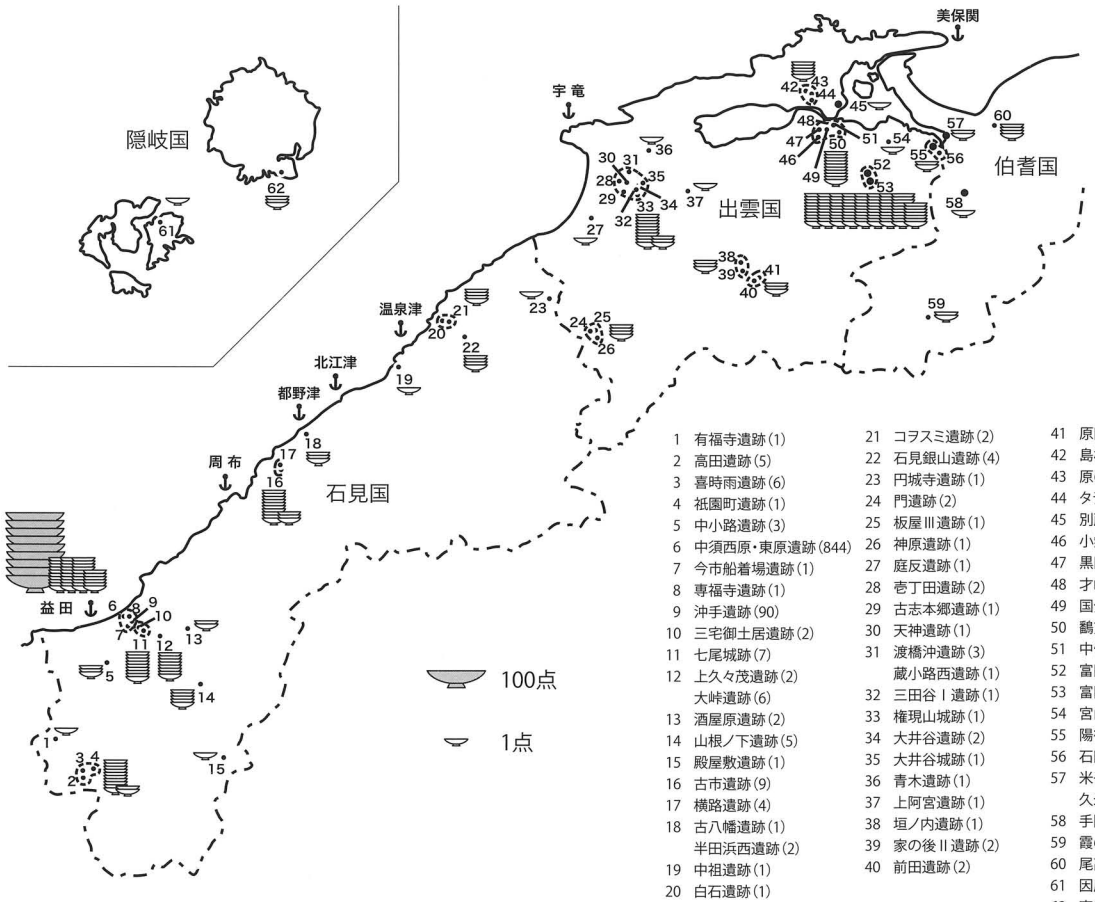
また、中国や朝鮮の陶磁器に加え、タイやベトナムの陶器が共伴することも大きな特徴である。南北朝時代以後、西日本海では各地の領主や民衆が直接的に交易を行う流通システムが成立し、隔地間交易が盛んに行われるようになった。その延長上で、周布氏の朝鮮交易にみられるように、石見国と対馬を結ぶ日常的な交易ルートが定着し、さらに倭寇的勢力も介在しながら、対馬を経由して中国・朝鮮や琉球、東南アジアなど広く東アジア世界とも密接に結ばれることになった。少量で、商品とは考えにくいものもあるが、東南アジア産陶器の出土は、中須西原・東原遺跡が、このような東アジア規模のネットワーク上に位置した拠点的な集散地であったことを示している。

国内遠隔地の陶器としては、備前、瀬戸美濃、東播系須恵器、常滑、珠洲、越前、信楽などがある。北陸の珠洲・越前は中須西原・東原遺跡で初めて確認された。ごく少量の珠洲は、商品として搬入されたものではなく、日常的な使用品として交易に関わった人間とともに動き、破損等によって遺跡に残留した遺物と考えられる。

これに対して、中須の湊から積み出された物資に関しては、その一つとして材木が考えられている。天正６（1578）年に筑前の宗像大社辺津宮の再建に際して、「厚薄板并柾」３千枚、「丁長」４万数の材木が益田で調達され、益田氏も「丁長」１万数を寄進している。

また、益田川の上流域には、『日本三代實録』に元慶５（881）年に銅を産出した記録が残る都茂郷丸山がある。昭和61（1986）年まで操業が続いたこの都茂鉱山の鉱床は、黄銅鉱・斑銅鉱など銅の鉱物を主体とし、副産物としてタングステン・金・銀なども得られた。都茂鉱山から5kmほど下流の大年ノ元遺跡では、14～15世紀の銅の精錬工房跡が発見されている。銅は、日元貿易及び日明貿易における日本の主な輸出品のひとつであり、朝鮮王朝時代の倭館交易でも主要な輸出品であった。

さらに、中須西原・東原遺跡で継続的に行われた鍛冶による製品も主要な交易品であった可能性が推定される。



1 有福寺遺跡(1)
2 高田遺跡(5)
3 喜時雨遺跡(6)
4 祇園町遺跡(1)
5 中小路遺跡(3)
6 中須西原・東原遺跡(844)
7 今市船着場遺跡(1)
8 専福寺遺跡(1)
9 沖手遺跡(90)
10 三宅御土居遺跡(2)
11 七尾城跡(7)
12 上久々茂遺跡(2)
大峠遺跡(6)
13 酒屋原遺跡(2)
14 山根ノ下遺跡(5)
15 殿屋敷遺跡(1)
16 古市遺跡(9)
17 横路遺跡(4)
18 古八幡遺跡(1)
半田浜西遺跡(2)
19 中祖遺跡(1)
20 白石遺跡(1)
白石上屋敷遺跡(1)
21 コヲスミ遺跡(2)
22 石見銀山遺跡(4)
23 円城寺遺跡(1)
24 門遺跡(2)
25 板屋Ⅲ遺跡(1)
26 神原遺跡(1)
27 庭反遺跡(1)
28 壱丁田遺跡(2)
29 古志本郷遺跡(1)
30 天神遺跡(1)
31 渡橋沖遺跡(3)
蔵小路西遺跡(1)
32 三田谷Ⅰ遺跡(1)
33 権現山城跡(1)
34 大井谷遺跡(2)
35 大井谷城跡(1)
36 青木遺跡(1)
37 上阿宮遺跡(1)
38 垣ノ内遺跡(1)
39 家の後Ⅱ遺跡(2)
40 前田遺跡(2)
41 原田遺跡(1)
42 島根大学構内遺跡(3)
43 原の前遺跡(1)
44 タテチョウ遺跡(1)
45 別所遺跡(1)
46 小無田遺跡(1)
47 黒田館跡(3)
48 才峠遺跡(1)
49 国分寺遺跡(3)
50 鵝貫遺跡(1)
51 中竹矢遺跡(1)
52 富田川河床遺跡(36)
53 富田城跡(51)
54 宮山古墳群(1)
55 陽徳寺遺跡(1)
56 石田遺跡(1)
57 米子城跡(1)
久米遺跡(1)
58 手間要害遺跡(1)
59 霞の要害遺跡(2)
60 尾高城跡(4)
61 因屋城跡(1)
62 東船遺跡(3)

※西尾・守岡 2009 を一部加筆・修正

第79図　山陰西部における朝鮮王朝陶磁器の出土遺跡と数量

５．結語

石見国益田は西日本海に面して、中国大陸や朝鮮半島、対馬、博多とも距離的に近い位置にある。西日本海における航海に伴う距離感としては、朝鮮王朝の記録『成宋実録』（1476年）によれば、壱岐から若狭まで順風なら八日とある。また、『中書家久君上京日記』では、島津家久は天正３（1575）年に７月10日に浜田を出港し、12日には平戸に着いたとある。益田と博多や対馬、朝鮮半島との間は、風向きなどの条件に恵まれれば、ごくわずかな日数で航行が可能であったと考えられる。

このような地理的な環境の中で、中世には、河口域に形成された潟湖の周辺部に港湾遺跡群が展開した。沖手遺跡と中須東原遺跡における中世前期の盛行期は、益田川に沿って成立した益田荘と高津川流域の長野荘を含む広範な地域における流通拠点として機能し、発展したものと思われる。中須東

原遺跡の中世後半の最盛期と中須西原遺跡、さらに今市は、益田氏による直接的な関与によって再整備され、また、新たに成立した湊と考えられる。

これら港湾遺跡の消長は、益田地域における政治的・社会的な動向や国内外の情勢を背景としながら、急速に進む潟湖の陸化とともに、海面が現在よりも２m低下したといわれる15世紀中頃以降のパリア海退期とよばれる小氷期の影響によるものと考えられる。この海退期は長期的な天候不順が農業生産力の低下を招き、特に日本海側においては、大規模な飛砂現象が海浜部の湊や集落の衰退・終焉の直接的な原因となったことが指摘されている。

江戸時代以降も中須の湊は存続した。その当初の位置は、中須東原遺跡に近い、益田川左岸の中須村の川尻と推定されている。上流の沖手遺跡付近には、元和５（1619）年の浜田藩成立に伴い益田組専福地浦番所が置かれ、明治維新までの間、益田七浦（大浜、大谷、木部、津田、遠田、久城、中須）の浦事務を掌握した。

江戸時代を通じて、高津川の河口に湊を確保する目的で津和野藩による水刎や河道の塞ぎ止め、開削工事が進められ、浜田藩も同様に開削工事を行ったが、その影響や、人為的な制御を超える洪水によって河口域の地形は変貌し、河道の消失や水深の変化を招いた。このような中で、益田川の水量が次第に低下し、流砂による河口の閉塞も進んだため、中須湊は、17世紀前半頃には川幅と水深のある中須と中島間の河道沿いへ、18世紀終わり頃には中島の高津川縁へと変遷したと推定されている。

佐渡国の加茂郡真更川村鴨島の客船帳には、享保20（1735）年から宝暦４（1754）年にかけて、石見国では唯一、中須の千石船４艘の入津の記録が残る。中須湊は近世以降も浜田藩西部における湊として重要な位置を占め、城下への年貢輸送や、瀬戸内から大阪、江戸、さらに北国に向けての廻船の拠点として機能を続けた。

発掘調査の結果、中須東原遺跡は中世前期には成立し、中世後期には中須西原遺跡とともに一体的に機能していたことが確認された。益田氏は、南北朝時代に、大きく勢力を拡大していく守護大内氏と結ぶことによって石見国内で圧倒的に優位な地位を得、これを背景として権力の基盤を確立した。そして、中須地域を益田本郷に取り込んで湊を拡充し、以来、積極的に交易に関与して、戦国時代にかけて海洋領主的な性格を強めていった。そして、この交易と鉱山経営によって確立された強固な経済基盤が、幕府や大内氏、大内氏滅亡後の毛利氏に対する益田氏の地位を高めたと考えられている。

発掘調査によって、文献の記述から存在が推定されていた湊町が、舟着場の遺構を伴って良好な状態で確認され、最盛期の15世紀には、東アジア規模の交易圏に組み込まれていたことが遺構と遺物の両面から明らかにされた。日本列島における中世港湾遺跡の代表的事例として注目すべき遺跡であり、三宅御土居跡と七尾城跡の城館とともに、石見国最大の武士団益田氏の動向に直接結び付く重要な遺跡と評価することができる。

益田市では、この遺跡の持つ歴史的価値を重視し、区画整理事業推進協議会と関係権利者の理解と協力を得て、益田川左岸北部地区土地区画整理事業の計画の一部を変更し、遺跡の全面保存を図る方針を決定した。今後は、すでに史跡指定を受けている益田氏城館跡と密接に関連する遺跡として史跡指定を目指すとともに、長期の計画で調査研究と整備活用を進めていくこととしている。

【参考文献】

青森県教育委員会・市浦村教育委員会　『十三湊遺跡』、2005年

青森県市浦村編『中世十三湊の世界―よみがえる北の港湾都市―』新人物往来社、2004年

市村高男「中世後期の津・湊と地域社会」中世都市研究会編『中世都市研究３　津・泊・宿』新人物往来社、1996年

市村高男「中世日本の港町―その景観と航海圏」『港町のトポグラフィ』シリーズ港町の世界史２　歴史学研究会編　青木書店、2006年

市村高男『御影石製中世石造物の分布調査とその学際的研究』2008～2010（平成20～22）年度科学研究費補助金基盤研究（C）20520586　研究成果報告書

井上寛司「三宅御土居と益田氏」網野善彦・石井進編『中世の風景を読む４―日本海交通の展開―』新人物往来社、1995年

井上寛司『中世の港町・浜田―港湾都市浜田の成立と日本海水運に果たした役割―』石見学ブックレット２　浜田市教育委員会、2001年

井上寛司「中世の益田川関と沖手遺跡」『市道中吉田久城線道路改良工事に伴う文化財発掘調査　沖手遺跡』益田市教育委員会、2010年

大庭康時ほか編『中世都市・博多を掘る』海鳥社、2008年

岸田裕之「石見益田氏の海洋領主的性格」『芸備地方史研究』185　芸備地方史研究会、1993年

北島大輔「大内式の設定―中世山口における遺物編年の細分と再編―」『大内氏館跡XI』山口市教育委員会、2010年

木原　光「遺跡報告 石見国益田の中世港湾遺跡群―最近発見の中須西原・東原遺跡を含めた中世湊の変遷―」『日本考古学』第32号、2011年

古賀信幸「２ 大内氏遺跡出土土師器の編年」『大内氏館跡Ⅷ・大内氏関連町並遺跡Ⅰ』山口市教育委員会、1991年

児島俊平「第十一章　益田湊を探る」『近世・石見の廻船と釿製鉄』石見郷土研究懇話会、2010年

佐藤竜馬「資料調査メモ１　中世～近代の港湾施設」『四国村落遺跡研究会シンポジウム　港町の原像―中世港町・野原と讃岐の港町―』四国村落遺跡研究会、2007年

島根県教育委員会『沖手遺跡―１区の調査成果― 一般国道９号（益田道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書３―』、2006年

島根県教育委員会『一般国道９号（益田道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書５―沖手遺跡・専光寺脇遺跡―』、2008年

西尾克己・守岡正司「山陰西部における中世後期の陶磁器流通について」『広島県立歴史博物館開館20周年記念公開シンポジウム　中世後期の流通を考える』広島県立歴史博物館、日本中世土器研究会、大手前大学史学研究所、2009年

服部英雄「今市船着場跡の歴史的な役割―益田川の河口津をめぐる状況―」『中世今市船着場跡文化財調査報告書』益田市教育委員会、2000年

林　正久「益田平野の古地理の変遷」『中世今市船着場跡文化財調査報告書』益田市教育委員会、2000年

林　正久「益田平野の成り立ちと沖手遺跡」『沖手遺跡―１区の調査成果― 一般国道９号（益田道路）

建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書３―』島根県教育委員会、2006年
益田市教育委員会『沖手遺跡・久城東遺跡――般剣道久城インター線久城工区地方道路交付金（改良）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査―』、2010年
益田市教育委員会『沖手遺跡―市道中吉田久城線道路改良工事に伴う文化財発掘調査―』、2010年
村上　勇「地域研究と貿易陶磁・山陰―特に島根県益田川流域の発掘成果からの考察」『貿易陶磁研究』№29貿易陶磁研究会、2009年
村上　勇「パリア海退が中世地域社会に与えた影響について―日本海沿岸の遺跡を中心にして―」『西国城館論集Ⅰ―河瀬正利先生追悼論集―』中国・四国地区城館調査検討会、2009年

第20表　中須東原遺跡出土遺物観察表

遺物番号	挿図番号	写真図版	出土位置		種別	器種	型式時期	法量（cm）※()は推定値			文様・調整等		色調	備考
			グリッド	層位				口径	底径	器高	内面	外面		
1	47	25	F1	3層	青磁（同安窯系）	碗	Ⅰ-1b類	(15.6)			櫛目文	櫛目文	淡黄灰	
2	47	25	G2	4層	青磁（同安窯系）	碗	Ⅰ-1b類	(16.7)			櫛目文	櫛目文	淡緑灰	
3	47		G2	3層	青磁（龍泉窯系）	碗	Ⅰ-4a類	(16.6)			飛雲文		オリーブ黄	
4	47		G2	3層	青磁（龍泉窯系）	碗	Ⅰ-4b類	(16.6)			飛雲文		灰緑	口縁端部輪花
5	47	25	G2	3層	青磁（龍泉窯系）	碗	B1類	(15.4)				鎬蓮弁文	灰緑	
6	47	25	24G	3層	青磁（龍泉窯系）	碗	B0類	(13.6)				鎬蓮弁文	灰緑	
7	47	25	K7	4層	青磁（龍泉窯系）	碗	B4類					細い線描きの蓮弁文	暗灰緑	
8	47	25	14G	Po89（遺構外）	青磁（龍泉窯系）	碗	B4類		4.4		印花文	細い線描きの蓮弁文	暗灰緑	
9	47	26	G3	4層	青磁（龍泉窯系）	碗			(4.0)		印花文		オリーブ黄	
10	47	25	F20	12次SD1	青磁（龍泉窯系）	碗	D類	(13.0)					明緑灰	
11	47	25	E15・16	3層	青磁（龍泉窯系）	碗	C2類	(14.8)				雷文帯・簡略化した蓮弁文	灰緑	
12	47	26	G1	2層	青磁（同安窯系）	皿	Ⅰ-1b類		(4.8)		櫛目文		灰白	
13	47	26	F1	2層	青磁（龍泉窯系）	皿	Ⅰ類	(12.0)			櫛目文		灰緑	
14	47	25	K6	Po327（遺構外）	青磁（景徳鎮窯系）	菊皿		(12.0)	(5.8)	2.8			明緑灰	
15	47	26	L1	集石2	青磁（景徳鎮窯系）	菊皿			(5.5)				灰白	
16	47	26	K10	8層	青磁	皿	16c		(4.4)				明灰緑	
17	47	26	L2	3層	青磁（龍泉窯系）	稜花皿		(11.4)			草花文		暗灰緑	
18	47	26	L2	5層	青磁	皿	16c	(8.4)	(3.3)	2.8			明灰緑	
19	47	26	15G	第2面	青磁（龍泉窯系）	花生	14c	(7.5)					青緑	
20	47	26	17G	3'層	青磁（龍泉窯系）	多角坏		(7.2)					青緑	
21	47	26	L1	3層	青磁（龍泉窯系）	坏			(7.8)		蓮弁文	蓮弁文	灰緑	
22	47	26	K1	P578	青磁（龍泉窯系）	坏	Ⅲ-3b類	(12.2)			蓮弁文		灰オリーブ	
23	47	26	L3	4層	青磁（龍泉窯系）	坏	Ⅲ-4類	(13.4)				鎬蓮弁文	青緑	
24	47	26	L5	炉2	青磁（龍泉窯系）	坏		(12.3)	(7.2)	3.3	印花文		明緑灰	
25	47	26	E14	3層	青白磁	合子（身）							青白	
26	48	26	F11	3層	白磁	碗	Ⅳ類	(14.6)					灰白	玉縁状口縁
27	48	26	F9	3層	白磁	碗	Ⅳ類						灰白	玉縁状口縁
28	48	26	J1	3層	白磁	碗	Ⅳ類		(5.6)				灰白	
29	48	26	F7	遺構面	白磁	碗	Ⅸ類	(11.6)					灰白	口禿
30	48	26	K10	12次SX56	白磁	碗		(16.0)					白	
31	48	26	G5	5層	白磁	稜花碗	16c中頃				花弁状		灰白	口縁端部輪花
32	48	26	E11	4層	白磁	碗	15c中頃		(4.8)				白	
33	48	26	F7	3層	白磁	皿	Ⅸ類		(5.0)				灰白	
34	48	26	F12	3層	白磁	皿	Ⅸ類		(5.2)				灰白	
35	48	26	L2	4層	白磁	皿	Ⅸ類		(5.6)				灰白	
36	48	26	K1	2層	白磁	皿	Ⅷ-2b類		(5.0)		草花文		灰白	
37	48	26	G3	3層	白磁	皿	D群	(11.3)					灰白	
38	48	26	G4	3層	白磁	皿	D群	(11.4)					灰白	
39	48	26	G3	4層	白磁	皿	D群		4.2			高台に抉り	灰白	高台内に墨書
40	48	26	13G	暗褐色土	白磁	皿	15c	(15.2)					灰白	
41	48	26	15G	2層	白磁	皿	D群	(9.6)	(4.7)	2.4	見込みは露胎	体部上半のみ施釉	灰白	
42	48	35	K・L7	Po69（遺構外）	白磁	皿	E群	(11.9)	5.0	3.2			灰白	
43	48	35	K10	2層	白磁	菊皿	E群	(12.4)	(6.4)	3.1			白	
44	48	26	23G	3層	白磁	小坏	D群・15c	(6.8)	(2.7)	2.6		高台に抉り	灰白	
45	48	35	K6	Po311（遺構外）	白磁	坏	E群	6.5	3.2	3.8	見込みは輪状に釉はぎ取り		灰白	
46	49	28	K9	5層	青花	碗	C群						素地：灰白 呉須：藍	
47	49	27	L5	Po282（遺構外）	青花	碗	C群		(6.0)				素地：淡灰 呉須：暗藍	
48	49	28	9G	第1面	青花	碗	C群		(5.2)				素地：淡灰 呉須：暗藍	

遺物番号	挿図番号	写真図版	出土位置		種別	器種	型式時期	法量（cm）※()は推定値			文様・調整等		色調	備考
			グリッド	層位				口径	底径	器高	内面	外面		
49	49	27	L1	3層	青花	碗	E群		(4.0)				素地：淡灰 呉須：暗藍	
50	49	27	4G	4層	青花	碗	E群	(12.0)	4.2	6.4		高台内「大明年造」	素地：灰白 呉須：藍	
51	49	28	K9	12次 SK54	青花	碗	E群	(11.0)					素地：灰白 呉須：藍	
52	49	28	E11	3層	青花	碗		(14.8)					素地：淡灰 呉須：暗藍	粗製
53	49	35	17G	3層	青花 (漳州窯系)	碗	16c	(13.0)	(4.4)	5.8	見込みは輪状に釉はぎ取り		素地：灰白 呉須：藍	粗製
54	49	35	11G	遺構面 (礫直上)	青花 (漳州窯系)	碗		(13.0)	(4.8)	5.8			素地：黄白 呉須：暗灰	粗製
55	49	28	4G	4層	青花 (漳州窯系)	皿	C群	(9.6)	(3.0)	2.4	見込みは露胎		素地：淡灰 呉須：藍	粗製
56	49	28	F3	3層	青花	皿	C群	(11.8)					素地：灰白 呉須：藍	
57	49	28	K5	3層	青花	皿	C群		3.4				素地：灰白 呉須：藍	
58	49	28	K9	砂利敷	青花	皿	C群		3.5				素地：灰白 呉須：藍	
59	49	28	K10	2層	青花	皿	B群		(5.6)			高台内に「福」	素地：灰白 呉須：藍	
60	49	28	K5	2層	青花	皿	B群		(4.8)				素地：灰白 呉須：藍	
61	49	27	G区	石列	青花	皿	B-1群		8.6				素地：灰白 呉須：藍	
62	49	27	29G	3層	青花 (漳州窯系)	皿	16c後半	(11.3)	4.7	2.8			素地：灰緑 呉須：暗藍	
63	49	28	13G	暗褐色土	青花	皿	E群		(5.6)				素地：灰白 呉須：藍	
64	49	28	K7	3層	青花	皿	E群		(7.2)				素地：灰白 呉須：藍	
65	49	27	K11	6層	青花 (漳州窯系)	皿		(18.4)	(10.2)	3.3			素地：淡灰 呉須：暗藍	
66	50	29	34G	3層	天目	碗			4.1			高台に胎土目跡	胎土：灰白 釉：黒茶	
67	50	29	L9	6層	褐釉陶器	甕							灰黄褐	
68	50	29	K9	4層	褐釉陶器	鉢							にぶい赤褐	
69	50	29	18G	2層	タイ陶器	鉄絵壷	15c				露胎	鉄絵	内：にぶい橙 外：灰白	
70	51	29	L3	4層	朝鮮 青磁	碗	高麗か				象嵌	象嵌	明灰	
71	51	29	L1	5層	朝鮮 青磁	碗	高麗か				象嵌	突帯	灰オリーブ	
72	51	29	L2	5層	朝鮮 粉青沙器	碗	李朝				象嵌	象嵌	にぶい灰	
73	51	29	L3	4層	朝鮮 粉青沙器	碗	李朝				印花文	象嵌	明灰	
74	51	35	E20	12次 SD1	朝鮮 粉青沙器	碗	李朝	(18.6)	(6.8)	8.3	印花文		にぶい灰	
75	51	29	K4	Po66 (遺構外)	朝鮮 粉青沙器	坏	李朝	(11.8)	(4.2)	4.1	ハケ目		灰褐	
76	51	35	G2	3層	朝鮮 青磁	梅瓶	高麗	(6.4)			施釉	雲文状の線刻	オリーブ灰	
77	51	29	L5	3層	朝鮮 灰青陶器	坏	李朝		3.9		砂目跡	砂目跡	褐灰	
78	51	29	G3	3層	朝鮮 灰青陶器	坏	李朝		4.1		砂目跡	砂目跡	褐灰	
79	51	29	K6	P682	朝鮮 灰青陶器	坏	李朝		3.8		砂目跡	砂目跡	褐～灰	
80	51	29	K12	11層	朝鮮 灰青陶器	坏	李朝	(10.4)	4.5	4.9	砂目跡	砂目跡	青灰	
81	51	29	L3	4層	朝鮮 白磁	坏	李朝		(4.6)		砂目跡	砂目跡	灰白	軟質白磁
82	51	35	4G	第1面	朝鮮 白磁	碗	李朝	(15.2)	(4.4)	5.3	砂目跡	砂目跡	灰白	軟質白磁
83	51	29	K5	3層	朝鮮 白磁	碗	李朝		3.7		胎土目跡	胎土目跡	青白	
84	51	29	K8	2層	朝鮮 陶器	船徳利	李朝		(10.2)				灰褐	
85	51	29	2G	第2面	朝鮮 陶器	足付き鉢			(12.5)		タタキ痕	ナデ	暗灰褐	
86	52	31	G1	2層	中世須恵 (東播系)	鉢		(21.2)					褐灰	
87	52	31	E13	3層	中世須恵 (東播系)	鉢		(21.5)					褐灰	
88	52	31	F7	3層	中世須恵 (東播系)	鉢			(11.2)		摩滅		褐灰	
89	52	31	G4・5	北壁	中世須恵	甕					カキメ	格子タタキ	暗灰	
90	53	30	E20	12次 SD1	備前	擂鉢	V期					凹線2条	暗赤褐	

遺物番号	挿図番号	写真図版	出土位置		種別	器種	型式時期	法量（cm）※()は推定値			文様・調整等		色調	備考
			グリッド	層位				口径	底径	器高	内面	外面		
91	53	30	G4	4層	備前	擂鉢		(23.0)			スリ目は1単位5条以上	凹線2条	淡茶橙	
92	53	30	F5	サブトレ	備前	擂鉢			(14.0)		スリ目は1単位6条		暗赤褐	
93	53	30	L9	3層	備前	擂鉢			(10.0)		スリ目は1単位12条		明褐	
94	53	30	L1	集石2	備前	壷	ⅢB期						暗赤褐	
95	53	36	L2	12次SK7	備前	壷	ⅣA期	(11.6)					暗赤褐	
96	53	30	K6	Po64（遺構外）	備前	壷			9.6			底部に沈線	暗赤褐	
97	53	30	F6	Po364（遺構外）	備前	甕	ⅢB期orⅣA期						茶褐	
98	53	30	L5	Po312（遺構外）	備前	甕	ⅢB期	(25.9)					暗茶褐	
99	53	36	E・F20	12次SD1	備前	鉢			(17.0)				暗茶褐	
100	53	36	G・F1	3層	備前	鉢			(15.0)				暗赤褐	
101	54	31	F6	3層	東海系	山茶碗		(10.4)			自然釉	自然釉	灰褐	
102	54	31	F5	5層	信楽か	壷							暗灰	
103	54	31	F3	4層	信楽か	壷or甕					凹線	凸線	灰褐	
104	54	31	G4	4層	越前	甕							暗橙	
105	54	31	F4	4層	越前	鉢					端部に凹線		暗茶褐	
106	54	31	F6	3層	瓷器系	鉢			(12.4)		摩滅	ヘラケズリ	淡灰	貼り付け高台
107	54	31	F8	3層	瓷器系	甕					ナデ	ナナメ方向のカキメ	暗灰	
108	54	31	F8	5層	瓷器系	甕		(40.8)			ナデ	平行タタキ	暗灰	
109	54	31	G1	2層	瀬戸美濃	天目碗	後期様式Ⅱ期	(11.6)	(4.2)	6.4		体部下半に錆釉	黒茶	古瀬戸
110	54	31	K12	7層	瀬戸美濃	天目碗			(4.0)			錆釉	黒茶	
111	54	31	G1	2層	瀬戸美濃	皿			(7.4)		印花文		灰緑	古瀬戸/灰釉
112	54	31	L9	Po255（遺構外）	瀬戸美濃	皿			6.6				灰緑	灰釉
113	54	31	F7	11次SD23	瀬戸美濃	皿		(10.0)	(5.4)	1.9	見込みは輪状に釉拭き取り	口縁端部は輪花状	暗茶	鉄釉
114	54	31	F8	11次SD17	瀬戸美濃	卸皿		(13.0)					灰緑	古瀬戸
115	54	31	I1	2層	瀬戸美濃	卸皿			(6.4)			回転糸切り	灰褐	古瀬戸
116	54	31	F6	第1面	瀬戸美濃	瓶子	中期様式ⅠorⅡ期		(11.6)				灰褐	古瀬戸
117	54	31	J1	12次SK37	瀬戸美濃	茶入		胴部(5.6)			露胎		黒茶	
118	55	32	24G	3層	土師器	皿		6.4	6.8	2.1		回転糸切り	淡橙	
119	55	32	C1	3層	土師器	皿		(8.6)	(6.0)	1.5		回転糸切り	淡黄橙	
120	55	32	G2	4層	土師器	皿		8.1	5.6	1.35		回転糸切り	淡橙	
121	55		F10	3層	土師器	皿		5.8	2.0	1.1		手づくね	淡橙	
122	55	36	4G	3層	土師器	皿		8.6	4.9	1.8	スス付着	手づくねススが付着	淡灰	京都系土師器
123	55		C1	3層	土師器	坏		(13.4)					淡橙	
124	55		G1	P530	土師器	坏		(12.4)	(4.6)	4.1		回転糸切り	淡橙	
125	55	32	J1	3層	土師器	坏		(11.2)	(6.2)	3.3		回転糸切り	淡黄橙	
126	55	32	K8	Po245（遺構外）	土師器	坏			5.6			回転糸切り	淡橙	
127	55	32	K6	Po329（遺構外）	土師器	坏			6.0			回転糸切り	淡黄橙	
128	55	32	C1	2層	土師器	坏			6.0		スス付着	回転糸切り	淡黄橙	
129	55	32	E20	3層	土師器	坏			7.0			回転糸切り	淡黄橙	
130	55	36	F8	5層	土師器	小壷			(4.0)		ナデ	ナデ	淡橙	
131	55		K12	6層	土師器	浅鉢状			(6.4)		ナデ	ナデ	淡黄橙	
132	56		K8	Po220～223	瓦質土器	擂鉢	Ⅱ期	(32.0)	(13.0)	12.2	スリ目は1単位8条		淡灰褐	防長系
133	56	32	L1	3層	瓦質土器	擂鉢	Ⅱ期	(27.6)			カキメ後スリ目		淡灰褐	防長系
134	56	32	F8	5層	瓦質土器	鉢					カキメ		灰褐	
135	56	32	L9	Po207（遺構外）	瓦質土器	浅鉢		(20.8)	(13.0)	4.5	ナデ	ナデ、スス付着	暗灰	
136	56	32	F9	3層	瓦質土器	鍋	Ⅲ型式	(19.6)			ナデ	ナデ	灰褐	防長系
137	56	32	E・F20	12次SD1	瓦質土器	羽釜		胴部(25.6)			ヨコハケ	スス付着	灰黒	
138	57		L2	2層	瓦質土器	火鉢					ナデ	スタンプ文	灰褐～赤橙	
139	57	33	L3	3層	瓦質土器	火鉢					ヨコハケ	スタンプ文	褐灰	
140	57	33	L5	第2面	瓦質土器	火鉢					ナデ	スタンプ文	暗灰	
141	57	33	J1	3層	瓦質土器	火鉢					カキメ	スタンプ文	褐灰	
142	57	33	K8	Po323（遺構外）	瓦質土器	火鉢		(32.6)			カキメ	スタンプ文	灰黒	深鉢形
143	57	32	K9	P491	瓦質土器	火鉢		(31.9)			カキメ		灰黒	甕形
144	57	33	L2	Po335（遺構外）	瓦質土器	風炉						ミガキ、スタンプ文	灰黒	奈良産か

遺物番号	挿図番号	写真図版	出土位置		種別	器種	型式時期	法量（cm）※()は推定値			文様・調整等		色調	備考
			グリッド	層位				口径	底径	器高	内面	外面		
145	57	33	K9	12次 SK54	瓦質土器	風炉、浅鉢（脚部）							灰黒	獣脚状
146	58	33	H1	3層	滑石製品	石鍋						スス付着	暗灰銀	
147	58	33	K1	2層	滑石製品	石鍋		(14.4)				ノミ痕	暗灰銀	
148	58	33	E17	3層	滑石製品	石鍋	II類	(25.8)				外面に瘤状の把手	暗灰銀	
149	58	33	F6	5層	滑石製品	不明		長さ 12.6	幅 2.5	厚み 1.85			灰褐色	石鍋からの転用品
150	58		L3		五輪塔	地輪		幅 42.5		高さ 32.5		4面に梵字		花崗岩
151	59	34	L3	3層	銭貨	開元通宝	初鋳年 621年	直径 2.4		厚み 0.11				重量2.346g
152	59	34	L2	3層	銭貨	咸平元宝	初鋳年 998年	直径 2.4		厚み 0.1				重量2.786g
153	59	34	L2	3層	銭貨	祥符元宝	初鋳年 1008年	直径 2.4		厚み 0.1				重量2.320g
154	59	34	I区	墓1	銭貨	天聖元宝（北宋銭）	初鋳年 1023年	直径 2.5		厚み 0.12				重量1.794g
155	59	34	18G	Po82（遺構外）	銭貨	皇宋通宝（北宋銭）	初鋳年 1039年	直径 2.4		厚み 0.09				重量2.405g
156	59	34	K1	Po123（遺構外）	銭貨	嘉祐元宝（北宋銭）	初鋳年 1056年	直径 2.4		厚み 0.14				重量3.156g
157	59	34	F9	11次 SD6	銭貨	熙寧元宝（北宋銭）	初鋳年 1068年	直径 2.4		厚み 0.1				重量2.692g
158	59	34	G1	2層	銭貨	熙寧元宝（北宋銭）	初鋳年 1068年	直径 2.5		厚み 0.15				重量3.659g
159	59	34	K5	Po283（遺構外）	銭貨	聖宋元宝（北宋銭）	初鋳年 1101年	直径 2.3		厚み 0.9				重量1.987g
160	59	34	7G	5層	銭貨	大観通宝（北宋銭）	初鋳年 1107年	直径 2.4		厚み 0.11				重量1.417g
161	59	34	26G	Po192（遺構外）	銭貨	永楽通宝（明銭）	初鋳年 1408年	直径 2.5		厚み 0.14				重量2.051g
162	59	34	G14	3層	銭貨	朝鮮通宝（李朝）	初鋳年 1423年	直径 2.4		厚み 0.12				重量2.803g
163	59	34	K9・10	12次 SD23	銅製品	分銅		長さ 2.15	幅 1.65	厚み 1.0				重量15.6g
164	59	34	L2	3層	銅製品	甲冑金具		長さ 3.3	幅 0.9	厚み 0.45				重量3.827g
165	59	36	I区		木製品	荷札								

附章

中世の益田川関と沖手、中須西原・東原遺跡

井上寛司（島根大学名誉教授）

1．はじめに

中世益田氏や益田地域史像の解明は、とくにその成立期（平安末・鎌倉期）を中心としてなお多くの未解明な問題を抱えている。その最大の要因は、考察の手がかりとなる資料（とくに文献史料）が質・量ともに著しく制約されているところにあり、この障害を乗り越えることは容易でない。

こうした中にあって、2004～07（平成16～19）年度に進められた沖手遺跡、及び2007（平成19）年度から始まった中須西原・東原遺跡の発掘は、これまで不明であった多くの事実を明らかにし、益田地域史像解明のための重要な素材を提供することとなった。とりわけ注目されるのは、①益田川の河口部（益田川が高津川の分流と合流して日本海に注ぐかつての古益田湖[1]地域）に位置する沖手遺跡集落の成立が12世紀まで遡り、同世紀に最盛期を迎えた後（13世紀まで継続）、14世紀代の一時の衰退を経て、15世紀代に再び繁栄し、16世紀代に大きく衰退するという歴史的変遷が明確となったこと、②最盛期の沖手遺跡が、直線状あるいは方形に巡る側溝を持つ道路や柵列によって複数の屋敷地が計画的に形成された「町」的な景観を持つ遺跡で、140棟にも上る多数の建物跡が復元されるとともに、床面積が100m^{2}を超える大型建物が所々に存在していて、それらが公的な施設、あるいは有力者の居宅である可能性を推定できること、③この遺跡の立地する地点が、益田川に面した標高1.5mにも満たない低地で、集落を営むには決して良い立地条件とはいえない場所であるところから、この遺跡が「湊」的な性格を持つ集落であった可能性の高いことが推定できること、などである[2]。同じく、古益田湖に面する河岸段丘の後背湿地に位置する中須西原遺跡では（中須東原遺跡でも同様の遺構が検出されている）、大型の外洋船の船着き場とも考えられる堅固な礫敷き遺構２列が検出され、①礫敷き２は15世紀後半から末以後、礫敷き１はそれ以前の時期にそれぞれ築かれたことが明らかとなった、②出土遺物の貿易陶磁は、12・13世紀から一定のまとまりをもって出土するが、14世紀から徐々に増加し、15世紀前半が最盛期となり、15世紀後半から減少する傾向にあることが明確となった[3]、などの点が注目される。ともに古益田湖に面する形で近接するこの２つの遺跡がどのような関係にあったのかは未だ明確でなく、今後のさらなる検討を必要とするが、中世益田荘の成立（12世紀後半）に先だって、あるいはそれとほぼ時期を同じくして沖手遺跡が最盛期を迎え、また中須西原・東原遺跡の建設が始まったのは疑いのないところで、これらの相互連関をどう読み解いていくのかが改めて求められているといえる。

本稿は、文献史学の立場からこうした課題に応えるべく、新たに発見された中世益田荘関係史料を１つの手がかりとして考察を進めていくこととしたい。中世益田荘関係の新出史料とは、東京大学史料編纂所の久留島典子氏が科学研究費助成による調査・研究の一環として、山口県萩市須佐町の倉田

---

(1) 林正久「益田平野の成り立ちと沖手遺跡」（国土交通省中国地方整備局・島根県教育委員会『益田道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書３沖手遺跡―１区の調査―』所収）、2006年。

(2) 同上報告書及び国土交通省中国地方整備局浜田河川国道事務所・島根県教育委員会『一般国道９号線（益田道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書５沖手遺跡・専光寺脇遺跡』（2008年）、村上勇「地域研究と貿易陶磁・山陰―特に島根県益田川流域の発掘成果からの考察―」（『貿易陶磁研究』29、2009年）など。

(3) 前掲註(2)村上論文。

輝男氏所蔵文書として収集した益田金吾家文書（中世・近世分）12通のうちの１通で、〔文永６年（1269)〕４月12日法橋範政書状案[4]がそれである。

２．新出の中世益田荘関係文書

まず、問題の史料を提示しよう。それは次のようなものである。

（端裏書）
「弁法橋　文永六　四　十二」

長盛申石見国益田本郷津料浮口事、狛僧正御房去比御入滅候之間、件御領彼御分候、

仍于レ今進レ之候了、急有二御尋一可レ被レ申二左右一候、恐々謹言、

（異筆）
「文永六」

四月十二日　　法橋範政

この史料について、久留島氏は次のような点を指摘している。①この文書を伝えた益田金吾家は、永代家老益田家の陪臣的同族として須佐に居住した家と考えられるが、家蔵史料自体の性格に関する調査・検討が十分でないところから、何故この12通の文書がこのような形で存在しているのか、現状では不明といわざるを得ない。②12通の内の４通（益田元祥宛書状や牛庵覚書など益田家宛の近世文書）を除く鎌倉～南北朝期の中世文書８通は、益田家文書というより、俣賀家文書（遠江国内田荘を本拠とする鎌倉幕府御家人内田氏が、承久の乱以後石見国にも豊田郷等の所領を与えられ、その庶子が豊田郷内俣賀を譲られて俣賀氏を名乗り、伝えてきた文書。その主要部分は現在日本大学総合図書館に所蔵されていて、鈴木国弘編『日本大学総合図書館所蔵　俣賀文書』<1986年>として刊行されている）の一部、あるいは他の石見地域の武家の伝来文書と考えられる。

久留島氏のこの指摘（とくに②）は、中世文書８通の翻刻・紹介とその考察を通して提起されたもので、二号（永仁３年５月２日関東下知状）・六号（観応３年８月日俣賀致政軍忠状）・七号（具書案断簡①文永８年卯月３日沙弥西仏譲状案、②正安２年２月５日沙弥定願譲状案）、及び八号（具書案①建武３年３月19日内田致景軍忠状案、②建武３年９月26日内田致景代蒲五郎入道着到状案、③建武３年11月26日宗清感状案）の各文書がともに広義の俣賀家文書（嫡流内田家の文書を含む）であることから、その指摘の妥当性を認めることができる。

しかし、久留島氏も慎重に明言を避け、今後の検討課題としているように、本文書（一号、法橋範政書状案）の性格をどのようなものとして理解するかについては、さらなる検討が求められる。本文書の内容を理解する上で重要なのは、それが益田本郷内の益田川河口部に設けられた津（川関）での「浮口」の徴収権継承を主題としていることである。

津料としての浮口については周防国石国荘に類例があり[5]、筏流しの材木に課される税金であること、その税率は１割が標準であったことなどが知られる。恐らく石見、益田荘の場合も同様で、益田川や高津川などを用いて筏流しで搬出される材木に対し、船積みの荷物に課される津料（関銭）に準じて１割程度の税が課されたのであろう。問題は、この津がどういう性格のものなのか、またその津料の徴収権を持つとされる狛僧正御房や長盛とはどういう人物なのか、そして「今にこれを進め候」という「これ」をどう理解するのかということにある。

---

[4] 久留島典子「益田金吾家文書（中世分）の紹介と考察」（科研研究成果報告書『大規模武家文書群による中・近世史料学の統合的研究―萩藩家老益田家文書を素材に―』、2008年)。

[5] 嘉禎３年(1237)11月日周防国石国荘沙汰人等重申状（厳島野坂文書、『鎌倉遺文』5195)。久留島氏のご教示による。

まず津の性格であるが、これについては「益田本郷の津」と呼ばれていることが重要で、津料が津や港湾の機能を維持するために課されるのが一般的だとされていることからも、それが益田本郷（益田荘）の領主によって設置された私的な川関（朝廷や幕府・守護などの公権力によって設定された、個々の所領支配とは次元を異にする公的な津ではない）と考えるのが妥当だといえよう。従って、狛僧正などというのも、益田荘や益田本郷の領有に関わる人物であった可能性が高く、身分の高い寺院僧侶ということからすれば、鎌倉期益田荘の荘園領主（領家）であった円満院[6]（近江三井寺３門跡の１つで、天台宗園城寺内の寺院）の僧侶と推定することができる。果たせるかな、『三井続灯記』４長吏次第に「道智 禅林寺、号狛僧正、月輪禅定殿下御息、 仁治二年十一月十一日任」[7]、同じく『寺門伝記補録』14僧伝部戊長吏高僧略伝下に「道智　光明峯寺摂政之子、権僧正道誉之弟子也、（中略）仁治二年十一月、補二長吏一、」[8]とあって、摂関家九条道家の子道智が園城寺の長吏を務め、禅林寺・狛僧正などと号したことが知られる。そして、文書の発給者法橋範政についても、尾張熱田大宮司一族の僧侶に「範政」がおり、その孫「範乗」には「円満院庁」の注記が付されている[9]。また、範政の父範真は仁治３年（1242）７月17日の仁助法親王（円満院）の園城寺長吏補任の際の布施奉行として見え[10]、法橋範政は代々園城寺円満院の坊官を務める家柄であったと推定できる[11]。以上より、この文永５年の文書は荘園領主（領家）の事務局の者が発給したもので、津料の徴収権も荘園制支配に関わる一種の得分権として、狛僧正から長盛へと相伝されたものと考えることができる。

一方、「これ」については、前後の文脈から津料浮口を指し、狛僧正（ないし長盛）に対して浮口を納入してきたと解釈することができる。範政がどういう立場から、誰に充ててこの書状を提出したのか明確でないが、本文書が広義の俣賀文書だという点を踏まえて考えれば、俣賀氏の領した豊田・俣賀地域から高津川を使って搬出される材木に課される益田本郷津での浮口をめぐって問題が生じていて、その納入先を改めて確認するよう（俣賀氏に）要請しているのではないかと推定することができよう。

以上のように、本文書に関してはなお不明な部分もあり、その正確な理解は今後の検討課題としなければならないが、しかしそうした点を除いても、本文書が新たに発見されたことには重要な意味があり、その益するところは極めて大きいといわなければならない。とくに注意すべきこととして次の３点を指摘することができよう。

まず第１は、益田川の河口部に津（関所）が設けられ、浮口を含め津料（関銭）の徴収されている様子が13世紀中頃にまで遡る形で確認されたことである。これは、すでにこれ以前から益田川や高津川などの河川水運を用いた物資の流通が大きな賑わいを示していたことをうかがわせるものであり、益田荘成立期の益田地域の様相を解明する上に重要な手がかりを与えるものと評価することができる。

第２は、本文書が益田本郷の領域を具体的な形で確認することのできる最初の史料だということにある。中世益田荘は、本郷（益田郷）・納田郷・井村郷・弥富名・乙吉郷など、５つの単位所領からなる複合的な所領として成立したが、その中核部分をなす益田本郷については、従来その具体的な領域が明確でなく、益田荘の実態解明に大きな障害となってきた。しかし、本文書の発見によって益田

---

[6] 元亨４年（1324）12月23日某袖判家清奉書（益田家文書82-５）に「石見国益田庄郷々御知行事、円満院宮令旨如此」と見える。
[7] 大日本史料５-13。
[8] 大日本史料５-13。
[9] 尊卑分脈２、475ページ。
[10] 三井続灯記５（大日本史料５-14）。
[11] 狛僧正と範政に関しては西田友広氏のご教示による。

川の河口部までが益田本郷に含まれていたこと、しかもそれが13世紀中頃以前にまで遡ることが明らかとなったことで、成立期益田荘の様相解明が大きく前進することになったと評価することができる。

第３は、新たに発掘され、重要な情報を提供することとなった沖手遺跡や中須西原・東原遺跡などの考古遺跡と文献史料との具体的な連関が、本文書の発見によって明確となり、その実態解明が大きく前進する可能性を切り開いたことである。

そこで、以下節を改め、第１・第２の点を中心に若干の考察を試みることにより、第３の点に少しでも貢献できるよう努めたいと考える。

３．益田本郷と益田川関

まず、第２の点から検討を進めることとしよう。従来、益田本郷の具体的な領域が分かる史料として知られてきたのは、南北朝期の永和２年（1376）４月２日に作成された２通の益田本郷御年貢并田数目録帳[12]と、ほぼ同時期に作成されたと推定される年月日未詳の益田本郷田数注文[13]とであった。これらの史料によると、益田本郷は大きく益田川上流域の奥十二畠（但し、飛び地の形で日本海沿岸部の土田・平原・金山・浦大谷地域を含む）と中流域の志目羽（乙吉・染羽から野坂・横野・大谷・久々茂に至る地域）、及び下流域の徳原（七尾山麓の益田川南岸部）・波田原（三宅御土居西側の片山から久城・中須に至る益田川流域の河口部）の４地域に区分されていた[14]。しかし、これらの史料が、いずれも益田氏惣領が益田地域（三宅御土居）に拠点を定め、その再編成に乗り出した兼見時代のものであるところから、それ以前の益田荘成立期については不明とされてきた。とくに、乙吉郷（保）が益田本郷の下流域に位置し、かつ中須や久城地域の所属を明示する史料が存在しないことから、益田荘成立期の益田川下流域における益田本郷の領域は必ずしも明確でなかった。それが、この文書の発見により、益田川河口部までが益田本郷域であること、しかもこの文書がモンゴル襲来より６年前の、北条氏が石見国守護として入部する以前のものである（従って、益田氏の益田荘地頭職が没収されるなどの、益田荘支配の領有をめぐる大きな変動はなかったと推定できる）ことから、益田川河口部までを含むという益田本郷の領域が益田荘成立期にまで遡ることが明確となった。

また、こうした点を踏まえて益田本郷御年貢并田数目録帳や益田本郷田数注文を読み直すことも可能となり、より正確に事態を把握することができるようになった。１つは益田本郷領域の歴史的変遷、２つは南北朝期における４地域区分の持つ意味についてである。但し、これらの問題を全面的に論じるためには、益田本郷の開発や下地中分、あるいは益田氏一族による所領の分割相続のあり方などを含め、多様な問題について論じなければならない[15]ため、ここではごく簡単に結論的な部分のみを指摘するに止めたい。

まず前者では、とくに次の２点が重要であろう。１つは乙吉郷など乙吉氏の所領との関係である。

---

[12] 益田家文書80・81（井上寛司・岡崎三郎『史料集・益田兼見とその時代』49・50）。
[13] 益田家文書74-２（同上51）。
[14] 前掲註(12)において、波田原を「旧吉田村から下本郷・中須・中嶋・久城にかけての地域」（132ページ）として吉田地域を含めたのは不正確であり、訂正の必要がある。
[15] これについては、筆者の見解（前掲註(12)など）を批判する形で原慶三氏が興味深い議論を展開しており（2009年12月13日の「れんげ草の会」での講演「平安末期から南北朝期にかけての益田地域」）、早急に論文として公表されることを強く期待したい。

さきにも述べたように、成立期の益田荘において乙吉郷は益田本郷と肩を並べる独立した所領であったが、益田本郷田数注文では益田本郷（志目羽）の内とされている。これは、14世紀中頃までに乙吉氏の所領（一部であろう）が益田本郷内に組み込まれ、乙吉氏の益田氏への家臣化が進行しつつあったことをうかがわせるものといえる。それは、同じく本来は益田本郷と肩を並べる単位所領＝弥富名に属し、鎌倉末期の分割相続や所領紛争などを経て乙吉氏の所領になったと考えられる土田村[16]（同じく一部であろう）が、益田本郷（奥十二畠）として記載されている（奥十二畠が２つの飛び地からなるのはこうした背景によるものであろう）ことからも裏付けられるところといえる。益田兼見が「乙吉・土田両村」の領有を室町幕府から公式に承認されるのは、この後の永徳３年（1383）２月１日足利義満御判御教書[17]でのことであるが、実際には乙吉・土田両村の益田本郷内への取り込みがすでにこれ以前から進行しつつあったことを示すものに他ならない。

いま１つは東仙道郷との関係である。益田川の上流に位置する仙道地域は、これまた本来は益田本郷の内であった。それが、同じく鎌倉後期における分割相続などを通じて兼見の父兼世（仙道孫太郎入道）に譲与され、また北条氏によって益田氏の益田本郷地頭職が没収される中で益田氏が徳原（得原）から仙道郷に拠点を移し、益田本郷とは別の所領となったのであった。さらに、弥富名の再編成を通じて、大草・種地域が遠田地域の再編弥富名とは別の益田氏領とされたのにともなって、これを北仙道郷と称し、旧仙道地域（東仙道郷）と区別することとなった[18]。永和２年に作成された益田本郷御年貢并田数目録帳などは、こうした歴史的推移を踏まえた上で、再編された益田本郷域内の田畠を書き上げたものであったと考えられるのである。

後者については、以上に述べたような益田本郷域の再編成とともに、開発の進展や下層民衆の成長などにともなう百姓名の分割・独立がいま１つの重要な要因であったと考えられる。益田本郷田数注文によると、例えば五郎大夫名が小野・波田原（ともに波田原地域）と大山（奥十二畠地域）の３ヶ所に分けて記載されていて、もとは３町を超える大規模な名田であったのが、小規模な３つの百姓名に分割・再編成されているのがわかる。益田荘成立期の名田が散りがかり的な形で益田本郷内各地に展開し、複雑な入り組み関係となっていたのを、名の分割によって整理するとともに、それらを改めて志目羽・波田原以下の４地域に区分し直したのであった。筆者が本百姓・間人名体制と呼んだのは、益田兼見によって進められたこうした新しい地域民衆支配体制のことであり、それは益田本郷を４つの地域に区分することと一体的な関係にあったと考えることができる。そして、そうした地域的なまとまりという点からすれば、かつての乙吉郷は益田川流域部分の波田原と、染羽に隣接する内陸部の志目羽の２つに分割されたと考えるのが妥当だといえるであろう。益田本郷田数注文において乙吉が志目羽に属すとされたのは、それら旧名田の中核部分（名主屋敷の所在地など）が内陸部に位置したことによるのではないだろうか。この点は名田の具体的な復元などと合わせ、今後改めて検討する必要があるといえよう。

次に第１の点について。さきにも述べたように、この新出史料が最も注目されるのは、益田川河口部の川関の存在が13世紀半ばに遡る形で確認されたことにあり、島根県内地域ではその初見史料ということができる。11・12世紀の中世荘園公領制の成立にともなって、島根・山陰地域でも水運が基幹

---

[16] 日本歴史地名大系33『島根県の地名』（1995年、平凡社）「土田村」の項参照。
[17] 益田家文書３-８（『大日本古文書・益田家文書』10）。
[18] 前掲註(16)「東仙道郷」・「北仙道郷」・「弥富名」などの項参照。

的交通手段として成立・発展したと推定されることからすれば、こうした外洋との接点に位置する河口部地域に多数の津や湊が成立したであろうことは想像に難くない。しかし、これまでそれを具体的に裏付ける史料に欠け、想像の域を出るものではなかった。今回、益田本郷津の存在が明確となったことで、長野荘域の高津川河口部などを含め、各地に津や湊の成立したであろうことが明らかとなった。

本文書でいま１つ注目されるのは、筏流しの材木に浮口が課されていることである。これは、益田川上・中流域（あるいは長野川流域）からの材木の搬出が盛んであったこと、及びこれらの材木が商品として搬出されたことを意味しており、それを支える大きな需要のあったことが推定できる。これらの材木は、その一部が益田本郷津で改めて外洋船に船積みされ、益田以外の他地域に搬出されたことも考えられるが、しかし沖手遺跡など益田川河口部地域で消費されたことも十分に推測することができる。沖手遺跡が「町」的な景観を持つとされるのは、そこが材木のみならず、米・野菜などの食料品や日常生活用品など多様な諸物資の大量消費地でもあったことを意味するものであり、益田川水運はそうした需要に応える形で発展したものでもあったと考えられる。

沖手遺跡との関係では、沖手遺跡集落の成立が益田氏を中心とした藤原（御神本）氏一族による益田平野の開発から益田荘の成立へと至る時期とほぼ重なり合っていることが注目される。沖手遺跡集落は、益田地域におけるそうした古代から中世への歴史的な転換と機を一にする形で成立し、発展を遂げたものであり、その賑わった様子からは、この集落が益田川の流域に沿って成立・展開する益田荘全体の一つの結節点（流通センター）という位置を占めていたこと、さらには高津川・益田川流域の諸荘園公領共同の１つの流通拠点としても機能したのであろうことを推測することができる。益田本郷が益田荘の中核的な位置を占め、また南北朝期に益田氏惣領（兼見）がここに拠点を定め、以後益田氏が石西さらには石見国全体に大きな勢力を誇ったのも、ともに古益田湖を擁した益田川河口部が早くからこの周辺地域における流通の拠点として、重要な機能や役割を担っていたことと深く結び合っていると考えることができる。逆からいえば、沖手遺跡や中須西原・東原遺跡が大きく成長していく歴史的条件も、こうした点にこそあったといえよう。

４．むすび

以上、本稿では新出の益田荘関係文書を素材としながら、そこから何が読み取れるのかの検討を通して、沖手遺跡や中須西原・東原遺跡との関わりについて考えた。推測に推測を重ねる不十分なものではあるが、益田本郷市や今市などとの関係も含め、沖手遺跡や中須西原・東原遺跡の推移を益田氏や益田地域の歴史の中に正しく位置づける作業が改めて重要な課題として提起されたことは疑いない。益田本郷津の具体的な場所やその構造など、未だ不明な部分も多く、何よりもこれらの遺跡とこの川関との関係は未だ明確でないが、それらの点については発掘調査の進展をも見守りながら引き続き検討を進めていくよう努めたいと考える。

〔付記〕

本稿は、『沖手遺跡-市道中吉田久城線道路改良工事に伴う文化財発掘調査-』（益田市教育委員会、2010年）に掲載された、拙稿「中世の益田川関と沖手遺跡」の表題の一部を変更するとともに、若干の加筆を行ったものである。

高津川・益田川河口域の港湾遺跡群出土陶磁の背景

村上　勇（奥田元宋・小由女美術館長）

1．はじめに

2004（平成16）年以降の沖手遺跡、中須西原遺跡、中須東原遺跡など、高津川・益田川河口域の遺跡の発掘調査成果は、この圏域の港湾遺跡に対する考えを大転換させる内容を有していた。ここでは遺跡ごと、時代ごとにみられる出土陶磁の様相から、その歴史的背景を考える上での簡単なメモを提示してみたい。

2．沖手遺跡

道路・溝・柵列・建物・井戸跡等の密な遺構が検出された。報告者は、直線または方形に巡る道路や柵によって区画され、複数の屋敷地や遺構空白域が組み合わさって構成されている点が特徴的であり、こうした集落構造は、沖手遺跡で本格的に集落が形成される11世紀後半～12世紀前半の段階ですでに成立したものと推察し、成立段階から、道路を骨格とした集落全体の地割が行われたと考えている。列島規模でみても、当該期の港湾機能に関連すると考えられる町的集落としては稀有のものである。

こうした集落構造が11世紀後半～12世紀前半の段階で成立したとする根拠は、遺構が密集する中心区域から、大宰府編年C期の貿易陶器（白磁）が多数出土したからである。県教育委員会調査範囲から出土した、全土器・陶磁器中に占める貿易陶磁3,283点（11.11％）のうち、中国産の白磁は1,617点（5.47%）、青磁は1,221点（4.13%）という高比率で、時期別にみると、白磁Ⅳ類が主体となるC期のものが540点、これに次いで龍泉窯系青磁碗Ⅰ類等が主体となるD期（12世紀中頃～後半）が589点、以下、E期175点、F期91点と前代より減少する。ちなみに、中世後半のものはG～H期で168点、I～K期で138点と遺物量はかなり減少する。なお、青白磁合子、青磁水注・香炉・小壺、陶器小壺などの希少品の出土から、集落に有力人物の存在が推測されている。また、並行して調査された益田市調査部分では、貿易陶磁の割合が多いことが注目されており、やはり時期的に中心となるのは，C期、D期の貿易陶磁であった。いずれにしろ、11世紀後半の中国産貿易陶磁が前代とは比べ物にならない比率で出土するのは、絶対量を問わなければ、大陸との窓口であった博多遺跡群の様相に近いものがある。

「白磁の洪水」といわれるほどの状況を呈した博多遺跡群[1]を踏まえ、早くこの問題に言及した亀井明徳は、日本における中国陶磁への際限ない需要はもちろんであるが、これを実現させたのは、中国海商の、波打際貿易から、「住蕃貿易」への貿易システムの変換があったからだとしている[2]。11世紀後半の博多や、あるいは北陸の敦賀などで宋人居住の事例が増加するが、こうした傾向は広く東南アジア各地でも確認されている。南宋政府が、交易による財源確保のため、積極的に海外市場を求めたところが大きく、活発な生産を行った江西、福建、広東、浙江南部地域の製品が輸出された。住蕃貿易により来日した中国海商は博多では「唐坊（唐房）」と呼ばれた中国人居留地で活動していた。

---

(1) 池崎譲二・森本朝子「海を越えてきた陶磁器」『よみがえる中世１－東アジアの国際都市　博多』平凡社、1988年。

(2) 亀井明徳『日本貿易陶磁史の研究』同朋舎出版、1986年。

宋人居留地かどうかは判然としないが、トウボウ地名は九州以外では山口県で８か所確認されており、近々では阿武郡阿武町奈古にも「東方」地名がある[3]。

こうしたことに言及したのは、沖手遺跡の町的な港湾集落が、11世紀後半から12世紀前半段階に整然とした纏まりをもって整備された背景には、宋海商の関わりがあったのではないかと考えているからである。根拠の具体的な参考例として、島根県益田市横田町小野に所在する石塔鬼王帝釋天王国社経塚出土の青磁経筒を提示してみたい。

石見国石塔鬼王帝釋天王国社神は、沖手遺跡と同水系、高津川の中流域に位置し、津和野川と匹見川の合流地点を見下ろす山の頂上に鎮座し、『三代實録』に、陽成天皇の元慶（878）年、従５位下を授かるとあり、18世紀半ばに境内の一角から、小田富士雄が「九州発見の陶製経筒」で第Ⅰ類陶製経筒と呼んだ青磁経筒のほか、８口の壺類が出土し、現在、褐釉四耳壷３口と須恵質壺１口を含め５口が豊田神社に保管されている[4]。

小田は、紀年銘のある埋経事例が1111年から1130年に爆発的に増加し絶頂に達すること、また絶対年代のわかる第Ⅰ類陶製経筒もこの範囲にあることから使用された年代を推定している。分布は筑前四王寺山に集中し、筑後から九州の一部に散在する状況を取り上げ、この手の経筒は大宰府官人や北九州の荘園領主達が経筒用として特別に中国華南の宋代越州窯系の民窯に制作注文したといい、遠隔地に孤立的に発見される例は、大宰府と交渉を持ちうる階層の人々が関与した可能性を指摘している。

さらに、亀井明徳は、石塔鬼王帝釋天王国社経塚出土の越州窯系青磁経筒と同類のものの中に、「荘」や「李」など、宋人とみられる墨書人名を持つものがあり、明らかにこれらの経塚造営に宋人が関与しており、天治２年（1125）銘銅製経筒の「宋人憑榮伏」針書も引用し、きわめて日本的な経塚造営という習俗に、施主あるいはそれに近い形で宋人が参画しているのは長期の居住、住蕃があったことを証明するといっている[5]。

高津川の中流域に立地するとはいえ、同じ水系に属し、同時代のこの経塚遺物の在り様は、河口域での沖手遺跡成立の背景を考える上で参考になるものではなかろうか。

なお、浜田市の古市遺跡からも多くの貿易陶磁が出土した。全体的な器種構成は似ており、古市・沖手は山陰でも突出した事例である。沖手同様白磁Ⅳ類碗が主体であるが、白磁Ⅱ類碗が９倍、また同安窯系青磁が沖手の２倍出土しており、同じC期内でも早く出現する要素の比率が古市遺跡で高い点は別に検討されるべき課題であろう[6]。

３．中須西原・東原遺跡

中須西原遺跡からは遺物54,661点が出土。内、貿易陶磁は3,690点を数え、中国陶磁が全体の87％を占める。中でも碗Ｄ類、Ｅ類に分類される青磁が主流で、皿・坏では稜花皿が目立ち、浅形碗も含め相当量が出土した。白磁は22％を占め、中世前期のものも一定量出土しているが、15世紀代の白磁皿Ｄ類と16世紀の白磁皿Ｅ類の端反皿が他を圧している。青花は６％、ほかに元代の鉄絵瑠璃釉大鉢、褐釉擂座壷が出土した。

---

[3] 渡邊誠『平安時代貿易管理制度史の研究』思文閣出版、2012年
[4] 村上勇・西尾克己「中国地域の経塚出土陶磁」『貿易陶磁研究No.24 』日本貿易陶磁研究会、2004年。
小田富士夫「九州発見の陶製経筒」『日本歴史考古学論叢』吉川弘文館、1966年。
[5] 註(2)に同じ
[6] 村上勇「地域研究と貿易陶磁・山陰」『貿易陶磁研究No.29 』日本貿易陶磁研究会、2009年。

特筆されることは、朝鮮陶磁が貿易陶磁の12％を占めたことである。439点の内、高麗青磁・白磁12点を含むが、大半は朝鮮王朝陶磁で、15世紀以降の灰青陶器の碗・坏・皿329点が主体を占めていた。その他、粉青沙器象嵌瓶、象嵌青磁碗・皿、刷毛粉青、焼締陶器瓶なども出土した。この数量と比率は山陰では異例のことである。また、これまで山陰では出土例がなかったベトナム産の碗、鉄絵皿等44点、タイ産の鉄絵皿・小壷３点が出土したのも特記される[7]。

さて、遺物の量的な変遷をみると、C期に土地利用の萌芽がみられるが、G期に至るまで顕著な増加傾向は見られず、中世前期の傾向は沖手遺跡とは大きな差がある。ところが、中世後期のH期(14世紀後半～15世紀前半)になると出土量は急増し、J期（15世紀末～16世紀前半・中頃）まで継続し、17世紀前半までは確実に存続したことがわかる。

ここでは、特筆される朝鮮陶磁と東南アジア陶磁の在り様からその背景を考えてみたい。西原での朝鮮陶磁の占有率は12％であったが、さすがに対馬中心部の水尻仮宿遺跡では65％を占めるのは位置的な差と歴史的環境の違いであることは明白であろう。しかし、対馬周辺部や壱岐、松浦地域でも朝鮮陶磁と東南アジア産陶磁がセットで出土する時期があり、その比率が西原の様相と極めて類似しているのである[8]。森本朝子氏は、14世紀後半から15世紀初頭にかけて明の海禁政策で中国市場を失った南蛮船が、琉球経由ではなく、東シナ海で対馬・壱岐・博多商人や倭寇と接触することにより流入したものだといっており、これらの出土事例は、対馬・壱岐を除けば、大宰府・博多を中心に瀬戸内沿岸などで１～２点のわずかな例があるだけだと述べている[9]。また、水尻仮宿遺跡に隣接する土寄には倭寇の頭目早田氏がいて、一帯に対馬最大規模の集落700戸が展開していた。東南アジア産陶磁は、遺物は、朝鮮軍が上陸した応永の外寇（1419）の焼土層から主に出土していて、下限を15世紀の早い時期に置くことが出来る。西原遺跡の朝鮮陶磁とベトナム・タイ陶磁の複合的様相は、対馬の周辺部・壱岐・松浦地域の遺跡の様相にきわめて類似しており、こうした点を重視すれば、この遺跡が石見における倭寇の拠点、あるいはこれに深く関与した交易拠点であることは明白に思われる[10]。

中須東原遺跡は、現場の様子から西原遺跡と一体のものとして考えてもよいと思われるが、ここからは遺物総数の約10％にあたる5,323点の貿易陶磁が出土した。内、中国製が92％を占め、朝鮮陶磁が約８％、東南アジア産はタイ鉄絵壷、ベトナム白磁碗など７点が出土し約0.1％を占めた。やはり、山陰では顕著な朝鮮陶磁の比率と東南アジア産陶磁の出土は、西原同様の状況にあったことを物語っていると考えられる。時期的には、東原はD期（12世紀中頃～後半）に出土量が増え、F期（13世紀中頃～14世紀初頭前後）まで安定した出土数を保っていて、西原と組成内容を異にしている。特に目につくのは、H期（14世紀後半～15世紀前半）には西原・東原共遺物量の顕著に増加する点である。

H期の14世紀後半というのは、益田氏が荘園領主に代わって実権を掌握し、再び益田本郷を本拠に、館・寺社など、地域の再編成を行った時期にあたっている。この時期、益田川上流の大年ノ元遺跡では銅精錬工房跡が検出されており、圏域の経済活動の活発化は、古代以来重要な働きをした都茂鉱山

---

[7] 木原光「石見国益田の中世港湾遺跡群」『日本考古学第32号』日本考古学協会、2011年。なお、数量・比率については本報告書を参照のこと。

[8] 宮崎貴夫「長崎県地域の貿易陶磁の様相」『貿易陶磁研究No.18』日本貿易陶磁研究会、1998年。川口洋平「産地不明の貿易陶磁―対馬・壱岐・長崎」『貿易陶磁研究No.23』日本貿易陶磁研究会、2003年。

[9] 森本朝子「壱岐・対馬出土のベトナム陶磁について」『国立歴史民俗博物館研究報告第94集』国立歴史民俗博物館、2002年。

[10] 村上勇「中須西原・東原遺跡出土の貿易陶磁と中世後期の交易」『記録集　歴史を活かしたまちづくり講演会パート12』益田市教育委員会、2011年。

の掌握とその盛行が背景にあったことを予測させる。東原では、J期（15世紀末～16世紀前半・中頃）が最も貿易陶磁が増加し、K期にも傾向が維持されている[11]。

4．中世今市船着場跡

早くから、益田本郷地区の港的遺跡として注目されていた中世今市船着場跡の調査では、防長系鍋・擂鉢・足鍋などの出土遺物から、16世紀前半に短冊形の町割りが成立したと考えられ、あるいはもう一面下層に古い遺構面が残っている可能性もあるが、最盛期は16世紀の最末期であり、17世紀初頭にその活動は一気に終息したことが確認された。貿易陶磁の出土数は少なかったが、中国陶磁19点に対し、朝鮮王朝陶磁が14点出土したのは比率として注目された。

先に見たように、下流の中須東原遺跡では、J期（15世紀末～16世紀前半・中頃）が最も貿易陶磁が増加し、K期（16世紀中頃・後半～17世紀前半）にも維持されていた。盛んに活動する東原がありながら、高津川・益田川合流地点の側に、出島のように、短冊型の今市が作られ、東上市・中市・下市、西上市・中市・下市の字名が配置されているのは、新たな市町造りの強い明確な意思を感じさせるものがある。

永禄５（1562）年、益田氏は出雲進出後の軍事費などの調達のため、杵築大社の神官別火家を倉本に任命したように、次第に大規模化する戦闘用の物資の確保、輸送などのために今市に特権的な商人を創出した可能性が高い。17世紀初頭に活動が一気に終息したのが、益田氏の関ヶ原後の須佐移転にあるのであれば、今市住人の性格は明らかであろう。

5．終わりに

高津川・益田川河口部の港湾遺跡群は、それぞれが、その歴史上の性格、位置づけを変化させながら、地域の交易・交通を担ってきたが、これまで考えられてきた以上に、東アジア的諸関係の中で展開している状況が浮かび上がってきたように思われる。

---

[11] 註(7)を参照のこと。

写真図版

図版 1

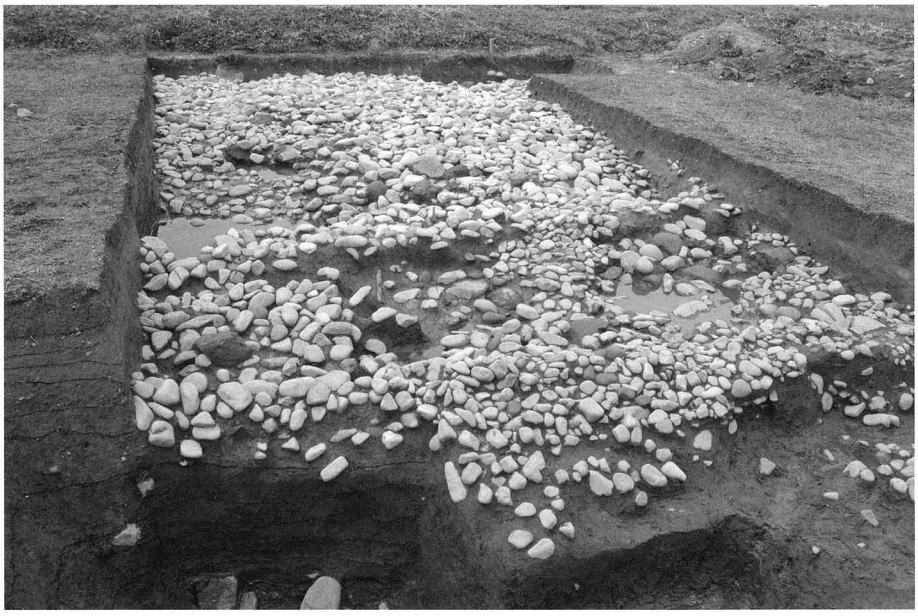
調査前の状況

調査前の状況

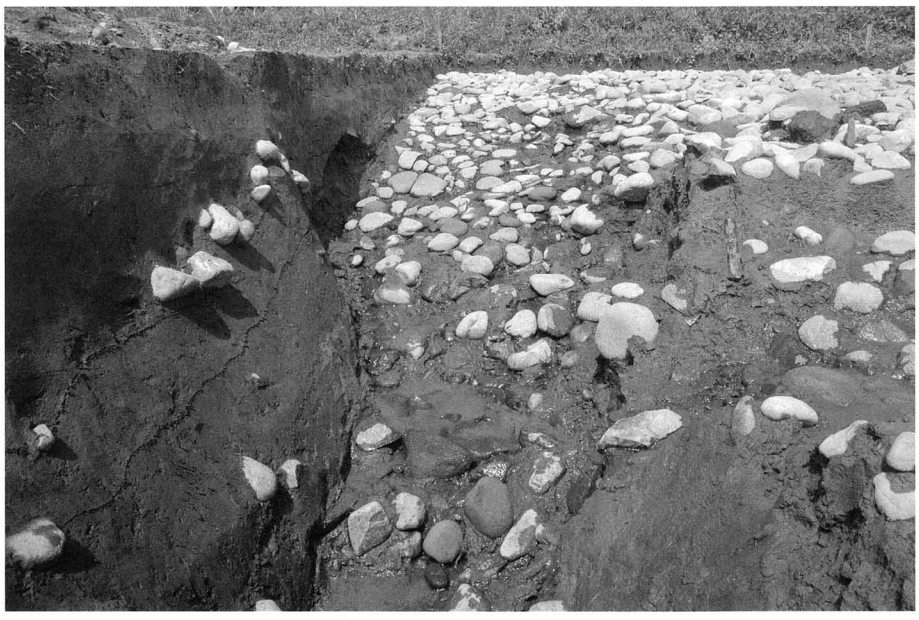
7 次SX1検出状況

図版２

７次SX1礫の堆積



７次SX1礫の堆積



７次SX1埋土の堆積

７次SX1帯水状況

７次SK5検出状況

７次SK5断割状況

図版４

８次SD24検出

G区遺構検出状況

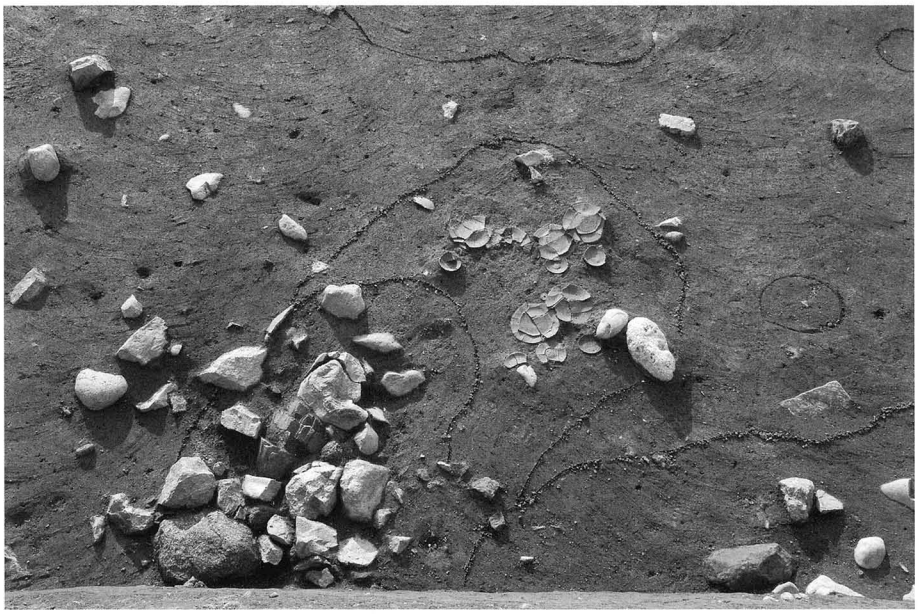
H区遺構検出状況
（右端は７次SX28）

図版５

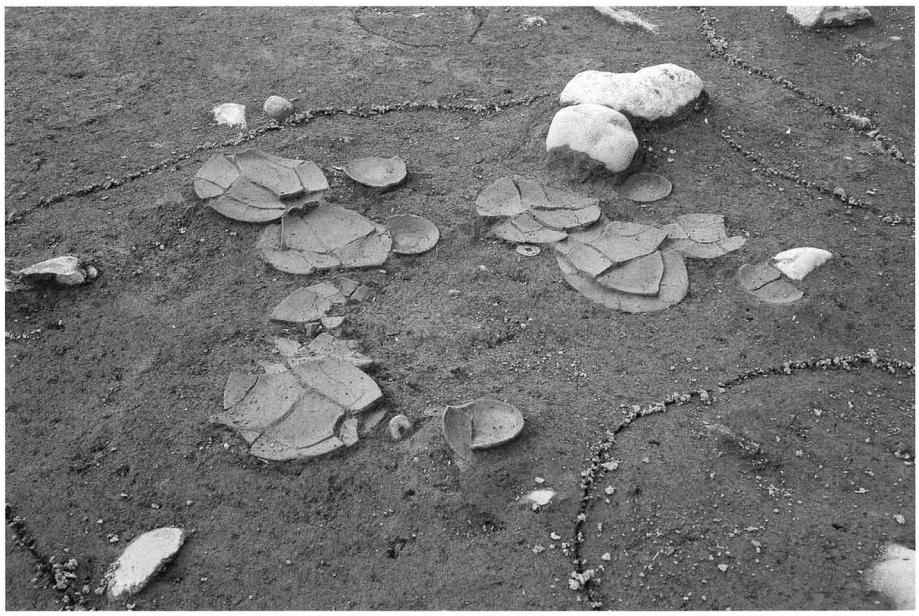
H区遺構検出状況

I区の造成のために投げ
込まれた礫

図版６

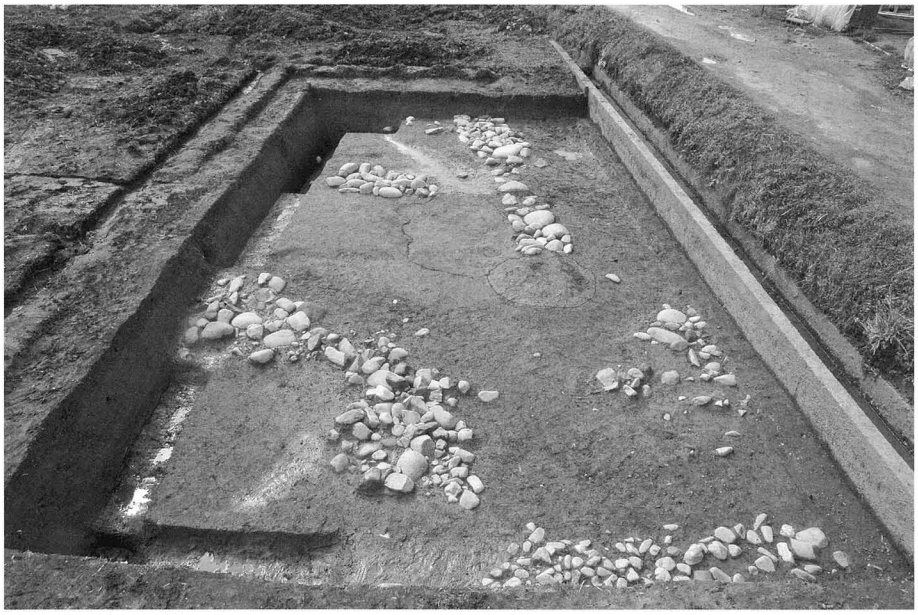


８次SK11検出状況



８次SK11遺物出土状況

８次SK11銭貨と木材出土状況



J区遺構検出状況

10次調査完掘状況
（西から）

10次調査
２つの遺構面検出状況
（４Gグリッド）

図版８

10次調査完掘状況
（東から）

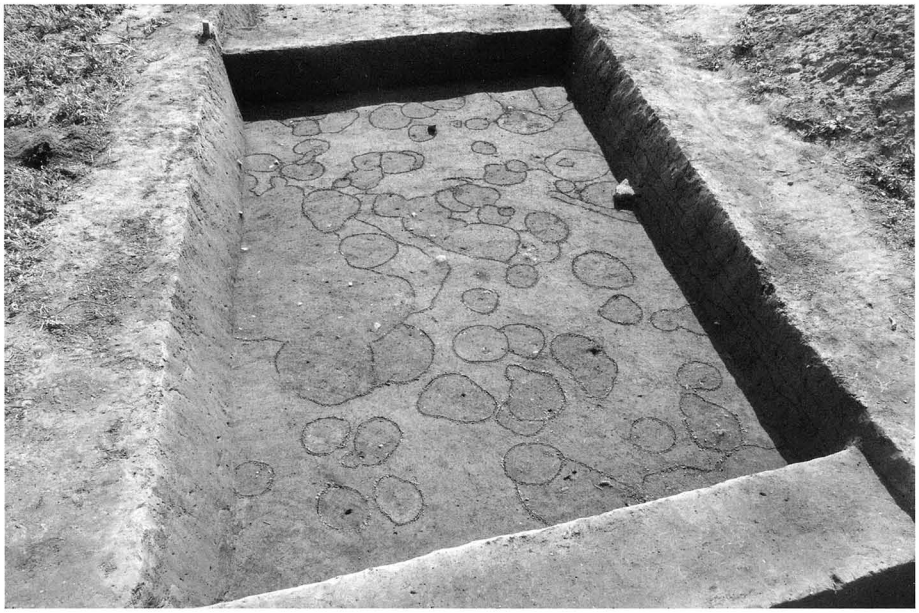
10次SX266検出状況

10次調査
12G土層堆積状況

10次調査
第２遺構面検出状況

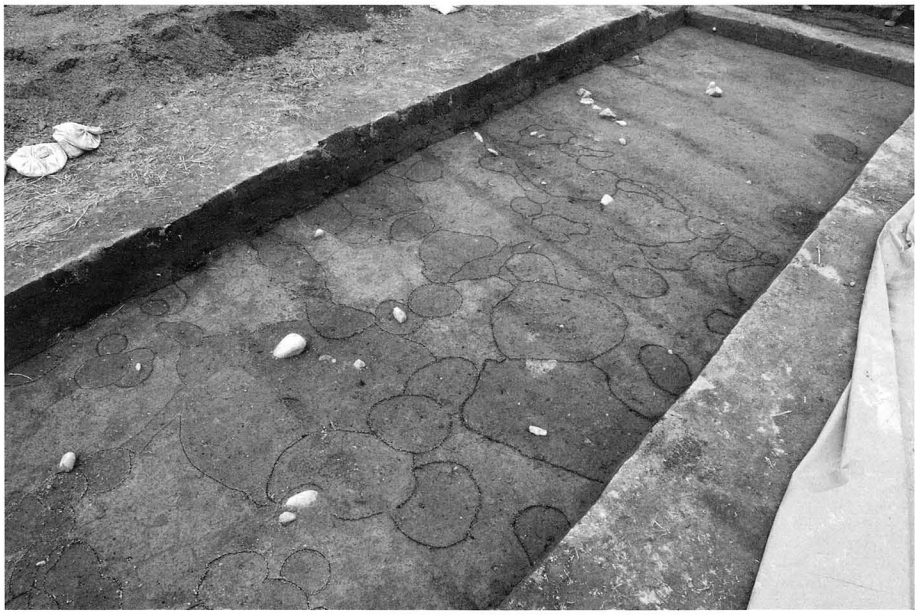
10次SK104、SK105
検出状況

図版10



10次調査
16G遺構検出状況

10次調査
17G遺構検出状況



10次調査
18G遺構検出状況

10次調査
22G遺構検出状況

10次調査
22G遺構検出状況
（石列を境に地山は砂質
へと変化する）

10次SX267検出状況

図版12

10次調査
26G土層堆積状況

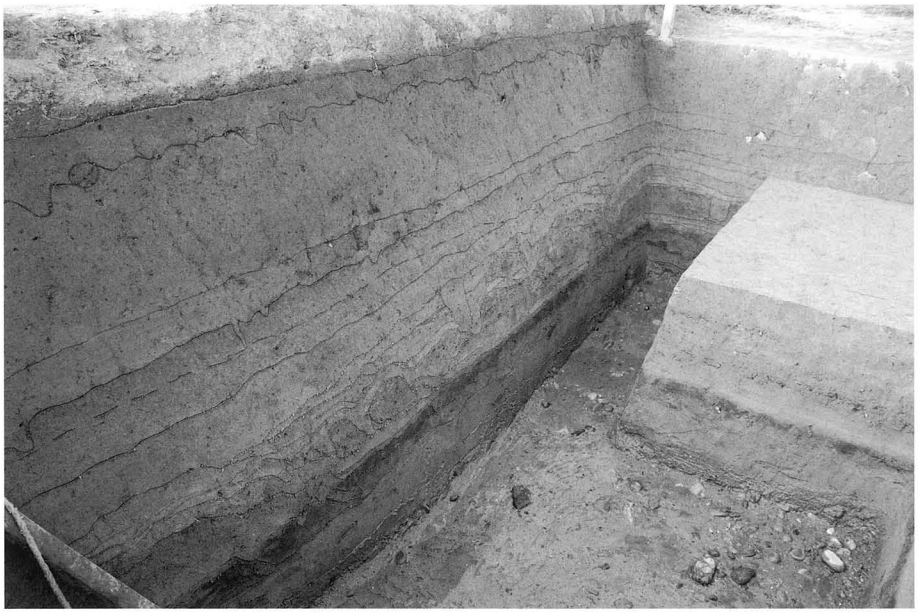
10次SX265と道路状礫敷き遺構の検出状況

10次SX265と
道路状礫敷き遺構

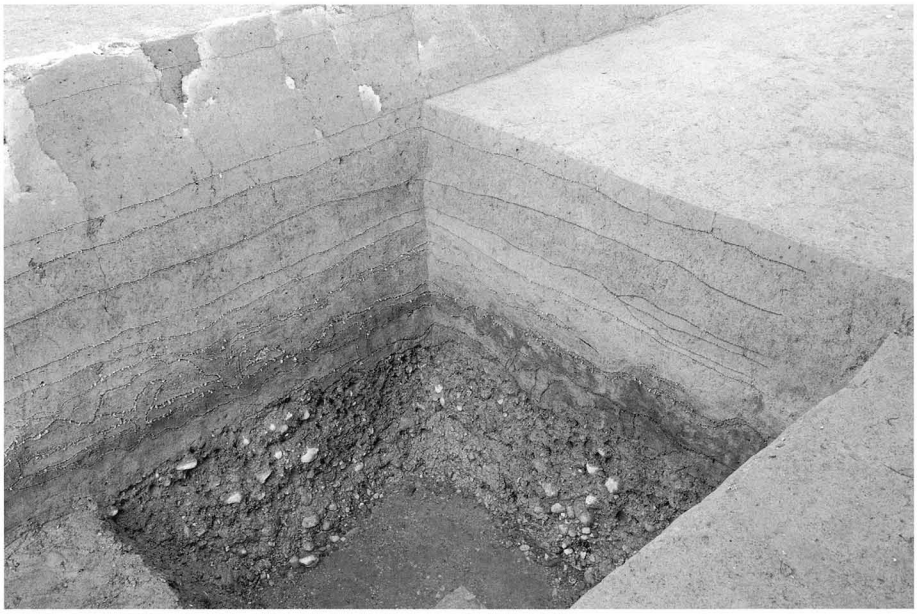
10次SX265
土層堆積状況

11次SK1検出状況

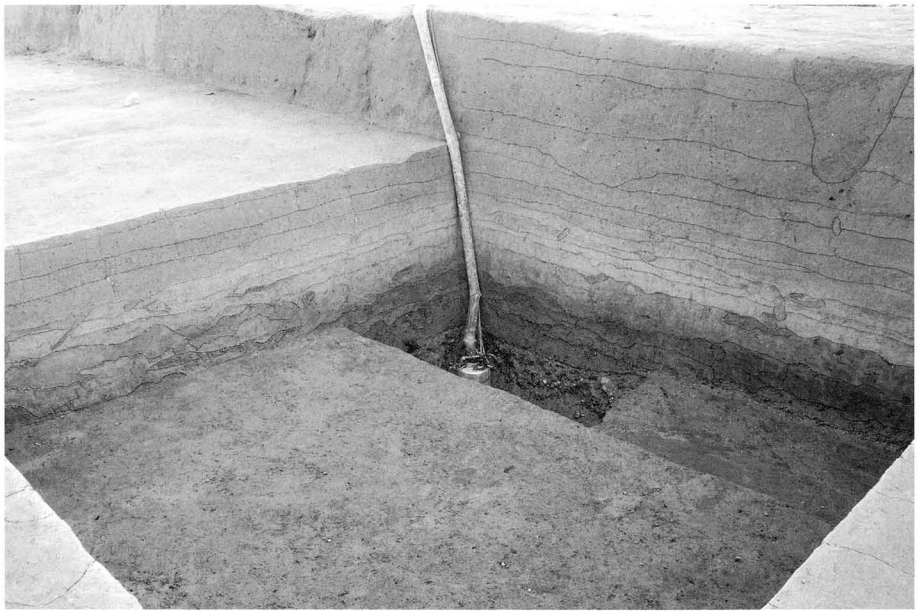
図版14



11次調査
C8付近土層堆積状況



11次調査
C10付近土層堆積状況



11次調査
F13付近土層堆積状況

11次SD1検出状況

11次調査
SB1検出状況

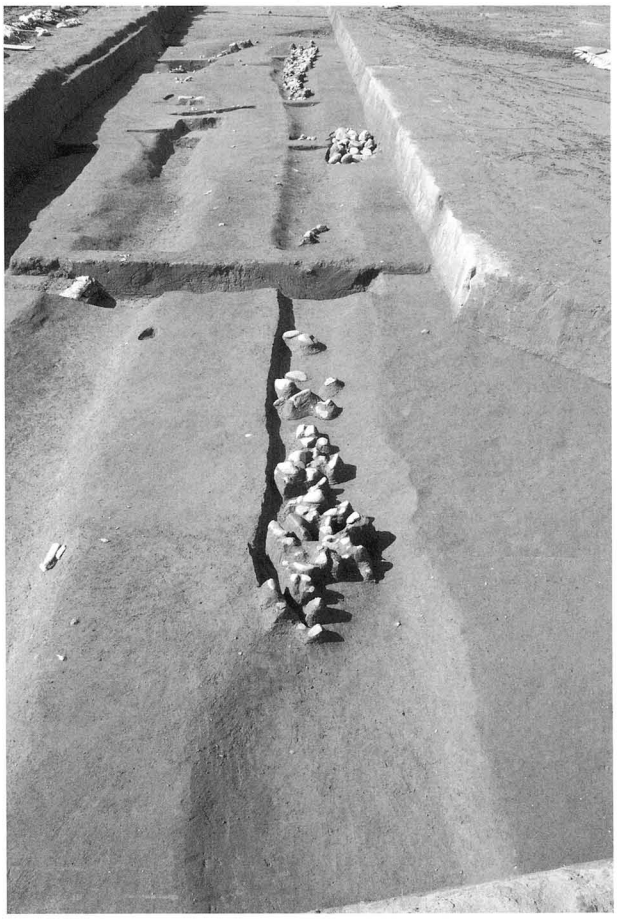
11次SD24他検出状況

図版16

11次SD23他検出状況

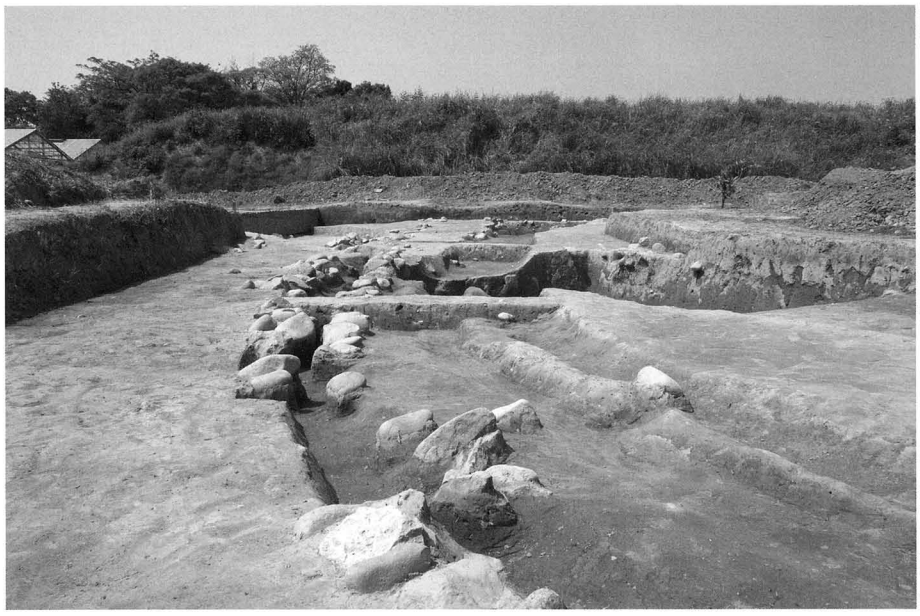
11次SD23土層堆積状況

11次SD6及びSD7
検出状況

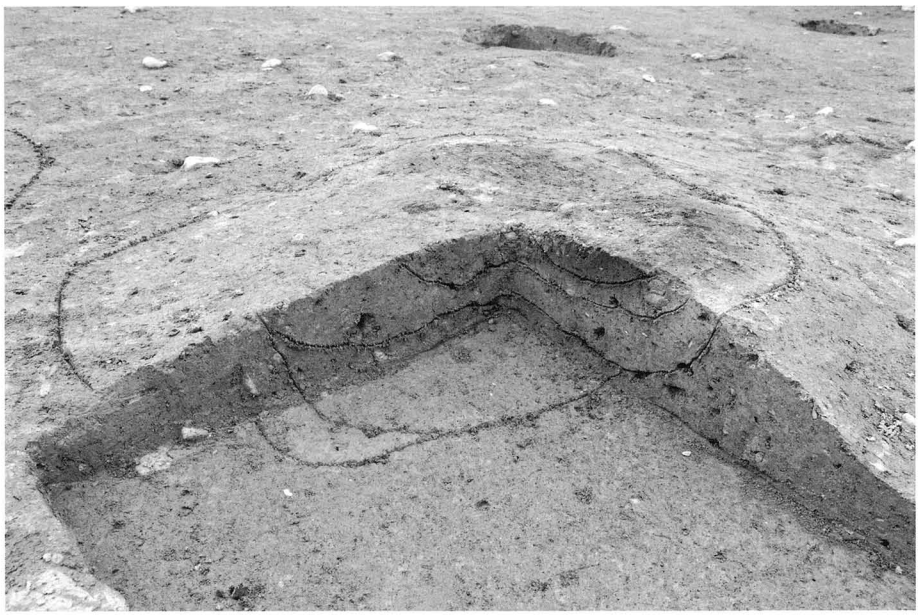


11次SD6及びSD7
完掘状況

図版18



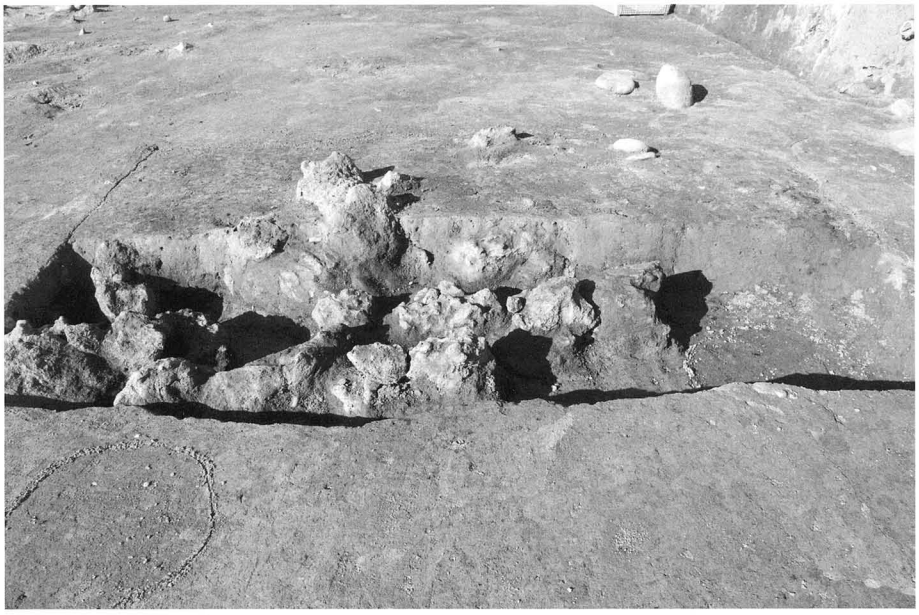
12次SD1完掘状況



12次SK92土層断面

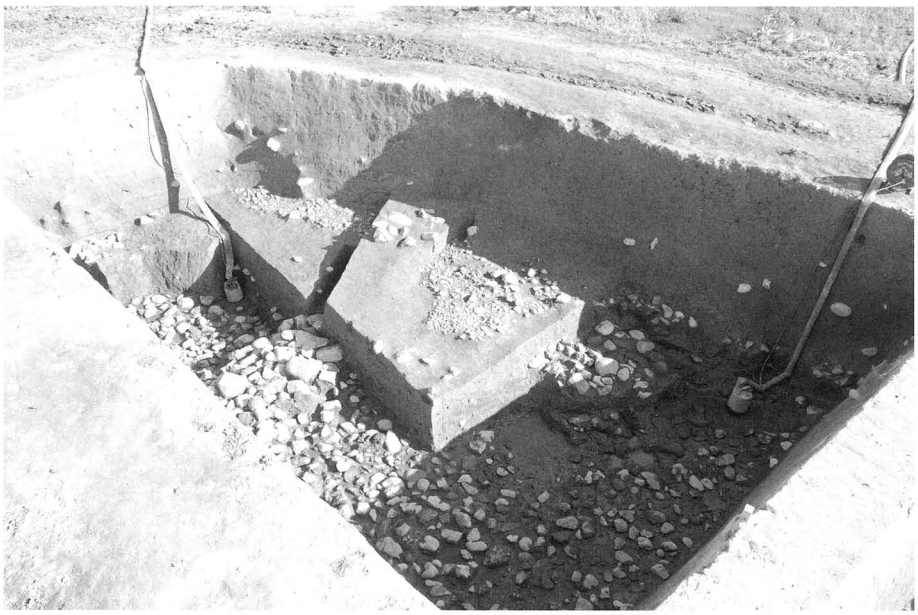
SB2検出状況

12次調査
北西部の砂丘端部

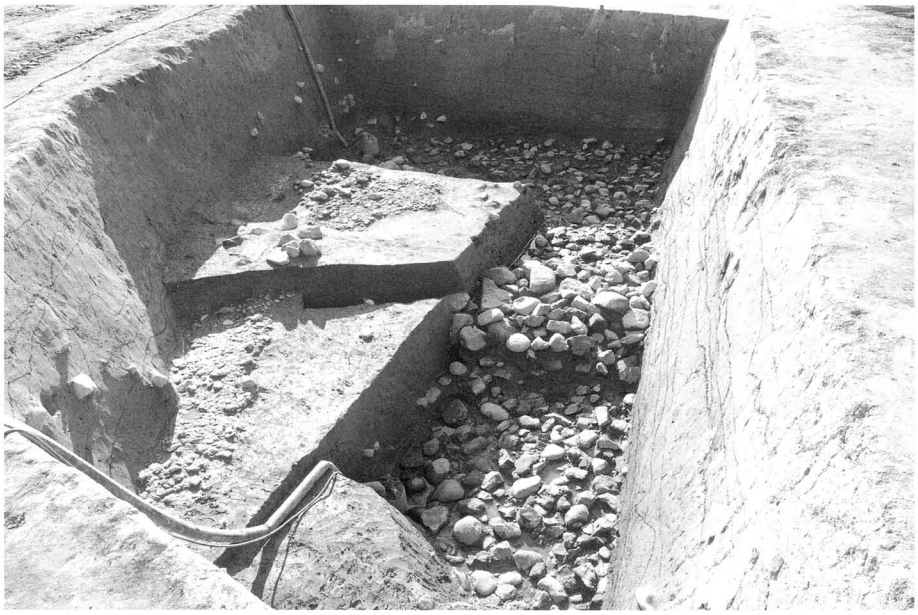


12次SK56鍛冶関連遺物
出土状況

図版20

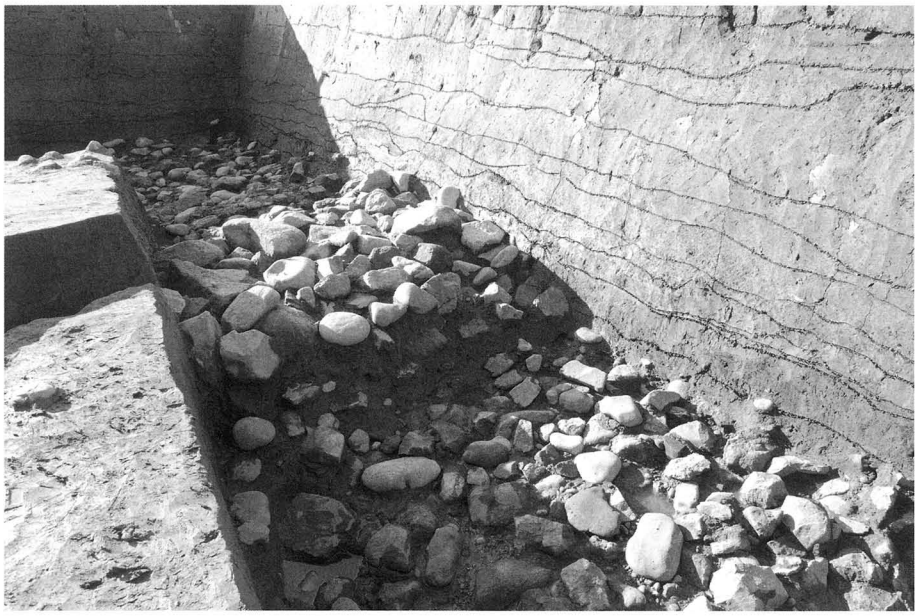


12次SX119検出状況
（北西から）



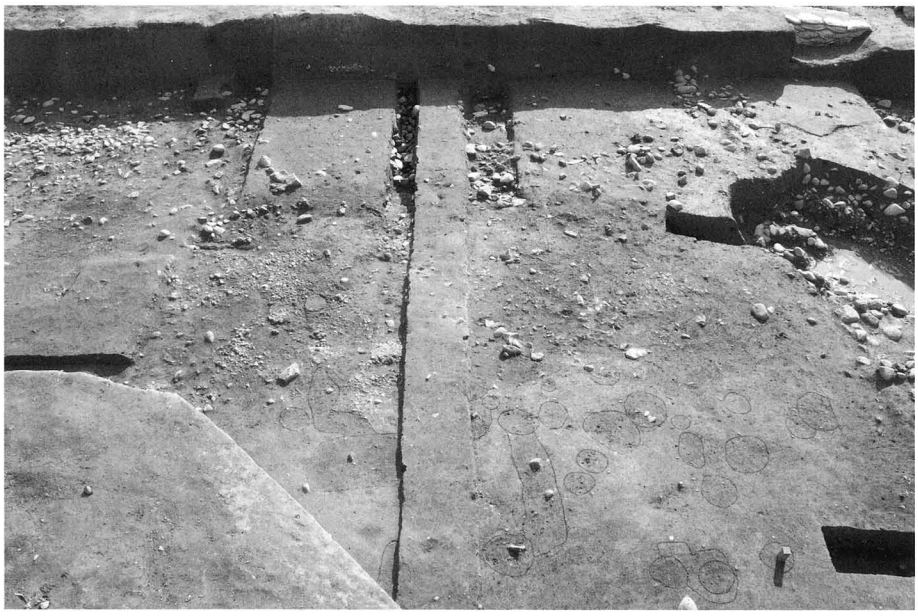
12次SX119検出状況
（東から）

12次SX119
土橋状の石積み



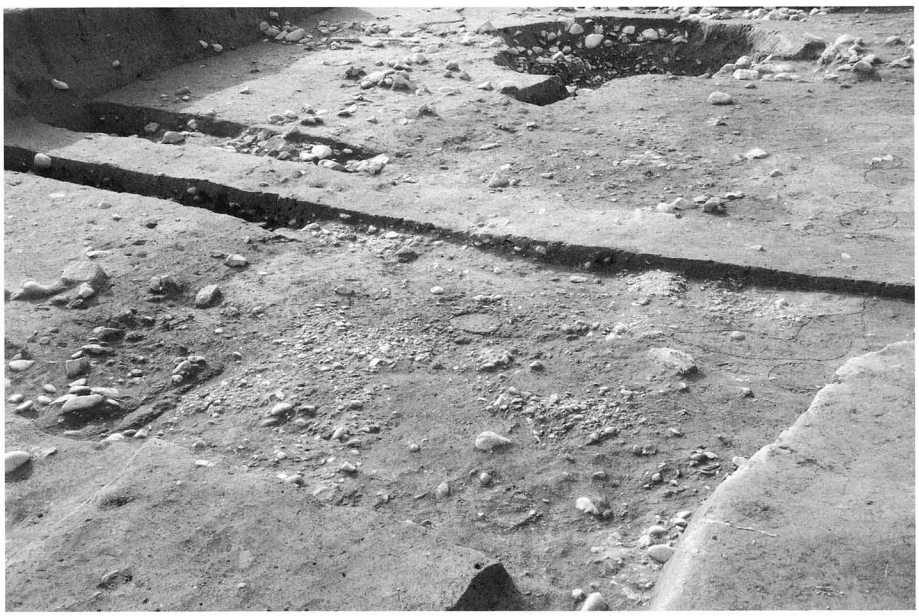
12次SX119
土層堆積状況

12次SX119
南北セクション
土層堆積状況



12次調査
L2周辺
鍛冶遺構検出状況

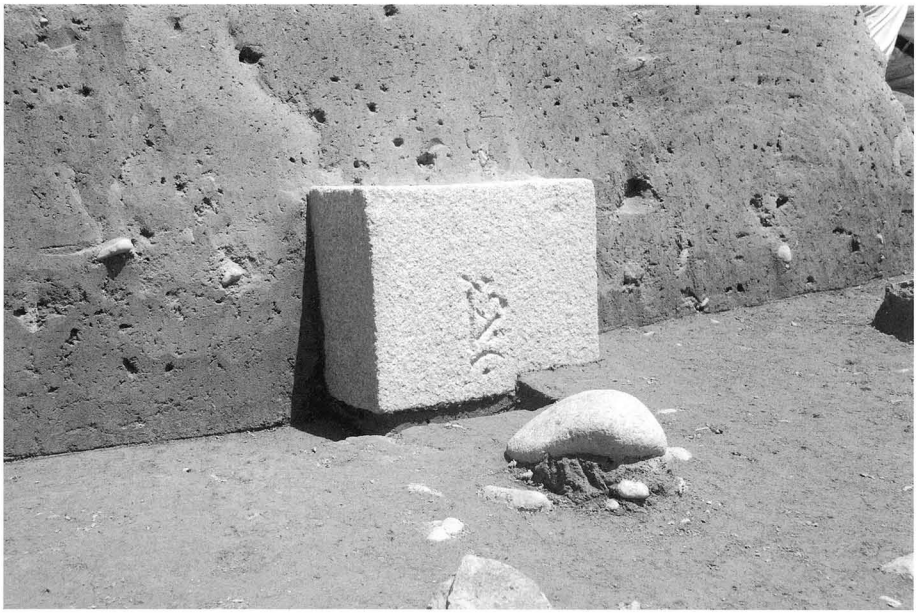
図版22



12次調査
L2周辺
鍛冶遺構検出状況

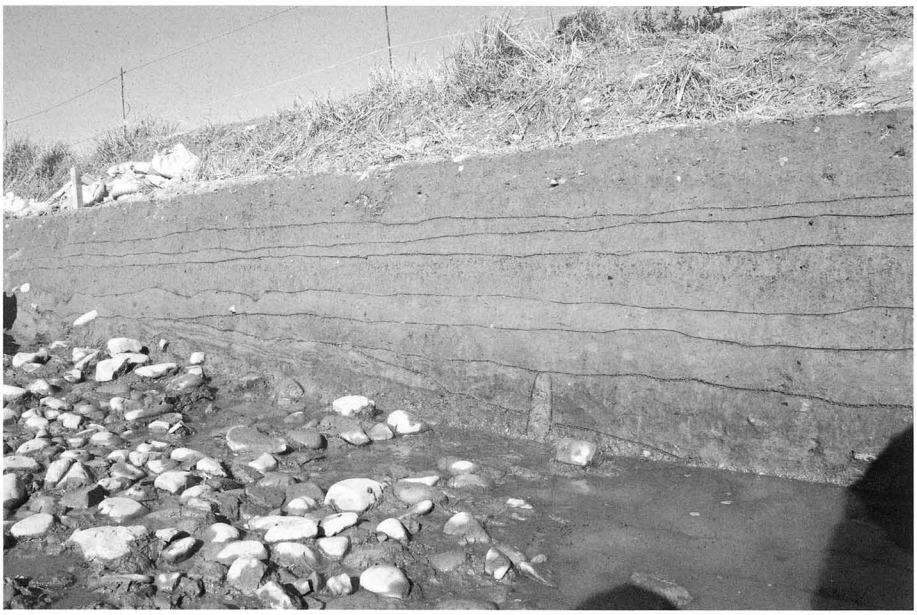
12次調査
L2周辺
鍛冶遺構検出状況

12次調査
L3周辺
遺構検出状況



12次調査
L3石造物出土状況

14次SX22検出状況



14次SX22土層堆積状況

図版24

14次調査
II区畑と考えられる畝状遺構

青磁（1）

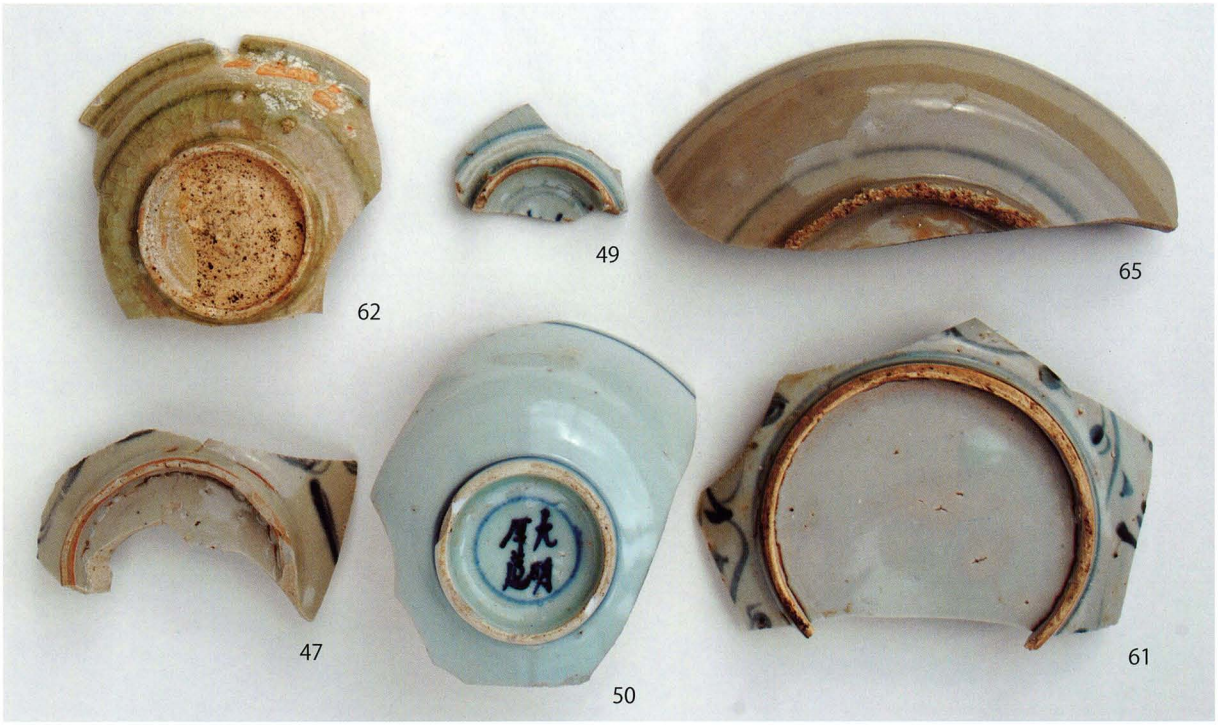
図版26

12
16
15
24
18
21
13
17
23
25
20
19
9
22

青磁（2）

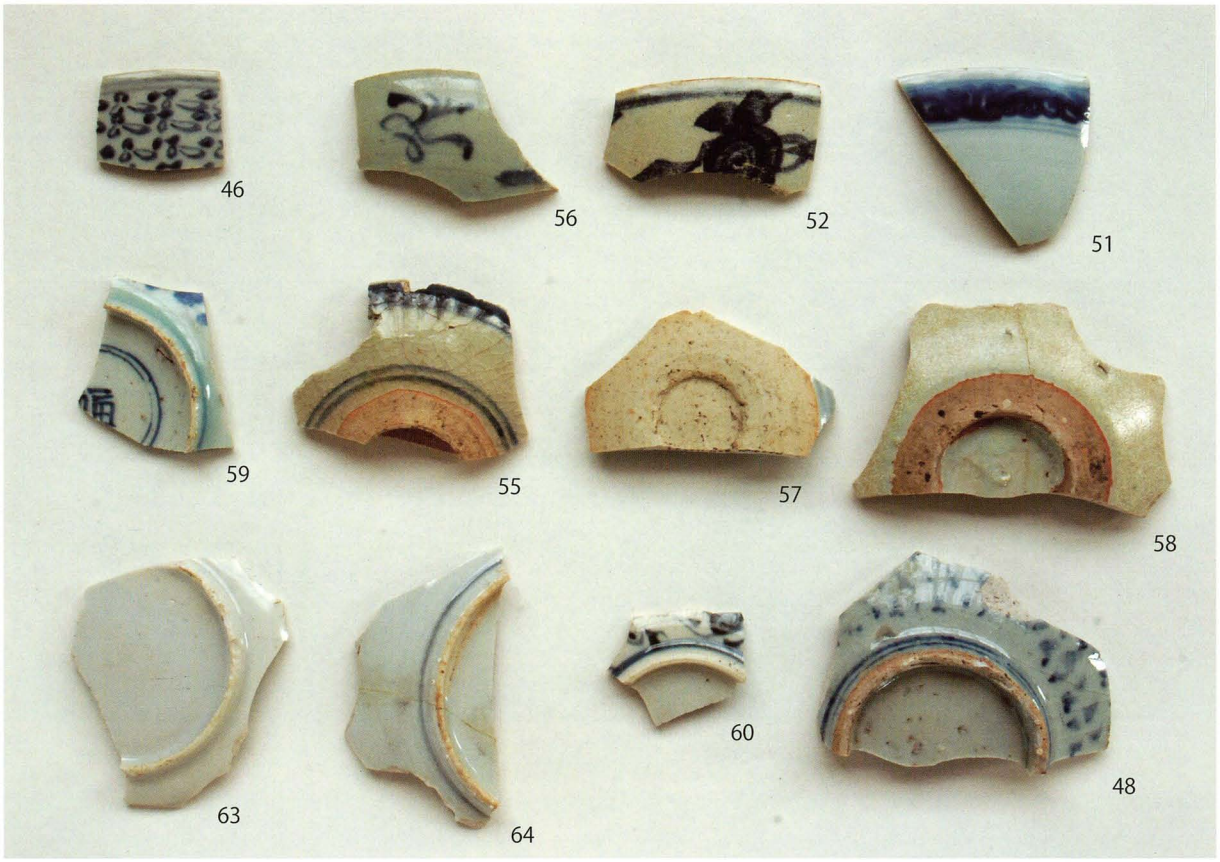
26
27
29
31
28
32
30
40
33
44
37
38
34
39
35
36
41

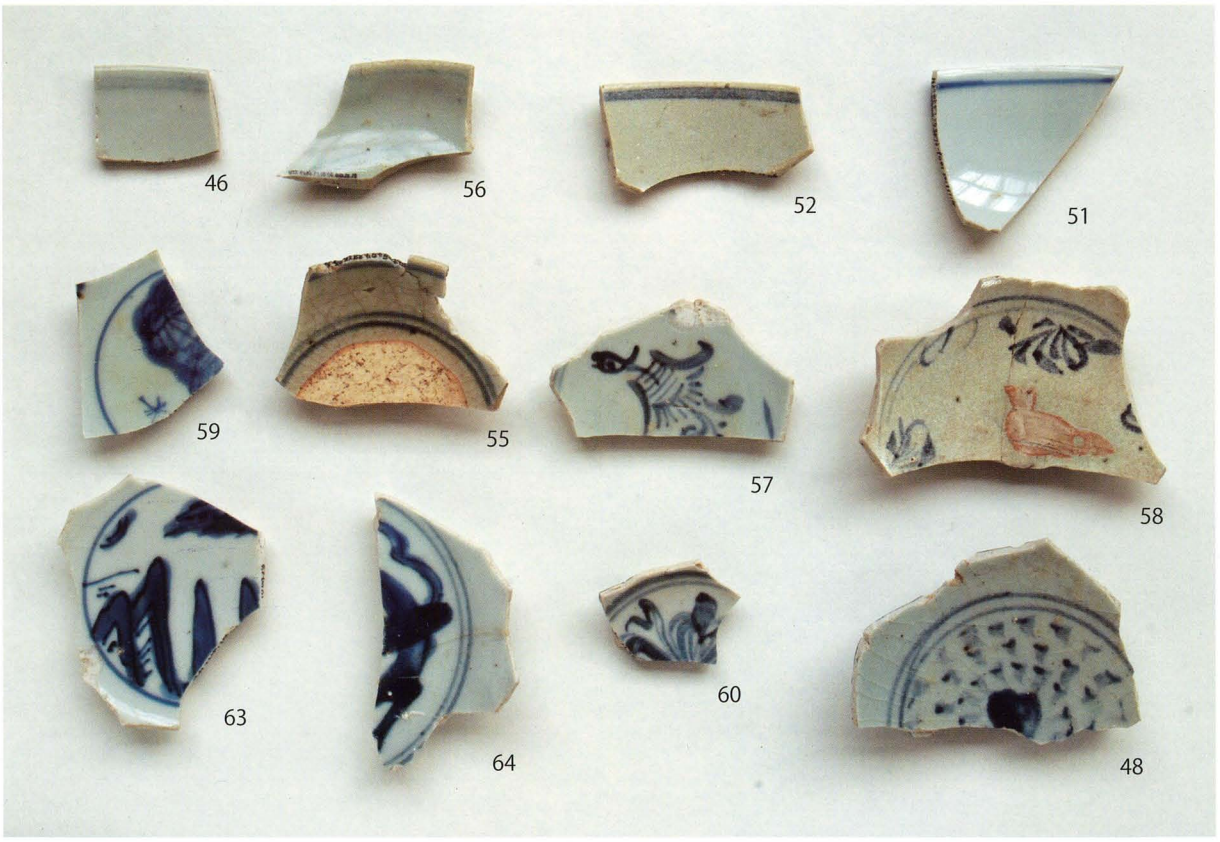
白磁



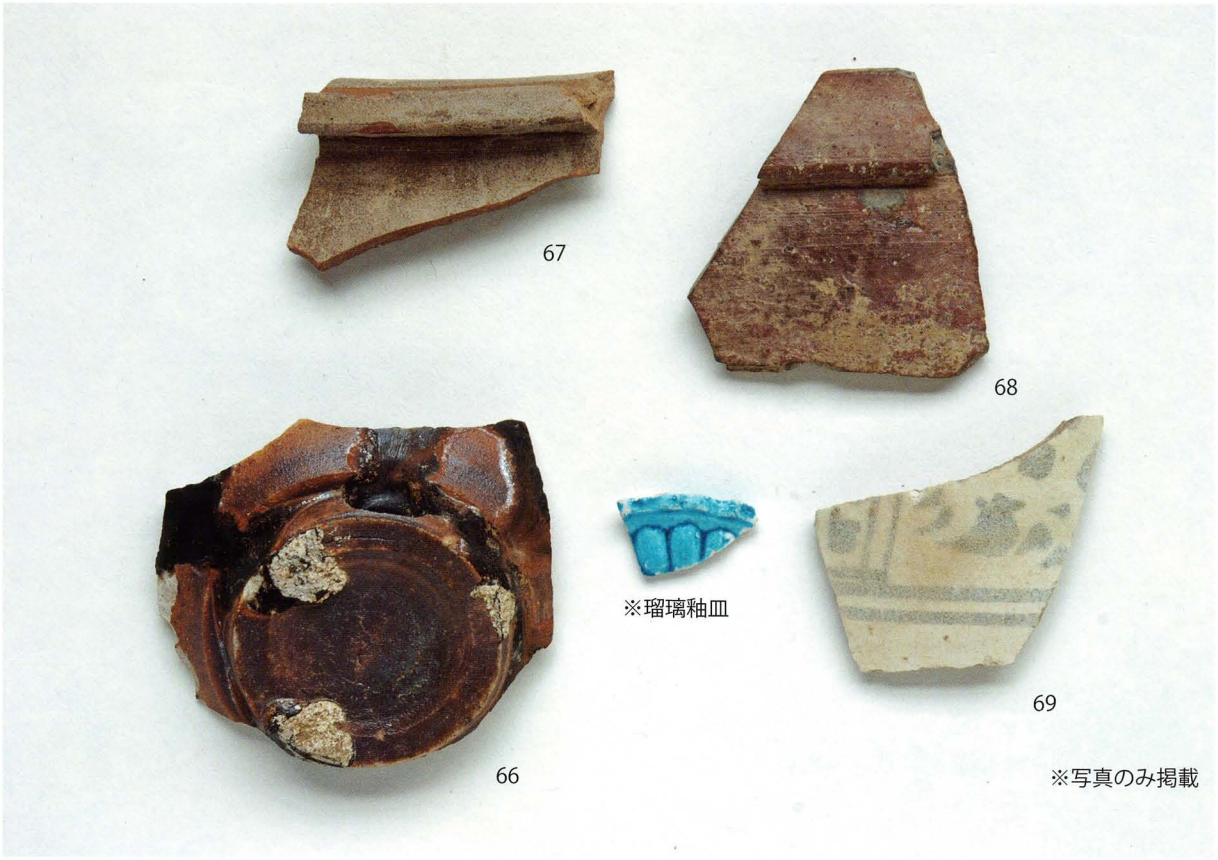
青花（1）

図版28





青花（2）



中国陶器、タイ陶器

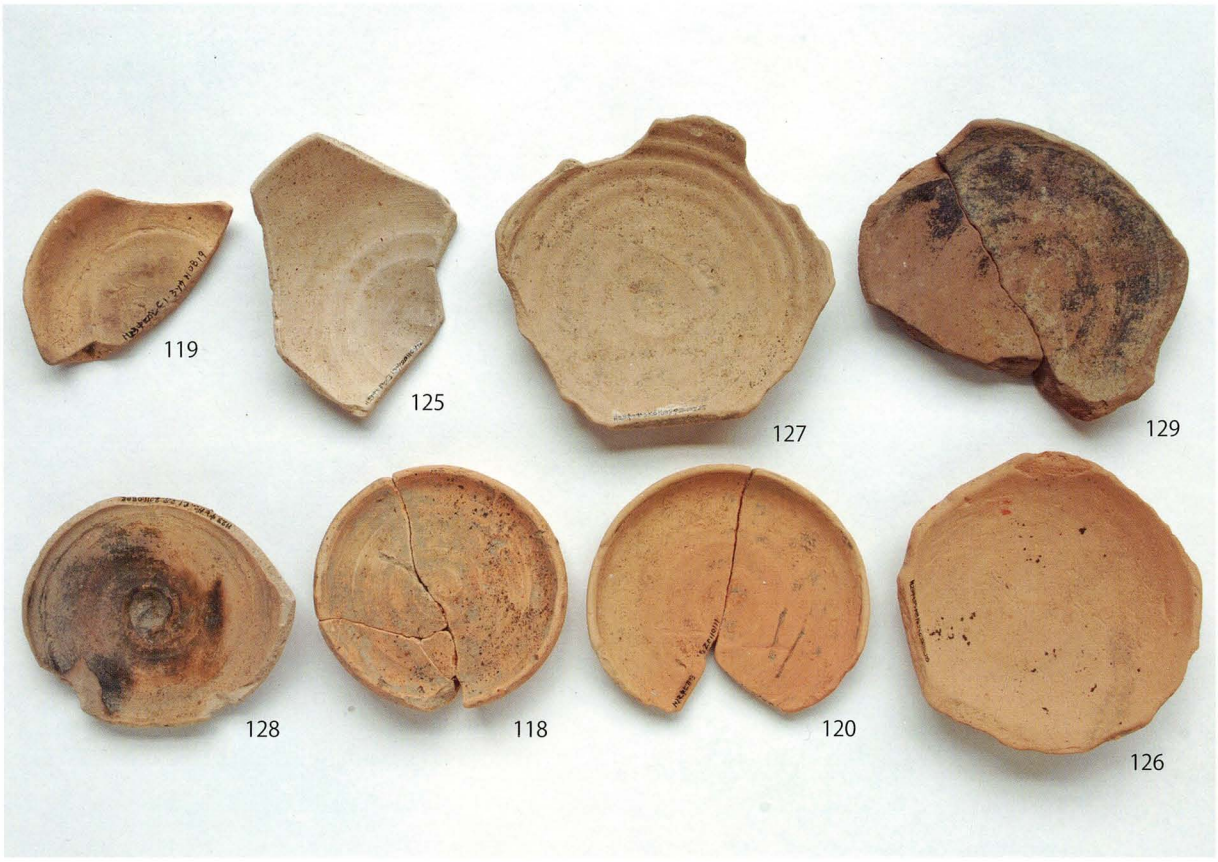
朝鮮陶磁器

図版30

備前焼

中世須恵器、瓷器系、瀬戸・美濃

図版32



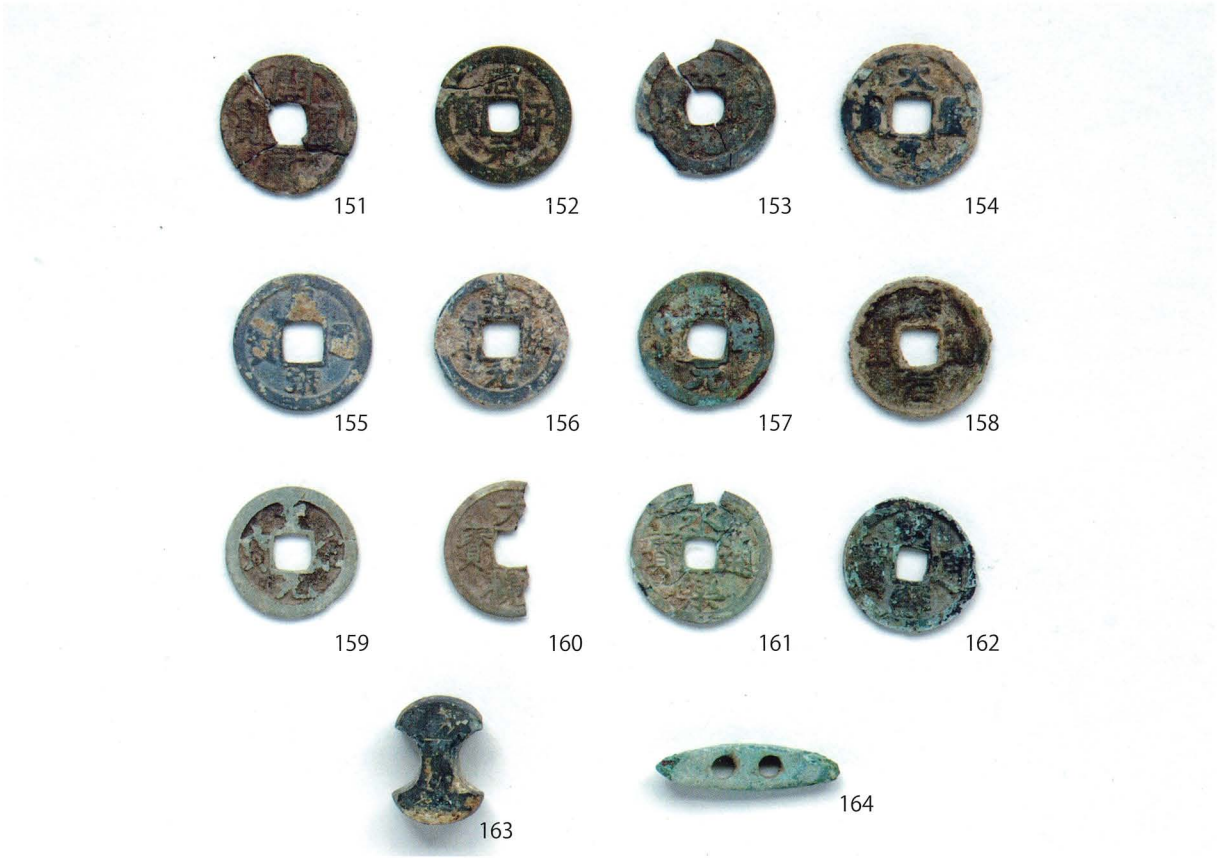
土師質土器

瓦質土器（1）

瓦質土器（2）

滑石製品

図版34



金属製品

※仕上砥　※中砥　※粗砥

※写真のみ掲載

砥石

43

42

45

53

54

76

74

76

82

備前焼擂鉢（７次SX1）

白磁、青花、朝鮮陶磁器、備前焼

図版36

95

100

99

122

130

165

※古瀬戸 花瓶

※不明陶器

※写真のみ掲載

備前焼、土師質土器、木製品、その他

報告書抄録

ふりがな	なかずひがしはらいせき
書名	中須東原遺跡
副書名	市内遺跡発掘調査及び益田川左岸北部地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編集者名	長澤和幸、山本浩之、中司健一、松本美樹、佐伯昌俊、木原光、井上寛司、村上勇
編集機関	益田市教育委員会
所在地	〒698-8650　島根県益田市常盤町１番１号　℡0856－31－0623
発行年月日	2013年９月10日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積（m^2）	調査原因
		市町村	遺跡番号					
中須東原遺跡（なかずひがしはらいせき）	島根県（しまねけん）益田市（ますだし）中須町（なかずちょう）	32204	Q378	34°41′47″	131°50′11″	2005. 10. 20～2005. 11. 28 2006. 12. 5～2006. 12. 20 2008. 2. 15～2008. 3. 7 2008. 3. 10～2008. 3. 29 2009. 2. 4～2009. 3. 9 2009. 6. 2～2010. 3. 19 2010. 4. 21～2011. 3. 23 2011. 4. 13～2012. 3. 22	4,332	試掘・確認調査 保存目的調査

遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中須東原遺跡	港湾集落	中世	道路遺構、溝状遺構、掘立柱建物跡、土坑、護岸施設遺構	土師質土器、中世須恵器、瓦質土器、貿易陶磁器、国産陶磁器、銭貨、金属製品、鉄滓、木製品、石造物	中世の大規模港湾遺跡

中須東原遺跡

市内遺跡発掘調査及び
益田川左岸北部地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成25年9月発行
編集・発行　益田市教育委員会
島根県益田市常盤町1番1号
印刷　のさか印刷
益田市高津五丁目28番8号